京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二〇－一〇

平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡

平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

３区池750（北東から）

３区池350（北東から）

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、佛教大学二条西校地建設工事に伴う平安京跡・壬生遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

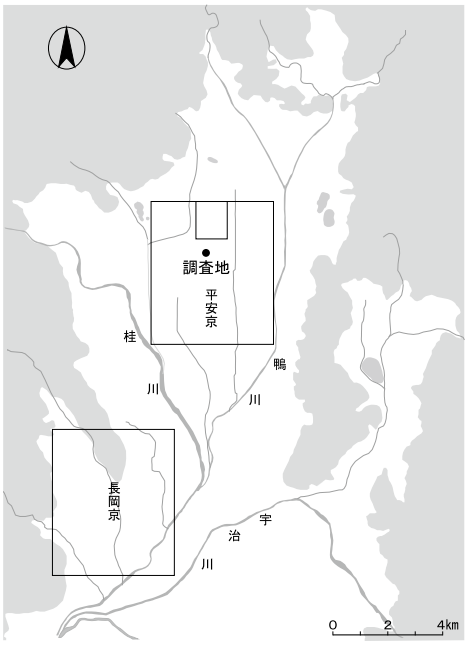
令和３年９月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	平安京跡・壬生遺跡　（京都市番号　19Ｈ455）
2	調査所在地	京都市中京区西ノ京小倉町101、102、103、105
3	委　託　者	学校法人　佛教教育学園　理事長　豊岡鐐尓
4	調 査 期 間	2019年12月９日～2020年８月11日
5	調 査 面 積	2,724㎡
6	調査担当者	西田倫子・鈴木康高・松吉祐希
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。 土器類は番号のみとしたが、墨書土器は「墨」、瓦類は「瓦」、銭貨は「銭」、金属製品は「金」、石製品は「石」、土製品は「土」、硯は「硯」、木簡は「木簡」、木製品は「木」をそれぞれ頭に付した。
13	本 書 作 成	西田倫子・松吉祐希



（調査地点図）

14	執筆分担	西田倫子：第１章、第２章、第３章-１、２-（１）・（５）、第４章、第５章-１ 松吉祐希：第３章-２-（２）～（４）、第５章-２・３ 付章：株式会社パレオ・ラボ
15	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
16	協力者	尼﨑博正（京都芸術大学）、伊藤淳史（京都大学）、大野浩二（全国社寺等屋根工事技術保存会）、小田裕樹（奈良文化財研究所）、貝　英幸（佛教大学）、北野信彦（龍谷大学）、古閑正浩（大山崎町教育委員会）、佐藤亜聖（財団法人元興寺文化財研究所）、清水みき（古代学協会客員研究員）、鋤柄俊夫（同志社大学）、高橋知奈津（奈良文化財研究所）、竹本　晃（大阪大谷大学）、告井幸男（京都女子大学）、友井辰哉（全国社寺等屋根工事技術保存会）、西山良平（京都大学）、橋本清一（京都保存科学株式会社）、浜中邦弘（同志社大学歴史資料館）、東影　悠（奈良県立橿原考古学研究所）、引原茂治（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、飛田範夫（農学博士）、丸山真史（東海大学）、山中　章（三重大学）、山本あずさ（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、吉野秋二（京都産業大学） ※敬称略・順不同・肩書は調査時 また、佛教大学の教職員各位にはご教示いただいた。

目　　次

第１章　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 4
　１．歴史的環境と立地 …… 4
　２．既往の調査 …… 4
第３章　遺　　構 …… 9
　１．七町・三条坊門小路（１・４区） …… 9
　（１）基本層序 …… 9
　（２）第２面〔弥生時代から平安時代中期〕の遺構 …… 9
　（３）第１面〔平安時代後期から江戸時代〕の遺構 …… 11
　２．六町（２・３区） …… 12
　（１）基本層序 …… 12
　（２）第２－２面〔弥生時代から平安時代初頭〕の遺構 …… 12
　（３）第２－１面〔平安時代前期前半〕の遺構 …… 13
　（４）第１－２面〔平安時代前期後半から後期〕の遺構 …… 14
　（５）第１－１面〔江戸時代〕の遺構 …… 18
第４章　遺　　物 …… 20
　１．墨書土器 …… 20
　２．土器・陶磁器類 …… 22
　（１）平安時代 …… 22
　（２）その他の時期 …… 29
　３．瓦類 …… 31
　（１）七町・三条坊門小路域出土瓦 …… 31
　（２）六町域出土瓦 …… 31
　（３）刻印瓦 …… 32
　４．銭貨 …… 32
　５．金属製品 …… 33
　６．石製品 …… 33
　７．土製品 …… 34
　８．木簡 …… 35
　９．木製品 …… 36
第５章　ま と め …… 39
　１．遺構の変遷 …… 39

２．池750と池350について …… 47
（１）池750と池350の変遷 …… 47
（２）既往調査との相違点 …… 47
（３）池750の復元 …… 50
（４）池350の復元 …… 51
３．平安時代前期の園池の構造と性格 …… 51
付章　自然科学分析 …… 54
１．花粉分析 …… 54
２．大型植物遺体 …… 70
３．珪藻化石群集 …… 81

図　版　目　次

巻頭図版１　遺構　３区池750（北東から）
巻頭図版２　遺構　３区池350（北東から）

図版１　遺構　４区東壁断面図（１：80）
図版２　遺構　３区東壁断面図（１：80）
図版３　遺構　２・３区南壁断面図（１：80）
図版４　遺構　３区西壁断面図１（１：80）
図版５　遺構　３区西壁断面図２（１：80）
図版６　遺構　七町・三条坊門小路（１・４区）第２面〔弥生時代から平安時代中期〕
遺構平面図１（１：200）
図版７　遺構　七町・三条坊門小路（１・４区）第２面〔弥生時代から平安時代中期〕
遺構平面図２（１：200）
図版８　遺構　七町・三条坊門小路（１・４区）第１面〔平安時代後期から江戸時代〕
遺構平面図１（１：200）
図版９　遺構　七町・三条坊門小路（１・４区）第１面〔平安時代後期から江戸時代〕
遺構平面図２（１：200）
図版10　遺構　１・４区柱列１・８・９実測図（１：50）
図版11　遺構　六町（２・３区）第２－２面〔弥生時代から平安時代初頭〕遺構平面図（１：200）、
断面図（１：50）

図版12　遺構　六町（２・３区）第２－１面〔平安時代前期前半〕遺構平面図１（１：200）
図版13　遺構　六町（２・３区）第２－１面〔平安時代前期前半〕遺構平面図２（１：200）
図版14　遺構　六町（２・３区）第１－２面〔平安時代前期後半〕遺構平面図１（１：200）
図版15　遺構　六町（２・３区）第１－２面〔平安時代前期後半〕遺構平面図２（１：200）
図版16　遺構　六町（２・３区）第１－１面〔江戸時代〕遺構平面図１（１：200）
図版17　遺構　六町（２・３区）第１－１面〔江戸時代〕遺構平面図２（１：200）
図版18　遺構　２区建物３実測図（１：50）
図版19　遺構　２区柱列４・５・３実測図（１：50）
図版20　遺構　２区セクション断面図（１：50）
図版21　遺構　２区建物１実測図（１：80）
図版22　遺構　２区建物２実測図（１：80）
図版23　遺構　３区建物４実測図（１：80）
図版24　遺構　３区池750実測図（１：100）
図版25　遺構　３区溝599実測図（１：100）
図版26　遺構　２区土器埋納遺構292実測図（１：10）、集石285・291実測図（１：20）
図版27　遺構　３区池350平面図（１：100）
図版28　遺物　墨書土器実測図１（１：２）
図版29　遺物　墨書土器実測図２（１：２）
図版30　遺物　墨書土器実測図３（１：２）
図版31　遺物　土器実測図１（１：４）
図版32　遺物　土器実測図２（１：４）
図版33　遺物　土器実測図３（１：４）
図版34　遺物　土器実測図４（１：４）
図版35　遺物　七町・三条坊門小路域出土軒瓦拓影及び実測図（１：４）
図版36　遺物　七町・三条坊門小路域、六町域出土軒瓦拓影及び実測図（１：４）
図版37　遺物　六町域出土軒瓦・丸瓦拓影及び実測図（１：４）
図版38　遺物　刻印瓦拓影（１：２）
図版39　遺物　石製品実測図（１：２、石８～10のみ１：４）
図版40　遺物　土製品実測図１（１：２）
図版41　遺物　土製品実測図２（１：２）
図版42　遺物　木簡実測図（１：２）、木製品実測図１（１：４、木20のみ１：６）
図版43　遺物　木製品実測図（１：４）
図版44　遺構　１　４区第２面全景（南から）
２　４区第１面全景（南から）
３　１区第１面全景（南西から）

図版45　遺構　1　4区土手状遺構41、溝125・850（東から）
2　4区南築地854（北西から）
3　1区溝98・100（東から）
4　1区土坑92（北から）
図版46　遺構　1　2区第2－1面全景（東から）
2　2区整地層1検出状況（北東から）
3　2区建物3：柱穴293（北から）
図版47　遺構　1　3区南半第1－2面全景（北から）
2　2区第1－2面全景（北から）
図版48　遺構　1　2区建物1・2検出状況（東から）
2　3区建物4検出状況（北西から）
図版49　遺構　1　3区建物4：柱穴696樹皮出土状況（北西から）
2　3区建物4：柱穴696断面（西から）
3　3区建物4：柱穴693（北東から）
4　2区建物1：柱穴255検出状況（北から）
5　2区柱列3：柱穴204断面（東から）
図版50　遺構　1　3区池750（北東から）
2　3区池750銭貨出土状況（西から）
3　3区池750円面硯出土状況（東から）
4　3区池750高杯出土状況（西から）
5　3区池750下駄出土状況（南西から）
図版51　遺構　1　3区溝599・池750合流部（南西から）
2　2区土器埋納遺構292土器出土状況（西から）
3　2区集石285検出状況（北東から）
4　2区集石291検出状況（西から）
図版52　遺構　1　3区第1－2面 池350検出時全景（北西から）
2　3区池350（北西から）
図版53　遺物　墨書土器、土器類
図版54　遺物　土器類
図版55　遺物　軒丸瓦・刻印瓦
図版56　遺物　軒平瓦
図版57　遺物　銭貨、石製品
図版58　遺物　土製品
図版59　遺物　木簡、木製品

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：2,500）　…… 1
図２　調査区配置図（１：1,000）　…… 2
図３　調査前全景（北西から）　…… 3
図４　作業状況（南東から）　…… 3
図５　報道発表状況（南東から）　…… 3
図６　３区保存遺構養生状況（南東から）　…… 3
図７　３区保存遺構砂養生状況（北西から）　…… 3
図８　墨書土器検討状況　…… 3
図９　周辺調査区配置図（１：1,000）　…… 5
図10　土坑92実測図（１：50）　…… 11
図11　柱穴555実測図（１：40）　…… 16
図12　土坑548実測図（１：20）　…… 17
図13　土坑548土器出土状況（南から）　…… 17
図14　井戸564（南から）　…… 18
図15　溝151護岸検出状況（北から）　…… 18
図16　溝151断面図（１：40）　…… 18
図17　須恵器壷（128）漆縮み状況　…… 27
図18　弥生時代・飛鳥時代の土器実測図（１：４）　…… 29
図19　江戸時代の土器実測図（１：４）　…… 30
図20　銭貨拓影（１：２）　…… 32
図21　金属製品実測図（１：２）　…… 33
図22　石器実測図（１：２）　…… 33
図23　木簡実測図（１：２）　…… 35
図24　右京三条一坊六・七町の遺構配置図１（１：1,000）　…… 40
図25　右京三条一坊六・七町の遺構配置図２（１：1,000）　…… 41
図26　右京三条一坊六・七町の遺構配置図３（１：1,000）　…… 42
図27　右京三条一坊六・七町の遺構配置図４（１：1,000）　…… 44
図28　右京三条一坊六・七町の遺構配置図５（１：1,000）　…… 45
図29　池350・750復元図（１：400）　…… 48
図30　９次調査東壁と今回調査西壁断面図（１：100）　…… 49
図31　９世紀中頃から後半の遺構配置図（１：800）と
　　池・溝断面図（縦１：80、横１：800）　…… 52

表　目　次

表１　周辺調査一覧表 …… 6
表２　遺構概要表 …… 9
表３　遺物概要表 …… 20
表４　各調査の池対応表 …… 47
表５　各調査における洲浜の標高 …… 50

付　表　目　次

付表１　墨書土器観察表 …… 91
付表２　土器観察表 …… 92
付表３　瓦観察表 …… 97
付表４　銭貨観察表 …… 99
付表５　石製品観察表 …… 99
付表６　土製品観察表 …… 100
付表７　木簡・木製品観察表 …… 101

釈　文　目　次

墨書土器釈文 …… 21
木簡釈文 …… 35

平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡

第１章　調査経過（図１～８）

本調査は、佛教大学二条西校地建設工事に伴って実施したものである。調査地は、平安京右京三条一坊六・七町、弥生時代の遺跡である壬生遺跡に当たる。これまで調査地周辺では多くの遺構が確認されていることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）より発掘調査の指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を実施することとなった。

調査区は、文化財保護課の指導により１区・２区・３区・４区を設定し、順に実施した（図２）。調査面積は2,724㎡である。2019年12月９日に調査を開始した。各調査区では、基本２面に分けて調査を行い、それぞれの遺構面において記録作業を行った。各遺構面の調査終了時には文化財保護課の検査指導を受け、検証委員である龍谷大学の國下多美樹教授、近畿大学の網　伸也教授の視察を受けた。

調査では、七町・三条坊門小路域の１・４区で弥生時代から古墳時代の流路、平安時代の三条坊門小路と湿地状堆積を検出した。六町域の２・３区では、弥生時代から古墳時代の流路、平安時代

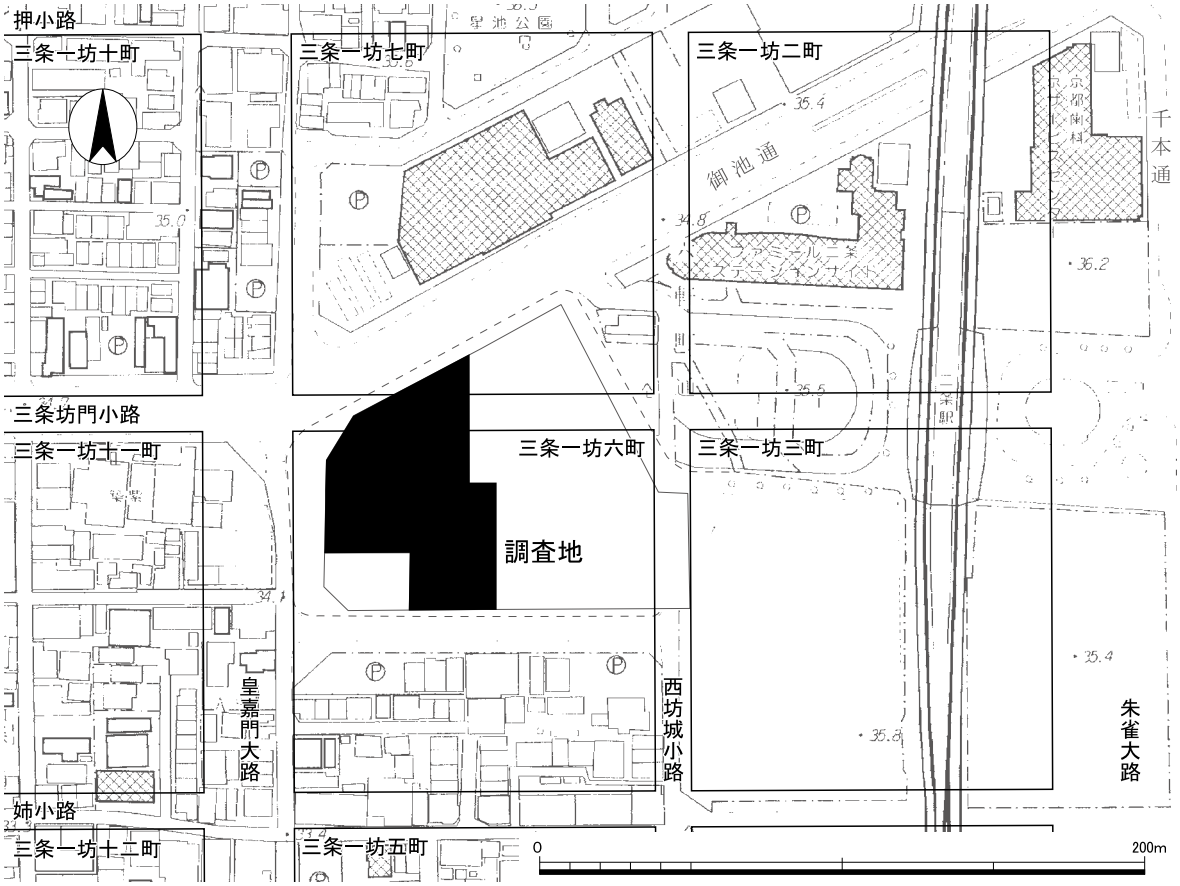


図１　調査位置図（１：2,500）

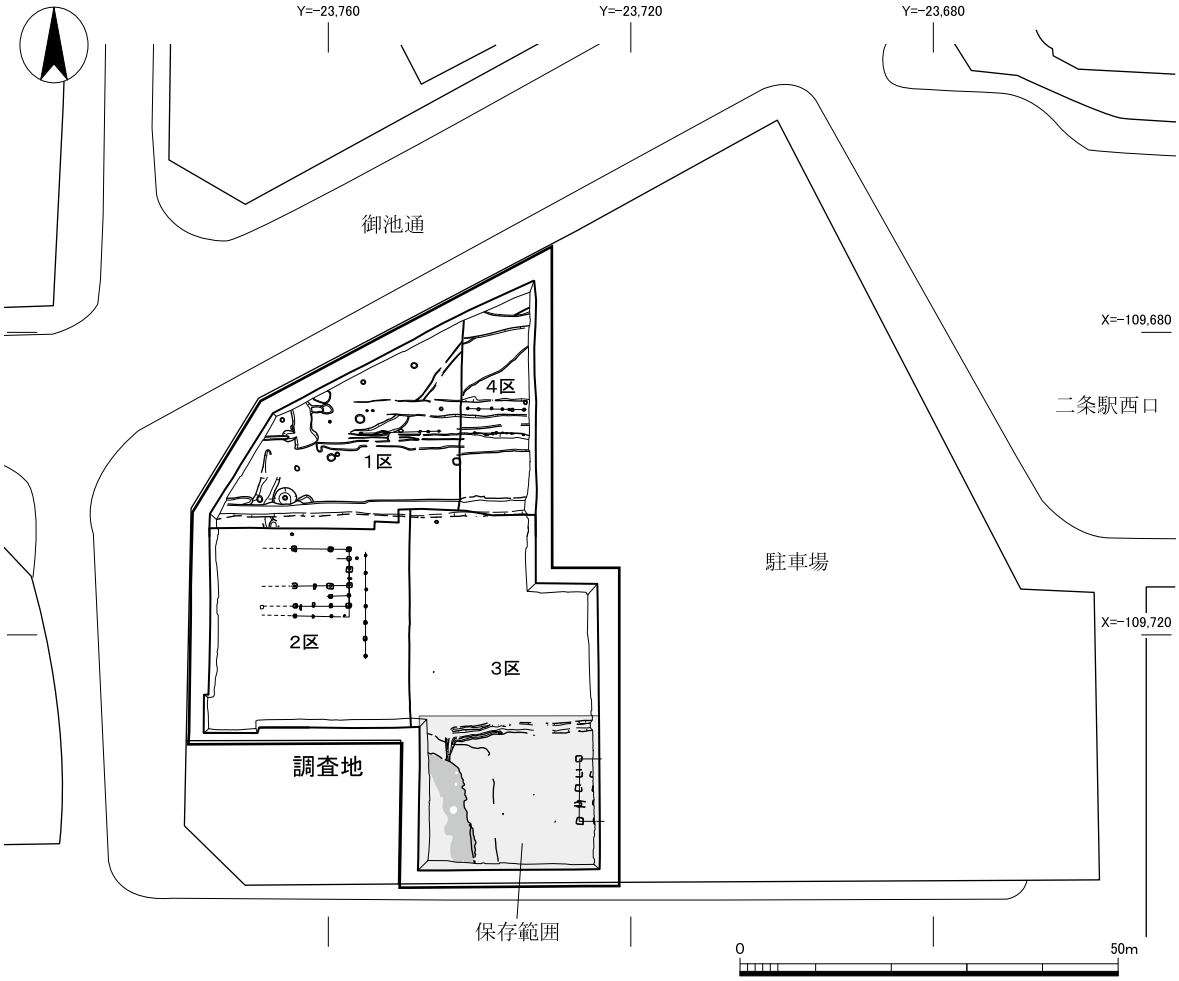


図２　調査区配置図（１：1,000）

の掘立柱建物・柵・池などを検出した。１・４区では平安時代末期から、２・３区では中世以降は耕作地が広がっていたと考えられる。

３区で検出した池750及び建物４を含む南側は現地保存することとなり、池750並びに建物４の柱穴は土嚢による養生の後、全面に砂を入れて保護し、埋め戻しを行った。調査は2020年８月11日に終了した。

図３　調査前全景（北西から）

図４　作業状況（南東から）

図５　報道発表状況（南東から）

図６　３区保存遺構養生状況（南東から）

図７　３区保存遺構砂養生状況（北西から）

図８　墨書土器検討状況

第２章　位置と環境

１．歴史的環境と立地

今回の調査地は、平安京右京三条一坊七町の南端部と六町の北西部を占め、中央北側が三条坊門小路に相当する。

七町は一・二・八町を含める４町規模の敷地を有する穀倉院とされる。穀倉院は、国家が管理する穀物備蓄のための施設である。９世紀後半以降にその機能を拡大したが、平安時代後期にはその機能は低下したと考えられている。

六町が文献史料に初めて登場するのは、平安時代後期の嘉保二年（1095）正月十日である[1)]。大江公仲が事件を起こし隠岐国へ配流されるにあたり財産処分状を作成したもので、その目録には、「西三条地壱町　在右京三條一坊六町」と記されており、平安時代後期には右京三条一坊が「西三条」と呼ばれていたことがわかっている[1・2)]。また鎌倉時代中期頃の『拾芥抄』の付図「西京図」にも右京三条一坊六町の部分に「西三條」と示されている。ただし『拾芥抄』の本文では「西三條」は右京三条一坊四町と記されている。『平安京提要』では大路に接した右京三条一坊四町を藤原良相の「西三条第」とする説をとっている[3)]。

また、2002年度の発掘調査では六町域で洲浜を持つ池から「齋衡四年三条院正倉帳」と墨書された題箋が出土し、西三条第が六町に存在していたのではないかという説が浮上した。

さらに2011年度の発掘調査では六町域北東部で検出された池より「三条院鈎（釣）殿高坏」と墨書された土師器高杯が出土したことで三条院＝三条第ではないかと想定され、右京三条一坊六町が藤原良相の「西三条第」とされた[1)]。

２．既往の調査（図９、表１）

ＪＲ二条駅周辺ではこれまで多くの発掘調査が行われている。今回の調査と関連する七町・三条坊門小路・六町域の発掘調査成果について時代順に記載する。

縄文時代から古墳時代

当地は壬生遺跡にあたる。縄文時代では地点９でサヌカイト製の石鏃が出土している。弥生時代では、各地点（13・15～18・21～23・25）から弥生土器や石器の破片が少量出土している。古墳時代では、地点10で前期の石製模造品、地点10・13で中・後期の須恵器が出土している。これらの各遺物は池や湿地状堆積と考えられている堆積土から出土しており、流路により上流から運ばれたものと考えられている[1)]。なお、地点18では時期不明の自然流路を検出しており、地点30で検出した南東部の湿地状堆積や地点21東端の湿地状堆積が確認されている。

平安時代

三条坊門小路に関連する遺構は、地点17・18で路面側溝、七町内溝、三町内溝、三町北面築地などを検出している。いずれも残存状況は良好ではない。

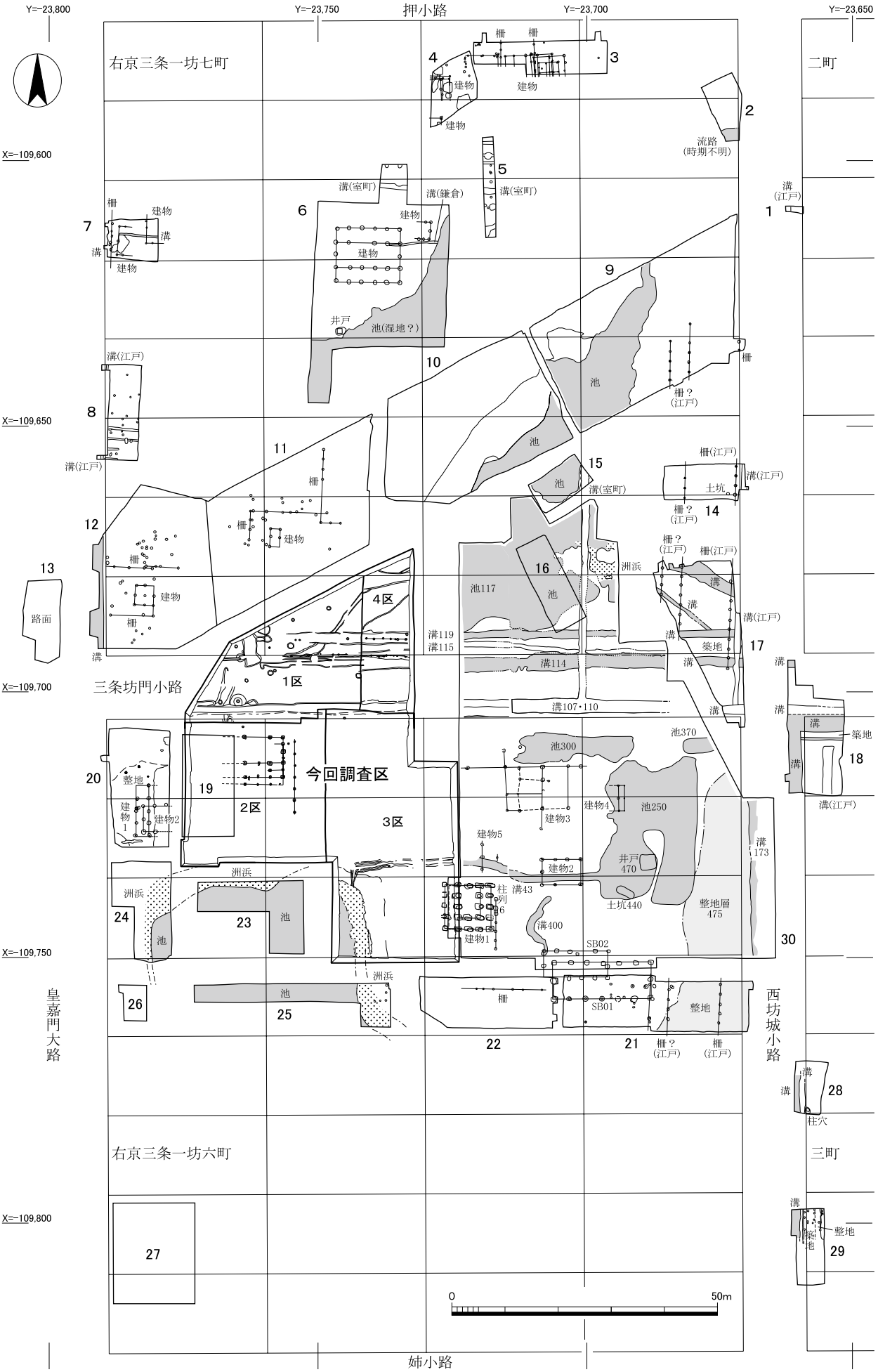


図９　周辺調査区配置図（１：1,000）

表１　周辺調査一覧表

地点	条坊名	調査機関	調査年度	主な遺構		主な遺物		備　考	文献
				平安時代	その他	平安時代	その他		
1	二町、 西坊城小路	市埋文研	1993年度 試掘調査	−	江戸時代中期の溝、後期の土坑	−	江戸時代中～後期の陶磁器	江戸時代中期の溝は西坊城小路路面上で検出。	1
2	七町、 西坊城小路	市埋文研	1993年度	−	成立不明の流路（埋没近代）	−	−	調査区９の池へ流れ込んでいたとみられる流路を検出。	2
3	七町	市埋文研	1993年度	平安時代中～後期の建物５・柵２・溝１	江戸時代の池・土坑	平安時代前期の土師器・緑釉陶器・灰釉陶器など、中～後期の土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦	江戸時代の土器・瓦類	推定穀倉院。平安時代中～後期の建物５棟。２～３棟が重複し、３時期ほどあるとみられる。建物間に柵がある。雑舎群の可能性あり。	
4	七町	市埋文研	1993年度	平安時代前期の柱穴、中～後期の建物３・井戸１・土坑３・溝１	−			推定穀倉院。平安時代前期の柱穴２基は別の建物。平安時代中～後期の建物３棟及び土坑や溝は重複。雑舎群の可能性あり。	
5	七町	市埋文研	1997年度	−	室町時代の溝	−	室町時代前期の土師器・陶器	推定穀倉院。調査区６から続く室町時代の溝を検出。	3
6	七町	市埋文研	1997年度	平安時代前期の建物１（身舎南北２間×東西５間、南北に庇）、中期の建物１（南北２間×東西２間以上）、後期の井戸１、中～後期の池	鎌倉時代の溝、室町時代の溝	平安時代前期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器など、中～後期の土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦質土器・瓦	鎌倉時代の土師器、室町時代前期の土師器・陶器、江戸時代の土師器・陶磁器	推定穀倉院。柱穴の状態から、平安時代前～中期にかけて何回かの建て替えがあったと想定。その後、10世紀後半の建物と柱穴は小規模な建物群が鎌倉まで存続。	
7	七町	市埋文研	1994年度 試掘調査	平安時代前期の建物２・柵１・溝２	−	平安時代前期の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦・凝灰岩片	−	推定穀倉院。柵列と溝は皇嘉門大路東側溝及び垣塀。	4
8	七町、 皇嘉門大路	市埋文研	1994年度 試掘調査	−	江戸時代の溝・柵・柱穴・湿地状堆積	−	桃山時代の土師器など、江戸時代の土師器・陶磁器・ガラス・金属	推定穀倉院。平安時代の遺構は未検出。	
9	七町、 西坊城小路	市埋文研	1997年度	平安時代前期の柵、中期の池・柱穴、後期の溝	鎌倉時代中期の池、江戸時代の耕作溝	平安時代前期の土師器・須恵器・瓦、中期の瓦、後期の瓦	縄文時代の石鏃、奈良時代の瓦	推定穀倉院。西坊城小路内溝は存在しない。池には湧水痕跡が２箇所で認められる。	5
10	七町	市埋文研	1997年度	平安時代中期～鎌倉時代の池	江戸時代の耕作溝	平安時代前期の墨書土器・黒色土器・瓦、中期の瓦、後期の瓦	古墳時代前期の石製模造品、奈良時代後期の瓦、鎌倉時代の瓦質土器、江戸時代の土師器・陶磁器	推定穀倉院。池護岸の一部を平安時代中期に石敷きとする。	
11	七町	市埋文研	1997年度	平安時代中期の建物１・柵２	江戸時代の耕作溝	平安時代前期の緑釉陶器・瓦、後期の瓦	江戸時代の土師器・陶磁器	推定穀倉院。居住空間。	
12	七町、 皇嘉門大路	市埋文研	1997年度	平安時代前期～鎌倉時代中期の溝、平安時代中期の建物１・柵	江戸時代の耕作溝	平安時代前期の須恵器、中期の瓦	江戸時代の土師器・陶磁器	推定穀倉院。居住空間。	
13	七町、 皇嘉門大路	市埋文研	1997年度	平安時代前～中期の路面	−	平安時代前期の須恵器、中期の瓦	弥生時代の石包丁、古墳時代中期の須恵器、江戸時代の土師器・陶磁器	皇嘉門大路路面は平安時代前期に整備され、平安時代中期に再整備された。	
14	七町、 西坊城小路	市埋文研	2004年度	平安時代前期の土坑	平安時代～室町時代の柱穴、江戸時代の溝・柱穴・土坑	平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器	中世の土師器、江戸時代の土師器・陶磁器	推定穀倉院。西半検出の南北方向の２条の柵列は平安時代中期と想定されていた。2011年度調査（調査区30）で江戸時代と判明。調査区東端の江戸の溝と柱列は調査区17へと続く。	6
15	七町	市埋文研	2002年度	平安時代の池	中世の池、江戸時代の溝	平安時代前期の瓦、中期の土師器・須恵器・緑釉陶器	弥生時代の石器、古墳時代の小片、鎌倉～室町時代の土師器・瓦質土器	推定穀倉院。湧水のあった池の護岸一部には、洲浜敷きが見られた。三条坊門小路内溝を検出し、平安時代前期からの土地利用がなされた点を指摘。平安時代中期以降に池は縮小、中世に耕作地。調査区15・16間は湧水のため池が残存していた可能性が高い。近世に農地となる。	7
16	七町	市埋文研	2002年度	平安時代の池・溝・土坑	室町時代の溝、江戸時代の耕作溝	平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦	弥生・古墳時代の土器、奈良時代の瓦、鎌倉時代の土師器、室町時代の土師器・焼締陶器・瓦・木製品、江戸時代の土師器・陶磁器		
17	六・七町、 三条坊門小路	市埋文研	2001年度	平安時代前期の築地・溝・路面・土坑、中期の建物	近世以降の井戸・柵・溝・土坑	平安時代前期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入磁器・瓦・石製品、中～末期の土師器・瓦	弥生時代の土器、奈良時代後期の瓦、近世の土師器・陶磁器・銭貨	推定穀倉院。三条坊門小路南・北側溝及び北側の内溝を検出。南東から北西方向の溝も検出し池に流れ込んでいた可能性が指摘される。	8
18	三町、 西坊城小路、 三条坊門小路	市埋文研	2001年度	平安時代前～後期の築地・路面・溝、平安時代後期～鎌倉時代の溝・路面	平安時代以前の自然流路、近世以降の井戸・溝・土坑			推定右京職。三条坊門小路南側溝、西坊城小路東側溝は平安時代後期まで機能。築地廃絶は９世紀末～10世紀。側溝幅が通常より広く右京職との関連を指摘。右京職後の土地利用は不明。	
19	六町	市埋文研	1982年度 立会調査	時期不明の池状・湿地状堆積（表土−1.14ｍ）		平安時代の土師器・須恵器	古墳～奈良時代の土師器・須恵器	推定西三条第。調査地全域が池または湿地状。	9

地点	条坊名	調査機関	調査年度	主な遺構		主な遺物		備　考	文献
				平安時代	その他	平安時代	その他		
20	六町、 皇嘉門大路	市埋文研	2006年度	平安時代前～中期初頭の建物・柵・柱穴・土坑・整地	中世～近世の土坑・耕作溝	平安時代前期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦・柱根	古墳時代の須恵器、奈良時代の瓦、中世の土師器・瓦質土器・焼締陶器・輸入磁器・銭貨、近世の土師器・陶磁器	推定西三条第。平安時代初期からの宅地利用、中期の早い時期までは継続、その後耕作化。建物1・2は9世紀中葉に成立し、9世紀末～10世紀初頭には廃絶。建物3は8世紀末～9世紀初頭で、9世紀前半に廃絶。整地土1は10世紀初頭、整地土2は9世紀中葉頃。埋納土坑98は建物1の地鎮遺構か?	10
21	六町、 西坊城小路	市埋文研	2000年度	平安時代前期の建物2・柱穴・整地(もとは湿地)	近世の溝・土坑	平安時代前期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入磁器・瓦、末期の土師器	弥生時代の土器、近世の土師器・陶磁器・木製品	推定西三条第。西坊城小路西側溝はない。SB01とSB02は重複。	8
22	六町	市埋文研	1998年度	平安時代前期の建物1・柵1・柱穴	江戸時代の井戸・溝・土坑	平安時代前期の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦・柱根	弥生時代の土器・石器、江戸時代の土師器・陶器・木製品	推定西三条第。西側で検出されていた平安時代前～後期の池に関連する建物SB01の検出。	11
23	六町	古代文化調査会	2008年度	平安時代前の池・土坑・柱穴	近世以降の耕作土	平安時代前～中期の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・輸入陶磁器・土製品・石製品・金属製品・木製品・瓦	弥生時代の土器、中世～近世の土師器・陶磁器	推定西三条第。池2は新旧2時期の造り替えあり、上層の池1は舟入状の落込み。	12
24	六町	市埋文研	2001年度	平安時代初～前期の池、後期の埋納遺構	近世の溝・土坑	平安時代前期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・輸入陶磁器・木製品・金属製品・植物遺体、後期の土師器	古墳時代の土器・須恵器、奈良時代後期の瓦、近世以降の陶磁器	推定西三条第。洲浜敷き北西護岸を検出。池は9世紀初頭と後半の2時期あり。	8
25	六町	市埋文研	1995年度 試掘調査	平安時代前～中期の池、後期の池	中世の土坑、江戸時代の溝・柵	平安時代前期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦質土器・瓦・木製品・獣骨	弥生時代中期の土器、古墳時代の須恵器、奈良時代の土師器・須恵器、中世の土師器・輸入陶磁器・焼締陶器・銭貨、近世の陶磁器	推定西三条第。池は2時期ある。旧池は洲浜部分が狭く、洲浜の傾斜も急であったが、平安時代後期に洲浜を広くし、傾斜も緩やかに改修。	13
26	六町	市埋文研	1995年度 試掘調査	平安時代前～中期の池、後期の池	江戸時代の溝				
27	六町	市埋文研	1988年度 立会調査	時期不明の沼状堆積（表土-1.53m）		－	－	推定西三条第。全域が沼であった可能性がある。	14
28	三町、 西坊城小路	市埋文研	1998年度	平安時代前期の土坑・柱穴、後期の溝	江戸時代の井戸	平安時代前期の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦・柱根、後期の土師器	江戸時代の土師器・陶磁器	推定右京職。西坊城小路東側溝を検出し、推定築地心で柱穴を検出。	11
29	三町、 西坊城小路	市埋文研	2003年度	平安時代前期の整地、中～後期の溝、平安時代の土坑・柱穴・築地	中世の耕作溝、近世以降の柱穴・溝・土坑	平安時代前期～後期の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・輸入陶磁器・瓦	奈良時代後期の瓦、中世の土師器・瓦質土器・陶器、室町時代の土師器、江戸時代の土師器・陶磁器	推定右京職。西坊城小路東側溝を検出し、推定築地心で柱穴を検出。調査区18・28の続き。	15
30	六・七町	市埋文研	2011年度	平安時代前期の建物7・池3・井戸1・溝・湿地	江戸時代の建物1・柱穴・柵・溝	平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・輸入陶磁器・木製品・金属製品・土製品	縄文時代の石器、弥生時代の土器、江戸時代の土器・陶磁器・銭貨・金属製品・石製品・木製品	推定西三条第。9世紀後半の建物と池とその池から流れる溝を検出。池から出土した墨書土器などから藤原良相邸の可能性が高まった。	16

※ 条坊名は、右京三条一坊を省略した。　市埋文研：財団法人京都市埋蔵文化財研究所

文献

1　平田　泰「平安京右京三条一坊6」『平成5年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年
2　平田　泰「平安京右京三条一坊3」『平成5年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年
3　平田　泰「平安京右京三条一坊3」『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年
4　平田　泰「平安京右京三条一坊2」『平成6年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年
5　吉村正親「平安京右京三条一坊4」『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年
6　布川豊治『平安京右京三条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-3　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年
7　尾藤徳行ほか『平安京右京三条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-1　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年
8　本　弥八郎ほか『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-5　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年
9　家崎孝治ほか『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度』　京都市文化観光局　1983年
10　布川豊治『平安京右京三条一坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-13　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年
11　伊藤　潔「平安京右京三条一坊1」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2000年
12　水谷明子ほか『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡ー西三条第（百花亭）跡ー』　古代文化調査会　2009年
13　伊藤　潔「平安京右京三条一坊2」『平成7年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1997年
14　家崎孝治ほか『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』　京都市文化観光局　1989年
15　田中利津子ほか『平安京右京三条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-16　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年
16　丸川義広ほか『平安京右京三条一坊六・七町跡ー西三条第（百花亭）跡ー』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2011-9　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2013年

七町域では、池や建物などの遺構を検出している。

平安時代前期の主要な遺構は、地点６では東西５間、南北２間で南と北に庇を持つ掘立柱建物が検出されている。地点４では建物が２棟、地点７では建物２棟と柵、溝などを検出し、地点14では土坑などを検出している。地点９・10では池とされる遺構を検出、地点15・16でも同様の池を検出し、平安時代前・中期の遺物を検出している。また地点９・10の池では石敷き護岸や洲浜状遺構も確認しており、地点30でも延長部を確認している。地点２で検出している流路は地点９・10の池に流れ込んでいたと考えられている[1)]。

平安時代中期の主要な遺構は、地点６で検出した掘立柱建物と東西溝、地点11・12の東西・南北方向の柵、建物、地点４の建物３棟と土坑、南北方向の溝、井戸、地点３の建物５棟と柵を検出している。

平安時代後期の主要な遺構は、地点６の井戸、地点９南東部の東西・南北方向の溝を検出している。

六町では、池や建物などの遺構を検出している。

平安時代の主要遺構は、地点20～22・30で掘立柱建物10棟、池を検出している。地点21・22・30で検出した建物の時期はSB01が９世紀前半、SB02、建物１～５が９世紀後半である。

地点23～25では洲浜敷きの池を検出している。地点24のSG24新からは「齋衡四年三條院正倉帳」と墨書した題箋が出土している。また地点30で検出した池250からは「三条院鈎（釣）殿高坏」と墨書された土師器高杯が出土している。この池250からは溝43が流れ出ており、今回の調査地へと続いている。各地点の池の年代解釈や今回の調査区との関係については「第５章 まとめ」の章で詳述する。

江戸時代以降

各調査で耕作に関する溝を検出している。条坊に重複する位置で確認されている溝は、地点１で西坊城小路路面上に南北溝、地点18で三町内溝推定位置のやや東側で南北方向の溝、地点14・17では南北溝を検出した。井戸は地点17・18・22・28で検出している。地点11・12では南北0.5ｍの段差による区画を検出した。その他、各調査地を横断する東西・南北の柵を検出している。地点30では小規模な総柱建物や三条坊門小路の路面を検出している。

註

１） 丸川義広ほか『平安京右京三条一坊六・七町跡－西三条第（百花亭）跡－』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011－9　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2013年

２） 朧谷　寿「大江公仲」『平安時代史事典』 角川書店　1993年

３） 山田邦和「右京三条一坊四町」『平安京提要』 角川書店　1994年

４） 本　弥八郎ほか『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002－5　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年

第３章　遺　　構

調査は、調査地を１～４区に分けて行ったが、各遺構の性格を考慮し、１・４区を七町及び三条坊門小路の遺構、２・３区を六町の遺構としてまとめて報告する。

１．七町・三条坊門小路（１・４区）

（１）基本層序（図版１）

調査地は現代盛土によりほぼ平坦になっており、地表面の標高は34.7～34.9ｍである。現地表面から0.9～1.25ｍが現代盛土で、その下に近世の耕作土が0.2～0.35ｍの厚さで堆積する（東壁１・２層）。その下に平安時代後期の耕作土855が0.1～0.2ｍの厚さで堆積する（東壁18・19層）。その下には、部分的に平安時代後期の整地層６が堆積する（東壁23層）。その下には平安時代中期の湿地状堆積（東壁59・60層）と整地層５（東壁57・58層）がある。湿地状堆積と整地層５の下層が腐植土（東壁66～68層）、灰色粘土・砂礫（東壁69～71層）の基盤層となる。基盤層上面の標高は33.0～33.3ｍである。

平安時代中期の整地層５上面で第１面〔平安時代後期から江戸時代〕、基盤層上面で第２面〔弥生時代から平安時代中期〕の調査を行った。

（２）第２面〔弥生時代から平安時代中期〕の遺構（図版６・７・44）

流路133　調査区の北部中央で検出した。北東から南西方向の流路である。検出長は約15ｍで、幅は0.7～2.0ｍある。検出面からの深さは約0.2ｍある。底部の標高は南西が北東より約0.05ｍ低い。埋土から弥生時代ならびに飛鳥時代の土器が少量出土した。

高まり852　調査区の北東部で検出した。検出長は約10.7ｍで、幅は４～５ｍある。検出面からの高さは約0.3ｍある。堆積土は図版１の61～65層である。自然の堆積作用によって形成された高まりと考えられる。遺構の年代は出土土器がなく不明であるが、弥生時代中期から後期の土器を含む腐植土の上に位置し、後述する土手状遺構827の構築土で覆われることから弥生時代から平安時

表２　遺構概要表

時　　代	七町・三条坊門小路の遺構	六町の遺構
弥生時代 ～飛鳥時代	流路133、高まり852	流路757・776・777
平安時代	柱列１・８・９、土手状遺構41・827、 北築地846、南築地854、 溝18・100・125・808・850、 湿地状堆積853、耕作土855	建物１～４、柱列３～５、柱穴555、 池350・750、集石285・291・778・779、 土坑548、溝599、土手状高まり348、 土器埋納遺構292、湿地状堆積349・780
江戸時代	土坑40・58・92・101・120、溝98、 杭列１～４、土取土坑群（土取土坑813）	建物５、井戸564、柱列２・７、溝151、 土取土坑群（土取土坑505・584）、 耕作溝156・429・515

代前期の間に形成されたものと考えられる。

柱列１（図版10） 調査区中央、溝125の北側で検出した。東西５間分を検出した。方位は西に対して２度南に振れる。柱間は西から3.25ｍ、2.0ｍ、2.6ｍ、1.05ｍ、1.4ｍある。柱穴掘形は長径0.25～0.55ｍの楕円形、深さは0.05ｍと浅い。この柱列は推定三条坊門小路北築地心の推定ラインとほぼ一致することから、七町南限を区画する掘立柱塀の可能性が想定される。出土遺物は少ないが検出位置から溝125と同時期のものと考えられる。

柱列８（図版10） 調査区中央北寄り、土手状遺構41上面で検出した。東西５間分を検出した。方位は西に対して２度南に振れる。柱間は西から1.45ｍ、1.7ｍ、1.45ｍ、1.3ｍ、1.45ｍある。柱穴掘形は長径0.3～0.4ｍの楕円形、深さは0.05～0.25ｍある。

柱列９（図版10） 調査区中央で検出した。東西５間分を検出した。方位は正方位である。柱間は西から2.4ｍ、0.45ｍ、0.85ｍ、0.6ｍ、0.6ｍある。柱穴掘形は長径0.2～0.3ｍの楕円形、深さは0.05～0.2ｍある。後世の溝18によって、遺構上部が削平されているものもある。この柱列は推定三条坊門小路北築地心の推定ラインより少し南に位置しており、七町南限を区画する掘立柱塀の可能性が想定される。

土手状遺構827 調査区北端で検出した。東西方向の畦である。検出長は約8.5ｍで、幅は1.5～３ｍある。検出面からの高さは約0.2ｍある。構築土は図版１の38～41層である。高まり852を一部利用して構築されている。構築土から10世紀前半の土器が出土した。土手状遺構41との間に後述する湿地状堆積853が広がる。

土手状遺構41（図版45） 調査区中央北寄りで検出した。東西方向の土手状遺構である。検出長は約23.2ｍで、幅は1.8～2.0ｍある。検出面からの高さは約0.8ｍある。構築土は図版１の44～55層である。北と南に小さな土手を作り（図版１－52～55層）、砂礫（図版１－47～51層）でその内側を埋め、最後に粘土質の土（図版１－44層）で上部を覆っている。構築土から９世紀後半の土器が出土した。土手状遺構827との間に後述する湿地状堆積853が広がる。

北築地846 調査区中央で検出した。東西方向に延びる高まりである。検出長は約９ｍで、残存幅は約0.5～1.3ｍある。検出面からの高さは約0.2ｍある。構築土は図版１の29～32層である。南に小さな土手（図版１－29層）を作り、構築時の土止めとしている。また北肩部には黒褐色粘土（図版１－32層）を貼っており、底部には木の幹を東西方向に据えていた。また構築土底部より田下駄が出土した。構築土から10世紀中頃の土器が出土した。

南築地854（図版45） 調査区の南端で検出した。東西方向に延びる高まりである。検出長は約９ｍで、残存幅は0.3～0.5ｍある。検出面からの高さは約0.3ｍある。構築土は基盤層を掘り込んでいる。構築土は図版１の34～37層である。構築土から10世紀中頃の土器が少量出土した。

溝850 調査区中央で検出した。東西方向の溝である。検出長は約９ｍで、幅は1.4～1.9ｍある。検出面からの深さは約0.16ｍある。埋土は図版１の56層である。底部の標高は西が東より約0.2ｍ低い。北築地846の北側に位置しており、内溝と考えられる。

溝125 調査区中央で検出した。東西方向の溝である。検出長は約28ｍで、幅は約２ｍある。検

出面からの深さは約0.3ｍある。埋土は図版１の33層である。底部の標高は西が東より約0.05ｍ低い。埋土から10世紀中頃の土器が出土した。北築地846の南側に位置しており、三条坊門小路の北側溝として掘削されたと考えられる。埋土からウマまたはウシの臼歯が出土している。

湿地状堆積853　調査区の北部で検出した。土手状遺構41並びに土手状遺構827の北側で検出した湿地状の堆積である。埋土は図版１の59・60層である。59層は60層より粒形が細かく南から北へ徐々に堆積していった可能性がある。埋土から10世紀中頃の土器が出土した。

（３）第１面〔平安時代後期から江戸時代〕の遺構（図版８・９・44）

溝18　調査区中央で検出した。東西方向の溝である。検出長は約23.7ｍで、幅は約0.5～0.8ｍある。検出面からの深さは約0.3ｍある。平安時代後期の整地層６（図版１－23層）の上面から掘り込んで成立している。埋土は図版１の21・22層である。底部の標高は西が東より約0.05ｍ低い。溝125と同様に三条坊門小路の北側溝として掘りなおされたと考えられる。また、溝115は溝18の西側延長部で検出した。出土遺物がなく不明であるが、層序などから溝18と同遺構と考えられる。

溝100（図版45）　調査区南端で検出した。東西方向の溝である。検出長は約41ｍで、北肩は江戸時代の溝98に削平されており残存幅は0.6～1.4ｍある。検出面からの深さは約0.6ｍある。埋土は図版１の24・25層である。底部の標高は西が東より約0.08ｍ低い。埋土から12世紀中頃の土器が出土した。推定三条坊門小路南築地心の北側に位置しており、南側溝として掘削されたと考えられる。

溝808　調査区北端で検出した。北東から南西方向の溝である。検出長は約11ｍである。検出面からの深さは約0.2ｍある。埋土は図版１の20層である。底部の標高は西が東より約0.08ｍ低い。埋土から12世紀末頃の土器が出土した。

溝98（図版45）　調査区南端で検出した。東西方向の溝である。検出長は約41ｍで、幅は約0.8～１ｍある。検出面からの深さは約0.6ｍある。埋土は図版１の７～11層である。底部の標高は西が東より約0.05ｍ低い。埋土から17世紀代の土器が出土した。三条坊門小路南築地心推定ラインの北側に位置しており、条坊地割を踏襲して掘削され

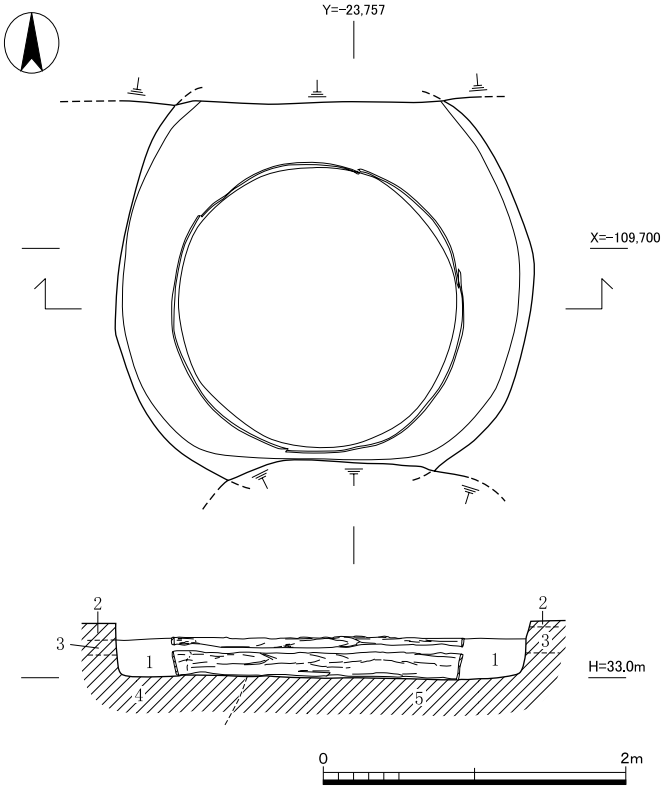


図10　土坑92実測図（１：50）

たと考えられる。埋土からウマの下顎の歯や上顎の臼歯が出土している。

杭列１～４　調査区の中央・南端で東西方向の杭列１～４を検出した。検出長は17～20ｍで杭間は0.5～3.0ｍある。杭間0.5ｍのものが多い。杭列１・２は、杭により板を固定した箇所も見られ、土留めの機能が想定される。東壁断面の観察により近世耕作土の上から杭が打ち込まれていることが確認でき、近世以降のものであるとわかる。

土坑92（図10、図版45）　調査区中央南寄りで検出した。北側は攪乱を受ける。掘形の平面形は円形で、径約2.8ｍ、深さは約0.4ｍある。掘形内に径1.9ｍの竹枠を据える。野壺の可能性がある。北東で検出した土坑60も竹枠が据えられており、同種の遺構の可能性がある。また土坑40・58・101・120についても形状や大きさから同種の遺構と想定され、耕作に伴う施設と考えられる。

土取土坑群　調査区の南東端で検出した。掘形は平面形が円形、方形、不定形のものがある。遺物は近世の磁器が少量出土した。土取土坑813中央部では平安時代の瓦が集中して出土しており、丸・平瓦をはじめ軒瓦も出土した。

２．六町（２・３区）

（１）基本層序（図版２～５）

調査地は現代盛土によりほぼ平坦になっており、地表面の標高は35.0～35.6ｍである。現地表面から1.1～1.5ｍが現代盛土で、その下に近世の耕作土が0.2～0.3ｍの厚さで堆積する（東壁１～３層、南壁１・２・５・６層、西壁１・４層）。その下に中世の耕作土が0.25～0.3ｍの厚さで堆積する（南壁15・16層、西壁８～10層）。その下に平安時代前期の整地層３が堆積する（東壁11層、南壁31～33層、西壁34～39層）。その下には平安時代前期の湿地状堆積（南壁43層）がある。平安時代前期の整地層と湿地状堆積を除去すると灰オリーブ色シルト、灰色砂礫・シルト、褐灰色砂礫（東壁17・18層、南壁47層、西壁42・43層）の基盤層となる。基盤層上面の標高は33.2～33.6ｍである。

平安時代前期の整地層３上面で第１面〔平安時代中期から江戸時代〕、基盤層上面で第２面〔弥生時代から平安時代前期〕の調査を行った。ただし、調査区西側の建物３は湿地状堆積上面で調査を行ったため第２－１面〔平安時代前期前半（９世紀前半）〕、基盤層上面を第２－２面〔弥生時代から平安時代初頭〕とした。第１面の遺構については、同一面で検出しているが、遺構の時期ごとに図面を分け、第１－１面（江戸時代）、第１－２面〔平安時代前期後半（９世紀中頃～後半）から後期〕として報告する。

（２）第２－２面〔弥生時代から平安時代初頭〕の遺構（図版11）

流路777　調査区の北部中央で検出した。北西から南東へ延びる流路である。検出長は約9.5ｍで、幅は0.5～1.1ｍある。検出面からの深さは約0.26ｍある。底部の標高は南が北より約0.08ｍ低い。埋土から弥生時代と考えられる土器の小片が出土した。

流路757　調査区の中央で検出した。北西から南東へ延びる流路である。検出長は約10.2ｍで、幅は0.4～1.8ｍある。検出面からの深さは約0.2ｍある。底部の標高は南が北より約0.09ｍ低い。遺物は出土していない。

流路776　調査区の中央で検出した。北西から南東へ延びる流路である。検出長は約3.4ｍで、幅は1.5～２ｍある。検出面からの深さは約0.12ｍある。底部の標高は南が北より約0.2ｍ低い。埋土から古墳時代と考えられる土器が少量出土した。

土手状高まり348（図版20）　調査区中央北寄りで、北西から南東へ弧状に延びる土手状の高まりを検出した。検出長約14ｍ、幅1.4～2.0ｍで、高さは約0.2ｍある。高まりの南端は、基盤層の標高が高い微高地にすりついていた。この土手状高まりは、基盤層である砂礫やシルト層を10㎝ほど掘り込み、その上に砂礫混じりの砂質土や粘土・砂礫などを互層に盛って固く叩き締め、さらに粘土で覆っていた。高まりの内側（南西）には、湿地状堆積349が認められた。遺物は出土していない。

（３）第２－１面〔平安時代前期前半〕の遺構（図版12・13・46）

建物３（図版18・46）　調査区中央北側・湿地状堆積349上面で検出した東西２間、南北３間の総柱建物である。掘形は直径0.3～0.6ｍの円形を呈し、深さは0.05～0.3ｍである。柱間は桁行・梁行ともに８尺（2.4ｍ）で、柱穴293のみ柱材が残存していた（図版46－３）。柱材の大きさは直径約15㎝で、樹種はヒノキである。９世紀前半の土師器などが出土した。

柱列４（図版19）　建物３の2.4ｍ東側で検出した。南北５間分を検出した。柱掘形は直径0.3～0.45ｍの円形を呈し、深さは0.1～0.25ｍである。柱間は６尺（1.8ｍ）である。９世紀前半の土師器などが出土した。掘立柱塀と考えられる。

柱列５（図版19）　建物３の1.8ｍ北側で検出した。東西２間分を検出した。柱掘形は直径0.3～0.4ｍの円形を呈し、深さは0.1～0.2ｍである。柱間は８尺（2.4ｍ）である。柱穴の埋土には木質遺物が多く含まれていた。柱列４・５は柱間が異なるが、建物３の北と東を囲う一連の遮蔽施設とみられる。９世紀前半の土師器などが出土した。

湿地状堆積349（図版20）　土手状高まり348の内側（南西）で、黒褐色シルト～粘土の堆積（図版20－７層）を検出した。深さは0.15～0.2ｍで、窪みに溜まったとみられる枝葉を含む腐植土を最下層（17層）で確認した。調査区の南西隅では、礫を多量に含む整地層１で埋め戻されていた（図版12・13）。また、この湿地状堆積の上面は土壌化が認められ、建物３や柱列４・５はこの上面で成立している。この湿地状堆積からは、９世紀初頭の土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器などの土器類、瓦、下駄などの木製品が出土した。

（４）第１－２面〔平安時代前期後半から後期〕の遺構（図版14・15・47）

調査区中央北側から西側では、整地層の上面で建物１・２、柱列３を確認した。整地層は、上下２層に分けられ、上層は灰オリーブ色粘土ブロックをよく含む暗灰黄色シルト（整地層３、図版20－２層、厚さ約0.1ｍ）、下層は礫・土器片を含む灰黄褐色細砂～シルト（整地層２、図版20－３層、厚さ0.04～0.1ｍ）である。整地層２は、建物１の北端から柵３の南端部にかけての範囲で、東西約14ｍ、南北約15.5～18ｍに及ぶ。ただし、調査区の西側は現代の攪乱によって削平を受けているため、整地層２の西端は確認できていない。建物１の範囲は、土器片や礫が特に多く含まれた土で整地がなされていた。９世紀前半の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器などの土器類、瓦などが出土した。また、この整地層２では土器埋納遺構や集石も検出した。

調査区東側では、基盤層上面で建物４、池750、溝599、柱穴555を検出した。また池750の下層には９世紀中頃の遺物を含む湿地状堆積の一部を確認した。池750・350・溝599については、これまでの調査と併せた考察を「第５章２・３」で述べることとし、ここでは今年度の調査成果のみ記す。

建物１（図版21・48・49） 調査区北西側で東西３間以上、南北２間の身舎に南１間の庇をもつ掘立柱建物を検出した。建物の西部は現代の攪乱により大きく削平を受けており、建物はさらに西側に続くとみられる。柱掘形は一辺0.48～0.9ｍの隅丸方形を呈し、深さは0.04～0.6ｍである。身舎の柱間は、桁行８尺（2.4ｍ）。梁行は８尺（2.4ｍ）である。庇の出は９尺（2.7ｍ）である。９世紀前半の土師器・須恵器・黒色土器などの土器類が出土した。

建物２（図版22・48） 建物１と重なる位置で掘立柱建物を検出した。確認できた柱穴は建物身舎の東側の東西１間、南北２間分と南庇の東西２間分である。柱掘形は一辺0.36～0.56ｍの隅丸方形を呈し、深さは0.1～0.2ｍと残存状態は良くない。身舎の柱間は桁行・梁行ともに８尺（2.4ｍ）で、庇の出は９尺（2.7ｍ）である。建物１と建物２は、身舎と庇の出の柱間が等しく、位置も重なっていることから、建て替えと考え、建物２も建物１と同様の規模をもつものとみられる。建物１と建物２は、柱穴に切り合い関係がみられないために、時期の前後関係は不明である[1)]。９世紀前半の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器などの土器類、瓦が出土した。

建物４（図版23・48・49） 調査区南西部で建物の柱穴５基を検出した。この柱穴は、2011年度の調査で検出した「建物１」の西側柱列にあたり、柱掘形には一辺0.8～１ｍの隅丸方形を呈するものと、南北0.7ｍ、東西1.35ｍの東西に長い隅丸長方形を呈するものがある。深さは0.2～0.4ｍである。柱間は東西・南北ともに７尺（2.1m）だが、西端の一間分のみ９尺（2.7m）と広い。今回の調査で検出した柱穴のうち、４基の柱穴（柱穴692・694・695・696）で、掘形の内部を地業する状況が確認できた。４基の柱穴では、柱掘形の底面に基盤層由来のシルト～粘土を４～15㎝の厚さでレンズ状に敷き、その上に幅１～３㎝の薄い樹皮[2)]を厚さ２～６㎝敷き重ね、その上に黒褐色粘土を重ねていた。この４基の柱穴では、柱の痕跡や抜取痕跡は確認できなかったため、建物の柱の下端部は今回の検出面よりも高い位置にあったとみられる。一方で、柱穴693では柱の抜取穴を確認

した。埋土には炭化物片や土器の細片が多量に含まれていたが、時期の特定できる遺物はない。また、柱穴693からは軒平瓦が出土したが、柱穴692・694・695・696からはほとんど遺物が出土しなかった。

柱列３（図版19・49） 建物１・２の2.4ｍ東側で南北方向の掘立柱塀を６間分検出した。柱掘形は直径0.3～0.6ｍの隅丸方形または円形を呈し、深さは0.1～0.2ｍである。柱間は７尺（2.1ｍ）である。９世紀前半の土師器・須恵器・黒色土器などの土器類、瓦、土馬の脚部が出土した。

池750（巻頭図版１、図版24・50・51） 調査区中央南側で池の北東隅を検出した。池750はこれまでの地点23～25（1995年度、2002年度、2009年度）で検出した池と同遺構である。

今回検出した池の規模は、東西6.5ｍ以上、南北14.4ｍ以上、深さは調査区南西の最深部で0.4ｍであった。池は元々の湿地（図版３－43層）を利用し作られている。洲浜は、黄灰色粘土（図版３－29）を厚さ５㎝ほど敷き、幅2.1～2.7ｍの範囲に径３～10㎝の礫を密に敷いて（図版３－27・28層）構築する。洲浜に用いられた礫の石材の種類は主に砂岩、チャートであった[3)]。また、洲浜には礫だけでなく、少量ではあるが瓦片も用いられていた。岸の傾斜角度は、東岸で４～８度で、北東隅の溝599との合流部付近が４度と、最も緩やかな傾斜を持つ。池750の埋土は２層に別れる。下層は黒褐色粘土（図版４－32層）、上層は黒褐色粘土（図版４－31層）である。下層の黒褐色粘土層は、池が機能していた時の堆積土とみられ、後世の踏み込みにより層界が凸凹していたものの、西壁北側で確認できた。上層の黒褐色粘土層は、木質遺物や種実、非常に小さな魚とみられる骨片が多く含まれており、池がしばらく放置された際の堆積土とみられる。その上面に池350が構築された。

また、池750の下層で湿地状堆積780を検出した。池750は現地に保存されることとなり、池750を掘削する調査は行わなかった。そのため、池750の下層に存在する湿地状堆積の全体像は把握できなかったが、池750の南壁・西壁の断ち割り断面でその一部を確認した（図版４－41層、図版３－43層）。湿地状堆積780の埋土からは９世紀後半の土師器が出土した。

池750の洲浜の直上からは、９世紀後半の皿や高杯を中心とした土師器・須恵器などの土器類、瓦、円面硯、富壽神寶・饒益神寶などの銭貨が出土した。

洲浜外縁部781（巻頭図版１、図版24・50・51） 洲浜の外縁部は、東西8.9ｍ、南北17ｍの範囲を掘り下げている。図版３－26層は、池の東岸の南東端の南北約５ｍ、幅0.3～0.6ｍの範囲でのみ確認しており、図版３－27・28層に比べると径の小さい２㎝ほどの小礫を敷いていた。この遺構は洲浜と一連の構築であるが、構築方法が異なることからここでは別遺構として報告した。

集石778・779（図版24・25） 池750と溝599との合流部付近で、２基の集石遺構（集石778、779）を検出した。洲浜の礫よりも大きい長径15～20㎝の礫が５～７個置かれていた。集石778には、礫の他に軒平瓦片も含まれていた。集石778は、溝599と池750の合流部に位置することから、溝599から流れ込む水の量を調節する堰の機能を持っていたと考えられる。

溝599（図版25・51） 調査区東側から中央にかけて東西方向の素掘り溝を検出した。この溝599は地点30（2011年度）の調査で確認された池250と今回検出した池750をつなぐ溝で、溝の西

端は池750に接続する。溝底の標高から、水は西流していたとみられる。

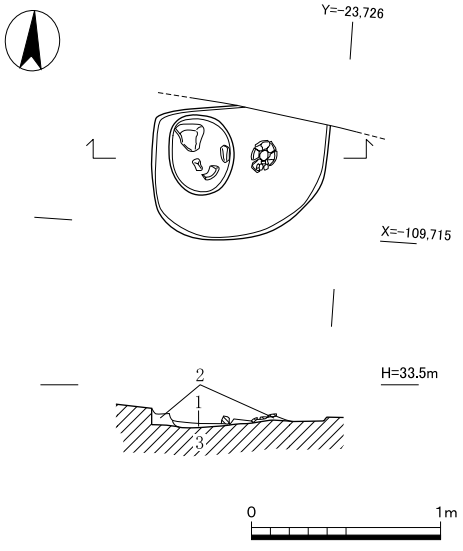
溝の総延長は約48mで、今年度の調査では長さ約20ｍ分を検出した。溝は調査区東端から西へほぼ直線状に17ｍほど延びた後、南西方向に屈曲し、池750の北西隅に合流する。溝の幅は東端で1.4ｍ、溝の深さは0.45ｍで、池750と合流する手前の屈曲部では幅1.9ｍと広くなり、溝底の標高を下げてやや深くする。一方、合流部は溝底を浅くし、溝の幅も狭めていることから、幅の広い屈曲部付近に水を貯め、その上澄みの水を池750に流したとみられる。

溝の埋土は、基本的に上層と下層とに分けられる。土層観察用畦のうち、中央畦（図版25－Ｃライン）と合流部畦（図版25－Ｂライン）では、溝の堆積土とみられる灰色～オリーブ灰色、黒褐色粘土などが確認できた。東壁の断面（図版25－Ｄライン）では、この堆積土は確認できなかったことから、池750との合流部付近にのみ泥が溜まったとみられる。

溝からは主に９世紀前半から中頃の土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦などが出土した。とくに土器類は摩滅が激しく、多くが小片であった。

柱穴555（図11） 調査区北東側で柱穴を検出した。柱掘形は一辺0.7～0.9ｍの隅丸長方形に近い形を呈し、深さは0.15ｍである。柱穴555は、地点30（2011年度）の調査で検出した「建物３」の北側柱列の西延長にあたる場所に位置しており、「建物３」に関連する構造物の柱穴である可能性が高い。９世紀後半の土師器が出土した。

土器埋納遺構292（図版26・51） 調査区北西側で土師器皿９枚を埋置した遺構を検出した。この土器埋納遺構は整地層２の中にあり、掘形は存在していない。建物１の南辺部にあたる。土師器皿は東西0.25ｍ、南北0.2ｍの範囲の北半に３枚、南半に６枚がすべて正位置で置かれていた。北側の３枚はそれぞれ重ならずに整然と並んでいたが、南側は一部が重なって配置されていた。９世紀前半から中頃の土器である。



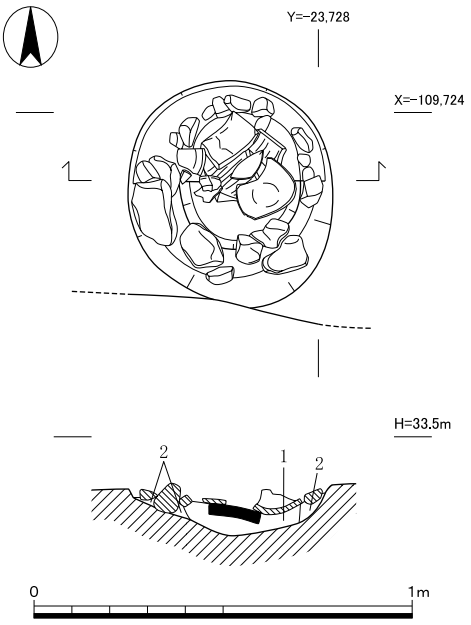
1　10YR3/2黒褐色粘土（炭化物・礫・木片・土器片含む）
2　10YR3/3暗褐色粘土（炭化物・土器片含む）
3　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
（5Y6/1灰色粘質シルト含む）――― 基盤層

図11　柱穴555実測図（１：40）

集石285（図版26・51） 調査区中央北側で集石を検出した。この集石は整地層２の中にあり、掘形は存在していない。建物１より約３ｍ、建物２より約1.6ｍ南にあたる。南北0.7ｍ、東西0.9ｍの範囲に10～15㎝ほどの石を重ならないように置いていた。

集石291（図版26・51） 調査区西部で集石を検出した。この集石は集石285と同様に整地層２の中にあり、掘形は存在していない。柱列３より約２ｍ東にあたる。南北0.45ｍ、東西0.6ｍの範囲に10～15㎝ほどの石を重ならないように置いていた。２基の集石の位置は、その後建てられる建物１・２の南限や塀（柱列３）の東限付近に位置しており、これらの建物の範囲と関連する可能性がある。

土坑548（図12・13） 調査区北東部で検出した。掘形の平面形は円形で、径0.54ｍ、深さ約0.5ｍある。掘形内に内法径0.3ｍで礫を据える。礫は径0.07～0.18ｍある。北半分の礫は小さく比較的粒がそろっている。礫の内側から越州窯青磁椀が正位置で出土した。北二門の東二行と東三行の境付近に位置し、埋納遺構の可能性が考えられる。



1　10YR4/2灰黄褐色細砂～シルト粘質
2　10YR5/1褐灰色シルト

図12　土坑548実測図（１：20）

池350（巻頭図版２、図版27・52） 池750の上層で新しい時期の池を検出した。池350は地点23・25（1995年度、2009年度調査）で検出した池と同遺構である。

今回の調査で検出した池の規模は、東西6.5ｍ、南北8.4ｍ、深さは調査区南西の最深部で0.1ｍほどであった。池350は池750を埋め立てて構築されていた。南壁と西壁の土層の観察から、まず池750が放置された際の堆積土の上に粘土ブロックや粘質土を積んで土手状の高まりを作り（図版３－23・24層、図版４－27・28層）、その内側に砂礫を多量に含む粘質土など（図版３－19・22層、図版４－13～26層）を充填した後、暗灰黄色砂混粘質土（図版３－18層、図版４－12層）を置き、上面には径３～５㎝の小礫を非常に密に敷き詰める構築の工程を確認した。またX＝－109,742付近の土手状の高まり（図版４－27・28層）より北は暗灰黄色粘土や黒褐色粘質土（図版４－29・30層）で埋められていた。池の礫敷に用いられた礫の石材の種類は主に砂岩、チャートであった[2)]。池350の礫敷には池750の洲浜とは異なり、瓦片は含まれていなかった。

図13　土坑548土器出土状況（南から）

池の埋土は灰黄色粘土層（図版３－17層）である。この層から12世紀後半の土師器・須恵器・瓦器などの土器類、瓦などが出土した。池350構築土からは、10世紀前半から12世紀中頃の土器が出土することから、池350は12世紀中頃に造られたとみられる。

（５）第１－１面〔江戸時代〕の遺構（図版16・17）

建物５　調査区南西部で検出した。東西３間南北２間の総柱建物である。東西柱間は約1.65ｍ、南北柱間は約2.1ｍある。

井戸564（図14）　調査区北東部で検出した。円形石組井戸である。掘形は長径1.2ｍのいびつな円形を呈する。石組みの内径は約0.6ｍある。標高32.2ｍで底を確認した。検出面からの深さは1.2ｍある。近世の瓦が出土した。

図14　井戸564（南から）

図15　溝151護岸検出状況（北から）

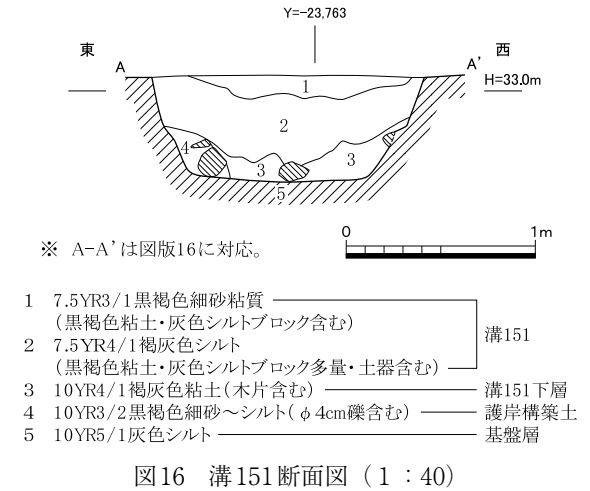


図16　溝151断面図（１：40）

柱列２　調査区中央で検出した南北方向に走る柱穴列である。柱間は約１～4.5ｍである。柱穴は径0.3～0.5ｍある。若干ではあるが北に対して東に振れる。

柱列７　調査区南東側で検出した東西方向に走る柱穴列である。柱間は西から1.6ｍ、1.8ｍと不均等である。柱穴は径0.3～0.5ｍある。東に対して南に３度振れる。この柱穴列は、2011年度の調査で検出した「柱列560」の西側延長線上に位置し、同一遺構である。

溝151（図15・16）　調査区中央西寄りで検出した南北方向の溝である。検出長は約24.5ｍで、幅は1.3～1.9ｍある。検出面からの深さは約0.56ｍある。埋土は図16の１～３層である。一部で石と杭で護岸を施していることを確認した。図16の４層は護岸に伴う構築土である。護岸は全体に施されていないことから崩れてきた溝の掘形を護岸したものと考えられる。さらに北へ続くと考えられるが１区では攪乱を受け検出できなかった。埋土から17世紀代の土器が出土した。

土取土坑群　調査区の南西部で検出した。平面形は長辺1.2～7.2ｍ、短辺0.6～1.9ｍほどの長方形や不定形のものが多くみられる。いずれも基盤層を掘り込んでおり、基盤層の灰色シルト層を得るための土取土坑群と考えられる。埋土からは近世の陶磁器が少量出土した。

註

1） 建物２の柱穴は、建物１の床束の可能性もある。

2） 柱穴内の材木については、北野氏（龍谷大学）に分析を依頼した。また現代の檜皮職人の大野氏・友井氏にも実見いただき、ご教授いただいた。その結果、樹皮は檜皮と判明した。また、今回検出した檜皮については、加工されていると考えられ、鬼皮の部分は見られないとのことであった。

3） 今回の調査では、池750と池350及び基盤層中で一部確認できた礫の鑑定を橋本清一氏に依頼した。鑑定では、池750・池350の洲浜または礫敷において、任意の地点に１ｍ四方の範囲を設定し、その範囲に敷かれた石を任意に60石抽出して、それらの石材の種類・大きさ・円磨度・風化度を調べた。また、池に使用された礫と比較をするために、基盤層中の礫も30石を任意に抽出し、池同様に鑑定した。その他、池750の２つの集石も同様に鑑定を行った。

池750の石の種類は、砂岩・チャート・ホルンフェルス・凝灰岩・脈石英が確認でき、それぞれ31：24：３：１：１（総数60）の割合であった。大きさは長径10～15㎝の礫が多く目立ち、長径５～９㎝の礫は少なかった。

池350の石の種類は、砂岩・チャート・脈石英が確認でき、それぞれ29：30：１（総数60）の割合であった。大きさは長径３～９㎝の礫が約80％と圧倒的に多く、長径10～15㎝の礫は約20％と少なかった。

集石778の石の種類は、砂岩・チャートで、３：１の割合であった。集石779の石の種類は、砂岩・チャート・ホルンフェルスで、３：１：１の割合であった。

基盤層の礫の種類は、砂岩・チャートが確認でき、それぞれ18：12（総数30）の割合であった。大きさは長径３～20㎝まで幅広く確認することができた。

このように、石材の組成としては、池750、池350、集石778・779、基盤層ともに砂岩とチャートが大多数を占めること、円磨度や風化度についても類似していることから、池で用いられた礫は、邸宅近郊で露出した基盤層中の礫を採取した可能性が高いと考えられる。

第４章　遺　　物

縄文時代、弥生時代、平安時代、江戸時代の遺物が主に出土している（表３）。出土量が最も多いのは平安時代前期に属する遺物で、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、石製品、土製品、木簡、木製品などがある。なお、土器編年の型式は、平尾政幸氏編年案に準拠した[1)]。

１．墨書土器（図版28～30・53、付表１）

七町・三条坊門小路域を中心に出土している。出土点数は、七町・三条坊門小路域で14点（墨１～14）、六町域で８点（墨15～22）、計22点である。内訳は、耕作土855が８点、整地層５が３点、土手状遺構827と湿地状堆積349が各２点。溝808、建物２柱穴254、整地層２、整地層３、池750上層、池750洲浜、表面採集品が各１点である。特に三条坊門小路を覆う耕作土855からの出土が多い。

以下墨１から順に解説する。釈文は後にまとめて記載する。

墨１　土手状遺構827出土。須恵器の鉢。体部外面に墨痕があるが文字か不明。

墨２　土手状遺構827出土。須恵器。器形不明。体部外面に墨痕があるが文字か不明。

墨３　整地層５出土。灰釉陶器の椀。底部外面に墨書がある。重ね書きか。

墨４　整地層５出土。土師器の椀。口縁外面に墨書がある。２Ｂ段階に属する。七条院は亭子院のことか。

墨５　整地層５出土。灰釉陶器の皿。底部外面に墨書があるが文字は不明。

墨６　七町域の耕作土855出土。灰釉陶器の皿または椀。底部外面に墨痕があるが文字か不明。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
旧石器時代～縄文時代	石器		石器３点		
弥生時代	弥生土器		弥生土器６点		
古墳時代～飛鳥時代	土師器、須恵器		須恵器２点		
平安時代	墨書土器、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦質土器、輸入陶磁器、瓦、金属製品石製品、土製品、硯、木簡、木製品		墨書土器22点、土師器110点、黒色土器６点、須恵器39点、緑釉陶器21点、灰釉陶器８点、瓦質土器２点、輸入陶磁器５点、瓦47点、金属製品９点、石製品８点、土製品16点、木簡２点、木製品39点		
江戸時代	土師器、焼締陶器、瓦質土器、施釉陶器、磁器、金属製品、石製品、木製品		土師器３点、瓦質土器１点、施釉陶器１点、金属製品１点、石製品２点、木簡１点、木製品２点		
合　計		259箱	356点（35箱）	２箱	222箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａ・Ｂランクの遺物を抽出したため、出土時より37箱多くなっている。

墨７　三条坊門小路域の耕作土855出土。須恵器。器形は鉢か。体部外面に墨書があるが文字は不明。

墨８　三条坊門小路域の耕作土855出土。土師器の皿。底部外面に墨書がある。

墨９　三条坊門小路域の耕作土855出土。須恵器の杯身。底部外面に墨書があるが文字か不明。

墨10　三条坊門小路域の耕作土855出土。土師器の椀。底部外面に墨書がある。１Ｂ～１Ｃ段階に属する。

墨11　三条坊門小路域の耕作土855出土。緑釉陶器の椀。底部外面に墨書がある。

墨12　三条坊門小路域の耕作土855出土。須恵器の杯身。底部外面に墨書があるが文字は不明。

墨13　三条坊門小路域の耕作土855出土。灰釉陶器の皿または椀。底部外面に墨書があるが文字は不明。

墨14　溝808出土。灰釉陶器の皿または椀。底部外面に墨書がある。筆跡が墨22と類似する。

墨15　湿地状堆積349出土。土師器の皿か。底部内面に墨書がある。「筯」は「箸」、「箸壷」は『延喜式』中務省・主計上に見える。

墨16　湿地状堆積349出土。土師器の椀か。底部外面に墨書がある。

墨17　建物２の柱穴254出土。土師器の皿または椀。底部外面に墨書があるが文字は不明。

墨18　表面採集遺物。須恵器の杯身。底部外面に墨書がある。

墨19　整地層３出土。須恵器の杯蓋。外面に墨書、内面に墨痕がある。

墨20　整地層２出土。須恵器の杯身。底部外面に墨痕がある。

墨21　池750上層出土。土師器の高杯。内面に墨痕がある。左右対称の文様の可能性がある。

墨22　池750洲浜出土。灰釉陶器の椀。底部外面に墨書がある。筆跡が墨14と類似する。

墨書土器の釈文については西山良平氏（京都大学）、吉野秋二氏（京都産業大学）のご教示を受けた。

墨書土器釈文

墨1　墨痕あり
墨2　墨痕あり
墨3　□［有カ］
墨4　七条院
墨5　□
墨6　□［入田カ］□
墨7　□
墨8　天
墨9　□
墨10　酒
墨11　□の［野カ］
墨12　□
墨13　□□
墨14　□［大カ］
墨15　□［十カ］二　□□
墨16　酒
墨17　□
墨18　天
墨19　福□
墨20　墨痕あり
墨21　墨痕あり
墨22　□［大カ］
□杯三　筋壷（箸）
□提二　□［酒カ］
□佐□　□［小カ］

２．土器・陶磁器類

（１）平安時代（図版31～34・53・54、付表２）

１）七町・三条坊門小路域

土手状遺構41出土土器（図版31　１～８）　構築土内から出土した。土師器、須恵器、灰釉陶器がある。１Ｂ～Ｃ段階に属する。

土師器には椀がある。椀（１～３）は外面にヘラケズリを施すもの（１）、ヨコナデで調整するもの（２・３）がある。いずれも焼成は良好で堅緻である。色味が赤みを帯びるもの（２・３）がある。

須恵器には杯、鉢、甕がある。杯（４～６）は高台が短く張り出す。高台内にヘラ記号がみられるもの（６）がある。鉢（７）は口径27.6㎝と比較的大型品である。甕（８）は口縁部が短く、ほぼ直角に立ち上がる。外面にはタタキ、内面には当て具の痕跡が若干残る。口縁端部と体部外面に自然釉がかかる。

溝850出土土器（図版31・53　９・10）　土器は少量しか出土していない。土師器、須恵器がある。１Ｂ段階に属する。

土師器には皿がある。皿（９・10）は口縁部外面をヨコナデで調整する。体部から底部外面には指頭圧痕がみられる。焼成は良好で色調が赤みを帯びる。

土手状遺構827出土土器（図版31　11・12）　構築土内から出土した。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。いずれも小片である。墨書土器が２点出土している（墨１・２）。２Ｂ～Ｃ段階に属する。

土師器には椀（11）がある。口縁部をヨコナデで調整する。体部には指頭圧痕がみられる。

緑釉陶器（12）は椀か皿の高台部である。高台を丁寧にケズリ成形する。丹波篠窯の製品と考えられる。

湿地状堆積853出土土器（図版31　13～26）　土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。２Ａ～Ｃ段階に属する。

土師器には皿、椀、杯、高杯、甑がある。皿（13）は口縁部外面をヨコナデで調整する。ナデが強く口縁が少し外反する。底部内面に一部粗いハケメが残る。椀（14）は口縁部をヨコナデで調整する。口縁の外面に油煙が付着する。体部外面には指頭圧痕がみられる。杯（15・16）は口縁部外面をヨコナデで調整する。内面は底部付近まで丁寧なナデ、体部外面には指頭圧痕がみられる。15は胎土に赤色礫が混じる。高杯（17・18）の17は脚部のみ残存する。外面をヘラケズリにより８面に面取りする。18は脚部と一部裾部が残存する。脚部は外面をヘラケズリにより６面に面取りする。裾部内面はヨコナデできれいに調整する。甑（19）の把手は芯の粘土にさらに粘土を巻き付けてナデで仕上げるが一部ハケメが残る。粘土を巻き付けた際に付着したと考えられる指紋がみられる。内・外面はハケメで調整し、内面は一部ナデで調整する。

須恵器には杯蓋、杯、壷がある。杯蓋（20）は口縁部上面にわずかに自然釉がかかる。杯（21～23）の21・22は高台が付く。21は口縁部が少し外反する。22は高台の一部が剥離しており、底部は凹凸で粗雑なつくりである。23は高台が付かない。壷（24）は細長い胴部と頸部をもつ。底部内面は凹凸が顕著である。底部外面には糸切り痕跡が残る。焼成は軟質である。

緑釉陶器には皿（25）がある。外面はヘラケズリ。内面はナデか。高台は貼り付けによる輪高台である。猿投産である。高台内を含めた全面に施釉する。

灰釉陶器には椀（26）がある。外面はヘラケズリを施し、内面はヨコナデで調整する。高台は貼り付けによる輪高台である。内面・高台の一部に釉薬がかかる。

整地層５出土土器（図版31・53　27～39）　三条坊門小路の整地土から出土した。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。墨書土器が３点出土している（墨３～５）。２Ｂ～Ｃ段階に属する。

土師器には皿、椀、杯がある。皿（27）は口縁部をヨコナデで調整する。底部外面には指頭圧痕がみられる。器壁は薄い。椀（28）は口縁部をヨコナデで調整する。体部から底部外面には指圧痕跡がみられる。器壁が薄い。杯（29～31）は口縁部をヨコナデで調整する。体部から底部外面には指圧痕跡がみられる。

須恵器には壷、鉢がある。壷（32）は底部付近の破片である。高台は貼り付けによる輪高台で、外方向に張り出す。高さは0.8cmある。鉢（33）は口縁端部が玉縁状を呈する。底部は糸切りである。口縁部付近の体部が大きく外側に膨らむ。底部付近は内側に窪む。

緑釉陶器には皿、椀がある。皿（34）は内外面をナデ調整する。体部内面に釉薬がかかる。釉薬は摩滅痕跡のみとなる。高台は削り出しによる平高台で高台内にヘラ書きがみられる。椀（35～38）の35は外面にヘラケズリを施し、内面はヨコナデで調整した後、ヘラミガキを施す。高台は削り出しによる蛇の目高台である。底部内面に重ね焼きの痕跡がみられる。高台も含めた全面に施釉する。36は内・外面とも摩滅が激しいが、外面底部付近はヘラケズリを施す。内面はナデ痕跡がみられる。高台は削り出しによる平高台。高台部にヘラ書きの痕跡がある。高台も含めた全面に施釉する。37は外面にヘラケズリを施し、内面はヨコナデで調整した後、ヘラミガキを施す。高台は削り出しによる輪高台である。高台も含めた全面に施釉する。38は体部中位に稜が付く稜椀。外面下半はヘラケズリを施し、上半はヨコナデで調整する。内面はヘラケズリの後にヘラミガキを施す。高台は削り出しによる蛇の目高台である。高台も含めた全面に施釉する。

灰釉陶器には椀がある。椀（39）は内・外面をナデで調整する。高台は貼り付けによる輪高台で、高台内に糸切り跡が残る。内面と口縁部外面に釉がかかる。

溝125出土土器（図版31　40～46）　土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。２Ｃ～３Ａ段階に属する。

土師器には椀がある。椀（40～42）は口縁部をヨコナデで調整する。体部外面には指頭圧痕がみられる。

須恵器には壷（43）がある。口頸部の破片である。口縁端部は上方に引き上げる。

緑釉陶器には椀がある。椀（44・45）は内・外面をヨコナデで調整する。高台は貼り付けによる輪高台。底部内面にトチンによる重ね焼きの痕跡が残る。44は高台内に糸切り痕跡とトチンによる重ね焼き痕跡がみられる。45は底部に凹線が巡る。

輸入陶磁器には青磁の椀がある。椀（46）は高台部と体部の破片である。体部に縦方向の稜がみられることから輪花椀と考えられる。高台は削り出しによる輪高台。

南築地854出土土器（図版31　47～49）　三条坊門小路の推定南築地心の整地土から出土した。土師器、須恵器、緑釉陶器がある。３Ｂ段階に属する。

土師器には皿がある。皿（47・48）は口縁部外面をヨコナデで調整する。口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。

緑釉陶器には椀がある。椀（49）は底部の破片である。高台は削り出しによる輪高台。高台面も含めた全面に施釉する。

北築地846出土土器（図版31　50～54）　三条坊門小路の推定北築地心の整地土内から出土した。土師器、須恵器、緑釉陶器がある。３Ａ～Ｂ段階に属する。

土師器には杯・皿がある。皿（50・51）は口縁部をヨコナデで調整する。口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。杯（52）は口縁部をヨコナデで調整する。口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。

緑釉陶器は椀、水注がある。椀（53）は内・外面をヨコナデで調整する。高台は貼り付けによる輪高台で、内傾する下端部が凹線状に窪む。近江産か。高台底部にトチンによる重ね焼きの痕跡が残る。高台面も含めた全面に施釉する。水注（54）は把手接合部と体部である。把手は粘土を接合した後でヘラケズリにて成形している痕跡がみられる。体部内・外面はナデで調整する。

溝100出土土器（図版31　55～57）　土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。４Ｃ～５Ａ段階に属する。

土師器には皿がある。皿（55・56）は口縁部を上下２段のヨコナデで調整する。55は上下２段のナデの間に凸面がみられる。56は上下２段ナデが近接し、断面は丸みを帯びる。

灰釉陶器には椀がある。椀（57）は内・外面をナデで調整する。高台は貼り付けによる輪高台である。体部内面に釉がかかる。体部外面の釉薬は高台部まで達しない。

耕作土855出土土器（図版32　58～67）　土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。墨書土器が７点出土している（墨６～13）。５Ｂ～６Ａ段階に属する。

土師器には皿がある。皿（58～64）は、口径が10㎝までのもの（56～61）と13㎝以上のもの（62～64）に大きく分別される。56・63は胎土に赤色礫が混じる。

灰釉陶器には椀がある。椀（65）は内・外面をナデで調整する。高台は貼り付けによる輪高台。体部内面に釉がかかる。

輸入陶磁器には白磁と青白磁がある。白磁椀（66）の高台は削り出しによる輪高台。底部内面に粘土の継ぎ目がみられる。青白磁合子蓋（67）は受部直径４㎝と小型品である。蓋上面に陰刻花文を施釉前に施す。

２）六町域

湿地状堆積349出土土器（図版32・53　68～83）　土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。墨書土器が２点出土している（墨15・16）。１Ｂ新段階を中心に１Ｃ段階までの時期に属する。

土師器には皿、杯、高杯、甕がある。皿（68～70）の68は口縁部付近をヨコナデで調整する。内外面に油煙が付着する。69・70は内面と口縁部外面をヨコナデで調整し、外面はヘラケズリを施す。70は口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。杯（71・72）の外面はヘラケズリを施す。71は口縁部付近をヨコナデ調整する。72は口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。高杯（73）は脚部のみ残存する。外面をヘラケズリにより７面に面取りする。甕（74）は小型品である。口縁部をヨコナデで調整する。体部外面に小さな突起がつく。体部内面にヘラ記号がみられる。

黒色土器には椀がある。椀（75）は内面と口縁部外面にヘラミガキを施す。内面にはラセン状の暗文を施す。胎土に赤色礫が混じる。

灰釉陶器には壷蓋がある。壷蓋（76）は口径が4.4㎝と小さく小型品である。天井部外面には釉がかかる。

須恵器には壷蓋、杯蓋、杯、鉢、甕がある。壷蓋（77）は天井部に藁灰の痕跡がみられる。つまみは接合面から欠損する。杯蓋（78）は天井部の中心に宝珠形のつまみが付く。杯（79～81）の79は焼きが甘く摩滅が激しい。80・81は高台が付く。鉢（82）は肩が張った体部に短く外上方に延びる口縁部が付く。焼成は良好である。甕（83）は口縁端部が丸みを帯びる。外面にはタタキが見られるが、内面に当て具の痕跡がみられない。

建物３出土土器（図版32　84・85）　各柱穴から出土した。土師器、黒色土器、須恵器、がある。１Ｃ段階に属する。

土師器には皿がある。皿（84）は内面と口縁部外面をヨコナデで調整する。底部外面には指圧痕跡がみられる。内・外面に油煙が付着する。

須恵器には杯蓋がある。杯蓋（85）は口縁部付近が残存する。

土器埋納遺構292出土土器（図版32・53　86～95）　整地土から土師器皿がまとまって出土した。13個体を確認したうちの10点を図示する。１Ｂ新段階を中心に１Ｃ古段階までの時期の遺物を含む整地層下面で検出した。

皿（86～95）は口径8.1～8.8㎝である。口縁部内・外面をヨコナデで調整し、底部外面には指頭圧痕がみられる。器壁は薄い。表面は摩滅が著しい。

整地層２出土土器（図版32・33・53・54　96～123）　整地土から出土した。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。墨書土器が１点出土している（墨20）。破片のため実測が困難であるが、土師器の甕の体部が多くみられた。１Ｂ新～１Ｃ古段階に属する。

土師器には皿、椀、壷、甕がある。皿（96～98）の96・97は外面をヘラケズリで調整し、98は外面をヨコナデで調整する。97・98は口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。椀（99～101）は口縁部内・外面をヨコナデで調整する。100・101の体部には凹凸がある。100は器表の摩滅が激し

い。壷（102）は摩滅が激しく不明瞭であるが、外面はミガキの痕跡を一部残す。内面は上半をヨコナデで調整し、下半にはハケメがみられる。高台は貼り付け。胎土に赤色礫が多く混じる。甕（103～106）は口縁端部が内側に折り返すもの（103・104・106）と外反気味に立ち上がるもの（105）がある。103は摩滅が激しく不明瞭であるが、口縁部内・外面はナデ調整し、体部内面はナデ調整でオサエ痕跡が残る。外面は一部ハケメが残る。104は口縁部内面ハケメ、外面はナデで調整する。体部外面はハケメで調整する。105は口縁部内・外面はナデ調整する。摩滅が激しく不明瞭であるが、体部内・外面はハケメで調整する。106は、口縁部はナデ調整する。体部外面はタタキを施し、内面上半は横方向のハケメ、下半は青海波文の当て具痕跡を残す。

黒色土器には甕、椀がある。甕（107）の口縁部外面はヨコナデ、内面はヘラミガキを施す。体部外面はケズリのちヘラミガキを施す。椀（108・109）の108は内面が黒色化し外面は赤褐色を呈する。内面はヘラミガキを施す。116は内面・外面が黒色化する。内・外面ともヘラミガキを施し、内面にはラセン状の暗文を描く。

須恵器には杯蓋、杯、皿、壷、鉢、甕がある。杯蓋（110・111）は天井部の中心に宝珠形のつまみが付く。焼成は良好である。杯（113～116）の113～115は高台が付く。116の底部外面の調整は粗く、ヘラ切り痕を残す。焼成は良好である。皿（112）は口縁部と体部のナデは丁寧だが、底部外面の調整は粗く、ヘラ切り痕を残す。壷（118～120）の118・119は体部のみで口頸部は欠損する。118は肩部と底部内面に自然釉がかかる。内面に焼きぶくれがみられる。120は内面の凹凸が顕著である。底部に糸切り痕が残る。口縁端部と体部外面の一部に自然釉がかかる。鉢（121）の口縁部を強くナデで調整する。焼きひずみが大きく、底部付近の体部内面に焼きぶくれがみられる。甕（117）の口頸部は外反し、端部は面をもつ。体部は外面にタタキメ、内面には粘土継ぎ目と当て具痕跡が残る。

緑釉陶器には皿がある。皿（122）は摩滅が著しく、底部内面の調整は不明。高台は削り出しによる平高台。

灰釉陶器には壷蓋がある。壷蓋（123）は天井部の中心に宝珠形のつまみが付き、釉がかかる。

整地層３出土土器（図版33　124～135）　土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。墨書土器が１点出土している（墨19）。１Ｃ～２Ａ段階に属する。

土師器は皿、杯、高杯がある。皿（124）は摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、外面はケズリ痕跡がみられる。口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。杯（125・126）は摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、内・外面にナデ調整を施す。口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。高杯（127）は脚部と杯部が残存する。脚部外面をヘラケズリにより７面に面取りする。杯部は摩滅が激しく調整が不明瞭である。

須恵器は壷、平瓶、凸帯付双耳瓶がある。壷（128）は体部内面に漆が付着する。国産漆特有の縮み（図17）がみられる[2)]。平瓶（129）は横に長い扁球形をした体部の一方の端近くに口頸部を貼り付ける。また背後に把手を貼り付ける。体部上面、把手部に自然釉がかかる高台は低く削り出しによる輪高台。凸帯付双耳瓶（130）は肩部に２本の凸帯を付ける。耳には穿孔がみられ、上部先

端側面には切り込みがある。胴部にタタキの痕跡はみられない。北陸地方で製作された凸帯の付く双耳瓶と考えられる。

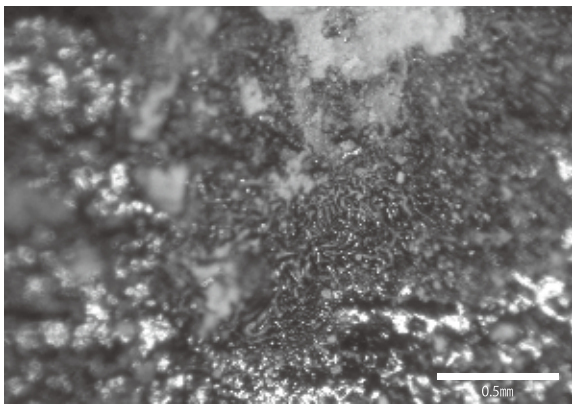


図17　須恵器壷（128）漆縮み状況

緑釉陶器には椀がある。椀（131～135）の131・132の高台は削り出しによる平高台。131は摩滅が激しく内面の調整不明。外面に釉薬がみられる。132の外面はヘラケズリで調整する。内外面に釉薬がかけられ、高台端部まで釉薬がみられる。133の高台は削り出しによる蛇の目高台。内・外面はヘラケズリで高台面も含めた全面に施釉する。134・135の高台は貼り付けによる輪高台。内・外面にヘラミガキを施す。高台面も含めた全面に施釉する。

建物１出土土器（図版33　136・137）　柱穴269から出土した。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。１Ｃ段階に属する。

土師器には皿、椀がある。皿（136）は外面をヘラケズリ調整する。口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。椀（137）は摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、外面にヘラケズリの痕跡を残す。口縁部はヨコナデ調整する。口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。

建物２出土土器（図版33　138・139）　柱穴254から出土した。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器がある。墨書土器が１点出土している（墨17）。１Ｃ段階に属する。

土師器には蓋がある。蓋（138）は摩滅が著しいが、天井部外面はヘラミガキの痕跡を残す。口縁部先端に沈線状の窪みがめぐる。

須恵器には杯がある。杯（139）は高台が付く。高台内に墨痕がみられる。焼成は良好である。

柱列３出土土器（図版33　140～142）　各柱穴から出土した。土師器、黒色土器、須恵器がある。１Ｃ段階に属する。

土師器には椀がある。椀（140）は外面に丁寧なヘラケズリを施す。柱穴204から出土した。

黒色土器には椀がある。椀（141・142）の内面は黒色化しヘラミガキ調整する。141は口縁部ナデ調整を施し、口縁端部が外反する。柱穴204から出土した。142の高台は貼り付けで断面形が三角形を呈する。胎土には赤色礫が混じる。内面は黒色化し外面は赤褐色を呈する。

土坑548出土土器（図版33　143）　土師器、輸入陶磁器がある。３Ａ段階に属する。

輸入陶磁器には椀がある。椀（143）の高台は削り出しによる輪高台で、メアトが６箇所残る。体部はやや外湾する。全体に釉薬を施す。越州窯産。

溝599出土土器（図版34　144～147）　土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。１Ｃ～２Ａ段階に属する。

須恵器には杯蓋がある。杯蓋（144）は口縁部付近が残存する。

緑釉陶器には椀がある。椀（145・146）の145の底部内面はナデ調整を施す。底部に糸切りの痕跡を残す。底部以外の内・外面に施釉する。146の高台は削り出しによる平高台。外面下半にヘラ

ケズリを施す。高台面も含めた全面に施釉する。

灰釉陶器には椀がある。椀（147）の口縁部と口縁付近の破片である。口縁端部が外反する。内・外面をナデで調整する。体部内面に釉がかかる。

湿地状堆積780出土土器（図版34・54　148～152）　堆積土内から出土した。土師器、須恵器がある。２Ｂ段階に属する。これらの土器は、池750構築時に踏み込み等でにより混じり込んだ土器の可能性も考えられる。

土師器には椀がある。椀（148～151）の体部内面と口縁部はヨコナデで調整する。148はほぼ完形。高杯（152）は脚部のみ残存する。脚部外面をヘラケズリにより７面に面取りする。

池750洲浜出土土器（図版34・54　153～159）　洲浜直上から出土した。土師器、須恵器、緑釉陶器がある。墨書土器が１点出土している（墨22）。２Ｂ段階に属する。

土師器には皿、杯、高杯がある。皿（153）の体部内面と口縁部はヨコナデで調整する。底部内面にハケメ痕跡がみられる。口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。杯（154）の体部内面と口縁部はヨコナデで調整する。高杯（155～158）の155・156は脚部のみ残存する。脚部外面をヘラケズリにより７面に面取りする。157は脚部と杯部の一部が残存する。脚部は外面をヘラケズリにより８面に面取りする。杯部は外面を中心に向かってヘラケズリを施す。内面はヨコナデで調整が施される。158は脚部のみ残存する。脚部は外面をヘラケズリにより面取りする。面数は８面ある。

須恵器には甕がある。甕（159）は体部のみ残存する。外面にはタテ方向のタタキ、内面には同心円文の当て具の痕跡が残る。当て具の痕跡は、図の右から左に進む。

池750上層出土土器（図版34・54　160～174）　埋土の上層から出土した。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。墨書土器が１点出土している（墨21）。２Ｃ段階に属する。一部５Ｂ段階の土器（168・169）が混じる。

土師器には皿、椀、杯、高杯がある。皿（160・162・167～169）は体部内面と口縁部はヨコナデで調整する。口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。168・169の口縁部外面のヨコナデは２段ナデである。168・169の土器は、池350構築時に踏み込み等により混じり込んだ土器の可能性も考えられる。杯（161・164～166・170）の体部内面と口縁部はヨコナデで調整する。口縁部の先端に沈線状の窪みが浅くめぐる。164・170は胎土に赤色礫が混じる。椀（163）の体部内面と口縁部はヨコナデで調整する。口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐる。高杯（171・172）の171は脚部と杯部が残存する。脚部は残りが悪く調整等不明。杯部は内・外面にヨコナデで調整を施す。172は脚部と杯部の一部が残存する。脚部外面をヘラケズリにより９面に面取りする。杯部内面にはハケメが施されている。いずれも胎土に赤色礫が混じる。

須恵器には壷がある。壷（173）は体部のみで口頸部は欠損する。内面の凹凸が顕著である。底部に糸切り痕が残る。

緑釉陶器には皿がある。皿（174）の高台は貼り付けによる輪高台。高台内に糸切り痕跡がみられる。高台面も含めた全面に施釉する。

池350構築土出土土器（図版34　175～179）　土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶

器、輸入陶磁器がある。５Ｂ段階に属する。一部２Ｃ段階の土器（178・179）が混じる。

土師器は皿がある。皿（175～177）の175は口縁部を内側に折り曲げたコースター形のものである。176・177は体部内面と口縁部はヨコナデで調整する。口縁部外面のヨコナデは２段ナデである。

須恵器には壷がある。壷（178）は細長い胴部と頸部をもつ。底部内面は凹凸が顕著である。底部には糸切り痕跡が残る。焼成は軟質である。

灰釉陶器には椀がある。椀（179）は口縁部から体部を輪花とした椀である。輪花口縁からタテ方向に筋を入れるようにして外面側からナデ、内側が盛り上がっている。口縁部内面と外面に釉がかかる。

池350礫敷出土土器（図版34　180・181）　礫敷直上から出土した。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。５Ｂ～６Ａ段階に属する。

土師器には皿がある。皿（180）は口縁部を内側に折り曲げたコースター形のものである。

輸入陶磁器には青磁椀がある。椀（181）の高台は削り出しによる輪高台。底部内面には片切り彫りの花文があらわされている。釉薬が全面にかけられる。同安窯系。

池350埋土出土土器（図版34　182～184）　埋土内から出土した。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。６Ａ段階に属する。

土師器には皿がある。皿（182～184）の体部内面と口縁部はヨコナデで調整する。口縁部外面のヨコナデは２段ナデである。184の胎土には赤色礫が混じる。

（２）その他の時期

１）弥生時代・飛鳥時代（図18、付表２）

流路133出土土器（185～187）　遺物が少量出土した。185は弥生土器器台の口縁部である。口縁端部は垂下して外面に波状文を施し、円形浮文を貼り付ける。弥生時代後期に属する。186・187は須恵器の杯身である。径が10㎝前後と小型化し立ち上がりは小さく低い。６世紀末葉に属する。

腐植土（４区東壁66層）出土土器（188・189）　188・189は弥生土器壷の底部である。内・外

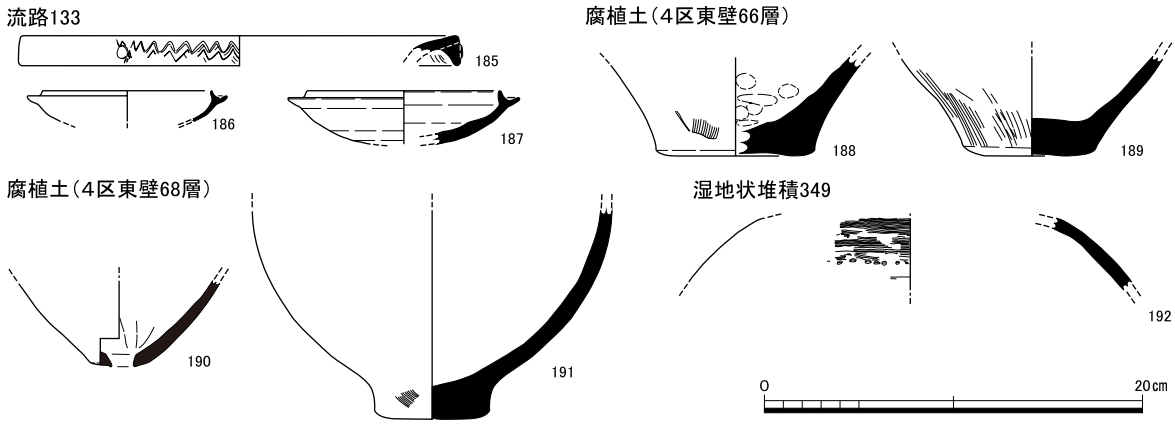


図18　弥生時代・飛鳥時代の土器実測図（１：４）

面は摩滅が著しく調整は不明瞭である。188の外面には縦方向のハケメ痕跡がみられる。内面はオサエ痕を残す。189の外面は縦方向のハケメ調整を施す。弥生時代中期に属する。

腐植土（４区東壁68層）出土土器（190・191） 190は弥生土器有孔鉢の底部である。摩滅が激しく調整は不明瞭である。底部には焼成前に小孔があけられている。191は弥生土器の壷の底部である。摩滅が激しく調整は不明。弥生時代後期に属する。

湿地状堆積349出土土器（192） 192は弥生土器の壷の体部である。体部外面にハケメと刻目がみられる。弥生時代後期に属する。

２）江戸時代（図19、付表２）

溝98出土土器（193・194） 埋土から出土した。土師器、施釉陶器がある。11Ｂ段階に属する。

土師器には皿がある。皿（193）は内面と口縁部にナデ調整を施す。内面に圏線をもつ。

陶器は椀である。椀（194）は口縁部が反る。高台は削り出しによる輪高台。高台端部と高台内以外の全面に施釉する。唐津産。

溝151出土土器（195～197） 埋土から出土した。土師器、陶磁器がある。11Ｂ段階に属する。

土師器には皿がある。皿（195・196）は内面と口縁部にナデ調整を施す。内面に圏線をもつ。196は口縁部に油煙が厚く付着する。

瓦質土器には方形浅鉢がある。方形浅鉢（197）は口径不明。口縁内部はナデ調整を施し、口縁端部および外部はヘラケズリ調整する。高台は貼り付け高台。

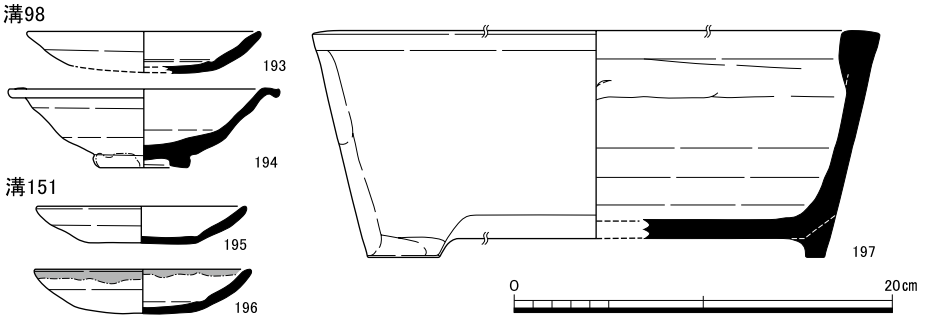


図19　江戸時代の土器実測図（１：４）

３．瓦類（図版35～38・55・56、付表３）

各調査区から、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦など瓦類が多く出土している。最もまとまっているのが耕作土599から出土した資料群である。以下七町域・三条坊門小路域、六町域それぞれから出土した軒瓦を中心に報告する。なお、池750埋土上層から出土した丸瓦の一部を掲載している。

（１）七町・三条坊門小路域出土瓦（図版35・36・55・56、付表３）

七町・三条坊門小路域からは軒瓦が21点出土した。17点が耕作土855から出土し、14点が三条坊門小路の耕作土855から出土している。

軒丸瓦（瓦１～８） 軒丸瓦は８点出土した。文様は重圏文が１点、蓮華文が７点である。瓦１は重圏文軒丸瓦である。難波宮6020型式の瓦である。溝100から出土した。瓦２～８は蓮華文軒丸瓦である。瓦２は産地不明であるが、「近」銘刻印瓦と同系の軒丸瓦と想定される。溝100から出土した。瓦３・４は産地不明である。いずれも一本造りである。圏線が子葉に沿って内側に突出する特徴を持ち、一本造りでも古式である。瓦５は中心に「下」銘刻印がある。森ヶ東瓦窯産である。瓦６・７は栗栖野瓦窯産である。瓦８は産地不明である。瓦３～８は耕作土855から出土した。

軒平瓦（瓦９～21） 軒平瓦は13点出土した。文様は重廓文１点、均整唐草文12点である。瓦９は重廓文軒平瓦である。難波宮6572型式である。耕作土855から出土した。瓦10～21は均整唐草文軒平瓦である。瓦10は平城宮6664系か。瓦11は平城宮6664Ｄ式である。瓦10・11は耕作土855から出土した。瓦12は平城宮6689Ａ型式である。重機掘削中に出土した。瓦13は平城宮6663Ｃ型式である。瓦14は平城宮6663型式である。瓦13・14は耕作土855から出土した。瓦15・16は平城宮6710Ａ型式である。瓦15は土取土坑813から、瓦16は溝100から出土した。瓦17は平城宮6664型式である。瓦18は西賀茂瓦窯産のＮＳ203型式である。瓦19は西賀茂瓦窯産のＮＳ207型式である。瓦20は産地不明である。瓦17～20は耕作土599から出土した。

鬼瓦（瓦22） １点出土した。外区の珠文のみ残存する。その他の文様は不明である。耕作土855から出土した。

（２）六町域出土瓦（図版36・37・55・56、付表３）

六町域からは軒瓦は23点出土し、主に整地層２・３から９点、湿地状堆積349から５点、池750から２点が出土している。

軒丸瓦（瓦23～29） 軒丸瓦は７点出土した。文様は文様不明のものが１点、蓮華文が６点である。瓦23～25・27～29は蓮華文軒丸瓦である。瓦23は平城宮の6316型式である。建物３の柱穴320から出土した。瓦24は平城宮6235型式か。整地層３から出土した。瓦25は小野瓦窯産である。外区珠文に「○」の文様がみられる。池350構築土から出土した。瓦27は産地不明である。整地層２から出土した。瓦28は向山瓦窯系であろう。平等院発掘調査報告[3)]のＮＭ032またはＮＭ033型式

の可能性がある。池350埋土から出土した。瓦29は産地不明である。整地層３から出土した。瓦26は小片のため内区の文様は不明である。産地不明である。池350構築土から出土した。

軒平瓦（瓦30～45） 軒平瓦は16点出土した。文様は重廓文２点、均整唐草文12点、偏向唐草文が１点、文様不明のものが１点ある。瓦30・31が重廓文である。瓦30は難波宮6530型式である。整地層２から出土した。瓦31は難波宮6574Ｂ型式である。湿地状堆積349から出土した。瓦32～43が均整唐草文である。瓦32は平城宮6664型式である。瓦33は平城宮6664型式と考えられる文様である。いずれも整地層３から出土した。瓦34は平城宮6727Ａ型式である。整地層３から出土した。瓦35は平城宮6727Ｂ型式である。湿地状態堆積349から出土した。瓦36・37は平城宮6721Ｃ型式である。瓦36は池750埋土下層から、瓦37は建物４の柱穴693から出土した。瓦38は平城宮系と考えられる。湿地状堆積349から出土した。瓦39は産地不明である。中心飾りに「松」の鏡文字のみられる文様と考えられる。平安京右京三条二坊十五・十六町の調査などで出土例がみられる。瓦40は大山崎瓦窯産のＯＹ205ｂ型式である。瓦39・40は整地層２から出土した。瓦41・42は産地不明である。瓦41は興福寺平ⅢＣ－２に酷似するものの異范である。平安時代中期と想定され、遺構の年代と合致せず混入の可能性がある。瓦41・42は湿地状堆積349から出土した。瓦43は河上窯産である。池750の集石778から出土した。瓦44は偏向唐草文である。森ヶ東瓦窯産で、池750の埋土下層から出土した。共伴する土器の年代から、上からの混入と考えられる。瓦45は小片のため内区の文様が不明である。産地不明である。建物２の柱穴254から出土した。

丸瓦（瓦46・47） いずれも丸瓦である。凹面に布目がみられる。凸面は縦方向のナデ調整を施す。両端は破損し、全長は不明である。池350構築土から出土した。

（３）刻印瓦（図版38・55）

刻印瓦は三条坊門小路域の耕作土855を中心に出土している。全出土点数は12種14点である。瓦48～50は「右坊」。瓦51は「坊」の裏字。瓦52～55は「坊」。瓦56は「□坊　」。瓦57は「□」主か。瓦58は「木工」。瓦59は「在」。

４．銭貨（図版57、図20、付表４）

奈良時代に鋳造された皇朝十二銭が１枚、平安時代に鋳造された皇朝十二銭が７枚、平安時代の中国銭が１枚、江戸時代に鋳造された寛永通寳が１枚、近代の中国銭が１枚出土した。

銭１は和同開珎。和同元年（708）初鋳である。整地層２から出土した。銭２は隆平永寳。延暦十五年（796）初鋳である。溝125から出土した。銭３～５は富壽神寳。弘仁九年（818）初鋳である。銭３は三条坊門小路域の耕作土855、

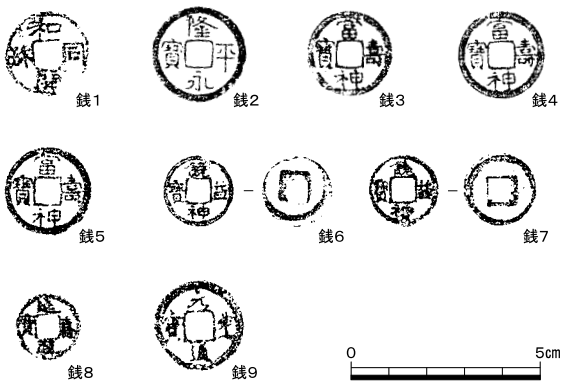


図20　銭貨拓影（１：２）

銭４・５は池350構築土から出土した。銭６・７は饒益神寶。貞観元年（859）初鋳である。銭６は三条坊門小路域の耕作土855、銭７は池350構築土から出土した。銭８は延喜通寶。延喜七年（907）初鋳である。池350埋土から出土した。銭９は元豊通寶。北宋の渡来銭である。摩滅が著しい。土取土坑584から出土した。

５．金属製品（図21）

金属製品は１点出土した。金１は小柄。長さ9.5㎝、幅1.5㎝、厚さ0.6㎝。銅製。片面に山道文を配する。土取土坑505から出土した。

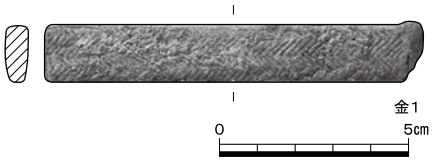


図21　金属製品実測図（１：２）

６．石製品（図版39・57、図22、付表５）

旧石器時代から縄文時代、平安時代、江戸時代に属するものがある。遺物の種類ごとに解説する。

石１は石帯の丸鞆である。研磨は雑である。淡緑灰色に白色の脈がみられる。潜り穴なく未製品である。整地層２から出土した。

石２・３は碁石。いずれも白石。石２は整地層２から出土した。石３は石英製であるが、白濁しており、白石として使用されたと考えられる。２区南西拡張部の整地層１から出土した。

石４～７は砥石である。石４は使用面が２面あり、石５は使用面が３面ある。いずれも池350を覆う中世の耕作土から出土した。石６は欠損部以外すべての部位に使用痕がある。線刻で文様が描かれる。溝98から出土した。石７は全面に使用痕がある。湿地状堆積349から出土した。

石８・９は石材として利用されたと考えられる。石８は風化が激しいが、七角形に面取りされ成形されたと考えられる。図の下方が外側に少し広がる。湿地状堆積349から出土した。石９は被熱痕跡がみられ、火災などで被熱した可能性が考えられる。整地層２から出土した。

石10は一体で造られた五輪塔の空輪・風輪である。「キャ・カ」の梵字が彫られる。宝珠の突起周辺には加工痕が明瞭に見られる。溝98から出土した。

石11～13（図22）は石器である。石11は尖頭器である。ほぼ完形で、溝100から出土した。後

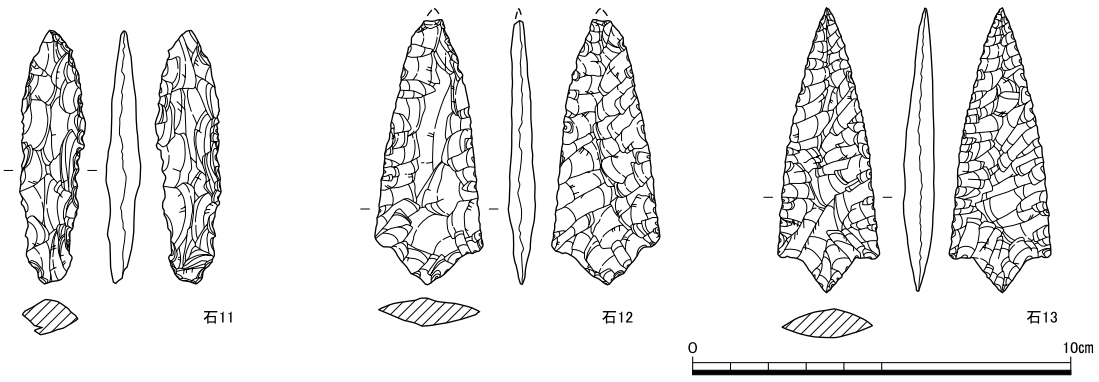


図22　石器実測図（１：２）

期旧石器時代か。石12・13は有舌尖頭器である。石12はほぼ完形で、溝429から出土した。石13は完形で、整地層３から出土した。石12・13は縄文草創期である。

７．土製品（図版40・41・58、付表６）

すべて平安時代に属するものである。最も多いのは硯で13点出土した。次に多いのが土錘で11点出土しており、内６点が池750・350内からの出土である。遺物の種類ごとに解説する。

硯１～12は硯で土師器、須恵器、灰釉陶器がある。灰釉陶器が７点で最も多い。硯１～９は風字硯である。硯１は陸部である。土師器。堤部と脚部を陸部に貼り付ける。脚部は円筒形だが側面が少しへこむ。整地層３から出土した。硯２は陸部である。須恵器。堤部は粘土板折り曲げ、上面はヘラケズリで成形し、海側端部を面取りしている。裏面に脚を貼り付ける。細かなケズリにより整形する。擦面は非常に平滑で、墨痕が残る。整地層２より出土した。硯３は海部と考えられる。須恵器。表面はナデで調整する。堤の上面と外面はヘラケズリで整形する。表面と縁上面・外面に墨痕が残る。溝156から出土した。硯４は陸部である。灰釉陶器。堤部は粘土板の両端を折り曲げて成形し、上面はヘラケズリで整形している。裏面の２箇所に脚を貼り付ける。左の脚は接合面から欠損する。細かなケズリにより整形する。堤外面から裏面全体に釉薬がかかる。墨痕はみられないが、使用され極めて平滑である。整地層２から出土した。硯５は海部である。灰釉陶器。小片であるが海部の先端付近と考えられ、花弁状の土手が形成される。花弁状の土手付近には墨痕が薄く残る。堤外面から裏面全体に釉薬がかけられる。硯６は陸部である。灰釉陶器。縁部は粘土板を折り曲げて成形し、上面と内・外面はヘラケズリで整形する。陸部もケズリで調整する。裏面の脚は接合面から欠損するが、ヘラで六角形に面取りした痕跡を確認できる。堤外面から裏面全体に釉薬がかけられる。擦面は非常に平滑で、陸部から堤の境目まで墨痕が残る。硯５・６は江戸時代の溝151から出土したが、時期は平安時代のものと考えられる。硯７は海部と考えられる。灰釉陶器。表面はナデで調整する。縁外面から裏面全面に釉薬がかけられる。表面全体に墨痕が残る。整地層３から出土した。硯８・９は海部である。灰釉陶器。表面はナデで調整する。堤の上面はケズリで整形し、端部を面取りする。堤外面から裏面全体に釉薬がかけられる。表面全体に墨痕が残る。いずれも整地層２から出土した。

硯10は宝珠硯か。陸部と考えられる。堤は大変低く陸部から緩やかな傾斜をつけて成形する。上面はヘラケズリにより整形する。裏面の脚は粘土の継ぎ目などが確認できず、ケズリ出して成形したと考えられる。方形の４隅に面取りが施され丁寧に整形される。墨痕は不明瞭である。擦面は極めて平滑である。裏面・脚全体に釉薬がかけられる。耕作土855から出土した。

硯11・12は円面硯である。いずれも須恵器。硯11は海部、堤部と側面の突帯、脚部の上端が残存する。側面上端には短い突帯を貼り付け回転ナデで整形し巡らす。脚部には幅約1.2㎝幅の透し孔が配置される。外面・内面ともに回転ナデで調整する。墨痕はみられない。硯12は陸部、海部、堤部と側面の突帯と脚部の上端が残存する。陸部は平らで、回転ヘラケズリによる調整である。海部を回転ナデで調整する。側面上端には低突帯を２本巡らす。突帯の下には径約1.7㎝の円形の貼

付文様の剥離痕跡がみられる。脚部には幅は不明であるが透し孔が配置された痕跡がみられる。陸部は著しい擦痕が認められ、平滑である。陸部から海部、堤部上端部にも墨痕が付着する。

土１～４は土馬で４点出土している。土１は首から下の胴部と尻尾の一部が残存する。足は接合面から欠損。手づくね成形で四肢などを引き出している。土２～４は足部である。土２は柱列３の柱穴から出土している。

土５～15は土錘である。心棒に粘土を巻き付けて成形したものである。大きさ、重量はそれぞれ差があるが、最大径が2.0㎝以下の小型品（土５～10）と最大径が2.5㎝以上の大型品（土11～15）に二分される。重量は小型品で10ｇ以下、大型品で30ｇ以上ある。土15は特に側面を溝状に加工しており、最も重い111.9ｇもある大型品である。11点の内２点（土13・15）が池750、２点（土７・12）が池350構築土、２点（土９・11）が池350埋土から出土している。

土16は用途不明の土製品である。円柱で、内面は無調整で粗雑である。上面には穿孔がある。

８．木簡（図版59、図23、付表７）

３点出土している。出土遺構は土手状遺構41（木簡１）、柱列５の柱穴309（木簡２）と江戸時代の溝151（木簡３）である。釈文は後にまとめて記載する。

木簡１は棒状製品の先端を斜めに削っている。先端を削った部分に墨書されたものである。「流」が大小２文字書かれており、筆跡が異なる。土手状遺構41から出土した。

木簡２は薄い板状製品に「□□取粉□（酒ヵ）」の墨書がみられる。柱列５の柱穴309から出土した。

木簡３は板材に墨書がみられる。文字は不明である。江戸時代の溝151から出土した。

木簡の釈文については西山良平氏（京都大学）、吉野秋二氏（京都産業大学）のご教示を受けた。

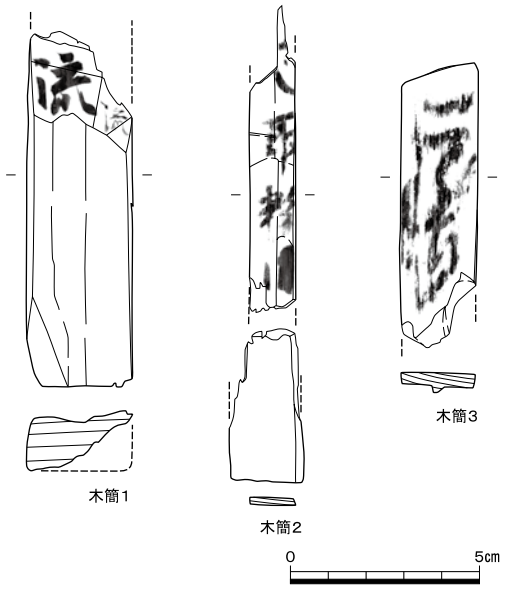


図23　木簡実測図（１：２）

木簡釈文

木簡１
流　流
(94)×28×14　019

木簡２
□□取粉□［酒カ］
(81＋41)×20×2　019

木簡３
□□□
(75)×21×5　019

９．木製品（図版42・43・59、付表７）

木製品は七町域では湿地状堆積853から最も多く出土している。六町域では、湿地状堆積349や池750・350から多く出土した。今回掲載していないものも含めて総計102点を数える。以下遺構ごとに解説する。

湿地状堆積853出土木製品（図版42・59　木１～15）　堆積土内から出土した。15点を図示する。製品としては木釘、棒状製品、曲物の底板、杭、皿、木球などがあり、その他にも加工痕跡がみられる棒状加工部材、板材、角材、付木などがある。付木が多い点が留意される。その他、箸や用途不明の加工品などが15点出土しており、この遺構からは計40点が出土した。出土総数の39％を占める。共伴する土器類は２Ａ～２Ｃ段階に属する。

木１・２はへら状製品である。木１は先端を斜めに削り薄く加工する。片端は欠損する。木２は先端を刀形に加工している。木３は杓子形である。片側側面に把手の窪みのような加工がみられる。用途は不明。木４は木釘である。頭部をケズリ出し円形に成形する。先端をケズリによって尖らせる。木５は棒状加工部材である。表面は摩滅する。側面両側に切り込みを入れる。先端は面取りする。木６は板材である。焼損のため表面は炭化する。詳細は不明である。表面は炭化する。木７～９は棒状製品である。いずれも先端部付近側面に切り込みを入れ、先端部も面取りをして成形する。用途不明。木10・11は曲物の底板である。いずれも円形で、側面に目釘穴が残存する。木11の目釘穴には１箇所目釘が残る。木12は木杭である。丁寧にケズリ整形する。断面形は楕円形となる。先端はケズリによって尖らせる。木13は木皿である。全体をケズリにより成形し、高台もケズリにより成形される。挽物か。木14は木球である。細かくケズリ扁球形に成形する。木15は角材か。全面に加工痕が残るが、加工途中か木取りを行った端材と想定される。

土手状遺構41出土木製品（図版42　木16・17）　構築土内から４点出土した。２点図示する。他に付木がある。共伴する土器類は１Ｂ～１Ｃ段階に属する。

木16は漆器の皿か。器表に黒色の漆が塗られる。木地は大変薄い。木17は下駄である。前・後歯は完存する。後歯は磨り減っており、台の上面に左足の指痕が残る。

土手状遺構827出土木製品（図版42　木18・19）　構築土中から２点出土した。共伴する土器類は２Ｂ段階に属する。

木18は板材である。半分残る。外縁が厚く加工されている。目釘穴などはみられない。木19は下駄である。後歯を欠損する。歯は外側に張り出しており、台の上面に足の指痕が残る。前壷が左寄りにあけられており、右足の痕跡か。

北築地846出土木製品（図版42・59　木20）　構築土内から２点出土した。共伴する土器類は２Ｂ段階に属する。

木20は田下駄の枠型とみられる。両端の２孔に枠を取り付けたと考えられる。

溝125出土木製品（図版42　木21）　埋土内から１点出土した。共伴する土器類は２Ｃ～３Ａ段階に属する。

木21は木皿である。皿の内面には加工痕が顕著にみられる。

溝100出土木製品（図版43　木22）　埋土内から２点出土した。箸と下駄が出土した。共伴する土器類は４Ｃ～５Ａ段階に属する。

木22は両口箸である。完存する。両端は断面形が円形に近いが中央は断面形が方形である。全長20.4㎝であり、時期的には標準サイズである。

耕作土855出土木製品（図版43　木23・24）　横櫛、下駄、箸、付木など５点出土した。共伴する土器類は５Ｂ～６Ａ段階に属する。

木23は横櫛である。肩部は丸味をもつ。歯は幅１㎝の中に４本と本数は少ない。側面には漆が付着する。木24は下駄である。台部は完存する。後歯は欠損する。前壷は右によせてあけ、前歯をさけて斜めにあける。長さは13㎝と小さく子供用か。

溝98出土木製品（図版43　木25）　墨痕のある板材、箸、櫛、漆器椀、加工品など６点出土した。共伴する土器類は11Ｂ段階に属する。

木25は板材である。元々は円形に成形されていたものと考えられ、曲物の底板の可能性が高い。側面に切り込みが入る。切り込み近くに墨痕が見られる。

土坑101出土木製品（図版43　木26）　共伴する土器は小片しかないが近世の磁器が出土した。

木26は糸巻の横木である。完形。板の中央を幅広く残し両端を棒状にケズリ出し枝部を成形する。かみあわせ部分の中央に軸孔をあけ、両側には記号がみられる。上部には墨書で「×」と記し、下部には「♀」の記号が印刻される。

湿地状堆積349出土木製品（図版43　木27～29）　漆器、下駄、加工品など６点が出土した。共伴する土器は１Ｂ新段階に属する。

木27は漆器の皿である。器表には黒漆が全体に残る。木地は大変薄い。木28・29は下駄である。木28は後ろ半分が欠損する。前壷は中央よりやや左により、前歯をさけて斜めにあけられる。歯は外側に張り出す。木29は前歯前方が折れて欠損する。後歯はすべて欠損する。

整地層３出土木製品（図版43　木30）　漆器、加工部材の２点が出土した。共伴する土器は１Ｃ～２Ａ段階に属する。

木30は加工部材である。板状に加工され中央付近に穿孔がある。

池750・溝599合流部出土木製品（図版43・59　木31）　池750と溝599が合流する部分から出土した。へら状製品が１点出土した。

木31はへら状製品である。先端を半円形に成形する。下半部は欠損する。

池750出土木製品（図版43・59　木32～34）　池750の埋土下層から出土した。板材、棒状製品、下駄の他、漆器、用途不明の加工品などが８点出土した。共伴する土器類は２Ｃ段階に属する。

木32は板材である。各面を丁寧に面取りする。一端のみ完存する。木33は棒状製品である。両端に切り込みを巡らす。完存する。木34は下駄である。ほぼ完存する。歯は外側に張り出す。後壷は後歯にあたり半円形となる。台の上面に足の指痕が残る。

池350構築土出土木製品（図版43・59　木35～39）　池350構築土から出土した。板材、棒状製

品、加工部材、曲物の他、箸などが６点出土した。共伴する土器類は５Ｂ段階に属する。

木35は板材である。先端を半円形に成形する。側面を丁寧に面取りする。木36は棒状製品である。一端に切り込みを巡らす。下半部は欠損する。木37・38は加工部材である。板材の側面に吐出部が成形される。木39は曲物の底板である。穿孔が３箇所みられる。

中世耕作土出土木製品（図版43・59　木40・41）　池350の上を覆う中世耕作土内から出土した。斎串、下駄の２点が出土した。

木40は斎串である。頭部は圭頭で、側面の２箇所に切り込みを入れる。下半は欠損する。

木41は下駄である。前歯の断面は他と異なり三角形を呈し、前壷を穿孔するために前歯の前端をくり抜く。また前歯の後端は半円形にくり抜く。

註

１）　平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

750年			840年			930年			1020年			1110年	1170年		1260年			1350年	1410年		1500年			1590年			1680年	1740年	1800年	1860年
1			2			3			4			5	6		7			8	9		10			11			12	13	14	
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B

２）　北野信彦『桃山文化期における漆文化の実態に関する文化財科学的研究』　東京文化財研究所　2012年

３）　『史跡及び名称　平等院庭園保存整備報告書』　平等院　2003年

第５章　ま と め

今回の調査では、２面の調査を行い、平安時代から江戸時代までの５時期にわたる遺構・遺物を検出した。以下、右京三条一坊七町・三条坊門小路及び六町の遺構の変遷について記述する。また六町域においては、９世紀後半の邸宅に伴う池を検出しており、周辺の調査成果と合わせて検討を加える。

１．遺構の変遷（図24～28）

Ⅰ期（図24）　七町域には、湿地状堆積853、土手状遺構41、溝850、柱列８がある。六町域には、土手状高まり348、湿地状堆積349、建物３、柱列４・５、整地層１がある。９世紀前半に属する。

周辺調査から七町域には、敷地の南側に湿地状の堆積が広がっていたことがわかる。地点30（2011年度調査）の湿地状堆積（池117）は今回の調査で検出した湿地状堆積853につながり、地形的に少し高まりをみせる調査区西側で終息する。南側は、土手状遺構41にて終息する。この土手状遺構41により、小路を維持するため、南側への水の流出を抑えられていたと考えられる。七町域は、当域を含む四町が穀倉院と推定されている。穀倉院については『西宮記』巻八裏書「或抄」から大同年間（806～810）に所在したと考えられているが[1)]、当地にはその頃湿地状堆積が広がっていたことになる。

六町域には、北西部に建物３が建てられ、その北と東に塀（柱列４・５）が造られた。これらの建物を建てる以前に、その一帯を乾燥させる目的で北西側に土手状高まり348を作り、結果一時期的に湿地状堆積349が形成された。その堆積349が干上がり乾燥した後に、建物３が建てられたと考えられる。また、より低い南西部では乾燥度合いが悪かったためか、整地層１により湿地状堆積349上面を整地している。地点24（2001年度調査）で検出した石敷きは整地層１と同一遺構と考えられるが、北西からの洪水により破損していると報告されていることから、整地後も依然として六町の南西部に水が集まる状況が存在し、後述する池750が造られると想定される。六町域の北東部では地点30（2011年度調査）でSB01や井戸470などを検出している程度で当代の遺構は希薄である。

Ⅱ期（図25）　七町域にはⅠ期から続く湿地状堆積853と土手状遺構41、土手状遺構827がある。六町域には、建物１・２・４、塀（柱列３）、溝599、池750、整地層２・３がある。９世紀中頃から後半に属する。

七町域の湿地状堆積853は、この頃から次第に埋まりはじめる。この段階で調査区北端には新たに土手状遺構827が構築され、南への水の侵入を防ぐ目的があったと考えられる。この時期には、Ⅰ期で掘られた溝850は廃絶し、七町内溝の機能は失われている。

六町域には、２つの池を持つ邸宅跡が展開する。まず建物１・２を造るために整地が行われている。整地層２は礫・土器を多く含む整地層で、建物１・２周辺のみで確認した。また、この整地層

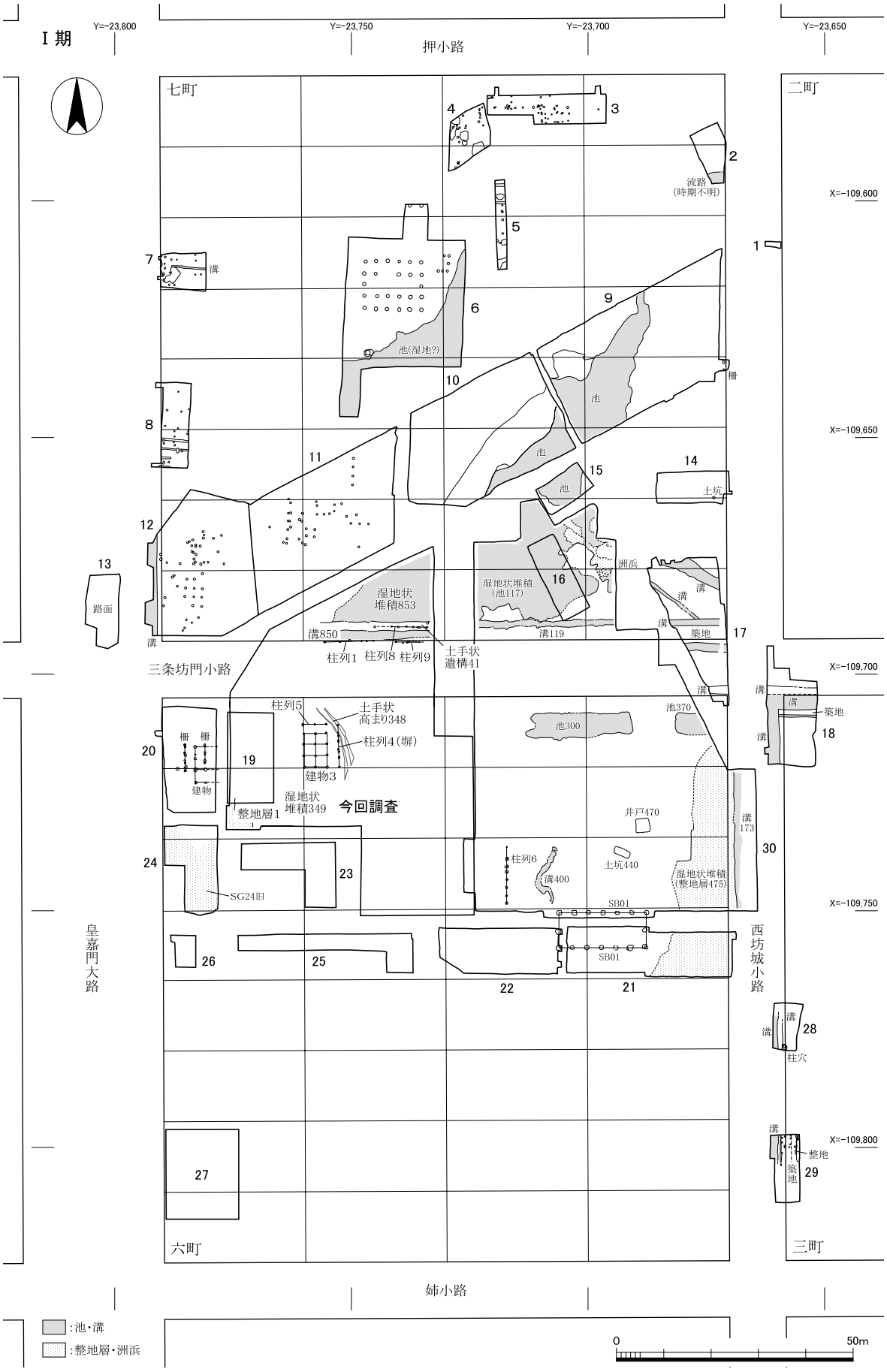


図24　右京三条一坊六・七町の遺構配置図１（１：1,200）

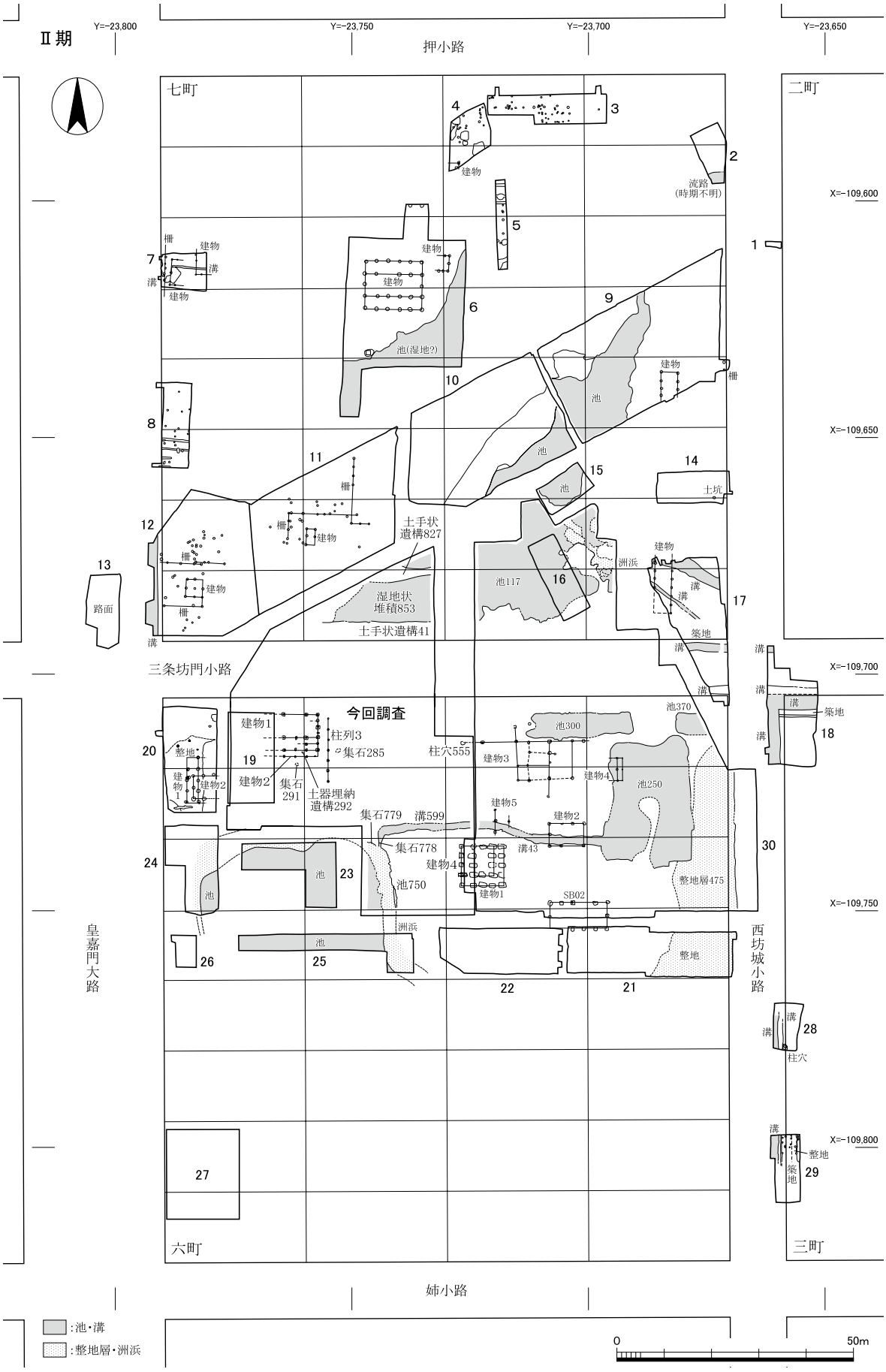


図25　右京三条一坊六・七町の遺構配置図２（１：1,200）

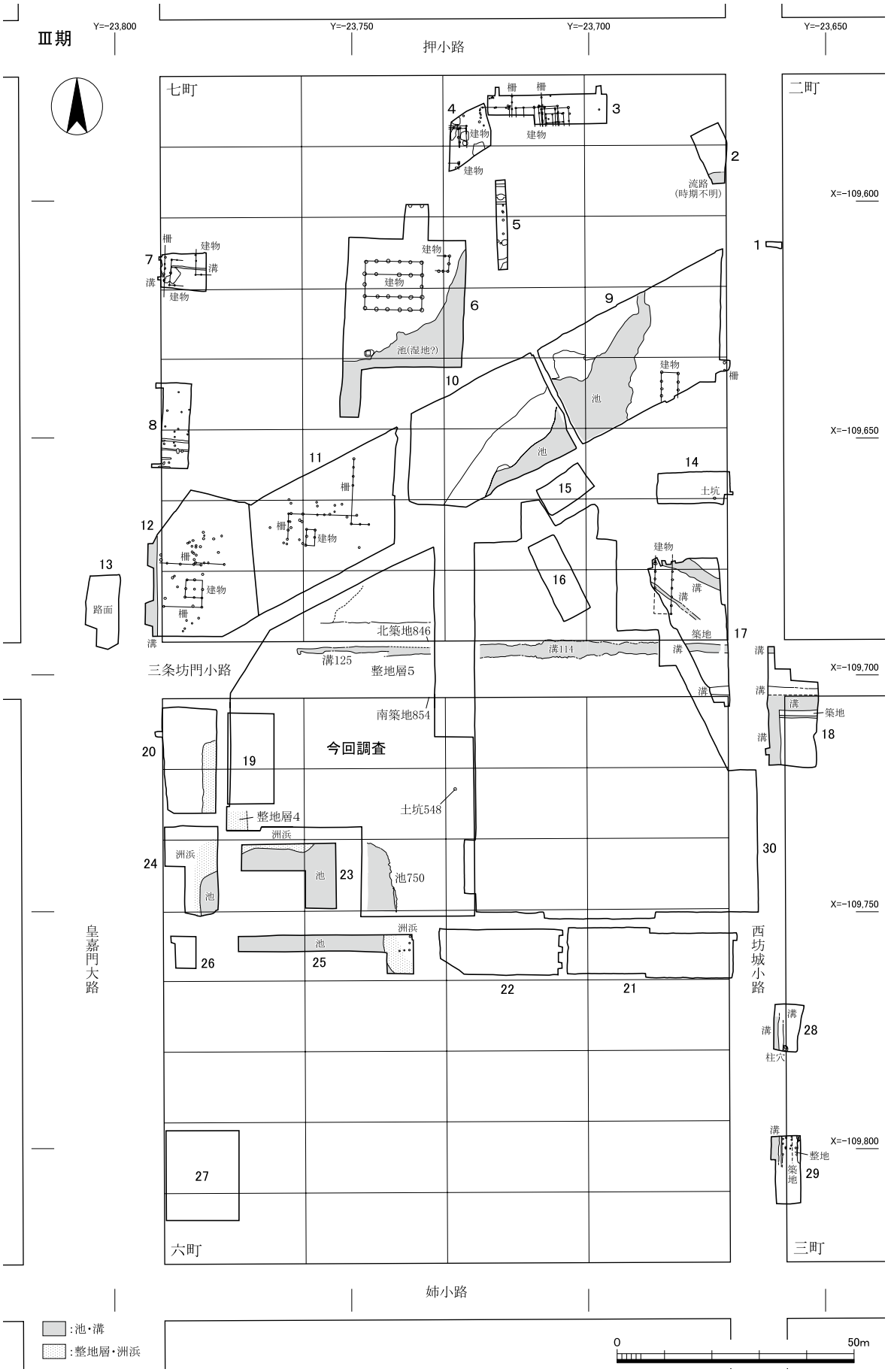


図26　右京三条一坊六・七町の遺構配置図３（１：1,200）

２の上に積まれた整地層３は今回の調査地全体に広がっており、基盤層を形成する灰黄褐色シルト・青灰色粘土・灰色粘土ブロックを含む比較的均質な土である。建物１・２については同規模の建物が位置をずらして建てられており、建て替えと考えたいが、柱穴の重複などがなく前後関係は不明である。この建物は塀（柱列３）により東側の眺望が閉鎖されていたと思われることから、南に広がる池を意識して建てられたと想定される。地点20の調査で検出した建物１の北端の柱列と今回の調査で検出した建物２の南端の柱列がそろっており、２つの建物が同時に存在していた可能性も考えられる。今回調査区北東端で、地点30にて検出した建物３の北端の柱列の延長上にある柱穴555を確認した。この柱列は建物１の身舎南の柱列の延長上にもあたり、建物１と地点30検出の建物３が関連性を持つ可能性も想定される。また、今回３区南東端で検出した建物４は、2011年度調査の建物１の西庇部分にあたる。この建物は東・南庇が７尺（2.1ｍ）、西庇が９尺（2.7ｍ）となり、西庇の柱間は他の庇の柱間より広いことから、西側に広がる池750を意識し、建てられたと想定される。

池750については別項で詳細を記すが、地点24（2001年度調査）で検出したSG24新段階のものと同一遺構であることが確認でき、池の北西及び北東端を確定することができた。また、池750に流れ込む溝599については、地点30（2011年度調査）で検出した溝43の延長線上にあり、宅地の中をほぼ直線的に約47ｍにわたって流れることを確認した。勾配が緩やかなこの溝は、宅地内を流れる「流れ」を意識し造られた可能性が考えられる。

また、第１章で記したとおり、六町域は地点30（2011年度調査）成果より藤原良相の「西三条殿」の可能性が高いと指摘されている。藤原良相は『三代実録』によれば貞観九年（867）に死去している。今回検出した池750洲浜から出土した土器の年代は２Ｂ段階（870～900）であり、藤原良相の死後池が放置された可能性も考えられる。土器及び遺構の年代観などについては今後のさらなる検討が必要といえよう。

Ⅲ期（図26） 七町域・三条坊門小路域には北築地846、溝125、南築地854、整地層５がある。六町域には、土坑548、整地層４、池750がある。10世紀に属する。

七町域に広がっていた湿地状堆積853は、この段階で完全に埋まり、三条坊門小路域の北築地846と溝125（北側溝）、南築地854が造られ、三条坊門小路の再整備が行われたと考えられる。

六町域の遺構は希薄である。溝599や地点30の池250は埋められ、池750は放置された状態となっていたようである。一方で、調査区南西部や地点20南東部、地点21・30の南東部ではこの時期の整地層を確認しており、北二門の東二行と東三行の境付近に同時期の埋納土坑（土坑548）も存在する。この時期、六町域は前代の土地利用とは異なった様相を示していると考えられる。

Ⅳ期（図27） 七町域・三条坊門小路域には溝18・115・100・808と整地層６がある。六町域には池350がある。12世紀に属する。

七町域では溝808を検出した。この溝の埋土は砂礫であり、洪水による堆積の可能性が指摘される。三条坊門小路域では北側溝（溝18・115）、南側溝（溝100）が掘削される。溝18は路面部分に広がる整地層６の上面から掘削されており、遺物の出土は少量であったが溝18と整地層６から平

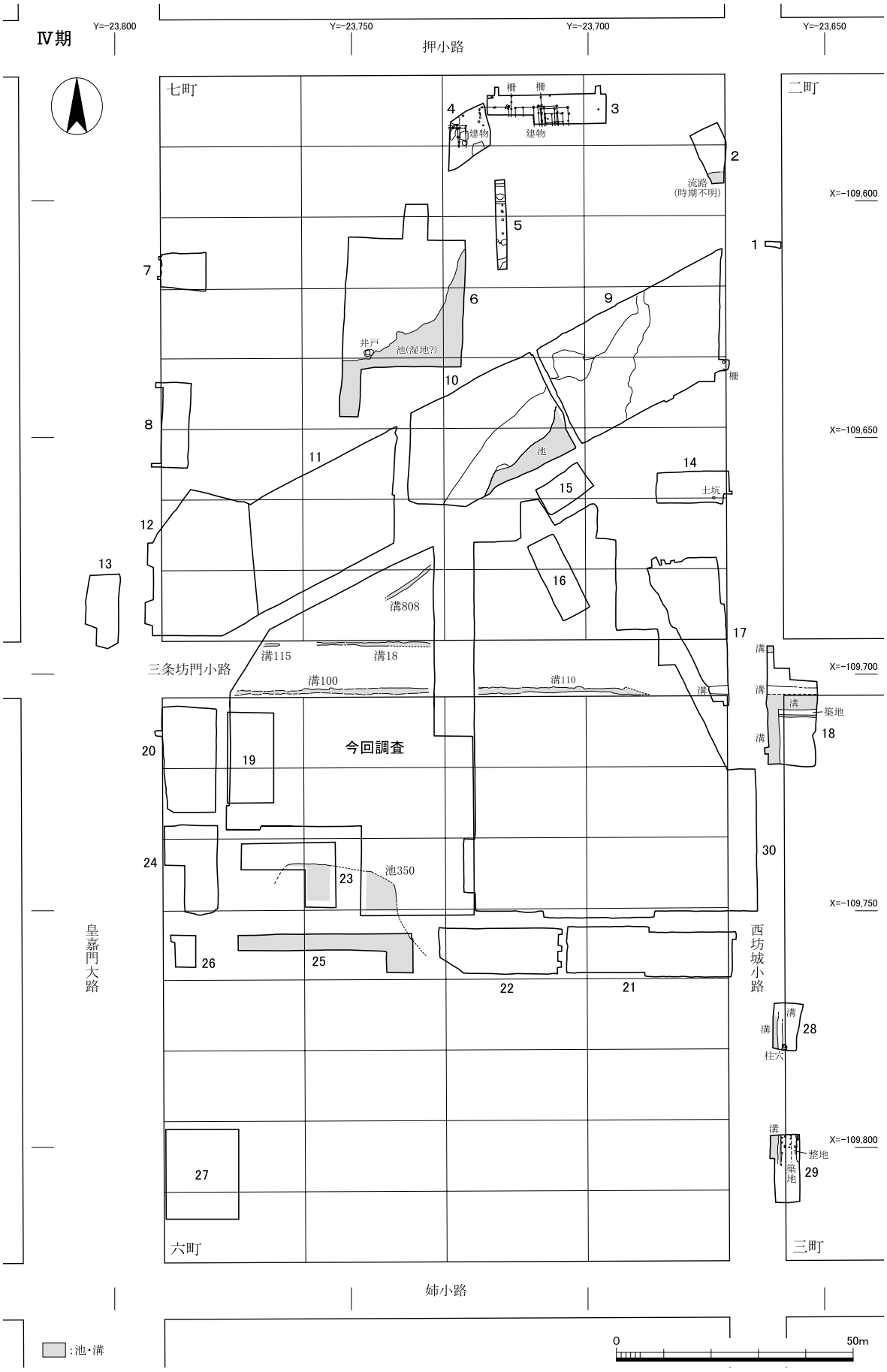


図27　右京三条一坊六・七町の遺構配置図４（１：1,200）

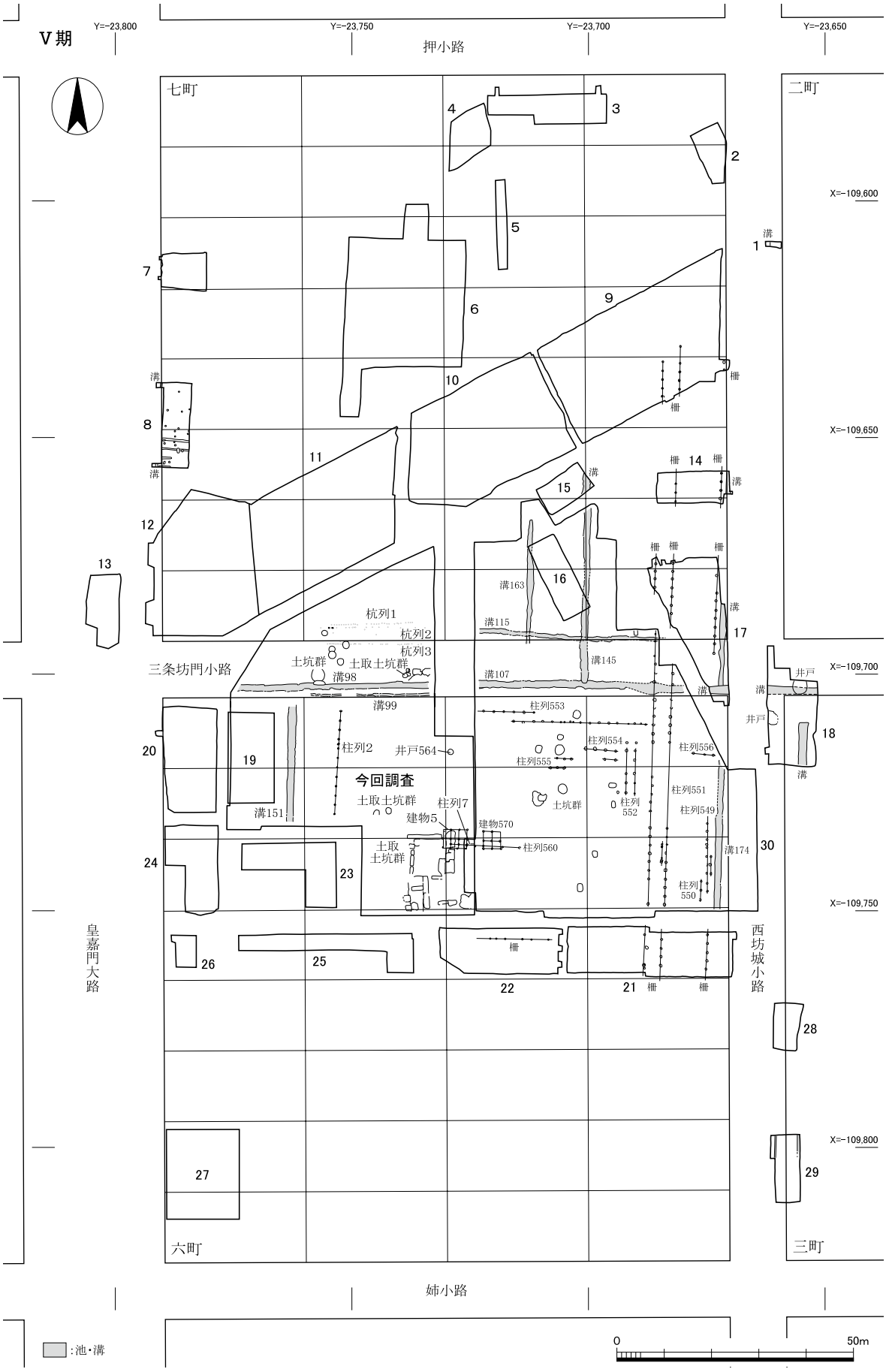


図28　右京三条一坊六・七町の遺構配置図５（１：1,200）

安時代後期の瓦が出土しており、この時期の遺構と考えられる。北側溝（溝18）が存在することから、三条坊門小路は機能していたと考えられる。12世紀末になると七町及び三条坊門小路域は耕作土で覆われることから、耕作地へと変化を遂げたことがうかがえる。この道路上を覆う耕作土は、北側溝より北側に広がる耕作土とは土質が異なり、石や瓦を多く含んでいる。17（2001年度調査）では３層構造をなし、小石や瓦を密に敷き詰めた平安時代前期の路面を検出している。今回の調査では耕作土の下では路面を確認できなかったが、前段階で構築された路面を耕作により攪拌したことにより、この耕作土から別の地点おそらく七町及び六町から混入されたと考えられる墨書土器や瓦を含む一定量の遺物と小石が出土したと考えられる。

また、周辺調査で明らかになっている通り、姉小路北側溝・朱雀大路西側溝・西坊城小路東側溝は平安時代後期に掘り直されており、平安時代後期に調査地を含めた土地の再開発が行われたと考えられる[2)]。

一方、六町域では12世紀末の池350が造られている。しかし遺構は希薄で、建物などの遺構は検出しておらず、宅地の全容は不明である。ただし池350が存在することから、周辺で耕作地が増える中、依然として宅地利用がなされる状況が続いていたと考えられる。

Ⅴ期（図28） 七町域・三条坊門小路域には杭列１～３、土坑40・58・60・92・101・120、土取土坑群、溝98がある。六町域には建物５、井戸564、溝151、柱列２・７、土取土坑群がある。17世紀頃に属する。

七町域・三条坊門小路域では、耕作に伴い使用された野壺と考えられる複数の土坑群（土坑40・58・60・92・101・120）を検出しており、当域には耕作地が広がっていたと考えられる。杭列１・２は前代の土手状遺構41上に存在し、高まり状になって近世まで存続していた可能性がある。杭列３については想定される三条坊門小路北築地心に位置し、溝98は三条坊門小路南側溝の場所に位置することから、近世まで土地区画を踏襲していたと考えられる。土取土坑については溝98付近に集中して検出した。基盤層は粘質のシルトであり、粘土を取るための採掘土坑と想定される。

六町域の建物５は、地点30（2011年度調査）で検出した建物570と近接しており関連した建物と考えられる。柱列７については地点30（2011年度調査）の柱列560の延長線上に位置し同一遺構である。溝151は南北方向に走り、東西方向の溝98に接続する。六町域で検出した土取土坑群も基盤層が粘質のシルトの場所に存在し、粘土採掘土坑と想定される。

２．池750と池350について（図29～31）

平安京右京三条一坊六町（以下「六町」とする）では、これまでに10回の発掘・試掘・立会調査が行われており、今年度の発掘調査は11回目にあたる。これまでの調査成果や文献資料から、平安時代前期の六町域は１町規模の邸宅であったことがわかっており、居住者は右大臣であった藤原良相と推定されている。この六町域は、これまでの調査で１町規模の邸宅の北半部がほぼ調査された、平安京内でも数少ない事例の一つである。

ここでは、今回の調査で検出した池750と池350について、これまでの調査事例を整理し、その構造を復元したい。

（１）池750と池350の変遷

今年度は、六町の北西部で調査を行った。北西部では、９世紀前半までは湿地（湿地状堆積349・780）が存在するが、調査区北側では９世紀前半に湿地状堆積349が一定乾燥する段階で建物３が建てられる。この湿地状堆積の乾燥は、条坊側溝など排水システムの整備と共に人為的に行われた可能性がある。９世紀中頃になると、この上に盛土による整地を行い、建物１・２を建てる。調査区南側では９世紀中頃に湿地状堆積780を利用して池750を造る様子を確認した。そして、池750は10世紀前半頃から埋まり始め、12世紀に完全に埋め立てられる。この埋め立て土の最上層に石を敷き、池350を新たに造ったことが明らかとなった。

池の存在する今回の調査区南側は、湿地状堆積780→池750→池350という平安時代の変遷を辿る。

（２）既往調査との相違点

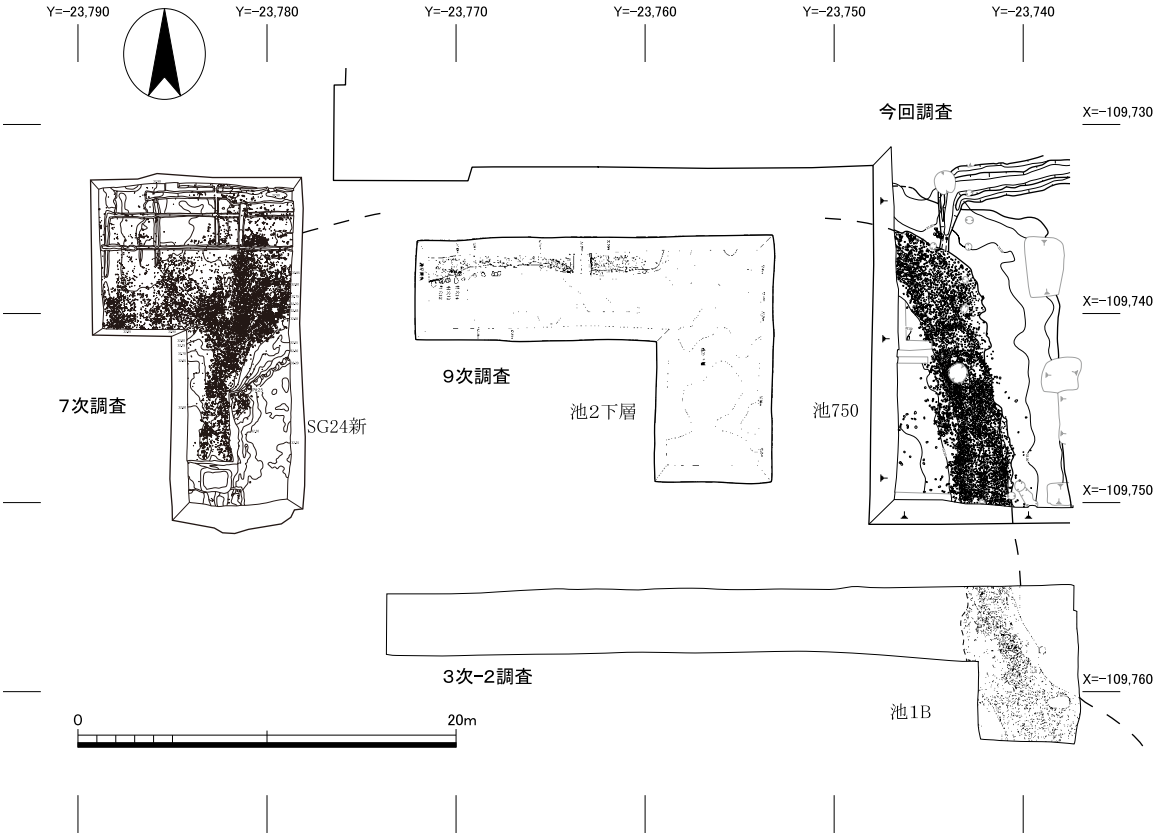
今回検出した池750と池350は、これまでに３次－２調査（地点25、1995年度）、７次調査（地点24、2001年度）、９次調査（地点23、2008年度）でも確認している。しかし、隣接した調査地に存在する同じ池と考えられるにも関わらず、調査により２時期または３時期の池を検出しており、池の年代観についても齟齬が生じていた。そのため、まずは池750と池350の整理を行う。それぞれの調査で検出した池は以下の通りである（表４）。

３次－２調査では、10世紀の池SG１B、12世紀の池SG１Aの２時期の池を検出している。７次

表４　各調査の池対応表

	3次-2調査	7次調査	9次調査	今回調査
9世紀初頭～前半		SG24旧		
9世紀後半～10世紀	SG1B	SG24新	池2下層	池750
12世紀	SG1A		池2上層	池350
12世紀以降			池1	

池750



池350

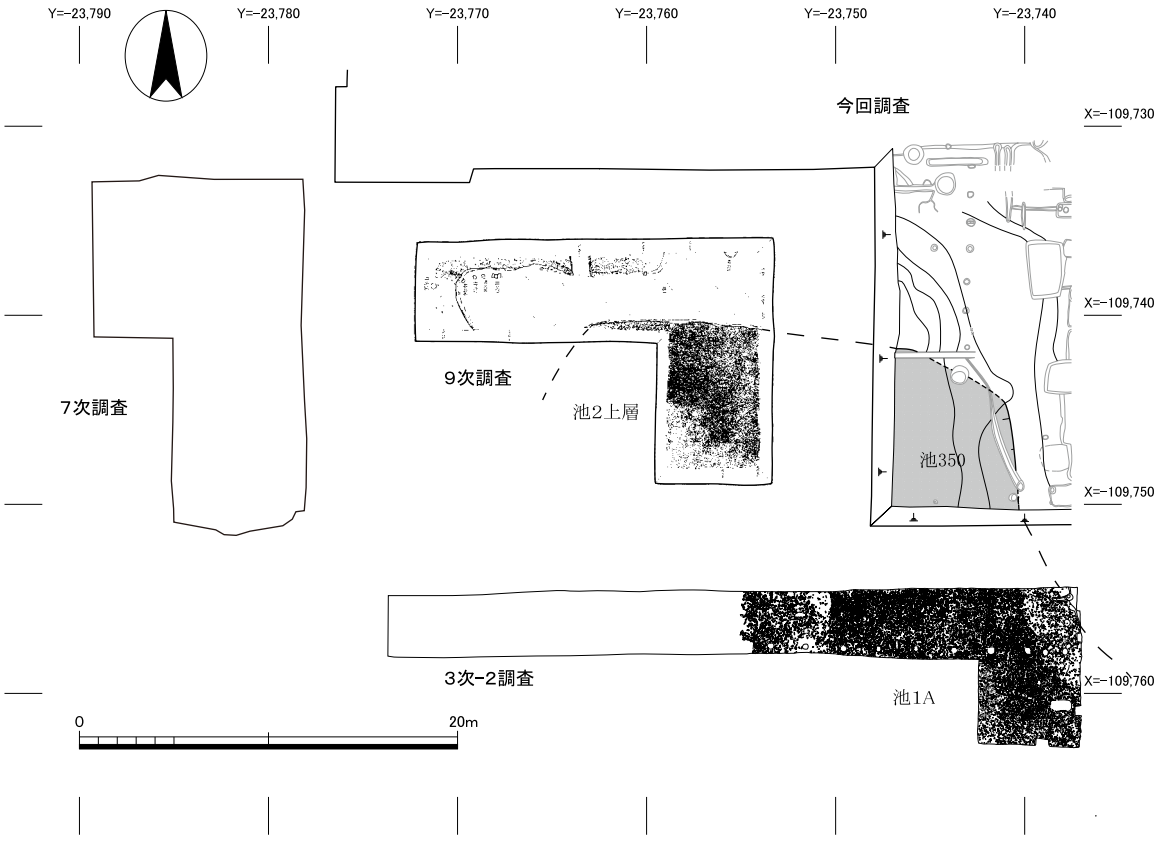
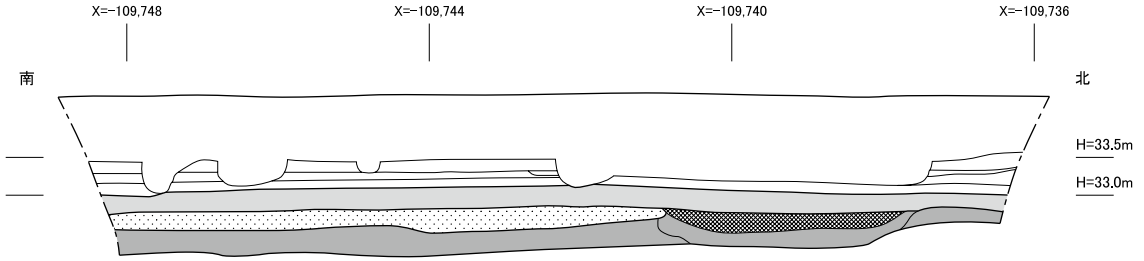
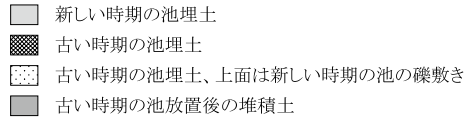


図29　池350・750復元図（1：400）

9次調査東壁断面（古代文化調査会2009 図5をトレース）





今回調査西壁断面

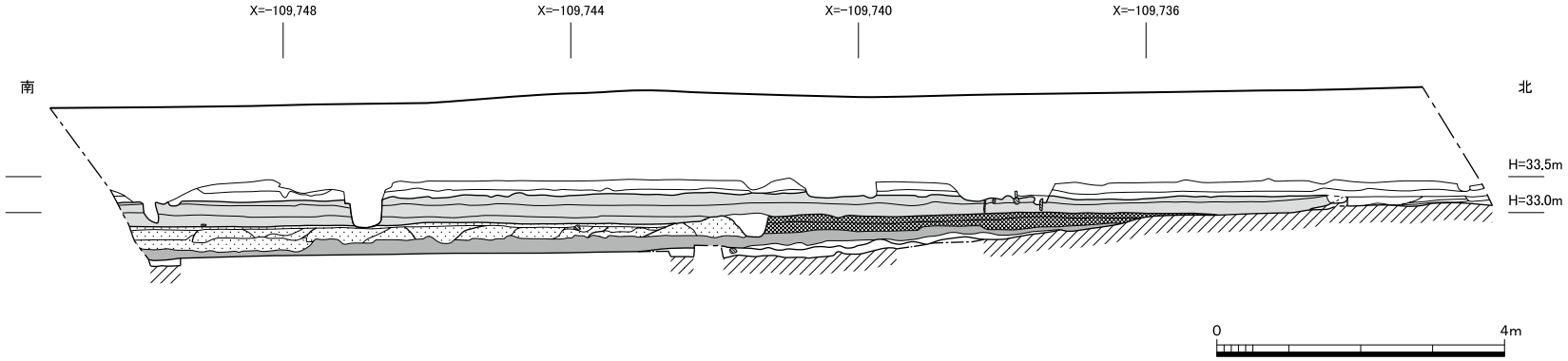


図30　9次調査東壁と今回調査西壁断面図（1：100）

調査では、９世紀初頭の池SG24旧、９世紀後半の池SG24新の２時期の池を検出している。９次調査では、９世紀後半の池２下層、12世紀の池２上層、12世紀以降の池１の３時期の池を検出している。そして、今回の調査では、９世紀後半の池750、12世紀後半の池350の２時期の池を検出している。

これらの池を出土遺物の時期や遺構の位置などから整理すると、少なくとも９世紀後半～10世紀の古い時期の池（下層池）と、12世紀の新しい時期の池（上層池）の新古２時期の池が認められる。すなわち、古い時期の池としてSG１B（３次－２調査）とSG24新（７次調査)、池２下層（９次調査)、池750（今回調査）があり、新しい時期の池がSG１A（３次－２調査）と池２上層（９次調査)、池350（今回調査）にあたる。

このうち、新古２時期の池に当てはまらなかった池は、７次調査の池SG24旧と、９次調査の池１である。

７次調査のSG24旧については、８次調査（地点20、2006年度）の南半や今回調査の南西隅で検出した整地層（整地層１）と同一とみられる。この整地層１は湿地状堆積349の埋め立て土であり、今回調査でも遺構面の標高が低い南西隅にのみ礫が多量に含まれる様子を確認した。また、出土遺物の時期や層序などからも、７次調査のSG24旧は、湿地の埋め立て土である整地層１とみられる。９次調査の池１については、他の調査では存在しておらず、池１は新しい時期の池の構築に伴う整地の単位である可能性が高い。

なお、各調査により池の呼称が異なるため、ここでは古い時期の池を池750、新しい時期の池を池350とする。

（３）池750の復元（図29）

上記のように、池750は３次－２調査、７次調査、９次調査、今回の調査で検出されたことが明らかとなった。池750は、東西43ｍ、南北26.5ｍ以上の規模を有しており、深さは３次－２調査で検出した最深部で0.6ｍほどである。池の岸は４～８度と緩やかな傾斜をもち、北岸から東岸にかけて、少なくとも約75ｍにわたり、径３～10㎝の礫を密に敷いた洲浜を施していた。

池750の水位については、これまでの調査では触れられていないため、今回検討してみたい。方法としては、池の岸の洲浜を施した範囲に池の水位が収まると考えられることから、各調査で検出

表５　各調査における洲浜の標高

調査次数	岸	池750		池350	
		最も高い地点	最も低い地点	最も高い地点	最も低い地点
3次-2調査	東岸	33.1m	32.6m	33.1m	32.9m
7次調査	北岸(北西隅)	33.0m	32.7m	—	—
9次調査	北岸	(32.8m)	32.6m	32.8m	32.8m
今回調査	東岸	32.9m	32.6m	33.0m	32.8m
	北岸(北東隅)	33.0m	32.6m	33.0m	32.8m

した池750の洲浜の施された範囲（洲浜の最も高い標高と最も低い標高）を各報告書の壁断面図から測り[3]、表５にまとめた[4]。この表によると、池750の洲浜の最も高い地点の標高は32.9～33.1ｍで、最も低い地点の標高は32.6～32.7ｍということがわかる。池の水位が、洲浜を超えることや、洲浜より低いことは考え難いため、池750の基本的な水位は32.7ｍから32.8ｍであったとみられる。なお、今回の調査では池750に水を溜めた状態で写真を撮影したが、その際の水位は32.75ｍに設定した（図版51－１）。

（４）池350の復元（図29）

12世紀の池350は、今回の調査と３次－２調査、９次調査でも検出されたことが明らかとなった。池350の規模は、東西36ｍ、南北22ｍ以上である。池750を埋め立てて造られており、池750よりも西岸は約18ｍ、北岸が約４ｍ縮小されている。今回の調査区では礫敷にほとんど傾斜はなかったが、東西幅約17ｍにわたる礫敷が確認された３次－２調査では、最深部は0.2ｍほどであった。岸部は後世の土地利用により、削平を受けているとみられることから、本来の池の深さは不明であるが、全面に非常に密な礫敷を施した水深の浅い池であったと考えられる。

上述のように六町では、これまでに10回の発掘・試掘・立会調査が行われている。しかし、これらの調査で、平安時代後期の遺構や遺物はこの池350以外に確認されておらず、この時期の様相は不明なことが多い。なお、11世紀の終わりには、この地に大江公仲が池を備えた屋敷地を有していたことが史料から知られている[5]（『平安遺文』第1338号）。しかし、池350は12世紀に造られたものであり、これとは別の池と考えられる。

３．平安時代前期の園池の構造と性格（図31）

次に、平安京右京三条一坊六町の平安時代前期における園池の構造について、これまでの調査成果も踏まえて検討する。平安時代前期の六町では、北東部で池250と、北西部で池750の２つの池と、これらの池をつなぐ溝599を検出した。

10次調査（地点30、2011年度）で検出した池250は東西18ｍ、南北24ｍのほぼ長方形を呈し、深さは最深部で約１ｍである。池の岸は15～22度とやや急な傾斜をもち、岸部に洲浜を施さない素掘りの池である。池の南岸中央には幅１ｍほどの土手状の高まりが池の内側へ約９ｍのび、その先端には南北４ｍ、東西4.5ｍの中島が存在する。また、池の西岸北部には池へ張り出す釣殿風の建物４も存在する。

池250の水位については、中島の標高から推測できる。中島は中央部の一番高いところの標高が33.0ｍである。池の中央部にある中島が絶えず水に隠れて見えない状態であるとは考えにくいことから、池250の水位は標高33.0ｍ以下であったと推測する。池底の標高は約32.5ｍであり、池250の基本的な水深は0.5ｍほどとみられる。

一方で、池750は池250の西40ｍに位置し、東西43ｍ、南北26.5ｍ以上と池250よりも規模が大きい。池の岸は、池250よりも緩やかな傾斜をもち、洲浜を施していた。

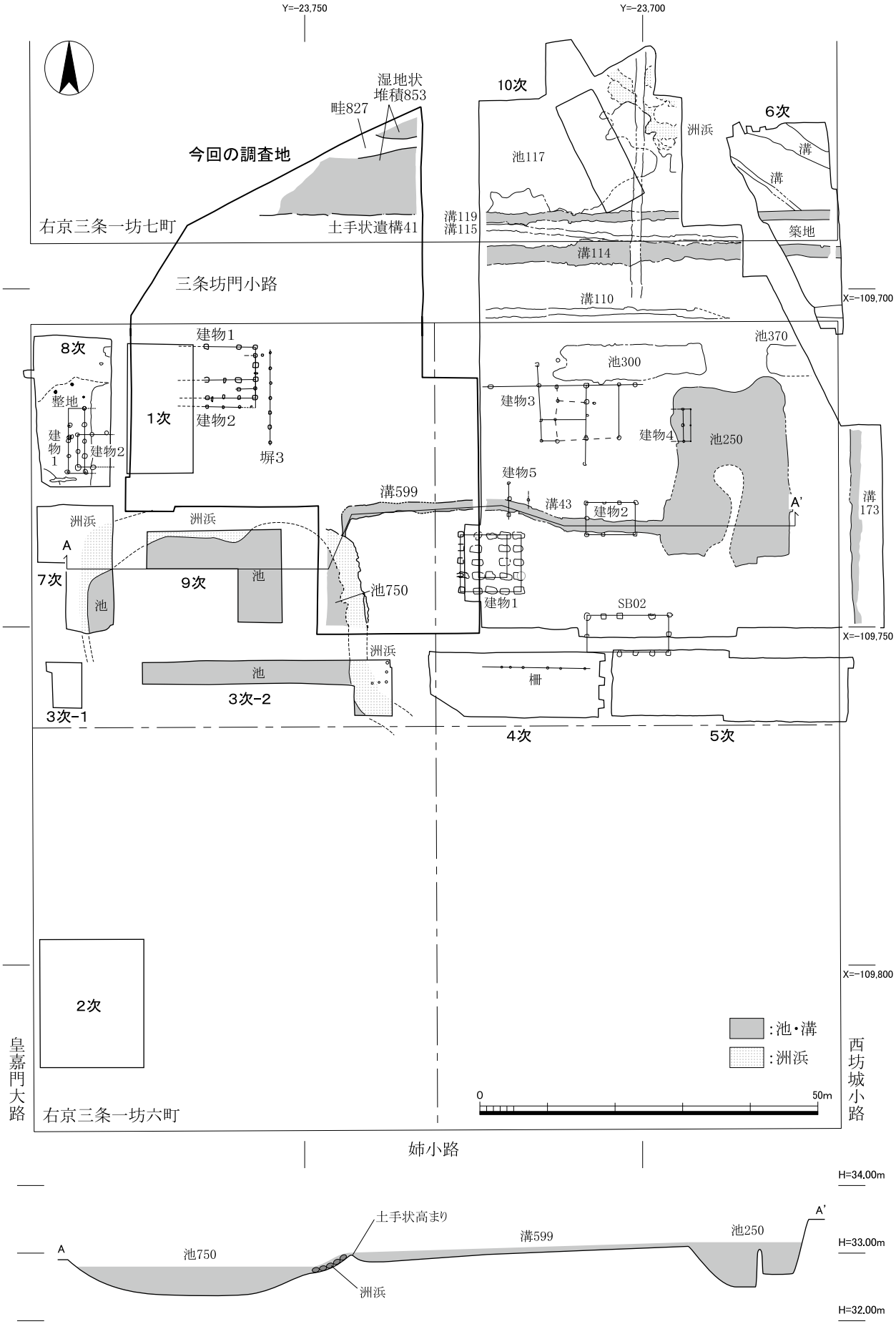


図31　９世紀中頃から後半の遺構配置図（１：800）と池・溝断面図（縦１：80、横１：800）

この２つの池を結ぶのが、溝599である。溝599は、池250の南西隅から建物４を避けつつ直線的に西へ流れ、池750の直前で池に向かって南西方向へ屈曲し、池750の北東部に接続する。溝599の底面は池250の底面から0.6ｍ高い位置にあることから、池250の水深が0.6ｍ以上になると溝599に水が流れる構造となっていたことがわかる。上述のように、池250の水深は0.5ｍほどとみられることから、溝599には恒常的に水が流れていなかったと考えられる。また、溝の幅は1.2ｍ、溝の深さは約0.3ｍであるが、池750と合流する手前の屈曲部では幅1.6ｍと広くなり、深さも0.4ｍと深くなる。そして、池750との合流部では溝の底が0.1ｍほど高くなっていることから、池750の手前の屈曲部に水を貯め、上澄みの澄んだ水のみを池750に流していたと推察する。溝599は邸宅内の「流れ」を意識したといえる。

このように六町で検出した庭園は、規模や意匠、洲浜の有無などの構造の異なった２つの池が存在し、その池を溝がつなぐという特徴をもつ。

この２つの池の構造の差異は、それぞれが構成する場の性格の違いを反映しているとみられる。すなわち、規模も大きく、岸に礫を密に敷いて洲浜を施すなどの特徴をもつ池750と建物１・２、及びその間の空閑地は儀式や饗宴のためのより公的な場としての性格を有しており、池250はその規模や意匠、建物との位置から、より私的な場としての性格を有していたと推測する。

なお、邸宅内に複数の池が存在する事例は、六町の他にも平安京右京三条二坊十六町の斎宮邸（９世紀後半～10世紀初頭）や、平安京左京二条二坊九・十・十五・十六町の高陽院（11世紀）などがあり、それぞれの池の機能や性格の差異については、今後も検討するべき課題である。

註

１）　本　弥八郎ほか『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002－5　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年

２）　前掲１）に同じ

３）　７次調査及び９次調査の池の遺構平面図には、10㎝間隔で等高線が入っている。しかし、９次調査における壁断面図の標高と平面図の標高が合わないことがわかった。そのため、壁断面図の標高を直接測るに至った。

４）　９次調査では池の北岸を検出しているが、この調査では北端部は確認していないため、池の洲浜の最も高い地点の標高は不明である。

５）　大江公仲処分状案（『平安遺文』第1338号より、一部抜粋）

西三条地壱町〈在左京三条一坊六町、建三間四面屋一宇〉

件弐箇所、先年之比、各従領主手、限価直所買得也。子細具見券文。而伝領之後、建屋栽樹。堀池洒泉、屡為避暑納涼之地。自留遊興慶翫之思。

付章　自然科学分析

株式会社 パレオ・ラボ

１．花粉分析

（１）はじめに

今回の調査区では、３区において９世紀後半の庭園の池（池750）が検出された。また、２区で９世紀初頭、４区で10世紀前半の調査区を広範囲に覆う腐植質の泥層の累重が認められた。

自然科学分析では、９世紀後半の庭園の池の植栽などの植生復元および池の水文環境の復元、２区と４区で確認された腐植質の泥層の堆積環境の復元、さらに、９世紀初頭から10世紀前半の調査区および周辺域の通時的な植生変化の検討を目的に、花粉分析、大型植物遺体分析、珪藻分析を実施した。

以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて大型植物遺体分析と珪藻分析も行われている（大型植物遺体分析と珪藻分析の項参照）。

（２）分析試料

(1) 調査区の堆積状況

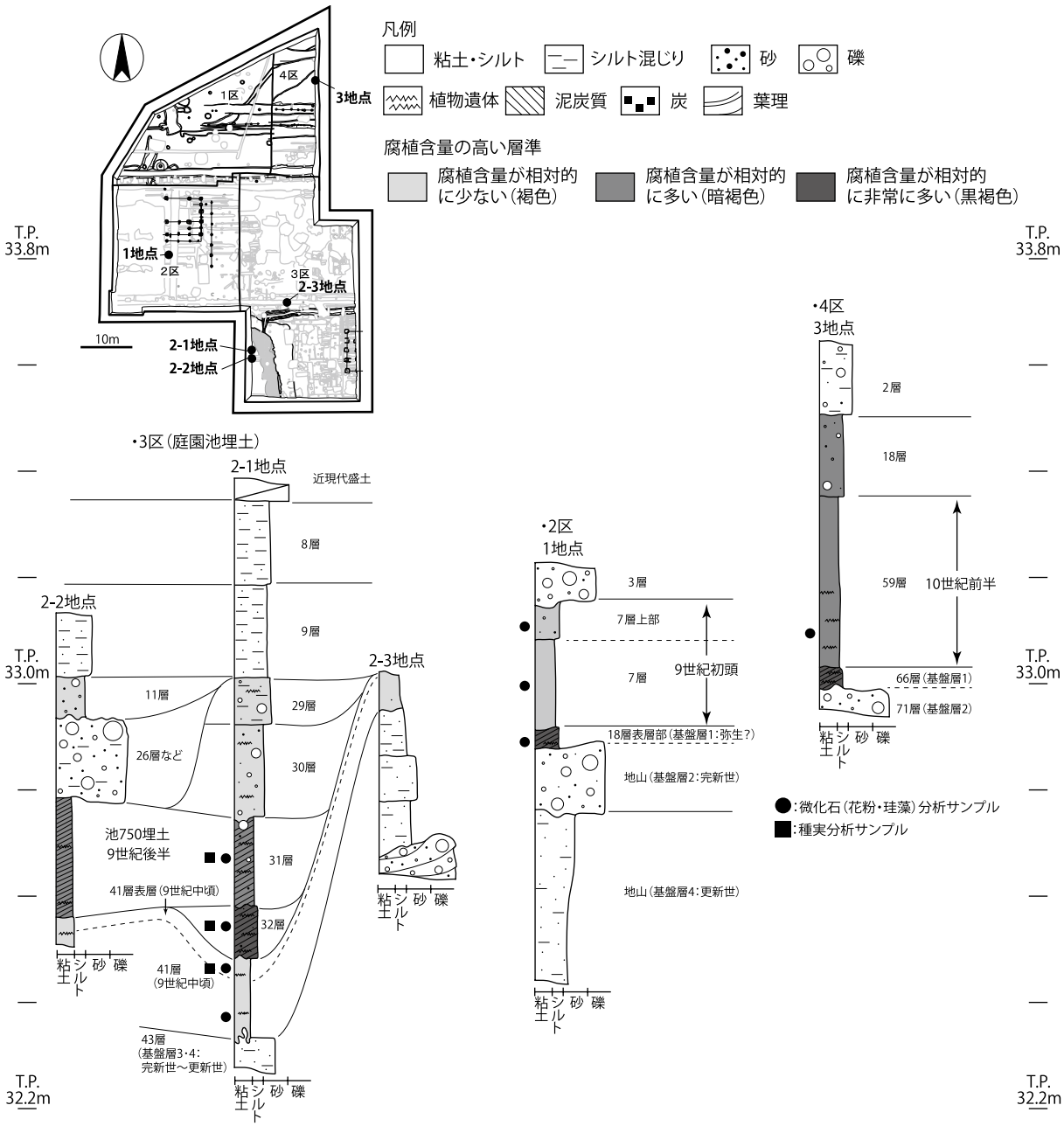
試料採取地点と柱状図、分析層準を図１に示す。分析試料を採取した不撹乱柱状堆積物の断面写真と分析試料の採取位置を図２に示す。また、試料採取地点や層相観察地点の堆積状況を図３に示す。古代の遺構および堆積層については、いわゆる地山と認識される古代以前の堆積層上面で検出ないし堆積している。本章では、古代以前の堆積層を「基盤層」とする。

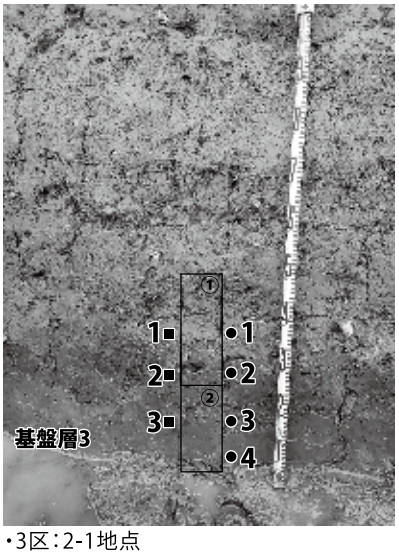
(2) 基盤層

1）基盤層４

基盤層は、堆積状況と層相から、基盤層１～４の４つの層準に区分できる。層位的に最下部に位置する基盤層４は、細礫（2-4㎜）と中礫（4-64㎜）の礫を多く含む、トラフ型斜行葉理の砂礫層と、砂質シルト、シルト質極細粒砂～細粒砂、シルト含む中粒砂からなる塊状無層理の砂質泥層、泥質砂層、砂層の細粒の砂質堆積物で構成される（図３－４～６）。このうち、砂礫層は、上に凸状をなして側方へ広く累重する。層相から、砂礫層は、流路河床もしくは布状の洪水堆積物と考えられる（図３－５）。細粒の砂質堆積物は、砂礫の高まり周囲の低所を埋積する浮遊砂主体の洪水堆積物である（図３－５・６）。

隣接する2011年度調査（地点30）の報告書（公益財団法人京都市埋蔵文化財財研究所，2013）に示された詳細な地質情報（パリノ・サーヴェイ株式会社，2013）によると、砂礫層は、古代の遺構確認面直下付近の中心に堆積している（以下、2011年度調査の地質情報は、すべて公益財団法人





・3区：2-1地点

・2区：1地点

・4区：3地点

図１　試料採取地点の堆積状況

京都市埋蔵文化財研究所（2013）からの引用とする）。また、2011年度調査では、古代の遺構確認面の下位－1.8ｍで噴出年代が約3.0万年前（Smith et al., 2013）の姶良Tn火山灰（AT）のテフラの挟在が確認されている（年代値は暦年代、以下も同様）。地質学的な説明はなされていないものの、ATについては、再堆積の可能性が指摘されている。

本調査区が載る地形面は、河角（2004）の地形発達史的研究によると、更新世に離水および段丘化した扇状地面である段丘面Ⅱである（図４）。2011年度調査でのAT挟在の報告と、河角（2004）

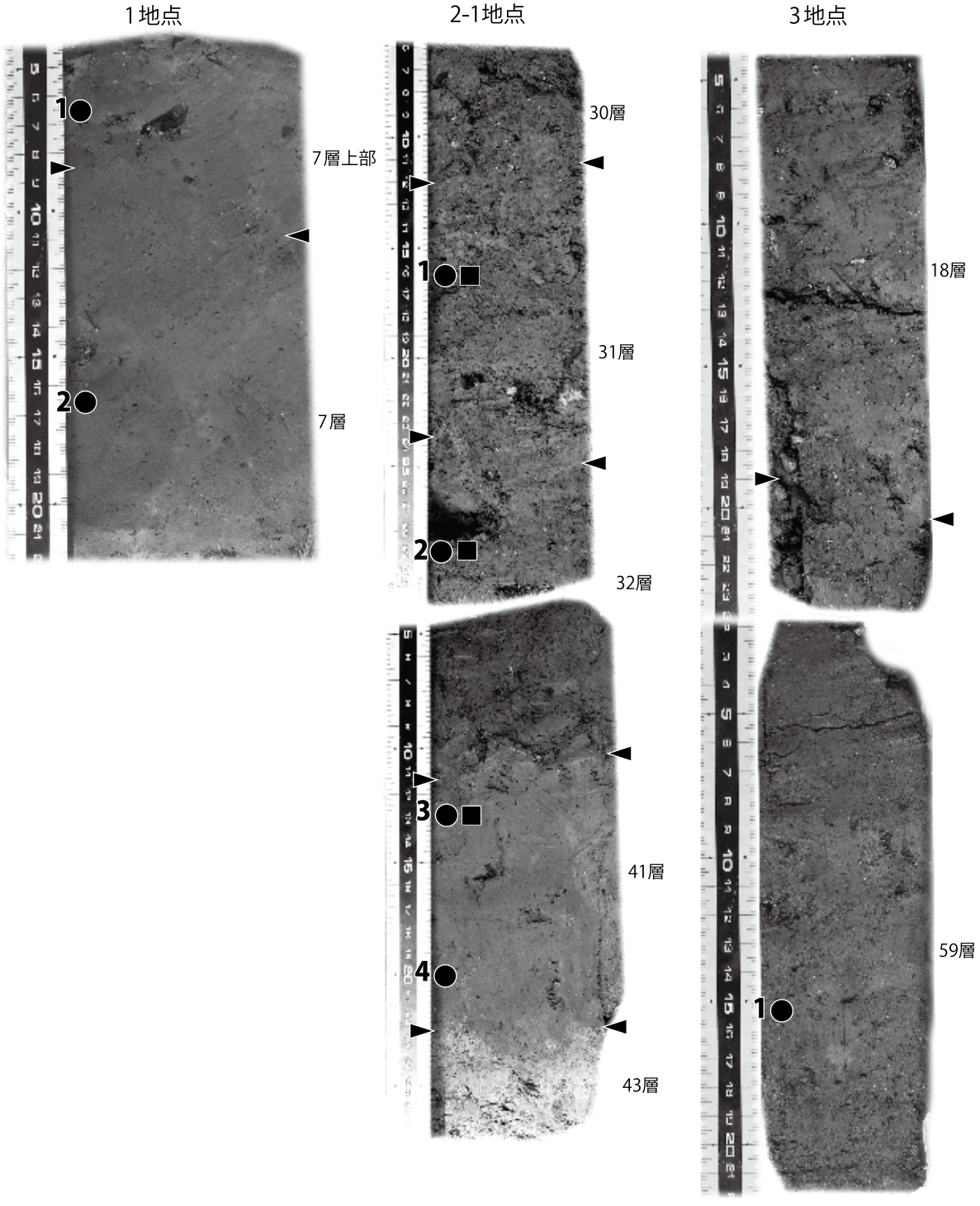
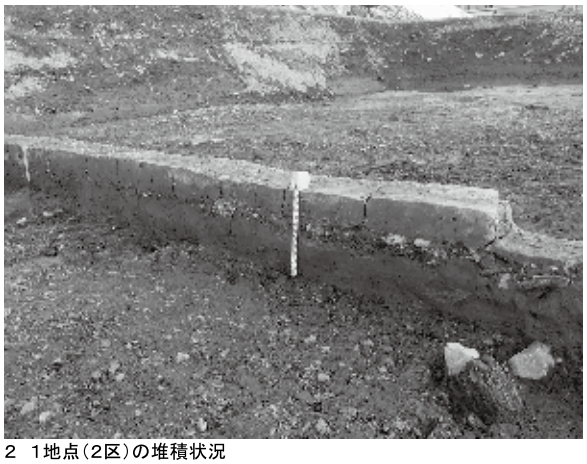
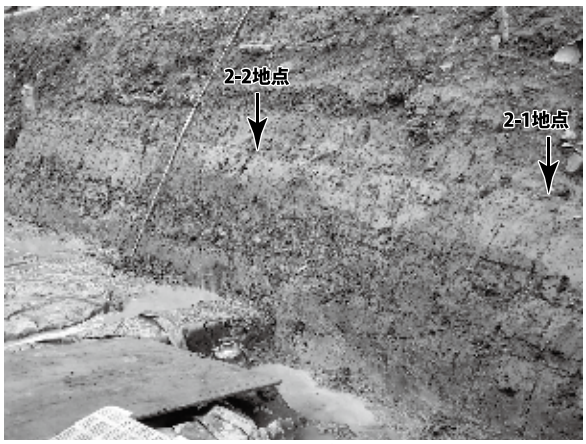


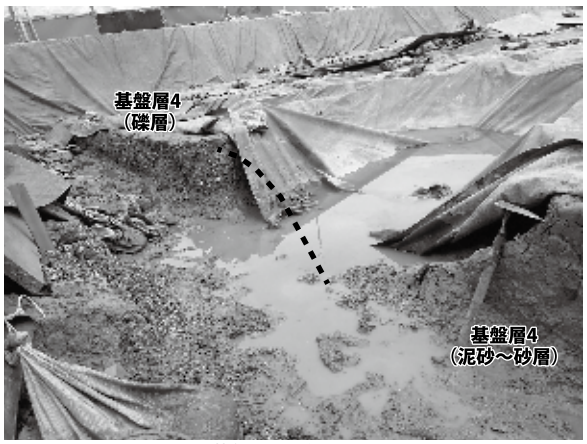
図２　不撹乱柱状分析試料の断面写真

1　1地点（2区）の試料採取地点の堆積状況


2　1地点（2区）の堆積状況

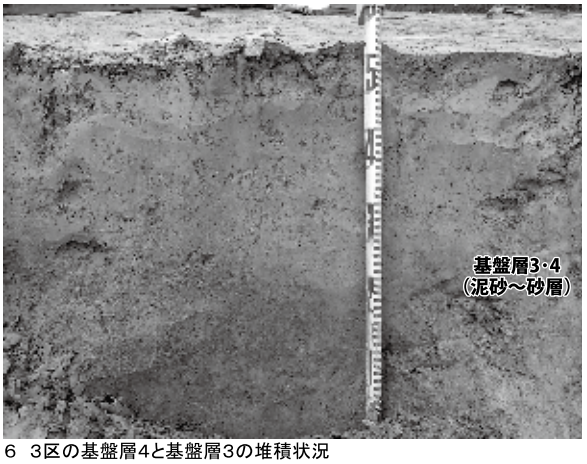


3　2地点（3区）の試料採取地点付近の堆積状況

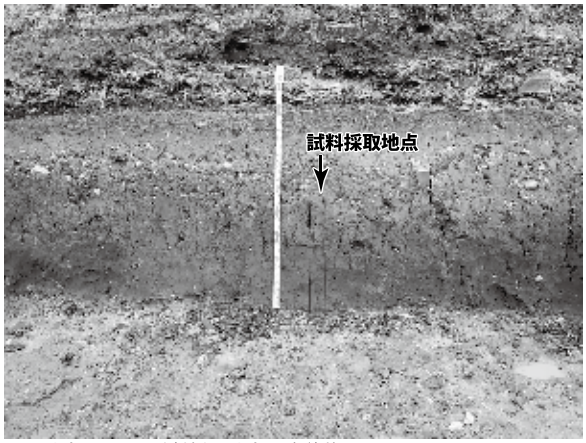


4　2-3地点付近（3区）の基盤層4の堆積状況

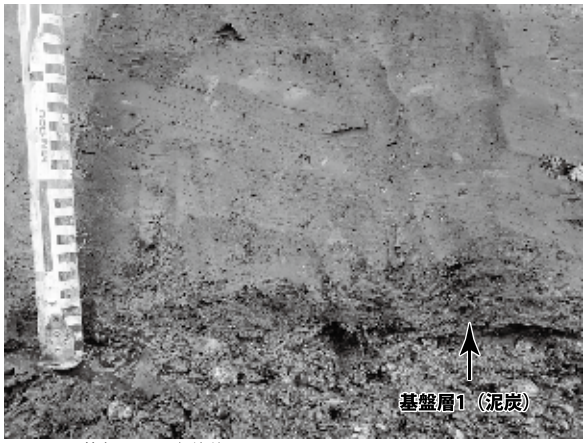
5　2-3地点付近（3区）の基盤層4（礫層）の堆積状況



6　3区の基盤層4と基盤層3の堆積状況

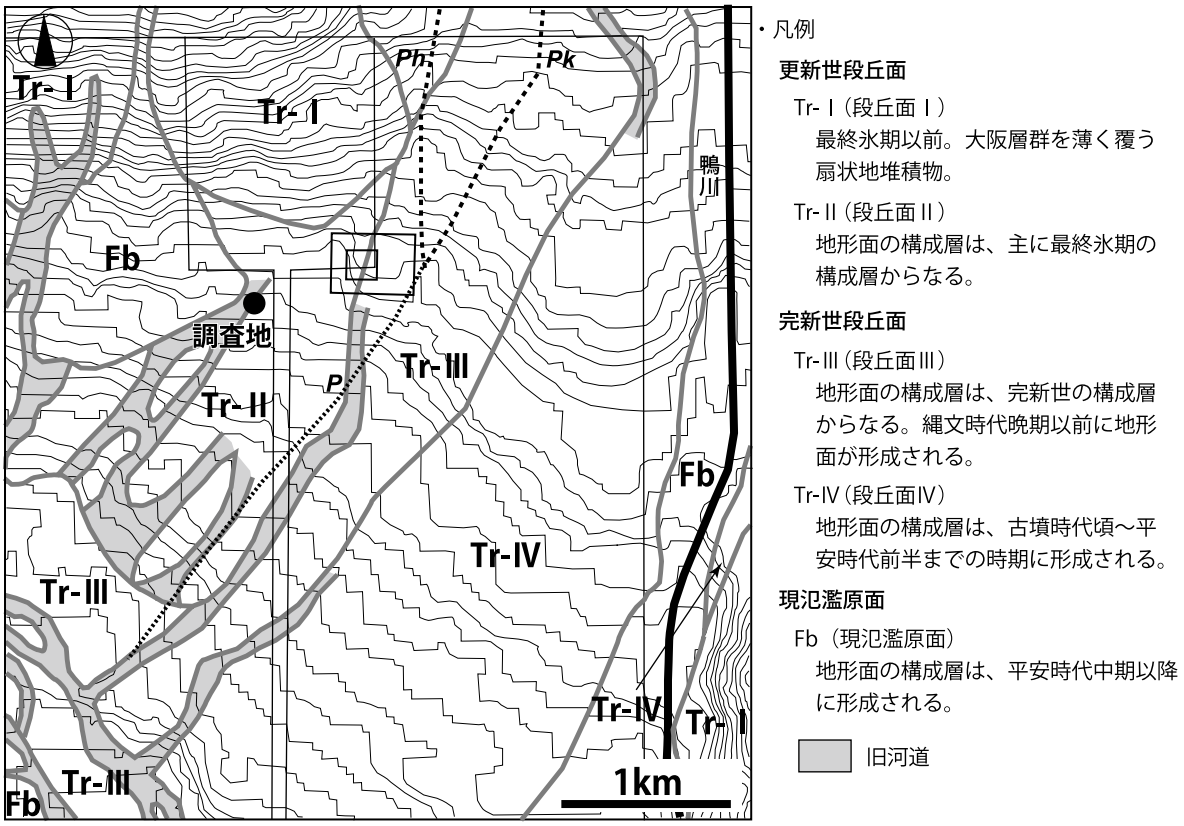


7　3地点（4区）の試料採取地点の堆積状況



8　4区の基盤層1の堆積状況

図３　試料採取地点・層相観察地点の堆積状況写真



・等高線は、河角（2004）の所収の第７図の等高線（1m間隔）を再トレースした。
・地形と旧河道の区分は、河角（2004）の所収の第２図の地形分類図を簡略化した。
・Ph（古堀川谷）、Pk（古烏丸谷）、P（古堀川）のラインは、横山（1988）所収の図と河角（2004）の所収の第７図を合成して作成した。

図４　調査地周辺の地形学図

による立地面の離水年代、さらに後述する灰色～暗色を呈す泥層の基盤層３の放射性炭素年代値をふまえると、基盤層４は、段丘面Ⅱの構成層と解釈され、遺構面付近の層準が約3.0万年前以降から完新世の開始年代である1.17万前以前の更新世末期に形成されたと考えられる。すなわち基盤層４は、更新統である。ただし、前回の2011年度調査および今回の調査区でも、基盤層４については、放射性炭素年代値が得られておらず、堆積年代を確定できていない。この点は、今後の課題である。

2）基盤層３

基盤層３は、砂礫層直上に被覆する、暗灰色～暗色を呈する腐植を多く含み、植物遺体を少量挟在する塊状無層理の粘土質シルトからなる土壌化した泥層である（図１）。2011年度調査区では、対応する層準から採取された植物遺体と木片から、縄文時代早期の8300－8000年前と縄文時代前期の6800－6600年前の年代値が得られている。既往の年代値から、基盤層３は、完新世に形成された完新統であり、直下の扇状地面を形成した更新統の砂礫層とは時間間隙（ハイエイタス）があったとみられる。基盤層３の層厚は、基盤層４の砂礫などによって形成された高まり部分で相対的に薄い。また、そのような高まり部分では、古代以降の人間活動による削平を受け、上部が失われるか、基盤層３自体が残存していない。後述する基盤層２・１に被覆されない領域では、古代の段階の地表は、基盤層３の表層に相当すると考えられる。よって、このような領域では、基盤層３

の形成年代が縄文時代から古代までとみなされる。

調査区内の微地形と基盤層の層序および後述の花粉・珪藻分析結果から、３区の庭園の池は、基盤面の地形が元々凹地ないし緩やかに低所となっていた、周囲よりも湿性の地表環境が形成されやすい緩斜面を選択して形成されたと推測される。

3）基盤層２・１

基盤層２は、２区と４区に分布する。本層は、基盤層４を一部侵食して累重する細礫～中礫を多く含む砂礫層である（図３－１）。基盤層２の砂礫は、基盤層４の砂礫に比べ、相対的に淘汰不良であるとともに、しまり具合が緩い。堆積状況と直上の泥炭層の基盤層１に含まれる弥生土器の存在から、基盤層２は、基盤層４と異なる時期に堆積した砂礫層と推測される。今回の調査や分析では、基盤層２の年代を特定できるような情報は得られていない。また、2011年度調査の記載からは、本層に対比される層準を確認できない。

基盤層１は、基盤層２の砂礫層を被覆する泥炭層の薄層である（図３－８）。４区では、基盤層１から弥生土器が検出されている。2011年度調査では、基盤層１に対比できる可能性のある泥炭層から、2550±30BPの年代値が得られており、小林（2017）と若林（2018）をふまえると、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期前半の暦年代値に相当する。

4）基盤層の堆積過程

京都盆地東縁部の岡崎の白川扇状地上に分布する考古遺跡の基盤層の層序を検討した小野（2020）の研究では、約2.9～2.6万年前の更新統の砂礫層の直上に、7700年前から4100年前までの複数の年代値が得られた砂礫層を部分的に挟在する完新統の腐植質泥層の存在が報告されている。このような堆積状況は、更新統の砂礫層と完新統の泥層主体の層準に、比較的短期間の地層形成の不連続（ダイアステム）が生じている可能性を示唆する。なお、年代値から、ダイアステムが生じていた時期は、更新世最末期の最終氷期最寒冷期前後と解釈され、降水量の減少など、この時期の古気候・古水文環境の変化と連動した地形変化であった可能性がある。

上述の小野（2020）で明らかにされた更新世から完新世に至る京都盆地の扇状地での年代と層序は、本調査区の基盤層４から基盤層３で確認された層相変化と非常に類似する。さらに、小野（2020）では、年代値から縄文時代早期から中期頃に形成されたと考えられる完新統の腐植質泥層の直上に、泥層を中心とした弥生時代～古墳時代の層準が載る状況が報告されている。このような堆積状況は、本調査区での基盤層３から基盤層２ないし１にかけての層相変化とも類似している。流域が異なるものの、本調査区と岡崎の白川扇状地での基盤層の堆積過程との間に、類似した点がある状況は着目される。

本調査区は、基盤層が観察できる範囲が限られ、堆積状況の詳細を把握できない。2011年度調査区と小野（2020）の研究をふまえると、本調査区の基盤層については、基盤層４が立地面を構成する更新世の扇状地堆積物、基盤層３～１が扇状地面の離水後に付近の河川から供給された完新世の堆積物と推定される。河角（2004）によれば、京都盆地の中央部から東部の扇状地は、更新世以降に東側へと段丘面を付加させていきながら、下刻が進行したとみられる。このため、調査区の立

地面の段丘化が進行した基盤層３～１の堆積段階においては、既に鴨川流域から切り離されていたとみられる。したがって、基盤層３～１の段階に調査区付近を流下する河川については、北側の山地や丘陵から流下する、集水域の狭い河川であったと推測される。

基盤層３～１については、基盤層２を除き泥質ないし泥炭質である。基盤層３～１の層相と年代値および堆積層形成段階に地形面が既に段丘化していた点、さらに堆積物を供給した河川が北側の山地・丘陵の比較的狭い流域に由来する可能性から、完新世に調査区付近の扇状地面付近を流下する河川では、侵食と堆積作用がともに弱く、河床も浅い小河川であったと推定される。このため、段丘化した扇状地面上の氾濫原では、洪水堆積物の堆積速度がかなり遅いとともに、地表面付近において土壌化が進行する領域が広がっていたと推定される。ただし、弥生時代もしくはそれ以前の縄文時代後半から末期には、２区や４区などを中心に、粗粒の洪水堆積物の流入が一時期存在したと推測される。一方で、基盤層２・１の堆積が生じたなかった領域では、縄文時代から９世紀頃まで、基盤層３に対比される泥質の土壌化した層準が形成されたと推測される。基盤層３の土壌化層準は、基盤層４の高まり部分において生成が顕著ではなく離水傾向にあったとみられる。

基盤層２・１が堆積した領域では、弥生時代から９世紀以前の堆積層がほとんど存在していない。このような堆積状況から、弥生時代から９世紀以前の古代にかけての本調査区付近では、全体的に河川堆積作用が非常に静穏で、安定した地表環境が維持されていたと推定される。本調査区の９世紀以前の地表環境は、完新世に若干の微地形変化の影響が認められるものの、更新世に形成された扇状地面の微地形に基本的に既定されており、埋没流路や砂礫のなどの部分が高く高燥で、これらの微高地間は低所となり、湿性であったと考えられる。そのようななか、調査区では、９世紀から10世紀にかけて、古い段階に形成された低地部に泥が間欠的に堆積した状況が、今回の発掘調査と現地の層相観察の結果から確認される。平安京の造成前後の時期に調査区内に泥が堆積し始めるという地表環境変化については、人為的な土地改変や、それまで流下していた小河川の付け替えなどとも関係している可能性があり、堆積過程については、今後より詳細な検討を行っていく必要がある。

なお、河角（2004）の地形分類図によれば、今回の調査区は、旧河道部分に立地する（図４）。横山（1988）によって従来から指摘されてきた古堀川および古堀川谷・古烏丸谷は、河角（2004）によれば、段丘面ⅡとⅢの地形境界を流下する旧河道に相当すると認識できる。したがって、本調査区部分に該当する旧河道は、少なくとも完新世に機能していた古堀川ではないと考えられる。河角（2004）に示された本調査区付近の旧河道については、実態が不明な点も多いと思われる。ただし、本調査区の地形が周囲よりも低く、凹地をなす旧河道部分に位置していた場合には、基盤層３～１のような更新統の砂礫層を被覆する完新統の氾濫原堆積物が流入しやすい堆積環境であったり、さらに地下水や表層水が集まりやすい状況であった可能性がある。この点については、本調査区周辺における、より詳細な基盤地形の復元からの検討が、今後の課題と考えられる。

(3) 古代の層準

1）９世紀初頭の堆積層（２区：１地点）

２区では、基盤層２の砂礫層と基盤層１の泥炭層の上部に、９世紀初頭に堆積した腐植質の塊状無層理の粘土質シルトの泥層が累重する（図１、図２、図３－１）。本層は、２区で検出された土手状遺構の西側に堆積する。層内には、植物遺体の挟在がほとんど認められない。本層の表層部分では、建物跡などの遺構が検出されている。最上部付近には、土器片や炭片とともに、微細な泥の偽礫も含まれる。このような層相と発掘調査成果から、本層の表層部分は、建物構築などに伴う人為的な地表撹乱を受けたと推定される。

上述の層相と珪藻分析結果から、９世紀初頭の腐植質の泥層は、湿地もしくは浅い滞水域の堆積環境下で形成されたと解釈される。ただし、遺構検出状況と表層付近の人為的地表撹乱の可能性などから、本層上面での遺構形成段階には、地下水位が低下するとともに、調査区内の排水性が良くなったとみられる。

2）池750埋土（３区：２地点）

下部には、黒褐色で腐植含量の高い泥炭質の塊状無層理をなす粘土質シルト層が存在する（図１、図２、図３－３・５）。本層は、池の北肩付近（２－１地点）のみに分布しており、池底が相対的に高くなった池南側の領域には堆積していない。上部には、下部よりも相対的に腐植含量の低い、暗褐色を呈する泥炭質の塊状無層理をなす粘土質シルト層が堆積する。この堆積層は、側方への連続性が良く、池の全域に分布する。

上述の層相と発掘調査結果から、池750の埋土をなす泥炭質泥のうち、特に上部の池埋土は、池の放棄段階を中心とした帯水環境下で形成された堆積層と考えられる。池750は、上部の池の造成時に、客土によって埋積される。客土は、２－２地点のように池の南半部で礫を非常に多く含み、粗粒である。池の北肩付近の客土層は、礫を多く含むものの、泥質である。

3）10世紀前半の堆積層（４区：３地点）

４区では、基盤層２の砂礫層の上面の、相対的な低所を中心に、10世紀前半に堆積した腐植質の塊状無層理の粘土質シルトの泥層が累重する（図１、図２、図３－７）。本層は、４区で検出された土手状遺構の北側に堆積する。２区の９世紀初頭の腐植質泥層よりも腐植含量が高く、土色も黒みが強い。また、層内は植物遺体を多く含むとともに、泥炭質泥の層相をなす部分もある。さらに、本層上部の整地層と思われる堆積層も、腐植質に富み、植物遺体を比較的多く含む。

上述の層相から、10世紀前半の腐植質の泥層は、排水不良の過湿地もしくは極浅い滞水域で形成されたと解釈される。本層上部の整地段階でも、４区では、排水不良の状態が継続していた可能性がある。

（３）分析方法

３つの地点（２～４区）から採取された計８試料の分析試料一覧を表１に示す。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

試料（湿重量約４g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶

表１　分析試料一覧

調査区	分析地点	試料№	層位	時期	岩質	備考
２区	１地点	1	７層上部	９世紀初頭	砂礫、炭、土器片混じり腐植質粘土質シルト	９世紀初頭の地表面（湿地状堆積349）
		2	７層		腐植質粘土質シルト	湿地（湿地状堆積349）
		3	18層表層	弥生時代？	泥炭	―
３区	２－１地点	1	31層	９世紀後半	砂質粘土質シルト	池750の放置期
		2	32層		腐植質粘土質シルト	池750の機能期
		3	41層表層	９世紀中頃	砂質粘土質シルト	池基底部表層（湿地状堆積780）
		4	41層		砂質粘土質シルト	池基盤層（湿地状堆積780）
４区	３地点	1	59層	10世紀前半	腐植質粘土質シルト	湿地（湿地状堆積853）

液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：硫酸１の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200に達するまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PLC.3112～3118）を作製し、写真を図５に載せた。

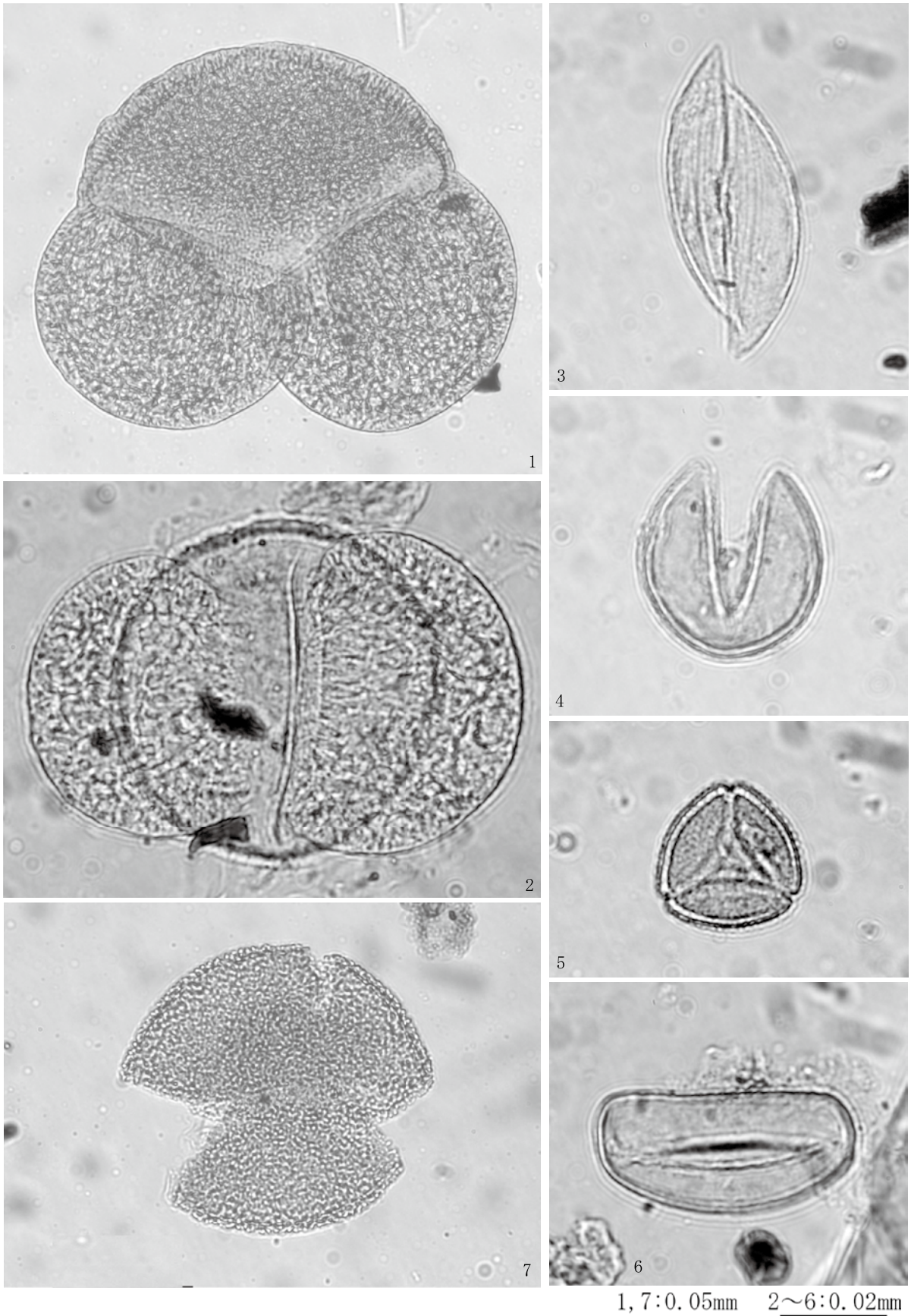
（４）結果

８試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉30、草本花粉29、形態分類を含むシダ植物胞子３の、総計62である。これらの花粉・胞子の一覧表を表２に、分布図を図６に示した。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図表においてハイフン（－）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、バラ科やマメ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

２区における弥生時代の可能性のある泥炭（２区№３：18層）では、ハンノキ属が優占する。その上位の９世紀初頭の層準（２区№１：７層上部、２区№２：７層）では、スギ属が優占する。また、モミ属やツガ属、イネ科は上位層に向かって増加傾向がある。

３区における池の基盤層（３区№４：41層底部）では、スギ属やコナラ属アカガシ亜属が優勢である。その上位の池基底部をなす基盤層（３区№３：41層表層）では、モミ属やツガ属、マツ属複維管束亜属などが増加する。また、９世紀後半の放棄段階の池750の上層（３区№１：31層）ではクリ属－シイノキ属－マテバシイ属が突出している。さらに、３区からは多くの種類の好湿性植物が産出しており、ガマ属やオモダカ属、ミズアオイ属、ハス属、キカシグサ属、ヒシ属、ミツガシワ属、ガガブタ、ゴキズル属－アマチャヅル属、サンショウモ属などが挙げられる。栽培植物としてはベニバナ属が池750の上下層（３区№１：31層、３区№２：32層）で検出された。

10世紀前半の４区の堆積物（４区№１：59層）では、樹木花粉ではモミ属やマツ属複維管束亜属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属が、草本花粉ではイネ科やヨモギ属の産出が目立つ。



1. モミ属（PLC.3112）　2. マツ属複維管束亜属（PLC.3113）
3. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科（PLC.3114）　4. スギ属（PLC.3115）
5. ガガブタ（PLC.3116）　6. ミズアオイ属（PLC.3117）　7. ハス属（PLC.3118）

図５　３区№２から産出した花粉化石

表２　産出花粉胞子一覧表

学名	和名	2区No.1	2区No.2	2区No.3	3区No.1	3区No.2	3区No.3	3区No.4	4区No.1
樹木									
Podocarpus	マキ属	－	－	－	－	－	1	－	－
Abies	モミ属	26	10	1	9	6	9	1	24
Tsuga	ツガ属	11	1	－	8	1	14	1	4
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	17	5	2	43	33	29	4	14
Sciadopitys	コウヤマキ属	－	－	－	1	2	8	2	4
Cryptomeria	スギ属	72	109	14	25	67	76	56	56
Taxaceae－Cephalotaxaceae－Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	5	10	7	4	11	6	18	2
Salix	ヤナギ属	－	－	－	－	3	－	－	－
Pterocarya－Juglans	サワグルミ属－クルミ属	1	－	－	2	1	1	－	1
Carpinus－Ostrya	クマシデ属－アサダ属	4	6	1	7	3	7	4	1
Betula	カバノキ属	1	1	2	－	－	4	4	5
Alnus	ハンノキ属	4	3	104	1	3	1	2	3
Fagus	ブナ属	3	1	2	2	1	1	2	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	13	8	16	10	11	12	12	2
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	30	38	30	29	39	29	68	53
Castanea-Castanopsis－Pasania	クリ属－シイノキ属－マテバシイ属	5	8	10	50	11	6	17	20
Ulmus－Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	2	－	1	2	2	2	2	2
Celtis－Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属	1	－	－	1	7	2	1	1
Phellodendron	キハダ属	－	－	1	－	－	－	－	－
Mallotus	アカメガシワ属	－	－	1	－	－	－	－	－
Ilex	モチノキ属	－	－	－	－	1	－	－	－
Acer	カエデ属	－	－	－	－	－	－	1	－
Aesculus	トチノキ属	－	1	2	－	－	－	－	－
Vitis	ブドウ属	－	－	－	1	－	－	－	－
Parthenocissus	ツタ属	－	－	－	1	－	－	－	－
Actinidia	マタタビ属	－	－	－	－	2	－	－	－
Araliaceae	ウコギ科	－	－	2	－	－	－	1	1
Symplocos	ハイノキ属	－	－	－	－	－	－	－	1
Styrax	エゴノキ属	－	－	－	－	1	－	－	－
Fraxinus	トネリコ属	5	3	5	4	－	－	4	5
草本									
Typha	ガマ属	1	－	－	－	1	1	－	1
Sagittaria	オモダカ属	8	8	－	2	1	3	3	2
Gramineae	イネ科	206	135	33	153	61	93	69	147
Cyperaceae	カヤツリグサ科	20	7	3	21	7	6	3	14
Monochoria	ミズアオイ属	－	－	－	6	16	4	－	6
Rumex	ギシギシ属	－	－	－	－	－	2	4	1
Polygonum sect. *Persicaria－Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	1	－	－	3	1	1	2	2
Chenopodiaceae－Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	－	－	－	－	4	1	3	2
Caryophyllaceae	ナデシコ科	－	1	－	3	－	1	－	3
Nelumbo	ハス属	－	－	－	－	2	－	－	－
Thalictrum	カラマツソウ属	1	－	－	－	－	－	－	－
Brassicaceae	アブラナ科	3	－	－	－	1	－	4	2
Rosaceae	バラ科	－	－	－	1	2	－	－	－
Sanguisorba	ワレモコウ属	－	－	2	－	－	－	－	－
Leguminosae	マメ科	－	－	1	－	－	－	－	－
Impatiens	ツリフネソウ属	1	－	1	－	－	－	－	1
Rotala	キカシグサ属	1	－	－	1	1	－	－	1
Trapa	ヒシ属	－	－	－	－	－	－	1	－
Haloragis	アリノトウグサ属	－	－	－	－	1	－	－	－
Apiaceae	セリ科	1	2	1	2	－	－	5	1
Menyanthes	ミツガシワ属	－	－	－	－	1	－	－	－
Nymphoides indica	ガガブタ	－	－	－	1	7	－	－	－
Solanum	ナス属	－	－	－	－	－	－	－	2
Plantago	オオバコ属	－	－	－	－	3	1	3	－
Actinostemma－Gynostemma	ゴキヅル属－アマチャヅル属	－	－	－	－	3	－	－	－
Carthamus	ベニバナ属	－	－	－	1	1	－	－	－
Artemisia	ヨモギ属	5	10	25	11	12	17	48	37
Tubuliflorae	キク亜科	1	4	－	2	4	1	3	2
Liguliflorae	タンポポ亜科	3	7	1	1	1	－	1	2
シダ植物									
Salvinia	サンショウモ属	－	－	－	－	2	－	－	－
monolete type spore	単条溝胞子	2	－	4	1	－	4	－	2
trilete type spore	三条溝胞子	2	3	4	5	2	－	－	1
Arboreal pollen	樹木花粉	200	204	201	200	205	208	200	200
Nonarboreal pollen	草本花粉	252	174	67	208	130	131	149	226
Spores	シダ植物胞子	4	3	8	6	4	4	－	3
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	456	381	276	414	339	343	349	429
unknown	不明	5	1	10	4	5	2	22	10

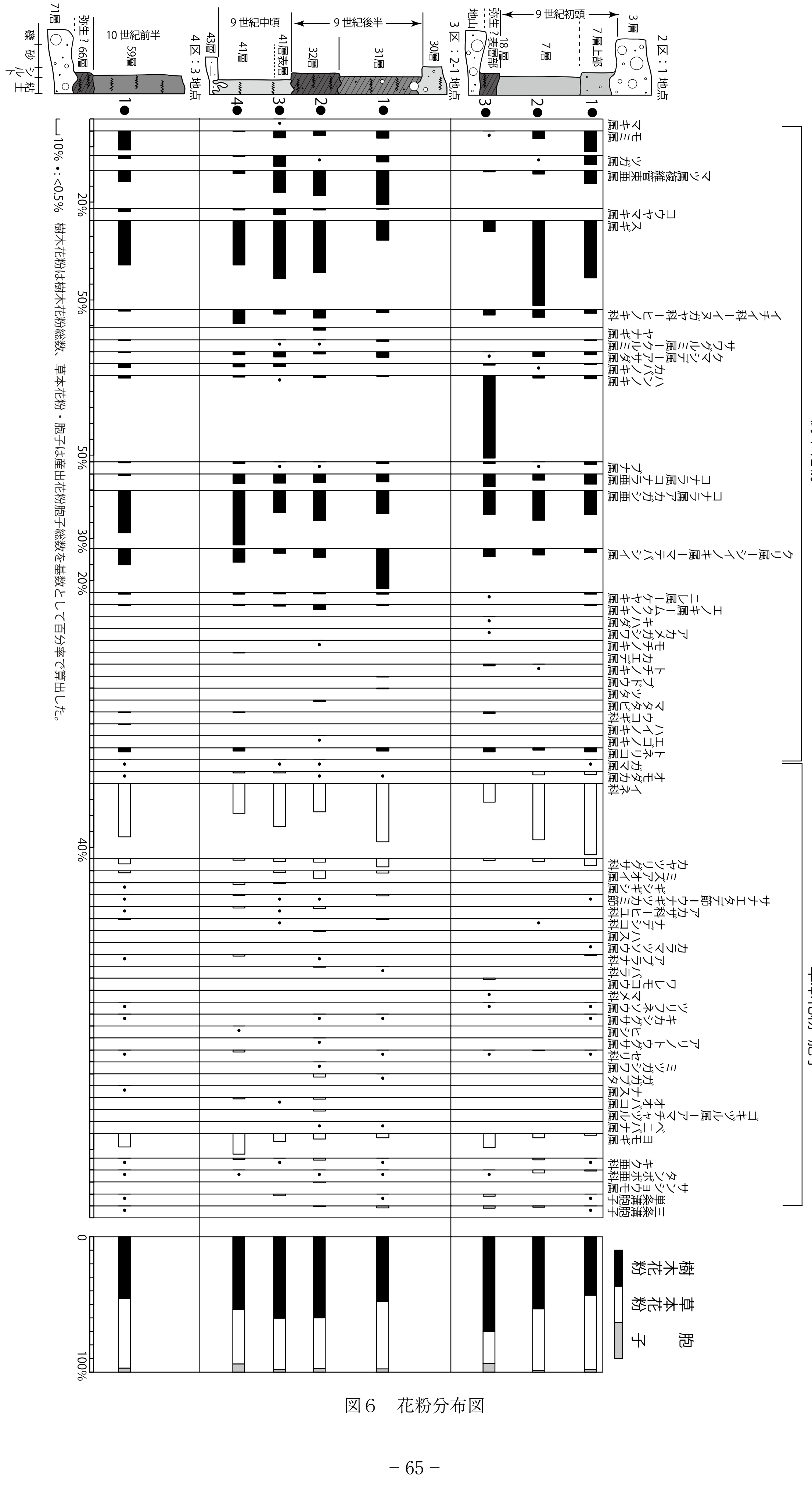

樹木花粉
草本花粉・胞子
2区：1地点
3区：2-1地点
4区：3地点
9世紀初頭
9世紀中頃
9世紀後半
10世紀前半
樹木花粉
草本花粉
胞子
10% •：<0.5%　樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。

図６　花粉分布図

（５）考察

(1) ２区

２区では、弥生時代の可能性のある層準および９世紀初頭の層準の分析結果が得られている。弥生時代の泥炭の18層（２区№３）では、ハンノキ属が優占するため、２区周辺にはハンノキ属から成る湿地林（沼沢湿原）が形成されていたと思われる。また、コナラ属アカガシ亜属の産出も目立ち、遺跡周辺にはカシ類からなる照葉樹林も分布していた可能性がある。

９世紀初頭に形成された湿地と考えられる腐植質泥層の７層（２区№２）になると、樹木花粉ではハンノキ属の産出がわずかとなり、スギ属が優占する。この時期は、遺跡周辺の丘陵地や山地において、スギ林が発達していた可能性がある。また、カシ類からなる照葉樹林も依然として分布していたと考えられる。草本花粉では、イネ科が優占しているため、２区周辺にはイネ科が分布を広げていたと思われる。

同じく９世紀初頭の腐植質泥層の７層上部（２区№１）では、スギ属やコナラ属アカガシ亜属に加え、モミ属やツガ属、マツ属複維管束亜属といった針葉樹が増加している。これらの針葉樹が９世紀初頭に分布を広げていたと考えられる。このうちマツ属複維管束亜属に注目すると、平安京域では９世紀ころにマツ属花粉が急増する傾向が確認されており、宅地域の庭園などにおけるニヨウマツ類の植栽が指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，2013)。時期的にも、７層上部（２区№１）におけるマツ属複維管束亜属の増加は一致しており、２区周辺のニヨウマツ類の植栽の増加を反映している可能性がある。

なお、７層上部（２区№１）は、９世紀初頭の遺構確認面となる。７層上部（２区№１）の分析層準は、この上部に整地層が被覆しており、現地での層相観察において削平などの影響がなく、７層（２区№２）から連続的に堆積していると判断できる。７層から７層上部の草本花粉では、荒れ地などに生育するヨモギ属が減少して、イネ科の増加が目立つ。この変化は、弥生時代の可能性のある18層から連続して認められる。発掘調査結果をふまえると、７層から７層上部での草本花粉の変化は、７層上部での宅地利用などの人間の土地利用の変化と関連している可能性がある。

(2) ３区

1）池の基盤層（№４、№３）

３区は、９世紀後半の池750埋土と池の基盤層の分析結果が得られている。池の基盤層については、縄文時代の可能性のある基盤層の泥層の41層底部（３区№４）で、スギ属とコナラ属アカガシ亜属の産出が目立つ。また、試料の層序で述べているように、庭園の池の構築時の地表もしくは地表にかなり近い層準であったと推定される41層（３区№４）と同様の層相を示す41層表層（３区№３）では、スギ属とコナラ属アカガシ亜属の産出とともに、モミ属やツガ属、マツ属複維管束亜属が増加する。41層表層（３区№３）の花粉組成の変化は、２区の９世紀初頭の７層（２区№２）で見られた変化と同様である。このように、41層では、表層と底部で花粉化石群集が大きく異なる。発掘調査では、41層直下の43層直上で古代の土器が検出されており、41層全体が古代と判断

できる。41層表層の花粉化石群集は、古代の湿地状堆積780埋土と判断して矛盾のない特徴を示す。一方で、花粉分析結果にもとづくと、41層底部については、上述で述べた基盤層３の花粉化石群集を反映していると考えられる。ただし、41層底部で古代の花粉化石群集を示さなかった要因については、堆積層の変形などが推測されるが、現段階では特定に至っていない。

なお、本遺跡の大型植物遺体分析の結果を参照すると、41層表層（３区№３）ではイネやメロン仲間といった、一般的には縄文時代に栽培が行われていなかった植物が産出している。また、上記のように、41層表層（３区№３）の花粉化石群集は、２区の９世紀初頭の７層（２区№２）と同様であり、生層序対比が可能である。このような特徴にもとづくと、41層表層（３区№３）の分析層準は、庭園の池の構築時の地表付近であった可能性が高く、この分析層準が湿地状堆積780の埋土となるのは極めて整合的である。

2）池埋土（№２、№１）

９世紀後半の池750では、特に下層の32層（３区№２）において、ガマ属やオモダカ属、ミズアオイ属、ハス属、キカシグサ属、ミツガシワ属、ガガブタ、ゴキズル属－アマチャヅル属、サンショウモ属など多くの種類の好湿性植物が産出しており、これらの植物が池内やその周辺に生育していた可能性がある。上記で示した種類のうち、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、ガガブタ以外は、№２のみで産出しており、特にハス属の産出が目立つ。飛田（2002）で挙げられた平安時代初頭の庭園の植栽植物をふまえると、特にハス属は、池中に植栽されていた可能性がある。

樹木花粉では、池の機能時の埋土である32層（３区№２）についてみてみると、モミ属やマツ属複維管束亜属、スギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ属アカガシ亜属などの産出が目立つ。現地性の高い大型植物遺体では、同層準でヒノキやモミ、マツ属が産出しているため、モミ属やマツ属複維管束亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科といった花粉は、池の近傍に生育していたヒノキやモミ、マツ属から供給されたと考えられる。

32層（３区№２）と31層（３区№１）は、氾濫原に流入した洪水によって砕屑物が供給された２区と４区の分析層準よりも、集水域の規模がかなり小さな池の埋土であり、相対的に局地性要素の強い花粉化石を多く含むと考えられる。マツ属については、９世紀初頭と10世紀前半の２区と４区の分析層準よりも多産傾向を示す。ただし、マツ属は、池基盤層の表層の古代の可能性のある41層表層（３区№３）でも、２区と４区の分析層準よりも多産しており、池構築以前に調査区付近で既にマツ属が増加していた可能性がある。以上から、９世紀後半とその直前の池の構築時以前と池の機能時および放置期には、９世紀初頭と10世紀前半段階よりも調査区とその近傍で、マツ属が相対的に多く分布していたと推定される。

なお、スギ属やコナラ属アカガシ亜属に相当する大型植物遺体は検出されていないため、スギ属やコナラ属アカガシ亜属に関しては、周辺の丘陵地や山地にスギ林や照葉樹林が分布しており、そこから供給されていた可能性がある。

大型植物遺体と花粉化石の産状および飛田（2002）と隣接する同時期を含む池の古植物学的な分

析結果（パリノ・サーヴェイ株式会社，2013）をふまえると、今回の分析結果から可能性が指摘される池の植栽樹としては、マツが挙げられる。

池の放置期の埋土である池750上層の31層（３区№１）においてもモミ属やマツ属複維管束亜属、スギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ属アカガシ亜属などが産出するが、この層準ではクリ属－シイノキ属－マテバシイ属が突出する。大型植物遺体分析では同層準でクリが産出しているため、クリ属－シイノキ属－マテバシイ属には、クリ由来の花粉が多く含まれている可能性が高い。クリ花粉については散布状況が詳細に調べられており、ほとんどの花粉がクリ林内に落下し、広範囲に散布されにくいという実証的なデータがある（吉川，2011）。池750のすぐ傍にクリが生育していた場合、池750には多くのクリ花粉が供給されることになり、クリ属－シイノキ属－マテバシイ属の産出率が高くなったと考えられる。埋土の性格をふまえると、クリ属－シイノキ属－マテバシイ属は、池放棄後に主に生育したものと推定される。また、池750の上下層（31層：３区№１、32層：３区№２）では、栽培植物のベニバナ属が検出された。池750周辺ではベニバナ栽培ないしベニバナを使用する何らかの人間活動も行われていた可能性がある。

花粉分析結果と大型植物遺体の分析結果をふまえると、池750では、池の放棄後に周囲の乾いた場所を中心に二次林が生育する状況であったと推定される。このような植生変化から、池放棄後には、一定期間居住域としての土地利用がなされず、土地が放置状態となっていた状況が推測される。

10世紀前半の59層（４区№１）では、モミ属やマツ属複維管束亜属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属－シイノキ属－マテバシイ属などの産出が目立つ。この層準では大型植物遺体分析を行っていないため、現地性の植物を区分するのが難しいが、59層（４区№１）は９世紀後半の池750（31層：３区№１、32層：３区№２）の花粉組成に類似する。植物の分布域については池750（31層：３区№１、32層：３区№２）を参照すると、10世紀前半においても周辺の丘陵地や山地にスギ林やカシ類の照葉樹林が分布しており、４区周辺にはモミ属やマツ属、クリ属などが生育していた可能性がある。草本花粉ではイネ科やヨモギ属の産出が目立つため、イネ科やヨモギ属が４区周辺に生育していたと考えられる。また、ガマ属やオモダカ属、ミズアオイ属、ツリフネソウ属、キカシグサ属などの好湿性植物の産出も見られ、４区周辺には湿地的環境も存在していた可能性がある。

（文責：森　将志・辻　康男）

引用・参考文献

河角龍典（2004）歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化－遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築－．京都歴史災害研究，1，13～23.

小林謙一（2017）縄紋時代の実年代－土器型式編年と炭素14年代－．263p，同成社.

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（2013）平安京右京三条一坊六・七町跡－西三条第（百花亭）跡－．229p，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所.

小野映介（2020）京都盆地東縁、白川扇状地における更新世末以降の堆積環境の変遷．立命館文學，666, 56-68.

高原　光（2011）日本列島とその周辺域における最終間氷期以降の植生史．湯本貴和編「日本列島の三万五千年－人と自然の環境史　第6巻　環境史をとらえる技法」：15-44，文一総合出版.

飛田範夫（2002）日本庭園の植栽史．435p，京都大学学術出版会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（2013）自然科学分析．京都市埋蔵文化財研究所編「平安京右京三条一坊六・七町跡」：133-171，京都市埋蔵文化財研究所.

Smith, V. C., Staff, R. A., Blockley, S. P. E., Bronk Ramsey, C., Nakagawa, T., Mark, D. F., Takemura, K., Danhara, T., Suigetsu 2006 Project Members（2013）Identification and correlation of visible tephras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronising of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. Quaternary Science Reviews, 67, 121-137.

若林邦彦（2018）近畿地方弥生時代諸土器様式の暦年代－石川県八日市地方遺跡の研究成果との対比－．同志社大学考古学研究室編「同志社大学考古学シリーズＸⅡ　実証の考古学　松藤和人先生退職記念論文集」：119-129，同志社大学考古学研究室.

横山卓雄（1988）平安遷都と鴨川つけかえ：歴史と自然史の接点．235p，法政出版.

吉川昌伸（2011）クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況．植生史研究，18，65-76.

２．大型植物遺体

（１）はじめに

３区で検出された９世紀後半の池750埋土と、古代の可能性のある池の基底部の堆積物より検出された大型植物遺体の同定結果を報告し、遺跡周辺の堆積当時の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて花粉分析を行っている（詳細は、花粉分析の項参照）。

（２）試料と方法

分析試料は、３区の２－１地点の池基底部の基盤層の41層表層、９世紀後半の池750の上層（31層）と下層（32層）の堆積物各１試料の、計３試料である。

堆積物試料の水洗は、各試料300ccについて、最小0.5㎜目の篩を用いて水洗した。水洗は、パレオ・ラボにて行った。大型植物遺体の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。計数が困難な分類群は、記号（＋）で示した。

（３）結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のヒノキ葉・種子とモミ葉、マツ属複維管束亜属葉の３分類群、広葉樹のブドウ属種子とバラ属核、ヒメコウゾ核、クリ果実、アカメガシワ種子、イヌザンショウ種子、ヒサカキ属種子の７分類群、草本植物ではジュンサイ種子とマツモ果実、ヘラオモダカ果実・種子、オモダカ属果実・種子、ホッスモ種子、ヒルムシロ属核、イボクサ種子、コナギ種子、ミズアオイ種子、ミクリ属核、スゲ属アゼスゲ節果実、スゲ属Ａ果実、スゲ属Ｂ果実、ヒメクグ果実、カワラスガナ果実、カヤツリグサ属果実、テンツキ属果実、サンカクイ－フトイ果実、ホタルイ属果実、メヒシバ属有ふ果、ヒエ属Ａ有ふ果、ヒエ属Ｂ有ふ果、イネ籾殻、エノコログサ属有ふ果、キケマン属種子、タガラシ果実、キンポウゲ属果実、ヒメビシ果実、ヒシ属果実、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属果実、ミズ属果実、メロン仲間種子、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、スミレ属種子、サナエタデ－オオイヌタデ果実、イヌタデ果実、ボントクタデ果実、ミゾソバ果実、イヌタデ属Ａ果実、ギシギシ属果実、ノミノフスマ種子、アカザ属種子、スベリヒユ属種子、オカトラノオ属種子、ナス種子、ナス属種子、オオバコ属種子、シロネ属果実、シソ属果実、アサザ属種子、タカサブロウ果実、オトコエシ属果実、チドメグサ属果実、セリ果実の55分類群の、計65分類群が見いだされた。この他に、科以上の詳細な同定ができない芽の一群を不明芽とした。種実以外には、外肛動物のコケムシ類休眠芽の１分類群が得られた（表３、図７）。また、不明昆虫遺体も得られたが、同定の対象外とした。

以下に、大型植物遺体の産出傾向について、時期ごとに、堆積物試料別に記載する（不明芽は除く）。

表３　大型植物遺体（括弧内は破片数）

		調査区	3区	
		試料No.	1	2	3
		採取位置	池750		基盤層
		層位	31層	32層	41層表層
		時期	9世紀後半		9世紀中頃
分類群		水洗量(cc)	300	300	300
ヒノキ	葉			10	
	種子			4	
モミ	葉		3 (+)	27 (+)	1
マツ属複維管束亜属	葉		3 (+)	26 (++)	2 (+)
ブドウ属	種子		(1)		
バラ属	核		(4)		
ヒメコウゾ	核		(1)		
クリ	果実		(5)		
アカメガシワ	種子			(1)	
イヌザンショウ	種子		(1)		
ヒサカキ属	種子		(1)	1	1
ジュンサイ	種子		(7)		
マツモ	果実			1	
ヘラオモダカ	果実			2	1
	種子				1
オモダカ属	果実		6 (1)	7	1
	種子		10	5	1
ホッスモ	種子		4	1	
ヒルムシロ属	核		2	(4)	(2)
イボクサ	種子		20	10	2
コナギ	種子		21 (1)	6	1
ミズアオイ	種子		18	63	4
ミクリ属	核			1	
スゲ属アゼスゲ節	果実				1
スゲ属A	果実		1		
スゲ属B	果実		2		
ヒメクグ	果実		17 (3)	26	23
カワラスガナ	果実		1	2	1
カヤツリグサ属	果実		8	11	2
テンツキ属	果実			1	1
サンカクイ－フトイ	果実				1
ホタルイ属	果実		1 (1)	(3)	3 (6)
メヒシバ属	有ふ果			4	31
ヒエ属A	有ふ果		5 (12)	3 (4)	5 (2)
ヒエ属B	有ふ果		1 (1)		1
イネ	籾殻		34 (+++)	4 (++)	2 (+)
エノコログサ属	有ふ果		(1)	(4)	5 (1)
キケマン属	種子		3	5 (3)	5 (3)
タガラシ	果実		9 (11)	32 (16)	6 (6)
キンポウゲ属	果実			2	4
ヒメビシ	果実		1 (5)		
ヒシ属	果実			(5)	
オランダイチゴ属ーヘビイチゴ属	果実			2	4 (1)
ミズ属	果実		1	9	
メロン仲間	種子		(2)	(3)	(1)
カタバミ属	種子		17 (10)	6 (9)	5 (3)
エノキグサ属	種子		2 (13)	(3)	
スミレ属	種子		2 (1)	(1)	
サナエタデーオオイヌタデ	果実		(1)	(2)	(3)
イヌタデ	果実		4 (6)		
ボントクタデ	果実		4 (7)	1 (2)	1
ミゾソバ	果実		1 (7)		
イヌタデ属A	果実		2 (3)		
ギシギシ属	果実			1	
ノミノフスマ	種子		12	5	3
アカザ属	種子				1
スベリヒユ属	種子			25	17
オカトラノオ属	種子		1		
ナス	種子			1 (3)	
ナス属	種子		1 (2)	1	
オオバコ属	種子				3
シロネ属	果実		1	1	
シソ属	果実		6 (13)	4 (9)	6 (14)
アサザ属	種子		1	2	
タカサブロウ	果実		4 (1)	23 (2)	46
オトコエシ属	果実				1
チドメグサ属	果実		5 (13)	18 (52)	12 (34)
セリ	果実		2		
不明	芽		(+)	(++)	
コケムシ類	休眠芽		3	38	13
不明	昆虫遺体		(++++)	(+++)	(++)

+:1-9, ++:10-49, +++:50-99, ++++:100以上

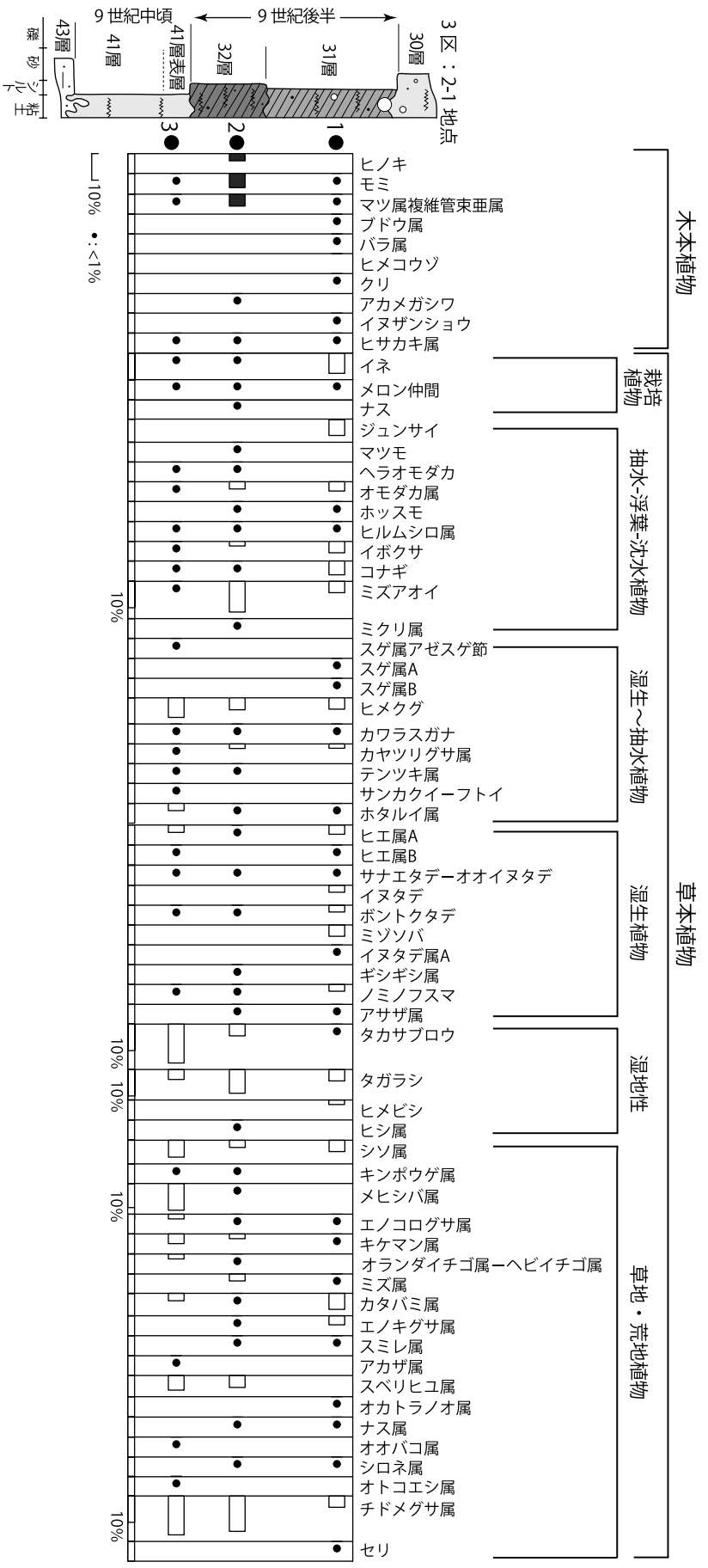


図７　大型植物遺体分布図

［古代］

41層表層（３区№３）：ヒメクグとメヒシバ属、タガラシ、スベリヒユ属、シソ属、タカサブロウ、チドメグサ属が少量、ミズアオイとホタルイ属、ヒエ属Ａ、エノコログサ属、キケマン属、キンポウゲ属、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属、カタバミ属、サナエタデ－オオイヌタデ、ノミノフスマ、オオバコ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が３点未満であった。栽培植物では、イネとメロン仲間がわずかに得られた。

［９世紀後半］

池750埋土32層（３区№２）：ミズアオイとチドメグサ属がやや多く、ヒノキとモミ、マツ属複維管束亜属、オモダカ属、イボクサ、ヒメクグ、カヤツリグサ属、タガラシ、カタバミ属、スベリヒユ属、シソ属、タカサブロウが少量、ヒルムシロ属とコナギ、ホタルイ属、メヒシバ属、ヒエ属Ａ、イネ、エノコログサ属、キケマン属、ヒシ属、ミズ属、メロン仲間、エノキグサ属、ボントクタデ、ノミノフスマ、ナスがわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が３点未満であった。栽培植物では、イネとメロン仲間がわずかに得られた。

池750埋土31層（３区№１）：オモダカ属とイボクサ、コナギ、ミズアオイ、ヒメクグ、ヒエ属Ａ、イネ、タガラシ、カタバミ属、エノキグサ属、イヌタデ、ボントクタデ、ノミノフスマ、シソ属、チドメグサ属が少量、モミとマツ属複維管束亜属、バラ属、クリ、ジュンサイ、ホッスモ、カヤツリグサ属、キケマン属、ヒメビシ、スミレ属、ミゾソバ、イヌタデ属Ａ、ナス属、タカサブロウがわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が３点未満であった。栽培植物では、イネとメロン仲間がわずかに得られた。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、写真を図８・９に示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APGⅢリストの順とした。

（1）ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa*（Siebold et Zucc.）Endl.　葉・種子　ヒノキ科

葉は暗褐色で、鱗片状。先端が緩やかに湾曲するため、ヒノキとした。長さ2.3㎜、幅1.5㎜。種子は黒褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円～三角形。表面は平滑。縁に向かって細くなる。両側に透明感のある薄黄白色の翼部分がある。長さ3.2㎜、幅2.9㎜。

（2）モミ　*Abies firma* Siebold et Zucc　葉　マツ科

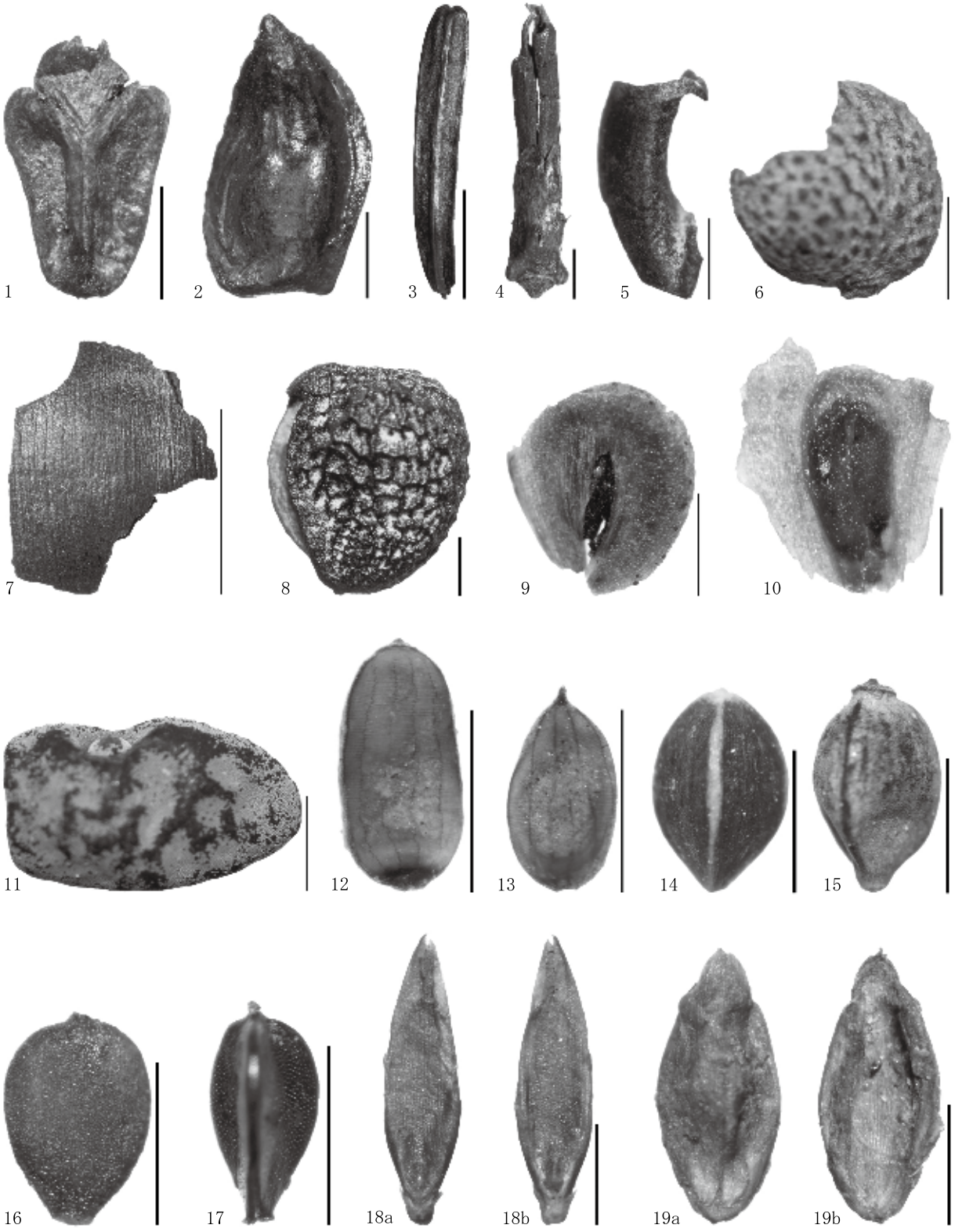
暗褐色で、扁平な針形。背面の中央部には縦方向の溝があり、腹面には幅の広い二列の気孔条がある。先端は二裂して鈍く尖る。基部は吸盤型であるが残存していない。残存長13.6㎜、幅2.2㎜。

（3）マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen.*Diploxylon*　葉　マツ科

暗褐色で、背面観と腹面観は狭長方形。完形ならば側面観は線状の狭長方形、断面は半円形である。背面と腹面の表面には、縦方向に並んだ８～10本の気孔条がある。マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツが含まれる。残存長6.0㎜、幅1.1㎜。

（4）ブドウ属　*Vitis* spp.　種子　ブドウ科

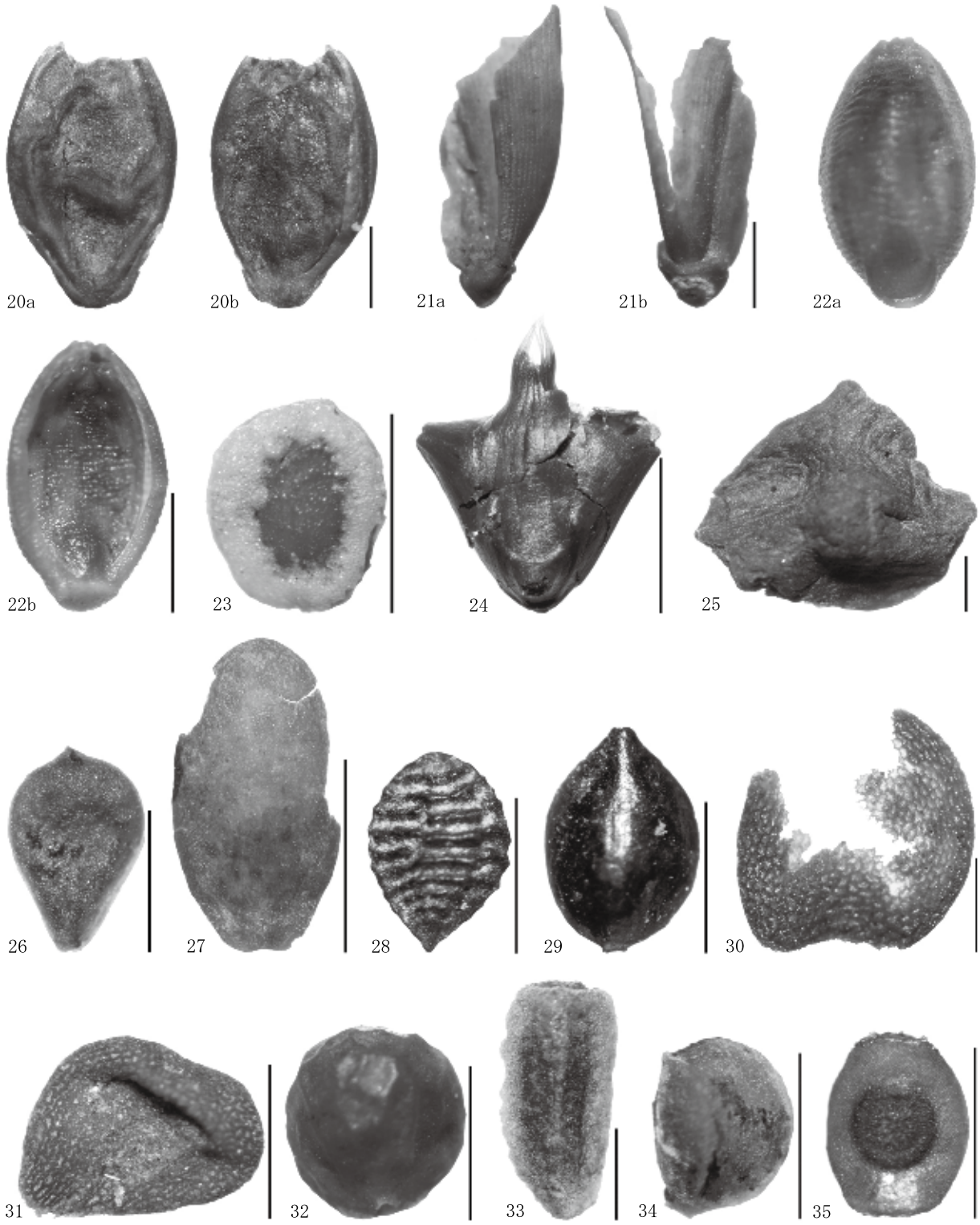
黒褐色で、完形ならば上面観は楕円形、側面観は下端が尖る倒広卵形。背面の基部寄りに円形の着点があるが、残存していない。腹面には縦方向の２本の深い溝があるが、１本しか残存していな



スケール 1, 2, 4-6, 8-19：1mm, 3, 7：5mm

1. ヒノキ葉 (No.2)、 2. ヒノキ種子 (No.2)、 3. モミ葉 (No.2)、 4. マツ属複維管束亜属葉 (No.2)、
5. ブドウ属種子 (No.1)、 6. ヒメコウゾ核 (No.1)、 7. クリ果実 (No.1)、 8. イヌザンショウ種子 (No.1)、
9. ヘラオモダカ果実 (No.3)、 10. オモダカ属果実 (No.1)、 11. イボクサ種子 (No.2)、 12. ミズアオイ種子 (No.2)、
13. コナギ種子 (No.2)、 14. スゲ属A果実 (No.1)、 15. スゲ属B果実 (No.1)、 16. ヒメクグ果実 (No.1)、
17. カヤツリグサ属果実 (No.2)、 18. メヒシバ属有ふ果 (No.3)、 19. ヒエ属A有ふ果 (No.3)

図８　３区２－１地点で出土した大型植物遺体（１）



スケール 20-23, 25, 26, 28-35：1mm 24, 27：5mm

20. ヒエ属Ｂ有ふ果 (№3)、 21. イネ籾殻 (№1)、 22. エノコログサ属有ふ果 (№3)、 23. タガラシ果実 (№1)、
24. ヒメビシ果実 (№1)、 25. ヒシ属果実 (№2)、 26. ミズ属果実 (№2)、 27. メロン仲間種子 (№2)、
28. カタバミ属種子 (№1)、 29. イヌタデ属Ａ果実 (№1)、 30. ナス種子 (№2)、 31. ナス属種子 (№1)、
32. シソ属果実 (№3)、 33. タカサブロウ果実 (№2)、 34. チドメグサ属果実 (№2)、 35. コケムシ類休眠芽 (№2)

図９　３区２－１地点で出土した大型植物遺体（２）

い。残存長2.9㎜、残存幅1.5㎜。

（5）ヒメコウゾ　*Broussonetia monoica* Hance　核　クワ科

淡褐色で、完形ならば上面観は楕円形、側面観はやや四角い円形。背面は稜をなし、腹面には溝がある。着点はやや突出する。表面全体を微細な突起が覆う。コウゾ属の中でも大きい。残存長1.8㎜、幅2.0㎜。

（6）クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　果実　ブナ科

黒褐色で、完形ならば側面観は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面にある殻斗着痕はざらつくが、残存していない。残存高6.9㎜、残存幅5.4㎜。

（7）イヌザンショウ　*Zanthoxylum schinifolium* Siebold et Zucc.　種子　ミカン科

黒色で、完形ならば上面観は卵形、側面観は楕円形。表面には大きな網目模様があり、一方の側面には大きな着点がある。着点は種子の長さとほぼ同じか、やや短い。長さ4.0㎜、幅3.5㎜。

（8）ヘラオモダカ　*Alisma canaliculatum* A.Braun et C.D.Bouché　果実・種子　オモダカ科

淡褐色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。周囲が肥厚し、中央は薄く、種子が透けて見える。長さ2.0㎜、幅1.8㎜。

（9）オモダカ属　*Sagittaria* spp.　果実・種子　オモダカ科

淡褐色で、上面観は扁平、側面観は歪んだ倒卵形。翼は黄白色で、厚く柔らかく、弾力がある。長さ2.6㎜、幅2.4㎜。

（10）イボクサ　*Murdannia keisak*（Hassk.）Hand.-Mazz.　種子　ツユクサ科

灰色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。中央部に狭楕円形で褐色の着点がある。表面にはやや凹凸がある。長さ1.8㎜、幅3.0㎜。

（11）ミズアオイ　*Monochoria korsakowii* Regel et Maack　種子　ミズアオイ科

黄褐色で、上面観は円形、側面観は楕円形。表面には縦方向の低い隆起があり、隆起の間には横方向の線が密に入る。コナギよりも大きい。長さ1.5㎜、幅0.6㎜。

（12）コナギ　*Monochoria vaginalis*（Burm.f.）C.Presl ex Kunth　種子　ミズアオイ科

黄褐色で、上面観は円形、側面観は楕円形。表面には縦方向の低い隆起があり、隆起の間には横方向の線が密に入る。長さ1.1㎜、幅0.6㎜。

（13）スゲ属A　*Carex* sp. A　果実　カヤツリグサ科

暗褐色で、側面観は倒卵形、断面は三角形。先端と着点がやや突出する。長さ1.4㎜、幅0.9㎜。

（14）スゲ属B　*Carex* sp. B　果実　カヤツリグサ科

灰色で、上面観は三稜形、側面観はやや下端が窄まる倒卵形。三面はややくぼむ。表面には微細な網目状隆線がある。先端に円形の穴がある。長さ1.6㎜、幅0.9㎜。

（15）ヒメクグ　*Cyperus brevifolius*（Rottb.）Hassk. var. *leiolepis*（Franch. et Sav.）T.Koyama　果実　カヤツリグサ科

赤褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形。頂部に突起があり、表面に微細な網目状隆線がある。長さ1.3㎜、幅0.9㎜。

（16）カヤツリグサ属　*Cyperus* spp.　果実　カヤツリグサ科

黒色で、側面観は狭倒卵形、断面は三稜形。頂部と基部が突出し、表面には斑点状の細かい隆起がある。長さ1.3㎜、幅0.6㎜。

（17）メヒシバ属　*Digitaria* spp.　有ふ果　イネ科

赤褐色で、披針形。先が尖り、縦方向に細かい顆粒状の模様がある。長さ2.9㎜、幅0.6㎜。

（18）ヒエ属A　*Echinochloa* sp. A　有ふ果　イネ科

赤褐色で、披針形。縦方向に細かい筋がある。内頴は膨らまず、外頴は中央部が最も膨らむ。那須（2017）に示された現生種の長幅比と比較すると、栽培型のヒエよりも野生植物のイヌビエの長幅比に近い。長さ2.2㎜、幅1.1㎜。

（19）ヒエ属B　*Echinochloa* sp. B　有ふ果　イネ科

赤褐色で、紡錘形。縦方向に細かい筋がある。内頴は膨らまず、外頴は中央部が最も膨らむ。那須（2017）に示された現生種の長幅比と比較すると、栽培型のヒエよりも野生植物のタイヌビエの長幅比に近い。残存長3.1㎜、幅2.0㎜。

（20）イネ　*Oryza sativa* L.　籾殻　イネ科

黄褐色で、本来の籾の形態は、上面観が楕円形で側面観が長楕円形。２条の稜があり、表面には四角形の網目状隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しく並ぶ。残存長3.6㎜、残存幅1.5㎜。

（21）エノコログサ属　*Setaria* spp.　有ふ果　イネ科

黄褐色。上面観は楕円形、側面観は長楕円形で、先端がやや突出する。アワよりも細長く、乳頭突起が畝状を呈する。長さ2.2㎜、幅1.3㎜。

（22）タガラシ　*Ranunculus sceleratus* L.　果実　キンポウゲ科

淡黄色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。両面中央はやや凹む。周囲は隆起し、稜を持つ。長さ1.1㎜、幅0.9㎜。

（23）ヒメビシ　*Trapa incisa* Siebold et Zucc.　果実　ヒシ科

赤褐色で、不整三角形。先端が尖った角が２方向にのびる。長さ9.6㎜、幅7.9㎜。

（24）ヒシ属　*Trapa* spp.　果実　ヒシ科

黄褐色。完形ならば不整三角形で、先端が尖った角が4方向にのびるが、残存していない。萼片が肥厚してできた腕の破片のみが産出した。残存長4.1㎜、残存幅5.0㎜。

（25）ミズ属　*Pilea* spp.　果実　イラクサ科

黄褐色で、上面観は扁平。側面観は倒卵形で、両端がやや尖る。種皮は柔らかく、表面は平滑であるが、光沢はない。長さ1.4㎜、幅1.0㎜。

（26）メロン仲間　*Cucumis* melo L.　種子　ウリ科

赤褐色で、上面観は扁平。側面観は完形ならば狭卵形で頂部が尖り、表面は平滑。藤下（1984）は、長さ6.0㎜以下の雑草メロン型、長さ6.1～8.0㎜のマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1㎜以上のモモルディカメロン型、と種子の大きさからおおむね３群に分けられるとしている。今回同定されたメロン仲間種子は、長さ8.2㎜、幅4.0㎜で、モモルディカメロン型であった。

（27）カタバミ属　*Oxalis* spp.　種子　カタバミ科

黒色で、上面観は扁平、側面観は広楕円状の卵形。下端は細くなり、尖る。両側面には10列程度の太い畝状の横皺が並び、光沢はない。長さ1.4㎜、幅1.0㎜。

（28）イヌタデ属A　*Persicaria* sp. A　果実　タデ科

黒色。上面観は扁平で両凸レンズ形、側面観は広卵形で、先端が尖る。表面は平滑で、やや光沢がある。長さ1.5㎜、幅1.0㎜。

（29）ナス　*Solanum melongena* L.　種子　ナス科

黄褐色で、上面観は長楕円形、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面には畝状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。残存長2.6㎜、幅2.5㎜。

（30）ナス属　*Solanum* spp.　種子　ナス科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には細かい畝状突起をもつ網目状隆線がある。長さ1.1㎜、幅1.5㎜。

（31）シソ属　*Perilla* spp.　果実　シソ科

赤褐色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。エゴマ以外のシソ属である。長さ1.2㎜、幅1.2㎜。

（32）タカサブロウ　*Eclipta thermalis* Bunge　果実　キク科

淡黄色で、頂部はやや切形になり、冠毛着点の隆起がある。腹面はやや扁平で、瘤状突起がある。両側はコルク質で、翼状になる。長さ2.6㎜、幅1.2㎜。

（33）チドメグサ属　*Hydrocotyle* spp.　果実　セリ科

黄褐色で、側面観は半円形、背腹面観は偏平である。背面と両側面の中央にそれぞれ１本の隆条がある。側面の隆条は、背面のカーブと同様にゆるやかな弧を描く。長さ1.1㎜、幅0.9㎜。

（34）コケムシ類　Bryozoa　休眠芽

黄褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。付着性休芽の表面には瘤と網目模様がみられ、浮環には網目模様のみがみられる。長さ1.1㎜、幅0.7㎜。

（４）考察

古代の池基底部の基盤層の41層表層と９世紀後半の池750埋土の上層（31層）と下層（32層）の堆積物からは、多量かつ多種類の大型植物遺体が得られた。

池基底部の41層表層では、木本植物の産出数が少なく、草本植物の産出数が多かった。抽水植物のヘラオモダカやオモダカ属、イボクサ、ミズアオイ、コナギ、浮葉植物のヒルムシロ属、湿地性のヒメクグやカワラスガナ、ヒエ属A、ヒメ属B、タガラシ、オオバコ属、湿生～抽水植物のカヤツリグサ属やテンツキ属、サンカクイ－フトイ、ホタルイ属、タカサブロウなどが得られた。乾いた草地や荒れ地、畑などに生育するメヒシバ属やエノコログサ属、キケマン属、キンポウゲ属、カタバミ属、サナエタデ－オオイヌタデ、アカザ属、スベリヒユ属、シソ属、チドメグサ属がしばしば得られている。また、水田作物のイネや畑作物のメロン仲間といった、一般的に縄文時代には栽

培が行われていなかった植物が産出している。41層表層が池構築時の地表付近であったとすれば、庭の池が建設されたときに、周囲には草地があったと推定される。

9世紀後半の池750の機能時の埋土の32層では、木本植物のヒノキやモミ、マツ属複維管束亜属が得られており、池の機能時には、周辺にこれらの針葉樹が生育していたと推定される。草本植物では、水田作物のイネ、畑作物のメロン仲間（モモルディカメロン型）やナスが得られた。池の岸にも生育する抽水植物のヘラオモダカやオモダカ属、イボクサ、ミズアオイ、コナギ、ミクリ属、湿地性のヒメクグ、カワラスガナ、ヒエ属A、タガラシ、アサザ属、ノミノフスマなどが産出しており、浮葉植物のヒルムシロ属やヒメビシ沈水植物のマツモやホッスモ、湿生～抽水植物のカヤツリグサ属、ミクリ属、テンツキ属、ホタルイ属なども産出した。さらに、湿地に生育するボントクタデ、タカサブロウなどを伴っていた。ほかに、乾いた草地や荒れ地、畑などに生育するメヒシバ属やエノコログサ属、キケマン属、キンポウゲ属、カタバミ属、エノキグサ属、スミレ属、サナエタデ－オオイヌタデ、ノミノフスマ、スベリヒユ属、シロネ属、ナス属、シソ属、チドメグサ属が得られている。上記の草本のうち、湿地を中心に生育する種類を含む湿地性の植物、湿生植物、浮葉植物、沈水植物、湿生～抽水植物は、池内と池の岸付近に生育していたとみられる。一方で、乾いた草地や荒れ地に生育する種類は、池の周囲の建物などが存在する乾いた場所に生育していたと考えられる。

池750埋土の放棄時の埋土の31層から産出した木本植物は、二次林を構成する落葉広葉樹が主体で、高木のクリやヒサカキ属、低木のヒメコウゾやイヌザンショウ、つる植物のブドウ属などがわずかずつ得られた。31層は池750放棄後の堆積層と考えられており、花粉分析では同層準でクリ属－シイノキ属－マテバシイ属が突出して産出している（花粉分析の項参照）。大型植物遺体でもクリ果実の破片が産出しているため、この時期には、池750のすぐそばにクリが生育していた可能性がある。

草本植物の組成は、32層とほぼ同様であった。水田作物のイネ、畑作物のメロン仲間が得られた。池の岸にも生育する抽水植物のオモダカ属やイボクサ、ミズアオイ、コナギ、湿地性のヒメクグ、カワラスガナ、ヒエ属A、ヒエ属B、タガラシ、ヒメビシ、アサザ属、ノミノフスマなどが産出しており、浮葉植物のジュンサイやヒルムシロ属、沈水植物のホッスモ、湿生～抽水植物のスゲ属Aやスゲ属B、カヤツリグサ属、ホタルイ属なども産出した。さらに、湿地に生育するボントクタデ、タカサブロウなどを伴っていた。また、比較的乾燥した場所にはエノコログサ属やキケマン属、カタバミ属、エノキグサ属、スミレ属、サナエタデ－オオイヌタデ、ノミノフスマ、シロネ属、ナス属、シソ属、チドメグサ属、セリなどが生育していたと考えられる。池の放棄時の埋土の31層では、浮葉植物のジュンサイやヒルムシロ属、ヒメビシ、沈水植物のホッスモのほか、多くの湿地植物が得られており、池が放棄された後も、これらの植物が生育できる停滞した水域があった可能性がある。

なお、同時期と考えられる池250の大型植物遺体分析結果（パリノ・サーヴェイ株式会社，2013）においても、今回の池750と同様に、草本植物が優勢であり、種類構成も大きな変化がなく、一般

的な池周辺の景観としては同様であったと考えられる。

大型植物遺体以外では、コケムシ類が３試料すべてから得られた。コケムシ類は水生固着動物（海産種および淡水産種）で、池などでも発生する。池の機能時の堆積物と考えられる池750埋土の32層の堆積時にはコケムシ類が豊富に存在した可能性がある。

（文責：バンダリ スダルシャン）

引用・参考文献

藤下典之（1984）出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法．渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学－総括報告書」：638-654，同朋舎出版．

広瀬雅人（2020）コケムシの多様な形と生き方．生物工学，98，5，270-273.

那須浩郎（2017）縄文時代にヒエは栽培化されたのか？SEEDS CONTACT，4，27-29.

パリノ・サーヴェイ株式会社（2013）自然科学分析．京都市埋蔵文化財研究所編「平安京右京三条一坊六・七町跡」：133-171，京都市埋蔵文化財研究所．

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

３．珪藻化石群集

（１）はじめに

珪藻は、10～500μｍほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉, 1988；安藤, 1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、堆積環境について知ることができる。

ここでは、平安京右京三条一坊六町跡の調査区から採取された堆積物試料中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

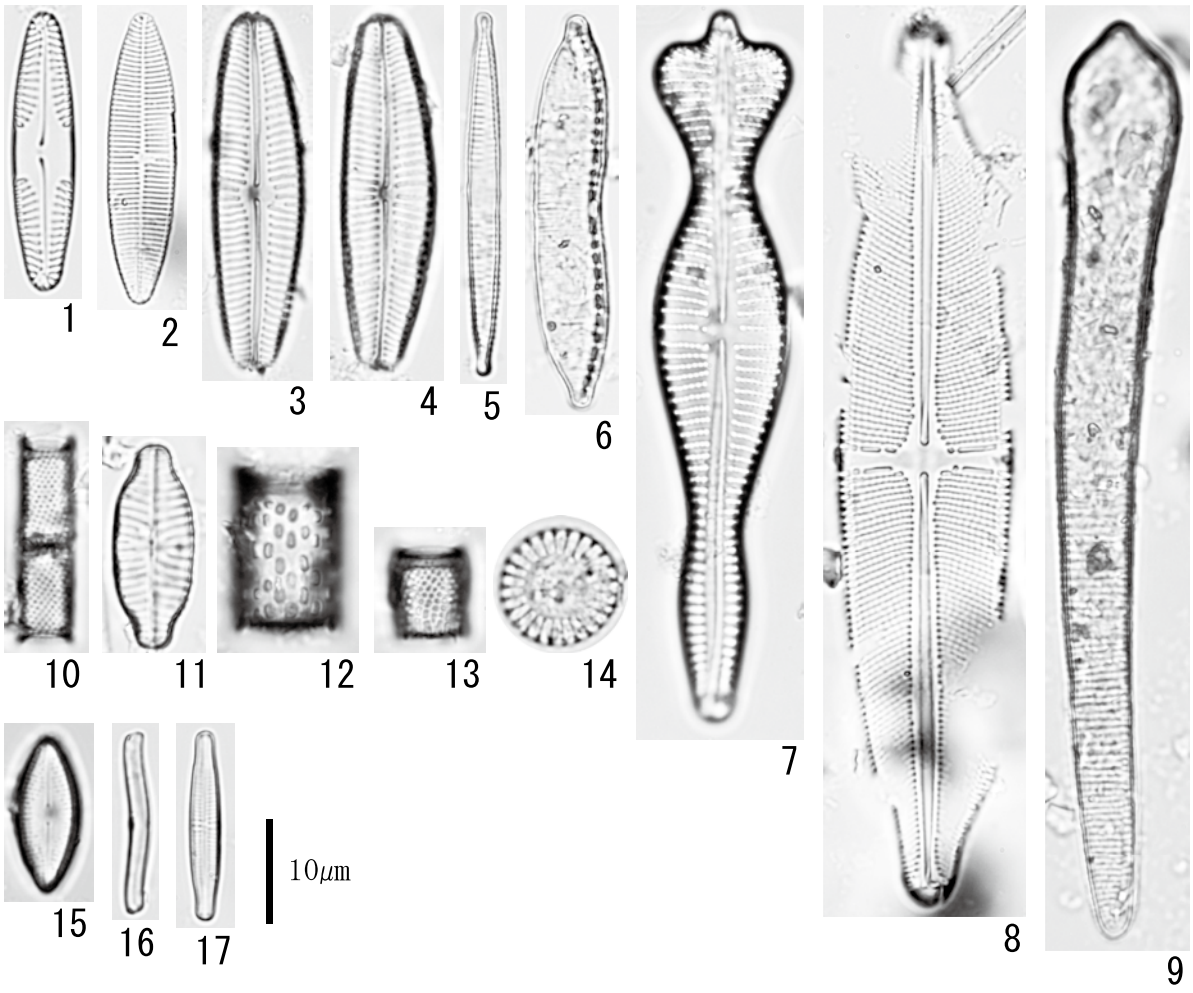
（２）試料と方法

試料は、２区・３区・４区から採取された計８試料である（花粉分析の項の表１を参照）。なお、同一試料を用いて花粉分析も行われている（詳細は、花粉分析の項参照）。各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。(1) 処理重量約0.5～1.0gを取り出し、秤量した後ビーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を12回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下600～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物１ｇ当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良好な珪藻化石を選び、写真を図10に載せた。

（３）珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定・不明種（?）として、海～汽水種は海～汽水不定・不明種（?）として、汽水種は汽水不定・不明種（?）として、淡水種は広布種（W）として、その他の種はまとめて不明種（?）として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（?）として扱った。以下に、安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。



1.*Pinnularia subcapitata* (3区No.2) 2.*Achnanthes hungarica* (3区No.2) 3.*Cymbella subaequalis* (2区No.2)
4.*Cymbella subaequalis* (2区No.3) 5.*Fragilaria capucina* (3区No.3) 6.*Hantzschia amphioxys* (3区No.1)
7.*Gomphonema acuminatum* (2区No.2) 8.*Stauroneis phoenicenteron* (4区No.1) 9.*Actinella brasiliensis* (3区No.2)
10.A*ulacoseira subarctica* (2区No.3) 11.*Navicula elginensis* (3区No.1) 12.*Aulacoseira crassipunctata* (4区No.1)
13.*Aulacoseira granulata* (3区No.1) 14.*Cyclotella meneghiniana* (3区No.2) 15.*Diadesmis confervacea* (3区No.1)
16.*Achnanthidium minutissimum* (3区No.4) 17.*Achnanthidium minutissimum* (3区No.4)

図10　堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

［中～下流性河川指標種群（K)］：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

［最下流性河川指標種群（L)］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

［湖沼浮遊生指標種群（M)］：水深が約1.5ｍ以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

［湖沼沼沢湿地指標種群（N)］：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種と

しても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

［沼沢湿地付着生指標種群（O)］：水深１m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

［高層湿原指標種群（P)］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

［陸域指標種群（Q)］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている)。

［陸生珪藻Ａ群（Qa)］：耐乾性の強い特定のグループである。

［陸生珪藻Ｂ群（Qb)］：Ａ群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

（４）結果

堆積物から検出された珪藻化石は、汽水種が１分類群１属１種、淡水種が69分類群31属49種２変種であった（表４)。これらの珪藻化石は、淡水域における８環境指標種群（K、L、M、N、O、P、Qa、Qb）に分類された（表４)。また、珪藻分布図を図11に示した。以下では、試料ごとに珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。

［２区（№１～３)］

・№３

堆積物１g中の珪藻殻数は2.9×105個、完形殻の出現率は51.9％である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群（O）が多く、湖沼浮遊生指標種群（M）と湖沼沼沢湿地指標種群（N）を伴う。なお、第一位優占種は*Cymbella*属、第二位優占種群は*Cymbella subaequalis*（O）であった。

環境指標種群の特徴から、湖沼を伴うか、もしくは一時期は湖沼となるような沼沢湿地環境が推定される。

・№２

堆積物１g中の珪藻殻数は3.8×105個、完形殻の出現率は52.5％である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群（O）が多く、湖沼浮遊生指標種群（M）と湖沼沼沢湿地指標種群（N）を伴う。なお、第一位優占種は*Cymbella subaequalis*（O)、第二位優占種群は*Aulacoseira*属であった。

環境指標種群の特徴から、湖沼を伴うか、もしくは一時期は湖沼となるような沼沢湿地環境が推定される。

・№１

堆積物１g中の珪藻殻数は9.0×103個、完形殻の出現率は72.7％である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群では、陸生珪藻Ａ群（Qa)、陸生珪藻Ｂ群(Qb)、湖沼浮遊生指標種群（M）が検出された。

珪藻化石が少ないため、群集組成に基づく堆積環境の把握は困難である。わずかに産出した珪藻

表４　堆積物中の珪藻化石産出表

※ 種群は、千葉・澤井(2014)による

No.		分類群	種群	2区 1	2区 2	2区 3	3区 1	3区 2	3区 3	3区 4	4区 1
1	*Nitzschia*	*levidensis*	?				1				
2	*Achnanthes*	*hungarica*	K				2	7	1		1
3	*A.*	spp.	?					14	17	13	
4	*Achnanthidium*	*minutissimum*	Qb	1			2	13	47	77	
5	*Actinella*	*brasiliensis*	O					2			
6	*Amphora*	*montana*	Qa			1	1		5	1	
7	*A.*	spp.	?		6	3	11	1	2		1
8	*Aulacoseira*	*canadensis*	W	1							
9	*A.*	*crassipunctata*	W				3	7	1		6
10	*A.*	*granulata*	M				2	1	1		
11	*A.*	*italica*	M		17			13	10	3	8
12	*A.*	*subarctica*	M	1		23	2	1			
13	*A.*	*valida*	M		10	5		5	2		
14	*A.*	spp.	?		32	17	5	2	1		
15	*Caloneis*	*aerophila*	Qa						1		
16	*C.*	spp.	?				7			2	
17	*Cyclotella*	*meneghiniana*	L					2			
18	*Cymbella*	*aspera*	O			3					1
19	*C.*	*gracilis*	W			7		2	3		
20	*C.*	*mesiana*	W			4	8		1	1	
21	*C.*	*naviculiformis*	W			1	5		2	2	11
22	*C.*	*subaequalis*	O		61	30					3
23	*C.*	*tumida*	W				1	1		3	
24	*C.*	*turgidula*	K						1		
25	*C.*	spp.	?		14	46	13	1	8	3	11
26	*Cymbopleura*	*apiculata*	W			2	1				
27	*Diadesmis*	*confervacea*	Qb				12	8			1
28	*D.*	*contenta*	Qa					1			
29	*Diatoma*	spp.	?				1				
30	*Diploneis*	spp.	?				9	1	1		
31	*Eunotia*	*pectinalis*	O			1					
32	*E.*	*pectinalis* var. *minor*	O			5		3	1	1	20
33	*E.*	*serra*	P			1	2				
34	*E.*	spp.	?	4	10	8	8	8	8	3	29
35	*Fragilaria*	*capucina*	N					3	2		2
36	*F.*	*exigua*	N				1				7
37	*F.*	*vaucheriae*	K							1	
38	*F.*	spp.	?	1	1		2	3	4	2	4
39	*Frustulia*	*rhomboides*	P					1			
40	*Gomphonema*	*acuminatum*	O		13	5	2	2	4	6	7
41	*G.*	*gracile*	O				1	1		1	2
42	*G.*	*truncatum*	W					4			
43	*G.*	spp.	?		5	2	30	13	19	30	34
44	*Gyrosigma*	spp.	?							1	
45	*Hantzschia*	*amphioxys*	Qa				5	2	2	1	
46	*Luticola*	*mutica*	Qa	2	1		2	1	3	2	1
47	*Navicula*	*americana*	W				1	2	1		
48	*N.*	*elginensis*	O				13			1	2
49	*N.*	*laevissima*	W				2	2			
50	*N.*	spp.	?		5	3	6	24	27	25	3
51	*Neidium*	spp.	?				2	2	1		
52	*Nitzschia*	spp.	?		1	1	3	13	4	11	
53	*Pinnularia*	*acrosphaeria*	O				2	2		1	1
54	*P.*	*borealis*	Qa				1				
55	*P.*	*gibba*	O				5	1	3		9
56	*P.*	*subcapitata*	Qb				4	5		1	
57	*P.*	*subcapitata* var. *elongata*	P							3	
58	*P.*	*viridis*	O								
59	*P.*	spp.	?		1	5	16	5	6	4	14
60	*Planothidium*	*lanceolatum*	K					2			
61	*Sellaphora*	*pupula*	W				2	8	3		

				2区			3区				4区
No.		分類群	種群	1	2	3	1	2	3	4	1
62	*Stauroneis*	*phoenicenteron*	O			2	4	1		1	11
63	*S.*	spp.	?				2	1			2
64	*Staurosira*	*construens*	N		8	1		1			1
65	*Staurosirella*	*pinnata*	N		16	22	2	2			8
66	*Surirella*	spp.	?					2	2		
67	*Synedra*	*ulna*	W			1					2
68	*S.*	spp.	?					1			
69	*Tabellaria*	*fenestrata*	O			2					3
70	*T.*	*flocculosa*	W			4			1		13
71		Unknown	?	1	1	3	5	7	7	4	3
		汽水不定・不明種	?				1				
		中～下流性河川	K				2	9	2	1	1
		最下流性河川	L					2			
		湖沼浮遊生	M	1	27	28	4	20	13	3	8
		湖沼沼沢湿地	N		24	23	3	6	2		18
		沼沢湿地付着生	O		74	48	27	12	8	11	59
		高層湿原	P			1	2	1		3	
		陸生Ａ群	Qa	2	1	1	9	4	11	4	1
		陸生Ｂ群	Qb	1			18	26	47	78	1
		広布種	W	1		19	23	26	12	6	32
		淡水不定・不明種	?	5	75	85	115	91	100	94	98
		その他不明種	?	1	1	3	5	7	7	4	3
		汽水種					1				
		淡水種		10	201	205	203	197	195	200	218
		合　計		11	202	208	209	204	202	204	221
		完形殻の出現率(%)		72.7	52.5	51.9	46.2	74.5	72.3	70.6	59.7
		堆積物1g中の殻数(個)		9.0E+03	3.8E+05	2.9E+05	8.2E+05	9.4E+06	6.2E+06	5.8E+06	2.2E+06

化石の環境指標種群の特徴からは、ジメジメとした陸域を伴う基本的に乾燥した陸域環境が推測される。

［３区（№１～４）］

・№４

堆積物１ｇ中の珪藻殻数は5.8×106個、完形殻の出現率は70.6％である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に多い。環境指標種群では、陸生珪藻Ｂ群（Qb）が多く、沼沢湿地付着生指標種群（O）を伴い、陸生珪藻Ａ群（Qa）や湖沼浮遊生指標種群（M）などをわずかに伴う。なお、第一位優占種は*Achnanthidium minutissimum*、第二位優占種群は*Gomphonema*属であった。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域の環境が推定される。

・№３

堆積物１ｇ中の珪藻殻数は6.2×106個、完形殻の出現率は72.3％である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に多い。環境指標種群では、陸生珪藻Ｂ群（Qb）が多く、湖沼浮遊生指標種群（M）と陸生珪藻Ａ群（Qa）を伴い、沼沢湿地付着生指標種群（O）や中～下流性河川指標種群（K）などをわずかに伴う。なお、第一位優占種は*Achnanthidium minutissimum*、第二位優占種群は*Navicula*属であった。

環境指標種群の特徴から、沼沢湿地を伴うか、もしくは一時期の水位上昇により沼沢湿地へと変

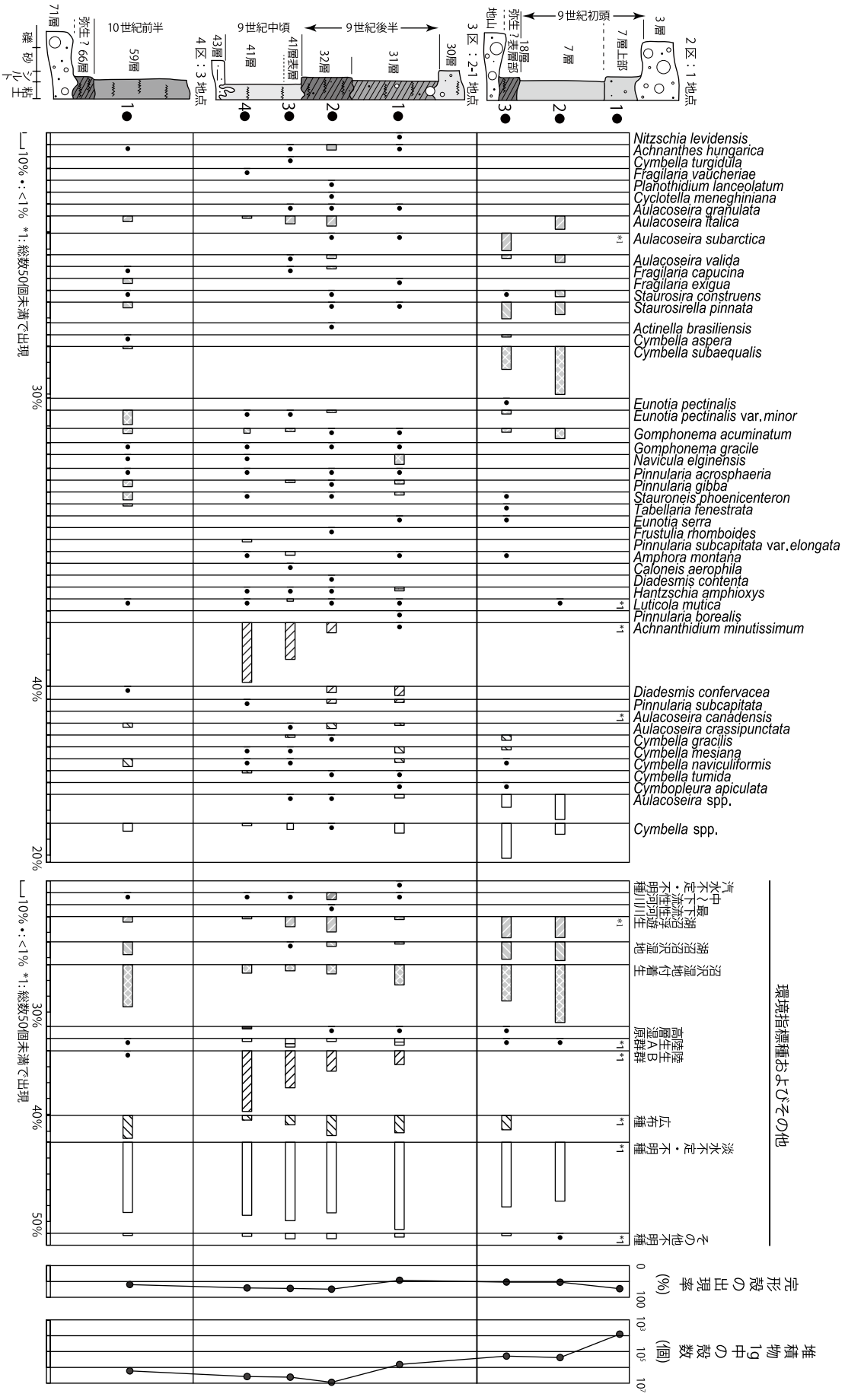


図11　堆積物中の珪藻化石分布図（主な分類群を表示）

化するようなジメジメとした陸域の環境が推定される。

・№２

堆積物１ｇ中の珪藻殻数は9.4×106個、完形殻の出現率は74.5％である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に多い。環境指標種群では、陸生珪藻Ｂ群（Qb）が多く、湖沼浮遊生指標種群（M）を伴い、沼沢湿地付着生指標種群（O）や中～下流性河川指標種群（K)、陸生珪藻Ａ群（Qa）などをわずかに伴う。なお、第一位優占種群は*Navicula*属、第二位優占種群は*Aulacoseira*属であった。

環境指標種群の特徴から、水の流れも生じるような、湖沼を伴うか、もしくは一時期は湖沼となるような沼沢湿地環境が推定される。

・№１

堆積物１ｇ中の珪藻殻数は8.2×105個、完形殻の出現率は46.2％である。おもに淡水種からなり、汽水種をわずかに伴う。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群（O）が多く、陸生珪藻Ｂ群（Qb）を伴い、陸生珪藻Ａ群（Qa）や湖沼浮遊生指標種群（M)、湖沼沼沢湿地指標種群（N)、中～下流性河川指標種群（K）などをわずかに伴う。なお、第一位優占種群は*Gomphonema*属、第二位優占種群は*Pinnularia*属であった。

環境指標種群の特徴から、沼沢湿地環境が推定される。

［４区（№１）］

・№１

堆積物１ｇ中の珪藻殻数は2.2×106個、完形殻の出現率は59.7％である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に多い。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群（O）が多く、湖沼沼沢湿地指標種群（N）を伴い、湖沼浮遊生指標種群（M）などをわずかに伴う。なお、第一位優占種群は*Gomphonema*属、第二位優占種群は*Eunotia*属であった。

環境指標種群の特徴から、湖沼を伴うか、もしくは一時期は湖沼となる時期もあるような沼沢湿地環境が推定される。

（５）考察

(1) ２区

弥生時代の可能性のある泥炭の18層（№３）と、９世紀初頭の腐植質泥の７層（№２）では、基本的に同様の珪藻化石群集を示す。18層と７層では、恒常的に水深のある「湖沼」に生育する湖沼浮遊指標種群と、長期間にわたり水位が地表面とほぼ等しいか、地表面よりも高い土地を指す「湿地」（坂上ほか編著，2010）にも生育する湖沼沼沢湿地指標種群が、他の調査区よりも多産する。

なお、湖成低地の地形については、鈴木（1998）の定義に従い、「沼」を「湖」より浅い水域で周囲に湿地や湿原が発達する水域、「池」を径約100ｍ以下の小さな「湖沼」をなす水域、「沼沢地」または「沼沢」を常に浅い水面に覆われる面積が「湿地」や「湿原」よりも相対的に大きく、周囲に湿地林を伴う抽水植物が繁茂する場所、「湿地」を常に湛水するか、洪水時に湛水しやすい場所

で、水面の占める面積が「沼沢地」より小さい場所とする。また、坂上ほか編著（2010）によれば、水域の持続性による分類の場合には、いずれも陸水および降水の双方で涵養されるものの、永久浅水体が「沼沢地」、一時的高水体が「湿地」となる。さらに、沼沢地については、降水もしくは地下水・表流水が供給源となって泥炭が堆積する湿原と異なり、表流水で涵養される割合が相対的に高く、さらに底質に無機質（鉱物質）土壌が堆積するとされる（坂上ほか編著，2010）。「沼沢地」の植生としては、草本である。また、今回の報告で使用している「陸域」という用語については、地下水位が地表付近に達しておらず、大気下に常に曝されるような状態、すなわち地表化している状態において堆積する、液相より個相と気相の割合が高い堆積物に対して使用する。

上記の湿地に関する定義にもとづき、分析層準の層相と珪藻・花粉分析の結果および発掘調査成果をふまえると、まず花粉分析の結果から、ハンノキ属が優占する泥炭の18層は沼沢湿原であったと判断される。腐植質泥の７層については、18層よりも沼沢湿地付着生指標種群が増加しており、分析地点の周囲に恒常的に浅い湛水域となる沼もしくは池を伴うか、もしくは分析地点において一時的に沼もしくは池が形成されるような湿地であったと考えられる。なお、第一位優占種のCymbella subaequalisの生態情報（渡辺・浅井，1992b；渡辺ほか，2005）から、18層と７層で形成されていた湛水域では、汚濁度の低い好清水性水域が形成されており、閉鎖的な水域ではなかったと推定される。

７層上部（№１）では、珪藻化石の保存状態が非常に不良となる。珪藻化石の保存状態が不良となる要因は様々あるものの、その一つとして、大気に常時曝されるような好気的（酸化的）状態で微化石の保存状態が相対的に不良となる傾向が指摘されている（松井，2003）。７層上部では、建物跡などの遺構が検出されており、この段階の地表は、人が居住できるような乾いた状態であったと考えられる。７層上部で珪藻化石の保存状態が不良となった要因の一つとしては、この層準において水位が低下し、地表付近が乾燥化して好気的土壌環境に変化した点があげられる。ただし、同一試料で実施した花粉分析では、花粉化石の保存状態が良好であった。

(2) ３区

珪藻化石群集は、人工的に作られた池750の基盤層の腐植質泥の41層の底部と表層（№４・№３）と、９世紀後半の池埋土の泥炭質泥の32層（№２）と31層（№１）の大きく二つに区分される。池の基盤層の41層底部と表層では、いずれの層準でも基本的にジメジメとした陸域であったと考えられる。ただし、池750の基底部の花粉、大型植物遺体の分析結果から古代の堆積層の可能性が高いと考えられる41層表層（№３）では、湖沼浮遊指標種群が微増傾向を示しており、分析地点の周囲に沼もしくは池を伴うか、あるいは分析地点において一時的に沼もしくは池が形成されるような湿地へと、上位に向かって湿潤化傾向にあったと推定される。

池750の埋土については、基盤層で優占していた陸生珪藻Ｂ群が上位に向かって減少する。池機能時の堆積層の可能性がある32層では、依然として陸生珪藻Ｂ類が多産するものの、直下の基盤層の41層表層に比べ、湖沼浮遊指標種群に湖沼沼沢湿地指標種群と沼沢湿地付着生指標種群および流水域を好む中～下流性河川指標種群の産出が目立つようになる。

珪藻化石群集と発掘調査成果にもとづくと、池750は閉鎖的ではなく、水の流れが生じるような池水の循環が良好な浅い湛水域が存在していたと考えられる。池750の放置期の堆積層の可能性がある31層では、湖沼浮遊指標種群と湖沼沼沢湿地指標種群および中～下流性河川指標種群が減少して、湿地を特徴づける沼沢湿地付着生指標種群が増加する。層相をふまえると、埋没が進行した31層段階の池750では、水位が低下して池内の水域が縮小し、降水や周囲から流入する地表水によって涵養され、過湿ないし多湿の地表環境となる湿地が形成されたと考えられる。ただし、同一試料の種実分析結果では、浮葉植物や沈水植物の産出が目立っており、これらの植物が生育可能な停滞した水域が存在したと判断される。分析地点が周囲よりも池の深度が深かった場所であり、種実分析結果は、このような遺構の状態も影響している可能性がある。珪藻分析と種実分析結果および堆積状況をふまえると、31層段階には、池が泥炭質の堆積物で埋没が進行しており、水域が依然として存在していたものの、相対的に高い場所を中心にして、機能時よりも水域の面積が縮小傾向および水位の低下傾向にあったと推察される。

なお、隣接する調査区で実施された同じ時期の池250の埋土の珪藻分析結果では、流水不定・不明種と沼沢湿地付着生種となる止水生種が優占しており（パリノ・サーヴェイ株式会社，2013)、今回の調査区の池750と、ほぼ同様の堆積環境変遷と水文環境であったとみられる。

(3) ４区

10世紀前半の腐植質泥層の59層では、湖沼沼沢湿地指標種群を伴い、沼沢湿地付着生指標種群が多産しており、基本的に湿地の堆積環境であったとみられるが、分析地点の周囲に沼もしくは池を伴うか、あるいは分析地点において沼もしくは池が一時的に形成されていた可能性もある。

(4) 小結

２区の７層と４区の59層は、調査区内において側方へ連続する古代の湿地の堆積層である。10世紀前半の４区の59層は、９世紀初頭の２区の７層に比べ、湖沼沼沢湿地指標種群と沼沢湿地付着生指標種群の割合が相対的に低い。珪藻分析結果から、今回の調査区では、古代に形成された湿地のうち、10世紀前半の４区59層に比べ、９世紀初頭の２区７層の方が相対的に湿潤化の傾向が強く、さらに周辺において沼もしくは池の広がる面積が大きかったか、もしく分析地点において沼もしくは池が形成されていた期間が長かった可能性がある。

人工的な池750の埋土の珪藻化石群集は、上記のような古代の湿地堆積層とは様相が異なる。池埋土では、古代の湿地堆積層で産出しない、もしくは極わずかしか産出しない陸生珪藻Ｂ群が相対的に多産する。分析地点が池の岸付近に近いという発掘調査成果をふまえると、池750の分析地点の周囲には、完全に乾燥はせずジメジメと湿りがちではあるが、地表が基本的に大気下に曝されるような場所が広がっていたと考えられる。一方で、古代の湿地堆積層の分析地点の周辺には、大気下に常に曝されるような地表が存在していなかったと推定される。

以上から、今回の調査区では、古代の９世紀初頭と10世紀前半に、分析地点やその近傍で沼もしくは池が生じるような湿地をなし、泥層で埋積される時期が存在したとみられる。これらの泥層は、腐植質に富み、植物遺体の挟在も認められるため、水湿地性の草本なども生育する比較的安定

した湿地の堆積環境下で形成されたと解釈される。ただし、珪藻化石の保存状態が不良な２区７層上部では、湿地の水位が低下して、地表が乾燥化したと考えられる。地表乾燥化の要因については、現段階で不明である。

（文責：野口真利江・辻　康男）

引用・参考文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

千葉　崇・澤井裕紀（2014）環境指標種群の再検討と更新．Diatom，30，7-30.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20.

松井　章（2003）環境考古学の歴史と実践．松井章編「環境考古学マニュアル」6-16，同成社.

パリノ・サーヴェイ株式会社（2013）自然科学分析．京都市埋蔵文化財研究所編「平安京右京三条一坊六・七町跡」：133-171，京都市埋蔵文化財研究所.

坂上潤一・島村　聡・伊藤　治・石澤公明・中園幹生編著（2010）湿地環境と作物：環境と調和した作物生産をめざして．264p，養賢堂.

鈴木隆介（1998）建設技術者のための地形図読図入門　第2巻　低地．554p，古今書院.

渡辺仁治・浅井一視（1992a）高優占度珪藻による有機汚濁度の判定（1）．Achnanthes，Anomoeoneis，Aulacoseira，Melosiraを第1位種とする群集．Diatom，7，13-19.

渡辺仁治・浅井一視（1992b）高優占度珪藻による有機汚濁度の判定（2）．Caloneis，Cocconeis，Cyclotella，Cymbella，Diatoma，Eunotia，Fragilaria，Gomphoneis，Gomphonemaを第1位種とする群集．Diatom，7，21-27.

渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻　彰洋・伯耆晶子（2005）淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数DAIpo，pH耐性能．784p，内田老鶴圃.

付表１　墨書土器観察表

番号	器種	器形	地区	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	部位と特徴
墨1	須恵器	鉢	4区	土手状遺構827	－	(6.0)	11.0	体部外面に墨痕。
墨2	須恵器	不明	4区	土手状遺構827	－	(2.6)	－	体部外面に墨痕。
墨3	灰釉陶器	椀	1区	整地層5	17.1	(2.4)+(1.8)	6.9	底部外面に墨書、重ね書きか。 釉は底部内面にかかる。
墨4	土師器	椀	4区	整地層5	13.6	2.7	－	口縁外面に墨書「七条院」。 灯明皿。ほぼ完形。
墨5	灰釉陶器	皿	1区	整地層5	14.4	2.8	6.4	底部外面に墨書。 釉は外・内面にかかる。
墨6	灰釉陶器	皿or椀	1区	耕作土855	－	(1.8)	8.5	底部外面に墨書。 釉は外・内面にかかる。
墨7	須恵器	鉢か	1区	耕作土855	－	(3.9)	－	体部外面に墨書。
墨8	土師器	皿	1区	耕作土855	長(3.9)、幅(4.2)、厚0.4			底部外面に墨書。
墨9	須恵器	杯身	1区	耕作土855	－	(1.0)	－	底部外面に墨書。
墨10	土師器	椀	1区	耕作土855	12.7	3.3	－	底部外面に墨書「酒」。
墨11	緑釉陶器	椀	1区	耕作土855	－	(3.0)	6.4	底部外面に「□の」。 底部は無釉で糸切り跡が残る。
墨12	須恵器	杯身	1区	耕作土855	－	(1.3)	8.9	底部外面に墨書。
墨13	灰釉陶器	皿or椀	4区	耕作土855	－	(2.1)	6.9	底部外面に墨書。 底部は重ね焼きにより無釉。
墨14	灰釉陶器	皿or椀	4区	溝808	－	(1.5)	6.2	底部外面に墨書。
墨15	土師器	皿か	2区	湿地状堆積349	縦(7.3)、横(8.0)			底部内面に墨書。
墨16	土師器	椀か	2区	湿地状堆積349	縦(6.3)、横(6.0)			底部外面に墨書「酒」。
墨17	土師器	皿or椀	2区	柱穴254(建物2)	縦(3.8)、横(6.2)			底部外面に墨書。
墨18	須恵器	杯身	2区	表採	－	(2.2)	10.0	底部外面に墨書「天」。
墨19	須恵器	杯蓋	3区	整地層3	16.9	(1.1)	－	外面に墨書「福□」。 内面に墨痕、硯に転用されているか。
墨20	須恵器	杯身	2区	整地層2	－	(6.3)	15.0	底部外面に墨痕。
墨21	土師器	高杯	3区	池750 上層	15.2	(1.9)	－	底部外面に墨痕。文様か。
墨22	灰釉陶器	椀	3区	池750 洲浜	－	(2.1)	7.0	底部外面に墨書。 内面なめらか、硯に使用か。高台内に糸切り跡。

※（ ）は残存数値

付表２　土器観察表

番号	器種	器形	地区	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調	備考
1	土師器	椀	4区	土手状遺構41	13.4	(2.9)	−	20	外:7.5YR6/3にぶい褐色 内:5YR6/3にぶい橙色	
2	土師器	椀	4区	土手状遺構41	14.0	(3.4)	−	8	外:2.5YR5/4にぶい赤褐色 内:5YR6/4にぶい橙色	
3	土師器	椀	4区	土手状遺構41	13.8	(3.4)	−	7	5YR6/4にぶい橙色	
4	須恵器	杯	4区	土手状遺構41	−	(4.6)	10.7	高台21	外:10YR6/1褐灰色 内:10YR5/1褐灰色	
5	須恵器	杯	1区	土手状遺構41	−	(4.8)	11.0	高台40	N6/0灰色	
6	須恵器	杯	1区	土手状遺構41	−	(5.5)	11.5	高台32	外:N6/0灰色 内:N7/0灰白色	
7	須恵器	鉢	1区	土手状遺構41	27.6	10.8	9.4	口縁11 底部43	外:N6/0灰色 内:N7/1灰白色	
8	須恵器	甕	4区	土手状遺構41	(9.8)	(5.5)	−	24	N6/0灰色	
9	土師器	皿	4区	溝850	16.4	2.2	11.6	口径8	7.5YR5/4にぶい褐色	
10	土師器	皿	4区	溝850	19.2	2.6	10.0	口径33	7.5YR5/4にぶい褐色	
11	土師器	椀	4区	土手状遺構827	14.6	(2.0)	−	8	外:10YR6/2灰黄褐色 内:10YR6/3にぶい黄橙色	
12	緑釉陶器	椀か皿	4区	土手状遺構827	−	(1.4)	6.9	高台25	胎土:N7/0灰白色 釉:7.5Y灰オリーブ色	
13	土師器	皿	4区	湿地状堆積853	14.8	(2.0)	7.4	口縁15	外:10YR5/3にぶい黄褐色 内:10YR6/3にぶい黄橙色	
14	土師器	椀	4区	湿地状堆積853	14.9	(3.3)	7.5	口縁10	外:10YR5/2灰黄褐色 内:10YR6/2灰黄褐色	油煙付着。
15	土師器	杯	4区	湿地状堆積853	15.0	(2.0)	−	口縁7	10YR7/2にぶい黄橙色	
16	土師器	杯	4区	湿地状堆積853	15.4	(3.2)	−	口縁17	10YR7/2にぶい黄橙色	
17	土師器	高杯	4区	湿地状堆積853	−	(13.4)	−	−	外:10YR7/2にぶい黄橙色 内:7.5YR7/3にぶい橙色	
18	土師器	高杯	4区	湿地状堆積853	−	(13.8)	−	−	外:10YR7/2にぶい黄橙色 内:7.5YR7/4にぶい橙色	
19	土師器	甑	4区	湿地状堆積853	−	−	−	−	10YR7/2にぶい黄橙色	
20	須恵器	杯蓋	4区	湿地状堆積853	19.4	(0.8)	−	口径13	N6/0灰色	
21	須恵器	杯	1区	湿地状堆積853	17.9	5.4	11.5	高台24	N6/0灰色	
22	須恵器	杯	4区	湿地状堆積853	17.7	6.7	11.7	口縁44	N5/0灰色	
23	須恵器	杯	4区	湿地状堆積853	−	(2.0)	8.6	底径61	外:2.5Y7/1灰白色 内:10YR7/1灰白色	
24	須恵器	壷	4区	湿地状堆積853	−	(2.7)	5.3	底部100	外:N2/0黒色 内:2.5Y8/1灰白色	
25	緑釉陶器	皿	4区	湿地状堆積853	11.3	2.0	5.5	高台36	胎土:N8/0灰白色 釉外:10Y6/2オリーブ灰色 釉内:5GY5/1オリーブ灰色	
26	灰釉陶器	椀	4区	湿地状堆積853	−	(2.0)	6.5	高台29	N8/0灰白色	
27	土師器	皿	1区	整地層5	14.9	(1.3)	−	10	外:5YR6/4にぶい橙色 内:10YR7/3にぶい橙色	
28	土師器	椀	1区	整地層5	14.8	(1.8)	−	12	7.5YR7/3にぶい橙色	
29	土師器	杯	1区	整地層5	15.0	(1.8)	−	7	外:10YR7/2にぶい黄橙色 内:7.5YR7/2明褐灰色	
30	土師器	杯	1区	整地層5	16.0	(2.9)	−	12	外:7.5YR7/3にぶい橙色 内:7.5YR7/4にぶい橙色	
31	土師器	杯	1区	整地層5	16.0	(1.6)	−	9	10YR7/2にぶい黄橙色	
32	須恵器	壷	1区	整地層5	−	(4.6)	8.6	高台58	N5/0灰色	
33	須恵器	鉢	1区	整地層5	21.0	10.0	7.8	口縁40	N6/0灰色	
34	緑釉陶器	皿	1区	整地層5	−	(1.8)	5.8	底部100	N4/0灰色	
35	緑釉陶器	椀	1区	整地層5	−	(2.1)	6.3	高台100	胎土:10YR8/3浅黄橙色 釉:2.5GY4/1暗オリーブ灰色	
36	緑釉陶器	椀	1区	整地層5	−	(2.2)	6.6	高台57	胎土:10YR8/3浅黄橙色 釉:10Y5/2オリーブ灰色	
37	緑釉陶器	椀	1区	整地層5	−	(2.3)	7.7	高台68	胎土:7.5YR7/3にぶい橙色 釉外:7.5Y3/2オリーブ黒色 釉内:5Y3/1オリーブ黒色	

※（ ）は残存数値

番号	器種	器形	地区	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調	備考
38	緑釉陶器	椀	1区	整地層5	15.0	4.7	7.2	16	胎土:N6/0灰色 釉外:10Y4/2オリーブ灰色 釉内:10Y4/1灰色	
39	灰釉陶器	椀	4区	整地層5	10.6	3.9	6.0	高台52	2.5Y8/1灰白色	
40	土師器	椀	4区	溝125	−	(1.6)	−	−	外:10YR6/2灰黄褐色 内:10YR7/2にぶい黄橙色	
41	土師器	椀	4区	溝125	−	(1.8)	−	−	10YR7/2にぶい黄橙色	
42	土師器	椀	4区	溝125	12.2	(1.6)	−	9	10YR6/2灰黄褐色	
43	須恵器	壷	4区	溝125	10.5	(7.8)	−	口径58	外:N7/0灰白色 内:N6/0灰色	
44	緑釉陶器	椀	4区	溝125	−	(1.6)	8.0	高台28	胎土:10YR8/3浅黄橙色 釉:10Y4/2オリーブ灰色	
45	緑釉陶器	椀	4区	溝125	−	(3.1)	7.8	高台23	胎土:5YR5/6明赤褐色 釉:5GY3/1暗オリーブ灰色	
46	青磁	椀	4区	溝125	−	(3.6)	5.6	高台15	胎土:5Y8/1灰白色 釉:7.5Y6/2灰オリーブ色	輪花椀。
47	土師器	椀	4区	南築地854	−	(1.6)	−	口縁4	10YR7/1褐灰色	
48	土師器	椀	4区	南築地854	−	(1.0)	−	口縁6	10YR8/2灰白色	
49	緑釉陶器	椀	4区	南築地854	−	(1.2)	−	高台18	胎土:7.5YR7/4にぶい橙色 釉外:2.5Yオリーブ褐色 釉内:5Yオリーブ黒色	
50	土師器	皿	4区	北築地846	15.4	(1.5)	−	口縁10	外:10YR7/2にぶい黄橙色 内:10YR6/2灰黄褐色	
51	土師器	皿	4区	北築地846	11.5	1.8	−		外:10YR5/1褐灰色 内:10YR7/2にぶい黄橙色	
52	土師器	杯	4区	北築地846	14.0	(1.8)	−	口縁10	外:10YR6/2灰黄褐色 内:10YR7/2にぶい黄橙色	
53	緑釉陶器	椀	4区	北築地846	−	(1.9)	4.9	高台100	胎土:10YR8/3浅黄橙色 釉外:10Y3/2オリーブ黒色 釉内:10Y4/2オリーブ灰色	
54	緑釉陶器	水注	4区	北築地846	−	(10.0)	−	胴部33	胎土:10YR7/2にぶい黄橙色 釉:7.5Y4/1灰色	
55	土師器	皿	1区	溝100	14.0	(2.7)	−	口縁6	外:7.5YR8/3浅黄橙色 内:7.5YR7/4にぶい橙色	
56	土師器	皿	1区	溝100	16.0	(2.3)	−	口縁14	外:2.5Y7/1灰白色 内:10YR7/2にぶい黄橙色	
57	灰釉陶器	椀	1区	溝100	−	(2.3)	6.2	高台43	N6/0灰色	
58	土師器	皿	1区	耕作土855	8.9	(1.7)	3.2	口縁34	外:7.5YR6/3にぶい褐色 内:7.5YR7/3にぶい橙色	
59	土師器	皿	4区	耕作土855	9.7	1.8	5.6	口縁13	10YR7/2にぶい黄橙色	
60	土師器	皿	4区	耕作土855	9.2	1.6	4.0	口縁26	10YR7/2にぶい黄橙色	
61	土師器	皿	1区	耕作土855	9.8	2.0	4.0		外:10YR6/2灰黄褐色 内:10YR5/3にぶい黄褐色	
62	土師器	皿	4区	耕作土855	13.6	2.6	7.4	口縁93	外:10YR6/2灰黄褐色 内:10YR7/2にぶい黄橙色	
63	土師器	皿	4区	耕作土855	14.1	(2.5)	9.4	口縁23	外:7.5YR7/3にぶい橙色 内:7.5YR6/3にぶい褐色	
64	土師器	皿	1区	耕作土855	15.0	(2.8)	−	口縁29	外:7.5Y7/1灰色 内:5Y7/1灰白色	
65	灰釉陶器	椀	4区	耕作土855	−	(3.4)	6.4	高台15	10YR7/1灰白色	
66	白磁	椀	4区	耕作土855	−	(2.0)	4.5	高台71	素地外:10YR6/2灰黄褐色 釉外:5GY灰白色 釉内:10Y8/1灰白色	
67	青白磁	合子蓋	4区	耕作土855	2.0	1.1	受部径4.0	33	胎土:N8/0灰白色 釉:7.5GY7/1明緑灰色	
68	土師器	皿	2区	湿地状堆積349	17.8	2.5	−	17	10YR7/2にぶい黄橙色	油煙付着。
69	土師器	皿	2区	湿地状堆積349	19.0	1.9	−	17	10YR5/2灰黄褐色	
70	土師器	皿	2区	湿地状堆積349	18.8	(2.5)	−	17	10YR7/2にぶい黄橙色	
71	土師器	杯	2区	湿地状堆積349	15.8	(3.1)	−	12.5	10YR6/3にぶい黄橙色	
72	土師器	杯	2区	湿地状堆積349	17.0	4.1	−	12.5	7.5YR6/4にぶい橙色	

※( )は残存数値

番号	器種	器形	地区	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調	備考
73	土師器	高杯	2区	湿地状堆積349	−	(7.2)	−	脚部のみ	7.5YR6/4にぶい橙色	
74	土師器	甕	2区	湿地状堆積349	14.7	(4.4)	−	12.5	10YR8/2灰白色	ヘラ記号。
75	黒色土器	椀	2区	湿地状堆積349	23.2	5.5	−	33	N3/0暗灰色 10YR6/3にぶい黄橙色	
76	灰釉陶器	壷蓋	2区	湿地状堆積349	4.4	(1.4)	−	90	10YR7/1灰白色	
77	須恵器	壷蓋	2区	湿地状堆積349	12.4	(2.9)	−	50	N6/0灰色	猿投産。
78	須恵器	杯蓋	2区	湿地状堆積349	19.2	2.0	−	33	N6/0灰色	
79	須恵器	杯	2区	湿地状堆積349	13.8	(4.5)	−	12.5	10YR8/2灰白色	
80	須恵器	杯	2区	湿地状堆積349	10.7	4.1	7.3	60	N6/0灰色	
81	須恵器	杯	2区	湿地状堆積349	10.7	4.4	6.5	60	N6/0灰色	
82	須恵器	鉢	2区	湿地状堆積349	25.0	(10.1)	−	口縁17	N6/0灰色	
83	須恵器	甕	2区	湿地状堆積349	18.6	(5.7)	−	口縁20	N6/0灰色	
84	土師器	皿	2区	柱穴298(建物3)	16.8	(2.4)	−	20	10YR5/2灰黄褐色	油煙付着。
85	須恵器	蓋	2区	柱穴320(建物3)	21.8	(1.8)	−	8	N4/0灰色	
86	土師器	皿	2区	土器埋納遺構292	8.1	1.4	6.0	100	10YR7/2にぶい黄橙色	
87	土師器	皿	2区	土器埋納遺構292	8.2	1.7	6.3	口縁76	10YR7/2にぶい黄橙色	
88	土師器	皿	2区	土器埋納遺構292	8.2	1.8	6.4	口縁46	外:10YR7/3にぶい黄橙色 内:10YR7/2にぶい黄橙色	
89	土師器	皿	2区	土器埋納遺構292	8.4	1.6	3.8	77	10YR7/2にぶい黄橙色	
90	土師器	皿	2区	土器埋納遺構292	8.4	1.6	6.1	口縁69	7.5YR7/3にぶい橙色	
91	土師器	皿	2区	土器埋納遺構292	8.5	1.7	−	100	7.5YR7/3にぶい橙色	
92	土師器	皿	2区	土器埋納遺構292	8.5	1.7	−	口縁27	10YR7/2にぶい黄橙色	
93	土師器	皿	2区	土器埋納遺構292	8.6	1.4	6.8	口縁60	外:10YR7/2にぶい黄橙色 内:7.5YR7/3にぶい橙色	
94	土師器	皿	2区	土器埋納遺構292	8.6	1.8	7.0	100	外:10YR7/3にぶい黄橙色 内:10YR8/3浅黄橙色	
95	土師器	皿	2区	土器埋納遺構292	8.8	1.8	−	100	10YR7/2にぶい黄橙色	
96	土師器	皿	2区	整地層2	16.4	2.1	−	40	10YR7/2にぶい黄橙色	
97	土師器	皿	2区	整地層2	20.7	2.7	−	40	2.5Y7/2灰黄色	
98	土師器	皿	2区	整地層2	20.8	(2.1)	−	口縁12.5	10YR7/3にぶい黄橙色	
99	土師器	椀	2区	整地層2	13.9	(3.1)	−	口縁12.5	10YR7/3にぶい黄橙色	
100	土師器	椀	2区	整地層2	13.9	3.1	−	17	7.5YR7/4にぶい橙色	
101	土師器	椀	2区	整地層2	13.9	(3.1)	−	口縁17	7.5YR7/3にぶい橙色	
102	土師器	壷	2区	整地層2	8.3	7.3	6.2	90	7.5YR8/3浅黄橙色	
103	土師器	甕	2区	整地層2	16.2	(7.1)	−	口縁～肩60	7.5YR7/4にぶい橙色	
104	土師器	壷	2区	整地層2	16.2	(5.2)	−	口縁25	10YR7/3にぶい黄橙色	
105	土師器	甕	2区	整地層2	28.8	(10.4)	−	口縁～肩25	10YR7/3にぶい黄橙色	
106	土師器	甕	2区	整地層2	26.7	(14.3)	−	口縁～肩25	10YR7/3にぶい黄橙色	
107	黒色土器	甕	2区	整地層2	17.0	(4.7)	−	口縁12.5	N3/0暗灰色	
108	黒色土器	椀	2区	整地層2	13.5	(2.2)	−	口縁17	外:10YR8/2灰白色 内:N4/0灰色	
109	黒色土器	椀	2区	整地層2	17.6	(4.5)	−	口縁～体部10	外:N2/0黒色 内:N3/0暗灰色	
110	須恵器	杯蓋	2区	整地層2	14.5	1.6	−	51	外:N5/0灰色 内:N6/0灰色	
111	須恵器	杯蓋	2区	整地層2	16.4	1.9	−	口縁41	N7/0灰白色	
112	須恵器	皿	2区	整地層2	18.4	1.7	14.3	底部端13	外:10YR8/1灰白色 内:10YR7/1灰白色	
113	須恵器	杯	2区	整地層2	13.2	3.4	8.8	高台35 口縁6	N5/0灰色	
114	須恵器	杯	2区	整地層2	12.7	3.9	8.6	高台76 口縁12	N6/0灰色	
115	須恵器	杯	2区	整地層2	14.3	4.8	10.2	高台100 口縁32	N6/0灰色	

※( )は残存数値

番号	器種	器形	地区	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調	備考
116	須恵器	杯	2区	整地層2	12.3	(3.4)	8.6	底部26	10YR6/2灰黄褐色	
117	須恵器	壷	2区	整地層2	16.6	(4.8)	-	口縁60	N4/0灰色	
118	須恵器	壷	2区	整地層2	-	(7.3)	-	底部42	N7/0灰白色	
119	須恵器	壷	2区	整地層2	-	(9.7)	4.9	底部54	N6/0灰色	
120	須恵器	壷	2区	整地層2	6.4	18.6	4.5	口縁94	外:5B5/1青灰色 内:N7/0灰白色	
121	須恵器	鉢	2区	整地層2	32.5	(11.9)	16.9	口縁12	N6/0灰色	
122	緑釉陶器	皿	2区	整地層2	-	(0.9)	6.5	底部60	胎土:10YR8/2灰白色 釉:2.5Y7/2灰黄色	
123	灰釉陶器	壷蓋	2区	整地層2	5.6	1.7	-	90	10YR7/1灰白色	
124	土師器	皿	2区	整地層3	17.2	(2.4)	-	12.5	10YR8/2灰白色	
125	土師器	杯	2区	整地層3	16.8	(2.9)	-	8	7.5YR7/4にぶい橙色	
126	土師器	杯	2区	整地層3	17.4	(3.6)	-	12.5	10YR7/3にぶい黄橙色	
127	土師器	高杯	2区	整地層3	-	(7.0)	-		7.5YR7/4にぶい橙色	
128	須恵器	壷	3区	整地層3	-	(8.0)	3.8	50	5Y7/1灰白色	
129	須恵器	平瓶	2区	整地層3	-	(9.7)	8.4	66	胎土:N5/0灰色 釉:10Y6/2オリーブ灰色	
130	須恵器	双耳瓶	2区	整地層3	18.0	頸部(8.7) 体部(13.4)	-	20	N5/0灰色	
131	緑釉陶器	椀	2区	整地層3	-	(1.3)	3.8	底部100	胎土:2.5Y8/2灰白色 釉:2.5GY8/1灰白色	
132	緑釉陶器	椀	2区	整地層3	-	(2.6)	8.8	底部33	胎土:10YR7/3にぶい黄橙色 釉:10Y7/2灰白色	
133	緑釉陶器	椀	2区	整地層3	-	(1.9)	6.8	底部25	胎土:10YR7/3にぶい黄橙色 釉:7.5Y7/2灰白色	
134	緑釉陶器	椀	2区	整地層3	-	(1.6)	6.0	底部25	胎土:10YR8/3浅黄橙色 釉:7.5Y4/3暗オリーブ色	
135	緑釉陶器	椀	2区	整地層3	-	(2.0)	7.8	底部25	胎土:N8/0灰白色 釉:5Y7/3浅黄色	
136	土師器	皿	2区	柱穴269(建物1)	-	(2.1)	-	破片	10YR7/2にぶい黄橙色	
137	土師器	皿	2区	柱穴269(建物1)	-	(2.1)	-	破片	10YR7/3にぶい黄橙色	
138	土師器	杯蓋	2区	柱穴254(建物2)	27.2	(5.1)	-	8	5YR6/6橙色	
139	須恵器	杯	2区	柱穴254(建物2)	13.2	(3.9)	8.6	25	N6/0灰色	高台内墨痕。
140	土師器	椀	2区	柱穴204(柱列3)	12.8	(3.2)	-	17	10YR6/3にぶい黄橙色	
141	黒色土器	椀	2区	柱穴204(柱列3)	16.8	(3.7)	-	20	10YR8/2灰白色 N3/0暗灰色	
142	黒色土器	椀	2区	柱穴282(柱列3)	7.0	(1.9)	-	底部25	7.5YR8/3浅黄橙色 N3/0暗灰色	
143	青磁	椀	3区	土坑548	19.0	7.0	6.9	40	胎土:7.5YR7/2明褐灰色 釉:2.5Y6/4にぶい黄色	越州窯
144	須恵器	蓋	3区	溝599	19.4	(1.0)	-	口縁17	N3/0暗灰色	
145	灰釉陶器	椀	3区	溝599	18.7	(3.5)	-	口縁10	N7/0灰白色(自然釉:若草色)	
146	緑釉陶器	椀	3区	溝599	-	(1.5)	4.2	底部80	胎土:10YR7/3にぶい黄橙色 釉:7.5Y4/1灰色	
147	緑釉陶器	椀	3区	溝599	-	(3.4)	6.4	底部25	胎土:2.5Y8/2灰白色 釉:若草色	
148	土師器	皿	3区	湿地状堆積780	13.6	3.1	-	90	2.5Y7/2灰黄色	ほぼ完形。
149	土師器	皿	3区	湿地状堆積780	13.0	(2.4)	-	口縁12.5	2.5Y7/2灰黄色	
150	土師器	皿	3区	湿地状堆積780	14.0	(2.5)	-	口縁17	10YR7/2にぶい黄橙色	
151	土師器	椀	3区	湿地状堆積780	14.0	(2.9)	-	口縁25	2.5Y8/2灰白色	
152	土師器	高杯	3区	湿地状堆積780	-	(13.7)	-	脚柱100	2.5Y7/3浅黄色	
153	土師器	皿	3区	池750 洲浜	13.0	(1.9)	-	17	5Y7/1灰白色	
154	土師器	皿	3区	池750 洲浜	16.0	(2.1)	-	口縁17	2.5Y7/2灰黄色	
155	土師器	高杯	3区	池750 洲浜	-	(11.6)	-	脚柱部60	10YR7/2にぶい黄橙色	
156	土師器	高杯	3区	池750 洲浜	-	(9.3)	-	脚柱部50	10YR7/2にぶい黄橙色	
157	土師器	高杯	3区	池750 洲浜	-	(6.9)	-	脚柱25	2.5Y7/3浅黄色	

※( )は残存数値

番号	器種	器形	地区	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調	備考
158	土師器	高杯	3区	池750 洲浜	－	(7.2)	－	脚柱部40	7.5YR8/2灰白色	
159	須恵器	甕	3区	池750 洲浜	－	(16.8)	－	顎～胴部40	N3/0暗灰色	
160	土師器	皿	3区	池750 上層	－	(1.3)	－	小片	2.5Y7/2灰黄色	
161	土師器	杯	3区	池750 上層	－	2.5	－	小片	10YR7/2にぶい黄橙色	
162	土師器	皿	3区	池750 上層	15.8	(2.9)	－	口縁17	2.5Y7/1灰白色	
163	土師器	椀	3区	池750 上層	13.8	2.6	－	口縁12.5	2.5Y7/1灰白色	
164	土師器	杯	3区	池750 上層	15.0	2.5	－	60	10YR8/3浅黄橙色	
165	土師器	杯	3区	池750 上層	15.4	(2.9)	－	口縁8	2.5Y8/1灰白色	
166	土師器	椀	3区	池750 上層	18.6	(2.9)	－	口縁12.5	－	
167	土師器	皿	3区	池750 上層	15.3	(1.5)	－	口縁12.5	10YR7/2にぶい黄橙色	
168	土師器	皿	3区	池750 上層	14.3	(2.1)	－	口縁12.5	5Y8/1灰白色	
169	土師器	皿	3区	池750 上層	13.7	(2.7)	－	口縁12.5	10YR8/1灰白色	
170	土師器	杯	3区	池750 上層	19.8	(3.5)	－	口縁8	10YR7/2にぶい黄橙色	
171	土師器	高杯	3区	池750 上層	－	(7.2)	－	脚柱部25	10YR7/2にぶい黄橙色	
172	土師器	高杯	3区	池750 上層	－	(11.3)	－	脚柱50	10YR7/2にぶい黄橙色	
173	須恵器	壷	3区	池750 上層	－	(6.5)	4.2	底部60	5Y8/1灰白色	
174	緑釉陶器	皿	3区	池750 上層	12.0	2.3	6.4	60	胎土:2.5Y8/1灰白色 釉:2.5GY3/1暗オリーブ灰色	
175	土師器	皿	3区	池350 構築土	10.6	(0.9)	－	12.5	10YR7/2にぶい黄橙色	
176	土師器	皿	3区	池350 構築土	14.0	(2.7)	－	25	10YR7/2にぶい黄橙色	
177	土師器	皿	3区	池350 構築土	12.4	(2.5)	－	12.5	2.5Y8/1灰白色	
178	須恵器	壷	3区	池350 構築土	－	(3.2)	4.6	底部75	10YR7/2にぶい黄橙色	
179	灰釉陶器	椀	3区	池350 構築土	15.8	(3.8)	－	17	2.5Y8/1灰白色	
180	土師器	皿	3区	池350 礫敷	9.2	1.5	－	25	10YR7/3にぶい黄橙色	
181	青磁	椀	3区	池350 礫敷	－	(1.8)	5.3	底部50	胎土:5Y8/0灰白色 釉:7.5Y5/3灰オリーブ色	同安窯系
182	土師器	皿	3区	池350 埋土	9.2	(1.6)	－	20	10YR7/2にぶい黄橙色	
183	土師器	皿	3区	池350 埋土	9.2	2.1	－	12.5	10YR6/2灰黄褐色	
184	土師器	皿	3区	池350 埋土	13.8	(2.1)	－	12.5	10YR7/2にぶい黄橙色	
185	弥生土器	器台	1区	流路133	22.8	(1.6)	－	10	外:10YR6/2灰黄褐色 内:10YR6/3にぶい黄橙色	
186	須恵器	杯	1区	流路133	8.8	(1.8)	－	5	外:10YR8/1灰白色 内:N8/0灰白色	
187	須恵器	杯	1区	流路133	10.1	(2.8)	－	立上り10	外:5Y6/1灰色 内:2.5Y7/2灰黄色	
188	弥生土器	壷	4区	腐植土 (4区東壁66層)	－	(5.2)	8.4	43	外:5YR7/6橙色 内7.5YR7/4にぶい橙色	
189	弥生土器	壷	4区	腐植土 (4区東壁66層)	－	(5.3)	4.5	底部100	外:10YR7/2にぶい黄橙色 内:10YR6/2灰黄褐色	
190	弥生土器	有孔鉢	4区	腐植土 (4区東壁68層)	－	(4.6)	(3.0)	底部100	外:10YR8/3浅黄橙色 内:10YR7/3にぶい黄橙色	
191	弥生土器	壷	4区	腐植土 (4区東壁68層)	－	(11.1)	3.5	底部100	外:10YR7/3にぶい黄橙色 内:10YR6/2灰黄褐色	
192	弥生土器	壷	2区	湿地状堆積349	－	(3.8)	－	－	外:10YR8/2灰白色 内:10YR8/1灰白色	
193	土師器	皿	1区	溝98	12.2	(2.2)	8.0	58	10YR7/2にぶい黄橙色	
194	陶器	椀	1区	溝98	14.2	4.2	4.6	85	胎土:2.5Y7/1褐灰色 釉外:2.5Y6/2灰黄色 釉内:2.5Y5/2暗灰黄色	唐津
195	土師器	皿	2区	溝151	11.0	2.0	－	50	2.5Y7/2灰黄色	
196	土師器	皿	2区	溝151	11.4	2.4	－	90	7.5YR7/6橙色	油煙付着。
197	瓦質土器	火鉢	2区	溝151	－	12.0	－	小片	N3/0暗灰色	

※( )は残存数値

付表３　瓦観察表

番号	種類	文様	地区	出土遺構・層	表面の色調・胎土	特徴・備考
瓦1	軒丸瓦	重圏文	1区	溝100	N3/0暗灰色。 緻密、砂を少量含む。	難波宮6020式。側面上半凸面部は縦ヘラケズリ調整。
瓦2	軒丸瓦	蓮華文	4区	溝100	N3/0暗灰色。密、砂含む。やや軟質。	産地不明。冷泉院出土軒丸瓦の「近」銘刻印瓦と同系か。瓦当裏面ナデ調整は荒い。側面上半は縦ヘラケズリ、下半は横ナデ調整。
瓦3	軒丸瓦	蓮華文	1区	耕作土855	5Y7/1灰白色。密、砂含む。軟質。	栗栖野窯産。瓦当裏面に布目がみられる。摩滅する。
瓦4	軒丸瓦	蓮華文	4区	耕作土855	N3/0暗灰色。密、砂含む。	栗栖野窯産。瓦当裏面・丸瓦凹面に布目がみられる。 側面上半凸面は縦ヘラケズリの後ナデ調整。 笵傷多い。瓦3と同文か。
瓦5	軒丸瓦	蓮華文	4区	耕作土855	10YR7/1灰白色。 緻密。赤色礫を少量含む。	森ヶ東窯産。内区に「下」の文字がみられる。 瓦当裏面は粗いナデ調整。
瓦6	軒丸瓦	蓮華文	1区	耕作土855	N3/0暗灰色。密、砂含む。	栗栖野窯産。瓦当裏面中央がやや窪み、布目が残る。
瓦7	軒丸瓦	蓮華文	1区	耕作土855	N6/0灰色。密、砂含む。やや軟質。	栗栖野窯産。側面上半凸面部は横ヘラケズリ調整。
瓦8	軒丸瓦	蓮華文	4区	耕作土855	N4/0灰色。密、砂を含む。軟質。	産地不明。摩滅激しく調整不明瞭。瓦当裏面荒いナデ調整か。側面下半はナデ調整。
瓦9	軒平瓦	重廓文	1区	耕作土855	N3/0暗灰色。緻密、赤色礫を含む。	難波宮6572式。直線顎。顎面は縦ヘラケズリ。平瓦部は一部縄叩きの痕跡を残すものの、縦ヘラケズリで叩きを消す。凹面はナデ調整。一部布目が残る。
瓦10	軒平瓦	均整唐草文	1区	耕作土855	N3/0暗灰色。緻密。砂少量含む。	平城宮6664式。曲線顎。幅約2.5㎝の顎面をもつ。 顎部は横ナデ調整。凹面には布目が残り、文様面端部上面・側面はヘラケズリ調整。
瓦11	軒平瓦	均整唐草文	4区	耕作土855	5Y7/1灰白色。緻密、砂少量含む。	平城宮6664D式。段顎。顎部・文様端部上面は横ヘラケズリ。側面は縦ヘラケズリにて面取りする。平瓦部には叩きの痕跡を残す。凹面は横ヘラケズリを施すが一部布目が残る。
瓦12	軒平瓦	均整唐草文	1区	重機掘削	N4/0灰色、2.5Y7/3浅黄色。 密、砂を含む。やや軟質。	平城宮6689A式。段顎。顎面・凹面は横ナデ調整。 文様面摩滅する。
瓦13	軒平瓦	均整唐草文	1区	耕作土855	N5/0灰色。緻密。	平城宮6663C式。曲線顎。顎部はヘラケズリにより狭い平坦面を成形する。凹面は横ヘラケズリ調整。
瓦14	軒平瓦	均整唐草文	1区	耕作土855	N4/0灰色。緻密。	平城宮6663式。曲線顎か。摩滅激しい。顎部は縦ヘラケズリ後ナデ調整。平瓦部には叩きの痕跡を残す。 凹面は横ヘラケズリ調整か。
瓦15	軒平瓦	均整唐草文	4区	土取土坑813	10YR7/2にぶい黄橙色。 緻密。やや軟質。	平城宮6710A式。瓦17の中心飾り部分。文様面のみ残存。
瓦16	軒平瓦	均整唐草文	4区	溝100	N5/0灰色。緻密、砂少量含む。	平城宮6710A式。直線顎。顎部から平瓦部へ縦ヘラケズリ調整。凹面は文様面端面上部から約11㎝までは横ヘラケズリ調整し、端部は縦ヘラケズリ調整を施す。布目を残す。側面は縦ヘラケズリ調整。
瓦17	軒平瓦	均整唐草文	4区	耕作土855	N4/0灰色。緻密、砂含む。	型式不明。段顎。顎部・文様端部上面は横ヘラケズリ。側面は縦ヘラケズリにて面取りする。凹面は粗い横ヘラケズリを施すが一部布目が残る。
瓦18	軒平瓦	均整唐草文	1区	耕作土855	N3/0暗灰色。密、砂、石含む。	西賀茂窯産NS203式。曲線顎。幅約3.5㎝の顎面をもつ。顎部は横ヘラケズリ後横ナデ調整。平瓦部は縦ナデ調整。文様面端部上面は横ヘラケズリ、側面は縦ヘラケズリ調整。凹面には一部布目が残る。
瓦19	軒平瓦	均整唐草文	4区	耕作土855	N3/0暗灰色。密、砂、石含む。	西賀茂窯産NS207式。曲線顎。顎面欠損。平瓦部は縦ナデ調整。文様面端部上面は横ヘラケズリ、側面は縦ヘラケズリ調整。凹面には一部布目が残る。
瓦20	軒平瓦	均整唐草文	4区	耕作土855	N7/0灰白色。緻密。砂含む。	産地不明。曲線顎。幅約3㎝の顎面をもつ。凸面は縦ヘラケズリ調整。文様面端部上面は横ヘラケズリ、側面は縦ヘラケズリ調整。凹面には一部布目が残る。やや大型。同文瓦が右京職推定地で多く出土する。
瓦21	軒平瓦	均整唐草文	1区	耕作土855	N6/0灰色。緻密。	瓦20に同じ。
瓦22	鬼瓦		1区	耕作土855	7.5YR7/1明褐灰色。密。砂多量混。	外区珠文部のみ残存。摩滅著しい。

番号	種類	文様	地区	出土遺構・層	表面の色調・胎土	特徴・備考
瓦23	軒丸瓦	蓮華文	2区	柱穴320(建物3)	N3/0暗灰色。緻密。	平城宮6316式。周縁は斜縁。瓦当裏面はナデ調整。側面上半は縦ヘラケズリ調整。
瓦24	軒丸瓦	蓮華文	2区	整地層3	N4/0灰色。密、砂多量混。	平城宮6235式か。瓦当裏面上端より3㎝程下がったところに丸瓦を接合。摩滅著しい。
瓦25	軒丸瓦	蓮華文	3区	池350 構築土	N4/0灰色。緻密。砂少量含む。	小野窯産。珠文の部分に「○」の刻印がみられる。瓦当裏面は接合部補足粘土が剥離のため調整不明。側面上半は縦ヘラケズリ調整。
瓦26	軒丸瓦	文様不明	3区	池350 構築土	N4/0灰色。緻密。	産地不明。文様不明。外区珠文と圏線の一部が残存。瓦当裏面はナデ調整する。9世紀中頃のものか。
瓦27	軒丸瓦	蓮華文	2区	整地層2	2.5Y7/1灰白色。緻密。やや軟質。	産地不明。瓦当面と丸瓦接合部の補足粘土を多く使う。瓦当裏面ナデ調整か。摩滅著しい。
瓦28	軒丸瓦	蓮華文	3区	池350 埋土	N4/0灰色。緻密。	向山瓦窯系か。NM032またはNM033の可能性がある。
瓦29	軒丸瓦	蓮華文	2区	整地層3	2.5Y7/2灰黄色。緻密。軟質。	産地不明。摩滅が著しく、文様も不明瞭。丸瓦は瓦当面裏面上端付近に接合する。
瓦30	軒平瓦	重廓文	2区	整地層2	N3/0暗灰色。緻密、砂を多く含む。	難波宮6530式。直線顎。顎面は縦ヘラケズリ。凹面は丁寧な横ヘラケズリとナデ調整。側面は縦ヘラケズリ。
瓦31	軒平瓦	重廓文	2区	湿地状堆積349	N5/0灰色、10YR7/6明黄褐色。緻密。やや軟質。	難波宮6574B式。直線顎。顎面は縦ヘラケズリ。凹面は摩滅し調整不明瞭。側面は縦ヘラケズリ。
瓦32	軒平瓦	均整唐草文	3区	整地層3	N4/0灰色。緻密、砂を含む。	平城宮6664式。段顎。顎部横ヘラケズリ調整。平瓦と顎部接合部を横ナデ調整する。平瓦凸面には叩き痕跡を残す。凹面はナデ調整し、文様面端部上面を横ケズリで面取りする。平瓦部凸面に朱が付着する。
瓦33	軒平瓦	均整唐草文	3区	整地層3	N3/0暗灰色。緻密、砂少量含む。	平城宮6664式か。文様面のみ残存。
瓦34	軒平瓦	均整唐草文	2区	整地層3	N5/0灰色。緻密。	平城宮6727A式。曲線顎。狭い顎面をもつ。顎部は横ナデ調整する。凸面は叩きの痕跡を残す。文様面端部上面横ヘラケズリし、凹面には布目が残る。
瓦35	軒平瓦	均整唐草文	2区	湿地状堆積349	2.5Y7/1灰白色。緻密。	平城宮6727B式。段顎。顎部横ヘラケズリ調整。平瓦と顎部接合部を横ナデ調整する。平瓦凸面には叩き痕跡を残す。凹面は横ケズリ調整。
瓦36	軒平瓦	均整唐草文	3区	池750 下層	N5/0灰色。緻密、砂少量含む。	平城宮6721C式。曲線顎か。顎部が欠損する。凸面・側面は縦ヘラケズリ調整。凹面は横ヘラケズリ調整。
瓦37	軒平瓦	均整唐草文	3区	柱穴693(建物4)	10YR7/3にぶい黄橙色。緻密、砂少量含む。	平城宮6721C式。曲線顎。幅約0.7㎝の顎面をもつ。顎部は横ヘラケズリ調整。
瓦38	軒平瓦	均整唐草文	2区	湿地状堆積349	2.5Y7/1灰白色。緻密。	平城宮式か。摩滅著しく不明。
瓦39	軒平瓦	均整唐草文	2区	整地層2	N4/0灰色。密、石を含む。軟質。	産地不明。曲線顎。幅約2㎝の顎面をもつ。顎面は横ヘラケズリ調整。平瓦部凹・凸面はヘラケズリ調整。中心に「松」の文字のある文様と考えらえるが、文様がつぶれ円形の文様にみえる。摩滅著しい。
瓦40	軒平瓦	均整唐草文	2区	整地層2	N4/0灰色。緻密。	大山崎窯産OY205b式。直線顎か。顎部欠損。平瓦部凸面は摩滅し調整不明。文様面端部上面横ヘラケズリし、凹面には布目が残る。
瓦41	軒平瓦	均整唐草文	2区	湿地状堆積349	N4/0灰色。緻密。	産地不明。直線顎。摩滅が著しく、調整不明瞭。凹・凸面はナデ調整か。側面はヘラケズリ調整。興福寺平Ⅲ C－2式に似るが異文。平安時代中期と想定される。
瓦42	軒平瓦	均整唐草文	2区	湿地状堆積349	10YR7/4にぶい黄橙色。緻密。軟質。	産地不明。曲線顎。幅約2㎝の顎面をもつ。顎部はヘラケズリ後ナデ調整。文様端部上面は横ヘラケズリ調整。平瓦部凹面には布目が残る。凸面は縦方向に叩いた後横方向に叩いている。側面縦ヘラケズリ。
瓦43	軒平瓦	均整唐草文	3区	集石778	2.5Y4/1黄灰色。密、砂を含む。	河上窯産。凹面には布目が残る。凸面は摩滅が著しく調整不明。側面は縦ヘラケズリ調整。
瓦44	軒平瓦	偏向唐草文	3区	池750 下層	N6/0灰色。密。小石を含む。	森ヶ東窯産。曲線顎。幅㎝の顎面をもつ。顎面は横ヘラケズリ。凸面は手で押さえて成形するため、凹凸がめだつ。凸面端部にヘラ記号がみられる。文様面端部上面はヘラケズリにより面取りする。凹面には布目が残る。側面は縦ヘラケズリし、端部を面取りする。
瓦45	軒平瓦	文様不明	2区	柱穴254(建物2)	2.5Y7/1灰白色。緻密。	産地不明。外区珠文残存。平瓦部凸面縦ヘラケズリ、凹面横ヘラケズリ調整。側面縦ヘラケズリ。
瓦46	丸瓦		3区	池350 構築土	N5/0灰色	
瓦47	丸瓦		3区	池350 構築土	N5/0灰色	

付表４　銭貨観察表

番号	種類	地区	出土遺構・層	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	特徴・備考
銭1	和同開珎	2区	整地層2	2.3	2.3	0.12	1.4	和同元年(708)初鋳
銭2	隆平永寶	1区	溝125	2.5	2.5	0.16	3.4	延暦十五年(796)初鋳
銭3	富寿神寶	1区	耕作土855	2.3	2.3	0.18	2.2	弘仁九年(818)初鋳
銭4	富寿神寶	3区	池350 構築土	2.3	2.3	0.17	3.0	弘仁九年(818)初鋳
銭5	富寿神寶	3区	池350 構築土	2.3	2.3	0.15	2.7	弘仁九年(818)初鋳
銭6	饒益神寶	1区	耕作土855	1.9	1.9	0.16	2.1	貞観元年(859)初鋳。裏面に「笵ずれ」。
銭7	饒益神寶	3区	池350 構築土	1.9	1.9	0.14	1.8	貞観元年(859)初鋳。裏面に「笵ずれ」。
銭8	延喜通寶	3区	池350	1.8	1.8	0.16	1.6	延喜七年(907)初鋳
銭9	元豊通寶	3区	土取土坑584	2.4	2.4	0.18	2.6	北宋、元豊元年(1078)

付表５　石製品観察表

番号	種類	地区	出土遺構・層	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	特徴・備考
石1	石帯(丸鞆)	2区	整地層2	3.8	3.0	0.7	16	潜り穴なし。未製品か。
石2	碁石	2区	整地層2	1.5	1.3	0.6	1	白石
石3	碁石	2区	整地層1	1.4	1.4	0.6	2	白石。完形。
石4	砥石	3区	中世耕作土	2.8	(2.5)	0.7	9	長方形か
石5	砥石	3区	中世耕作土	(6.0)	5.3	1.8	94	長方形。使用痕有り。
石6	砥石	1区	溝98	7.9	3.8	0.9	43	長方形。線刻あり。
石7	砥石	2区	湿地状堆積349	11.7	2.3	1.3	51	不定形。使用痕有り。
石8	石材	2区	湿地状堆積349	(25.1)	9.8	9.5	1000	七角形柱状。凝灰岩。
石9	石材	2区	整地層2	(22.6)	20.9	10.5	2000	直方体か。凝灰岩。二次被熱。
石10	五輪塔	4区	溝98	(13.3)	11.4	11.4	1000	空輪・風輪が一体。2カ所梵字「キャ・ラ」と彫られる。花崗岩。
石11	尖頭器	4区	溝100	6.7	1.75	0.95	9.5	ほぼ完形。サヌカイト。
石12	有舌尖頭器	3区	溝429	(7.0)	2.85	0.75	12.4	ほぼ完形。
石13	有舌尖頭器	3区	整地層3	7.5	2.7	0.8	13.7	完形。

※（ ）は残存数値

付表６　土製品観察表

番号	種類	地区	出土遺構・層	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	特徴・備考
硯1	硯(風字硯)	2区	整地層3	(5.0)	(2.5)	高(2.5)	－	土師器。縁と脚部を陸部に貼り付ける。
硯2	硯(風字硯)	2区	整地層2	(9.2)	(4.2)	高(3.9)	－	須恵器。墨痕が残る。縁部は粘土板折り曲げ。
硯3	硯(風字硯)	2区	溝156	(3.1)	(3.4)	高(2.8)	－	須恵器。表面と縁上部・外面に墨痕が残る。
硯4	硯(風字硯)	2区	整地層2	(9.3)	(12.5)	高4.0	－	灰釉陶器。裏面・脚全体に釉薬がかけられる。 縁部は粘土板折り曲げ。
硯5	硯(風字硯)	2区	溝151	(5.8)	(3.4)	高(1.3)	－	灰釉陶器。海部に花弁状の土手形成。裏面に釉薬がかけられる。
硯6	硯(風字硯)	2区	溝151	(4.8)	(9.0)	高(2.1)	－	灰釉陶器。脚は剥離。裏面に釉薬がかけられる。
硯7	硯(風字硯)	2区	整地層3	(3.8)	(4.1)	高(1.0)	－	灰釉陶器。表面には墨痕が残る。裏面に釉薬がかけられる。
硯8	硯(風字硯)	2区	整地層2	(6.7)	(5.7)	高(2.4)	－	灰釉陶器。表面には墨痕が残る。裏面に釉薬がかけられる。
硯9	硯(風字硯)	2区	整地層2	(5.5)	(3.2)	高(2.4)	－	灰釉陶器。表面には墨痕が残る。裏面に釉薬がかけられる。
硯10	硯(宝珠硯か)	1区	耕作土855	(6.4)	(6.8)	高(4.6)	－	灰釉陶器。
硯11	硯(円面硯)	3区	溝515	突帯径16.6、器高(3.5)			－	須恵器。脚部に幅約1.2cm程の透し孔が配置される。
硯12	硯(円面硯)	3区	池750 洲浜	突帯径25.7、器高(5.6)			－	須恵器。同一個体と考えられる硯が池750下層より1点出土している。
土1	土馬	2区	湿地状堆積349	(7.5)	(3.6)	高(3.2)	－	首から下の胴部と尻尾の一部が残存する。
土2	土馬	2区	柱穴204(柱列3)	3.3	1.5	高(3.3)	－	前足か。粘土継ぎ目痕跡みられる。面取りする。
土3	土馬	4区	耕作土855	(4.2)	(2.3)	高(4.1)	－	前足か。貼り付け部が剥離か。ナデ調整。
土4	土馬	2区	整地層2	(2.8)	(1.6)	高(2.7)	－	後足か。ナデ調整。
土5	土錘	2区	整地層3	3.1	0.6	0.5	0.6	小型品。完存する。
土6	土錘	2区	整地層3	2.6	0.6	0.5	0.5	小型品。完存する。
土7	土錘	3区	池350 構築土	3.7	1.0	1.0	2.5	小型品。ほぼ完存する。
土8	土錘	4区	耕作土855	3.4	1.4	1.3	5.1	小型品。ほぼ完存する。
土9	土錘	3区	池350 洲浜	(4.5)	1.6	1.4	10.0	小型品。両端がわずかに欠損する。摩滅する。
土10	土錘	2区	溝151	(2.3)	2.0	1.8	7.2	小型品。端部が広がる。片端欠損する。
土11	土錘	3区	池350	4.4	2.9	2.9	35.0	大型品。須恵器。片端をわずかに欠損する。
土12	土錘	3区	池350 構築土	5.5	3.2	3.0	48.0	大型品。ほぼ完形。胎土に赤色粒子を多く含む。
土13	土錘	3区	池750 洲浜	4.8	3.5	3.3	52.0	大型品。瓦質。完存する。表面摩滅。
土14	土錘	1区	整地層5	4.9	3.4	3.3	60.6	大型品。須恵器。完存する。両端をケズリにより成形する。
土15	土錘	3区	池750 下層	7.4	4.7	4.1	111.9	大型品。完存する。側面を溝状に窪ませる。最も重い。
土16	用途不明品	4区	湿地状堆積853	4.4	4.2	高1.3	－	橙色。外面はナデ調整。穿孔あり。

※（ ）は残存数値

付表７　木簡・木製品観察表

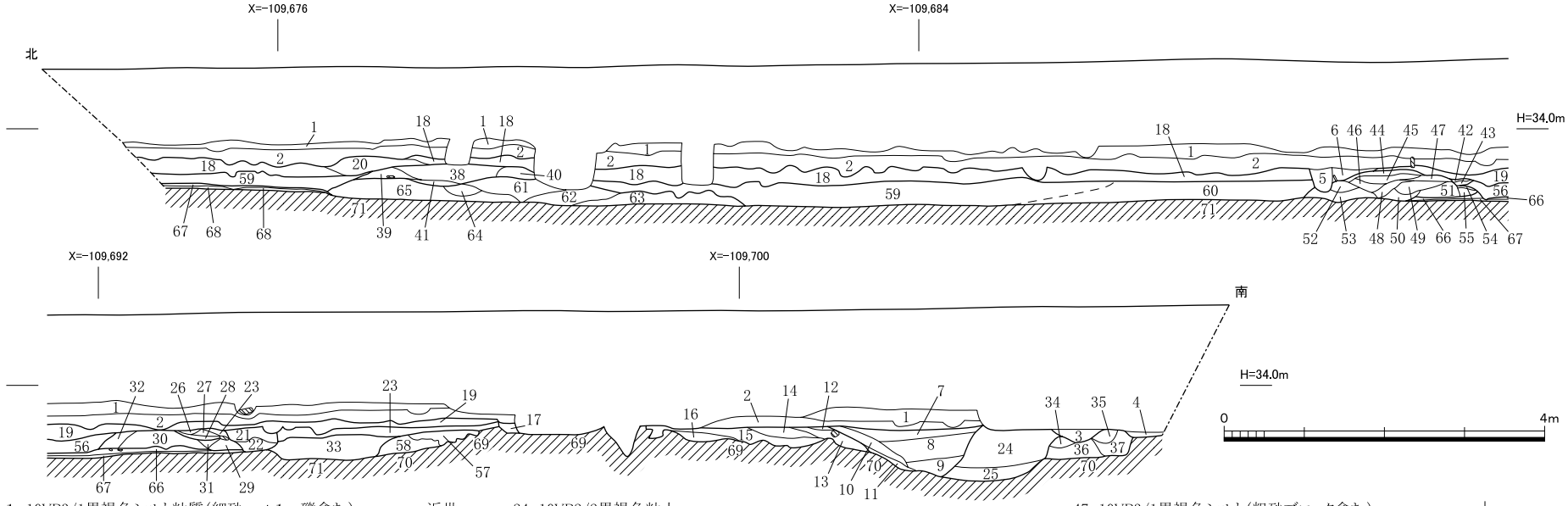
番号	種類	地区	出土遺構・層	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
木簡1	棒状製品	1区	土手状遺構41	(9.4)	2.8	1.4	先端を斜めに削る。先端に墨書「流流」。
木簡2	板状製品	2区	柱穴309(柱列5)	(8.1)と(4.1)	2.0	0.2	片面に墨書。
木簡3	板材	2区	溝151	(7.5)	2.1	0.5	片面に墨痕。
木1	ヘラ状製品	4区	湿地状堆積853	8.1	2.9	0.3	先端を削り込んで薄く加工する。
木2	ヘラ状製品	4区	湿地状堆積853	(11.4)	2.3	0.3	先端を刀形に加工する。下半は欠損。
木3	杓子形	4区	湿地状堆積853	(9.7)	3.0	0.5	先端を半円形に加工する。
木4	木釘	4区	湿地状堆積853	11.3	0.9	0.6	ほぼ完存する。
木5	棒状加工部材	4区	湿地状堆積853	14.7	2.9	1.0	両側面に切り込みがある。先端を面取りする。
木6	板材か	4区	湿地状堆積853	(10.6)	5.1	11.0	全面が著しく焼け、表面が炭化する。
木7	棒状製品	4区	湿地状堆積853	9.7	1.7	0.9	側面に切れ込みがある。先端を面取りする。
木8	棒状製品	4区	湿地状堆積853	(12.4)	1.3	1.0	棒の一端に切り込みをめぐらす。下半は欠損。
木9	棒状製品	4区	湿地状堆積853	(14.9)	1.7	1.2	棒の一端に切り込みをめぐらす。下半は欠損。
木10	曲物(底板)	4区	湿地状堆積853	10.4	(6.5)	0.7	2箇所目釘穴がある。
木11	曲物(底板)	4区	湿地状堆積853	9.6	5.8	4.0	2箇所目釘穴がある。1箇所に目釘が残る。
木12	棒状製品(杭)	4区	湿地状堆積853	26.8	2.5	1.8	先端を丁寧に削り込み、尖らせる。
木13	皿	4区	湿地状堆積853	17.4	6.7	1.6	高台は疑高台で外面が凹面をなす。
木14	木球	4区	湿地状堆積853	5.1	4.5	4.6	細かく面取りし、球体に仕上げる。
木15	角材か	4区	湿地状堆積853	8.9	8.6	4.1	加工途中または、木取り後か。
木16	漆器(皿か)	4区	土手状遺構41	6.4	4.8	0.6	器表に黒色の漆が残る。
木17	下駄	4区	土手状遺構41	17.6	8.9	2.0	台の上面に左足跡が残る。後歯は磨り減る。
木18	曲物(底板)	4区	土手状遺構827	12.4	(5.8)	1.1	外側が厚く加工されている。目釘穴などはない。
木19	下駄	4区	土手状遺構827	22.5	10.1	3.6	歯は外側に張り出す。台の上面に足跡が残る。
木20	田下駄(枠型か)	4区	北築地846	43.9	12.1	1.5	ほぼ完存する。両端2孔が枠用か。
木21	木皿	4区	溝125	15.7	2.7	0.6	直径19cmと推定。底部内面に刀痕か。
木22	箸	1区	溝100	20.4	0.8	0.4	完存。外面面取りされる。
木23	横櫛	1区	耕作土855	2.7	(6.0)	0.9	肩部に丸味をもつ。4本/1cm。漆付着。
木24	下駄	4区	耕作土855	13.0	6.0	2.5	小型品。前壷を右によせてあけ、前歯をさけて斜めに穿孔する。子供用か。
木25	板材(墨痕)	4区	溝98	8.8	(4.2)	0.4	目釘穴や綴じ穴はなく曲物(底板)の可能性がある。一端に切り込み。墨痕あり。絵か。
木26	糸巻(横木)	1区	土坑101	11.4	2.1	1.0	完存。焼印あり。墨書「×」
木27	漆器(皿)	2区	湿地状堆積349	(17.0)	(8.1)	0.2	器表の黒漆は全体に残る。非常にうすい優品か。
木28	下駄	2区	湿地状堆積349	(11.7)	8.7	3.3	前歯は外側に張り出す。
木29	下駄	2区	湿地状堆積349	(15.9)	6.5	3.3	後歯欠損する。前歯の縦断面は方形である。
木30	加工部材	2区	整地層3	12.6	2.7	1.3	穿孔あり。
木31	ヘラ状製品	3区	池750・溝599合流部	(9.3)	2.1	0.4	先端を半円形に加工する。
木32	板材	3区	池750 下層	14.8	(7.1)	0.7	一端は完存する。
木33	棒状製品	3区	池750 下層	21.5	2.5	2.3	完存する。棒の両端に切れ込み。
木34	下駄	3区	池750 下層	23.1	12.7	6.4	ほぼ完存する。歯は外側に張り出す。後壷は後歯にあたり半円となる。台の上面に右足跡が残る。
木35	板材	3区	池350 構築土	(13.0)	3.3	1.0	板材を加工し先端をいびつな半円形に加工する。
木36	棒状製品	3区	池350 構築土	(10.8)	1.9	1.4	棒の一端に切り込みをめぐらす。下半は欠損。
木37	加工部材	3区	池350 構築土	(13.6)	(3.5)	1.3	板材で1面に突出部がある。
木38	加工部材	3区	池350 構築土	(4.8)	4.3	1.1	板材で1面に突出部がある。
木39	曲物(底板)か	3区	池350 構築土	(19.6)	(5.5)	0.8	穿孔が3箇所みられる。
木40	斎串	3区	中世耕作土	(12.6)	1.9	0.5	両側2箇所に切り込み。下半は欠損。
木41	下駄	3区	中世耕作土	16.9	8.7	2.5	前歯の縦断面が三角形。前壷のために前歯を一部くり抜く。前歯後ろ中央を半円形にくり抜く。

※(　)は残存数値

図　　版

遺構図版1

4区東壁断面図（1：80）



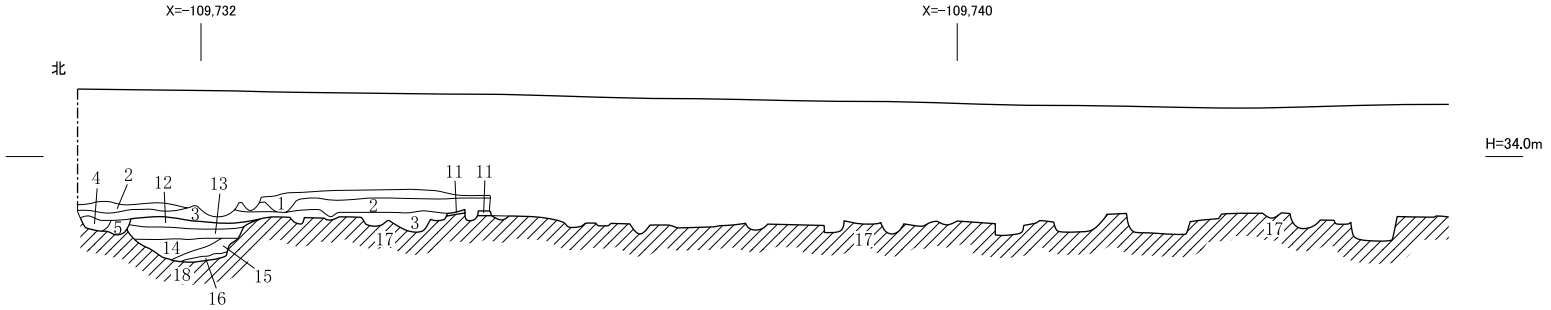
1 10YR3/1黒褐色シルト粘質(細砂～φ1cm礫含む) ┐近世
2 10YR4/2灰黄褐色細砂～シルト(φ2cm礫含む) ┘耕作土
3 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～細砂(φ3cm礫含む) ―溝99
4 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
5 10YR2/2黒褐色粘土(φ1cm礫・粗砂含む) ┐近世畦
6 10YR2/3黒褐色粘土(φ2cm礫含む)(板すえる) ┘
7 10YR3/1黒褐色粘土(φ1～3cm礫・細砂含む) ┐
8 10YR4/2灰黄褐色粘土(φ1～2cm礫含む) │
9 10YR3/2黒褐色粗砂～シルト(φ1cm礫含む) │溝98
10 10YR3/2黒褐色粗砂～シルト │
(φ1cm礫・7.5Y5/1灰色粘土ブロック含む) │
11 10YR4/2灰黄褐色粘土(7.5Y5/1灰色粘土ブロック含む) ┘
12 10YR4/2灰黄褐色細砂 ┐
13 10YR4/1褐灰色粘土(7.5Y5/1灰色粘土ブロック含む) │
14 10YR4/2灰黄褐色細砂(φ1cm礫含む) │
15 10YR4/2灰黄褐色細砂 │
(φ1cm礫・2.5Y6/2灰黄色粘土ブロック含む) │土取土坑
16 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 │
17 10YR3/2黒褐色粗砂～シルト粘質 ┘
18 10YR2/3黒褐色粘土(φ2cm礫含む) ┐耕作土855
19 10YR3/2黒褐色粘土 ┘
20 10YR2/2黒褐色シルト粘質 ―溝808
21 10YR3/3暗褐色シルト(φ1～2cm礫含む) ┐溝18
22 10YR3/2黒褐色シルト(2.5Y4/2暗灰黄色細砂含むラミナ) ┘
23 10YR3/1黒褐色シルト ┐整地層6
(φ2cm礫・粗砂・10YR2/1黒色粘土ブロック含む) ┘

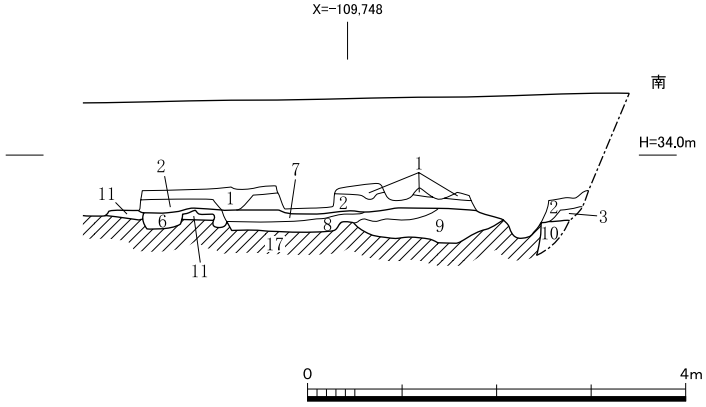
24 10YR2/2黒褐色粘土 ┐
(φ3～4cm礫・2.5Y4/2暗灰黄色粘土ブロック含む) ┘溝100
25 2.5Y3/2黒褐色粘土(φ3cm礫含む) ―
26 10YR3/1黒褐色シルト
(φ2cm礫・粗砂・10YR2/1黒色粘土ブロック含む)
27 10YR2/2黒褐色シルト
28 10YR2/2黒褐色シルト(2.5Y4/2暗灰黄色細砂含むラミナ)
29 10YR3/2黒褐色シルト砂質(2.5Y4/2暗灰黄色細砂ブロック含む) ┐
30 10YR3/1黒褐色粘土(10YR4/1褐灰色粘土ブロック含む) │
31 2.5Y3/1黒褐色粘土 │北築地846
32 10YR3/1黒褐色粘土 │
(10YR4/1褐灰色粘土ブロック・底部に木製品含む) ┘
33 10YR2/2黒褐色シルト粘質(φ1～4cm礫含む) ―溝125
34 10YR3/2黒褐色細砂～シルト粘質(φ1cm礫含む) ┐
35 10YR4/2灰黄褐色粘土(粗砂・7.5Y5/1灰色粘土ブロック含む) │南築地854
36 10YR4/2灰黄褐色粘土(粗砂含む) │
37 10YR4/1褐灰色粘土(7.5Y5/1灰色粘土ブロック含む) ┘
38 10YR3/2黒褐色シルト(木片含む) ┐
39 10YR2/2黒褐色シルト粘質(木片多量含む) │土手状
40 2.5Y3/1黒褐色粘土(10YR4/2灰黄褐色細砂含む) │遺構827
41 10YR3/2黒褐色細砂(10YR2/2黒褐色粘土ブロック含む) ┘
42 10YR3/2黒褐色粘土
43 10YR3/3暗褐色シルト(ラミナ)
44 10YR2/1黒色粗砂～シルト粘質 ┐
45 10YR2/2黒褐色シルト粘質 │
46 10YR2/2黒色粗砂～シルト │

47 10YR3/1黒褐色シルト(粗砂ブロック含む) ┐
48 10YR3/2黒色粗砂(黒色粘土ブロック含む) │
49 2.5Y5/3黄褐色砂礫層 │
50 2.5Y3/1黒褐色細砂～シルト │土手状
51 10YR3/1黒褐色シルト粘質～2.5Y4/2暗灰黄色細砂 │遺構41
52 10YR3/2黒褐色粗砂～シルト粘質 │
53 10YR3/2黒褐色粘土(粗砂～φ1cm礫含む) │
54 10YR3/1黒褐色シルト粘質 │
55 10YR4/1褐灰色シルト粘質 ┘
56 10YR3/1黒褐色シルト(ラミナ) ―溝850
57 2.5Y3/2黒褐色細砂～シルト粘質(φ1～3cm礫含む) ┐整地層5
58 2.5Y3/2黒褐色粘土(7.5Y4/1灰色粘土ブロック含む) ┘
59 10YR2/2黒褐色粘土 ┐湿地状
60 10YR2/2黒褐色粘土(φ2～3cm礫・木片含む) ┘堆積853
61 10YR3/3暗褐色粗砂～シルト ┐
(10YR2/2黒褐色粘土ブロック含む) │
62 10YR3/1黒褐色粘土 │
63 10YR3/1黒褐色粘土(10YR4/2灰黄褐色細砂含む) │高まり852
64 10YR3/2黒褐色粗砂～シルト │
65 10YR3/1黒褐色細砂粘質(10YR2/2黒褐色粗砂含む) ┘
66 10YR3/1黒褐色粘土(植物遺体含む)(腐植土)
67 10YR4/1褐灰色細砂(φ2cm礫・植物遺体含む)(腐植土)
68 10YR4/2灰黄褐色粗砂(腐植土)
69 7.5Y5/1灰色粘土 ┐
70 7.5Y5/1灰色シルト │基盤層
71 7.5Y5/1灰色砂礫 ┘

遺構図版2

3区東壁断面図（1：80）

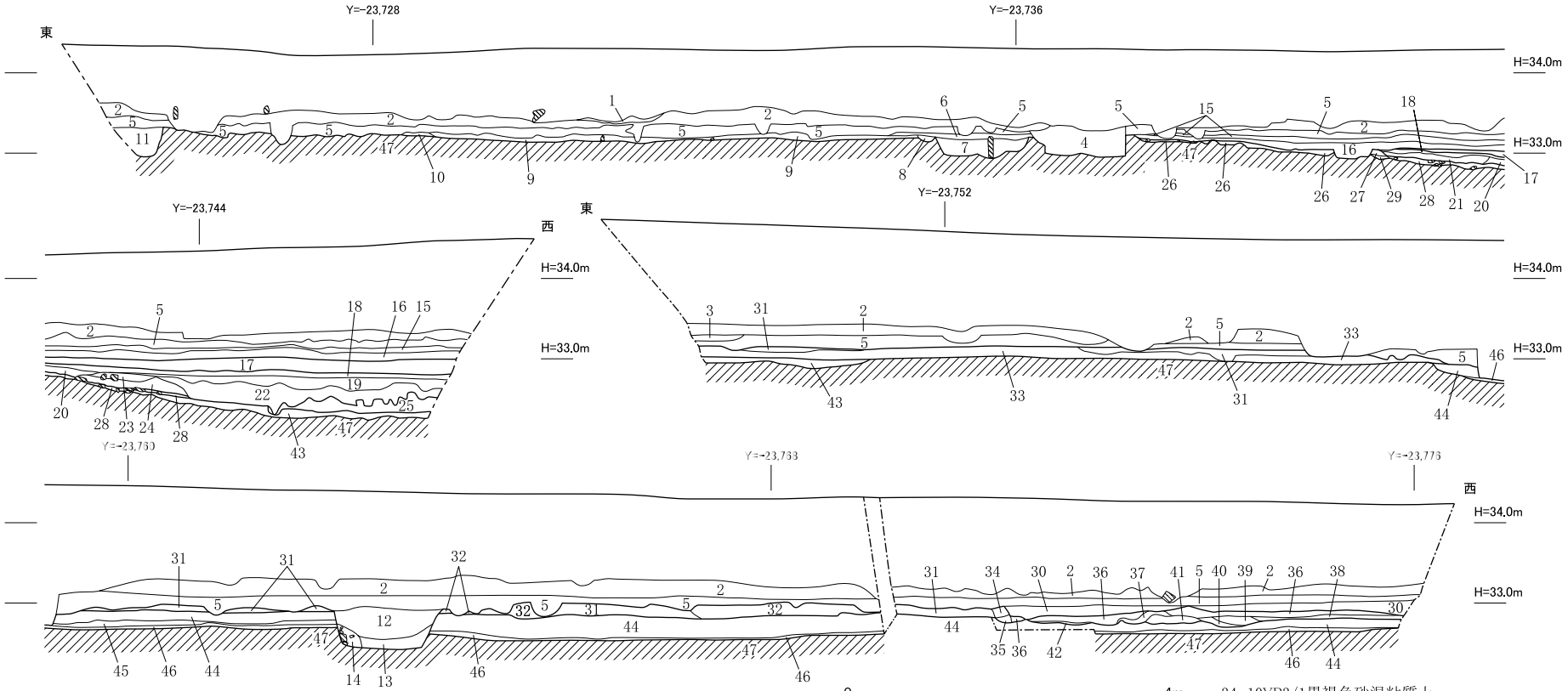




1 10YR2/1黒色細砂～シルト粘質
2 5Y3/2オリーブ褐色砂混粘質土(10YR4/3にぶい黄褐色粘質土ブロック含む)
3 10YR3/4暗褐色砂混粘質土(橙色粘質土ブロックまばらに含む)
　近世耕作土
4 10YR4/1褐灰色細砂～シルト粘質
5 2.5Y5/1黄灰色砂混粘質土
　耕作溝
6 10YR4/2灰黄褐色粗砂～シルト(φ2cm礫含む)
7 10YR4/2灰黄褐色粗砂～シルト(φ3cm礫含む)
8 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～シルト(φ3cm礫含む)
9 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～シルト(5Y6/2灰オリーブ色シルトブロック含む)
　土取土坑
10 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土(φ5～10cm礫含む)
11 10YR4/3にぶい黄褐色粘土(10YR4/2灰黄褐色シルトブロック含む)
　整地層3
12 10YR4/1褐灰色粗砂～シルト(φ2cm礫含む)
13 10YR4/1褐灰色砂混粘質土
14 10YR4/1褐灰色粘土(2.5GY5/1オリーブ灰色シルト・φ1cm礫含む)
15 10YR4/2灰黄褐色粘土(φ2cm礫含む)
　溝599
16 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂
17 5Y6/2灰オリーブ色シルト粘質
　基盤層
18 10YR4/4褐灰色砂礫(φ3cm礫含む)

図版3　遺構

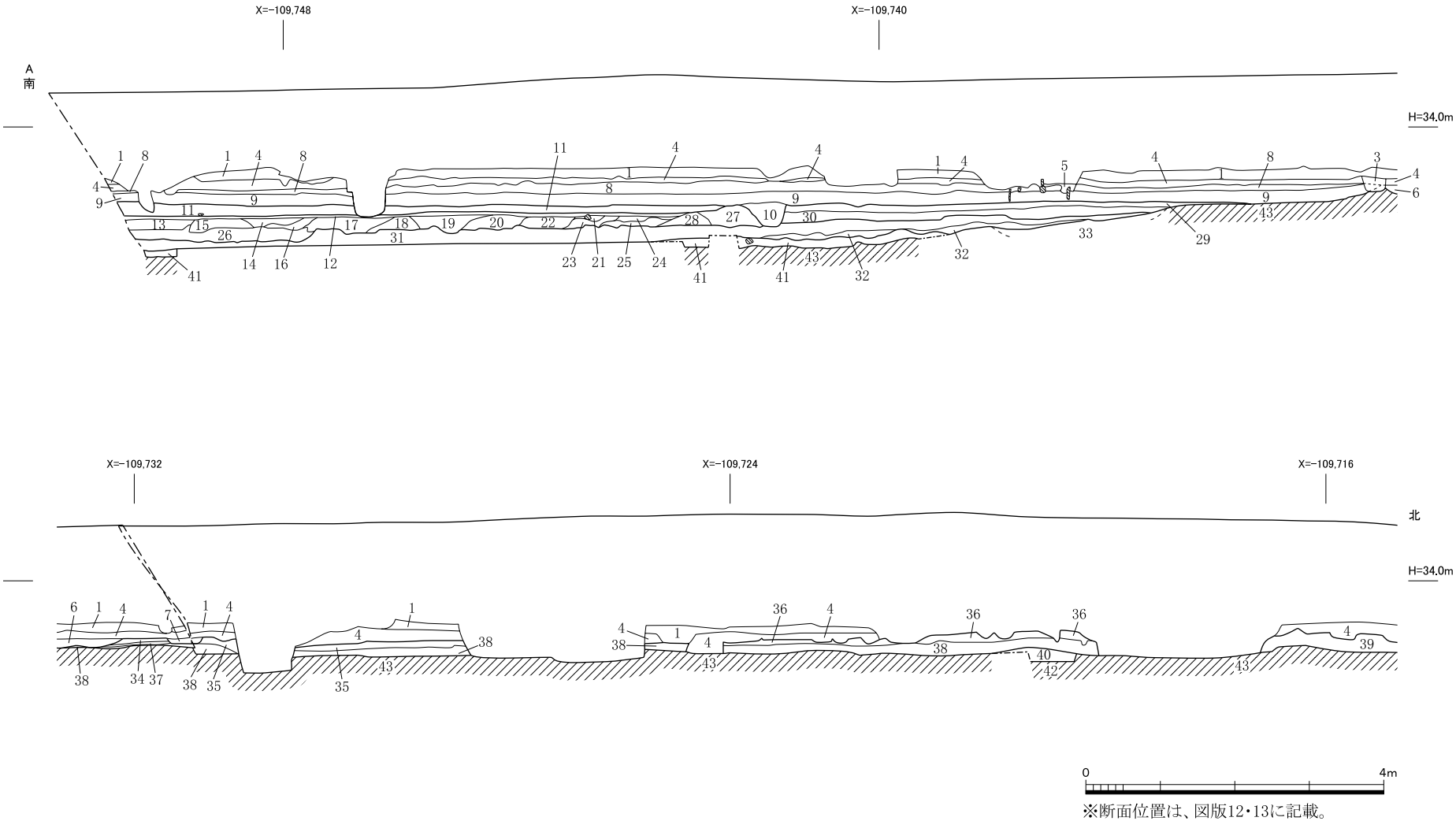
2・3区南壁断面図（1：80）



1 2.5Y4/2暗灰黄色砂混粘質土
2 5Y3/2オリーブ褐色砂混粘質土（10YR 4/3にぶい黄褐色粘質土ブロック含む）— 近世耕作土
3 7.5Y4/1褐灰色シルト（灰色粘土ブロック・φ3cm礫含む）— 耕作溝
4 7.5Y4/4褐色粘質土（2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土ブロック含む）— 土取土坑
5 10YR3/4暗褐色砂混粘質土（橙色粘質土ブロックまばらに含む）— 近世耕作土
6 2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土
7 2.5Y5/4黄褐色粘質土（5Y4/1灰色粘土ブロック含む）— 土取土坑
8 10YR4/2灰黄褐色シルト — 耕作溝
9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
10 2.5Y4/3オリーブ褐色砂混粘質土
11 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土（φ5〜10cm礫含む）
12 7.5YR4/1褐灰色シルト（黒褐色粘土ブロック・土器含む）— 溝151
13 10YR4/1褐灰色粘土
14 10YR3/2黒褐色細砂〜シルト（φ4〜10cm礫含む）— 溝151護岸
15 2.5Y4/3オリーブ褐色砂混粘質土（φ3〜5cm礫含む）— 中世耕作土
16 2.5Y3/2黒褐色粘質土
17 10YR4/2灰黄褐色砂混粘質土 — 池350埋土
18 2.5Y4/2暗灰黄色砂混粘質土（上面に礫敷く）— 池350礫敷
19 2.5Y4/1黄灰色粘質土（礫多量含む）
20 5Y3/1オリーブ黒色砂質土
21 5Y3/1オリーブ黒色粘質土（2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック含む）— 池350構築土
22 2.5Y3/1黒褐色粘土（砂礫含む）
23 5Y4/1灰色砂質土（粘土ブロック含む）
24 5Y4/2灰オリーブ色（粘土ブロック含む）
25 2.5Y3/1黒褐色粘土 — 池750放置後堆積（埋土上層）
26 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土（φ3〜5cm礫含む）— 洲浜外縁部781
27 5Y3/2オリーブ黒色砂礫（φ〜2cm礫含む）
28 2.5Y3/1黒褐色粘土（φ3〜5cm礫敷く）
29 2.5Y4/1黄灰色粘土 — 池750洲浜
30 10YR4/1褐灰色粗砂〜シルト粘質（φ1〜3cm礫・土器片含む）— 整地層4
31 10YR4/2灰黄褐色粘土
32 10YR4/1褐灰色粘土（10Y6/1灰色粘土ブロック含む）
33 10YR3/1黒褐色粗砂〜シルト粘質（土器・炭化物・φ1cm礫含む）— 整地層3
34 10YR3/1黒褐色砂混粘質土
35 10YR2/1黒色粗砂〜粘質土
36 10YR4/3にぶい黄褐色砂層
37 2.5Y3/1黒褐色砂混粘質土
38 2.5Y3/1黒褐色シルト（φ3〜5cm礫多く含む）
39 2.5Y3/1黒褐色砂混粘質土
40 2.5Y3/2黒褐色粗砂（φ3〜5cm礫含む）
41 10YR2/1黒色粘土（10YR4/1褐灰色粘土含む）
42 10YR4/1褐灰色細砂 — 整地層1
43 2.5Y3/1黒褐色粘土 — 湿地状堆積780
44 10YR3/2黒褐色シルト粘質（下層にラミナ）— 湿地状堆積349
45 10YR2/1黒色粘土（植物遺体含む）
46 10Y4/1褐灰色砂礫（腐植土）
47 10Y7/1灰色シルト — 基盤層

図版4 遺構

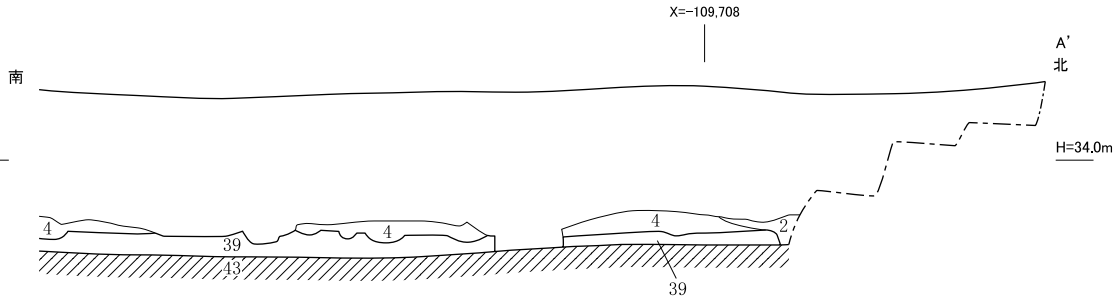
3区西壁断面図1（1：80）



※断面位置は、図版12・13に記載。

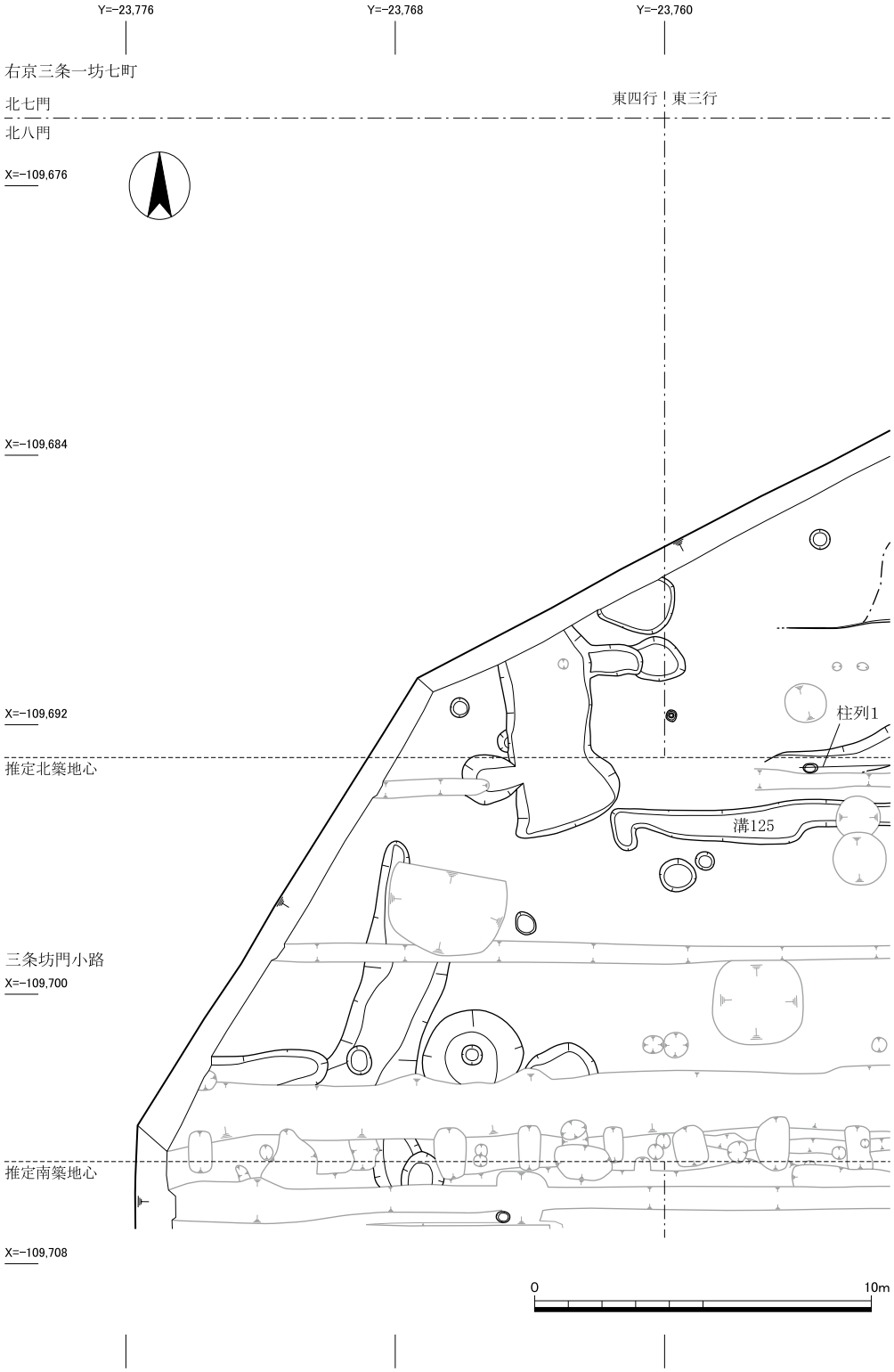
図版5　遺構

3区西壁断面図2（1：80）

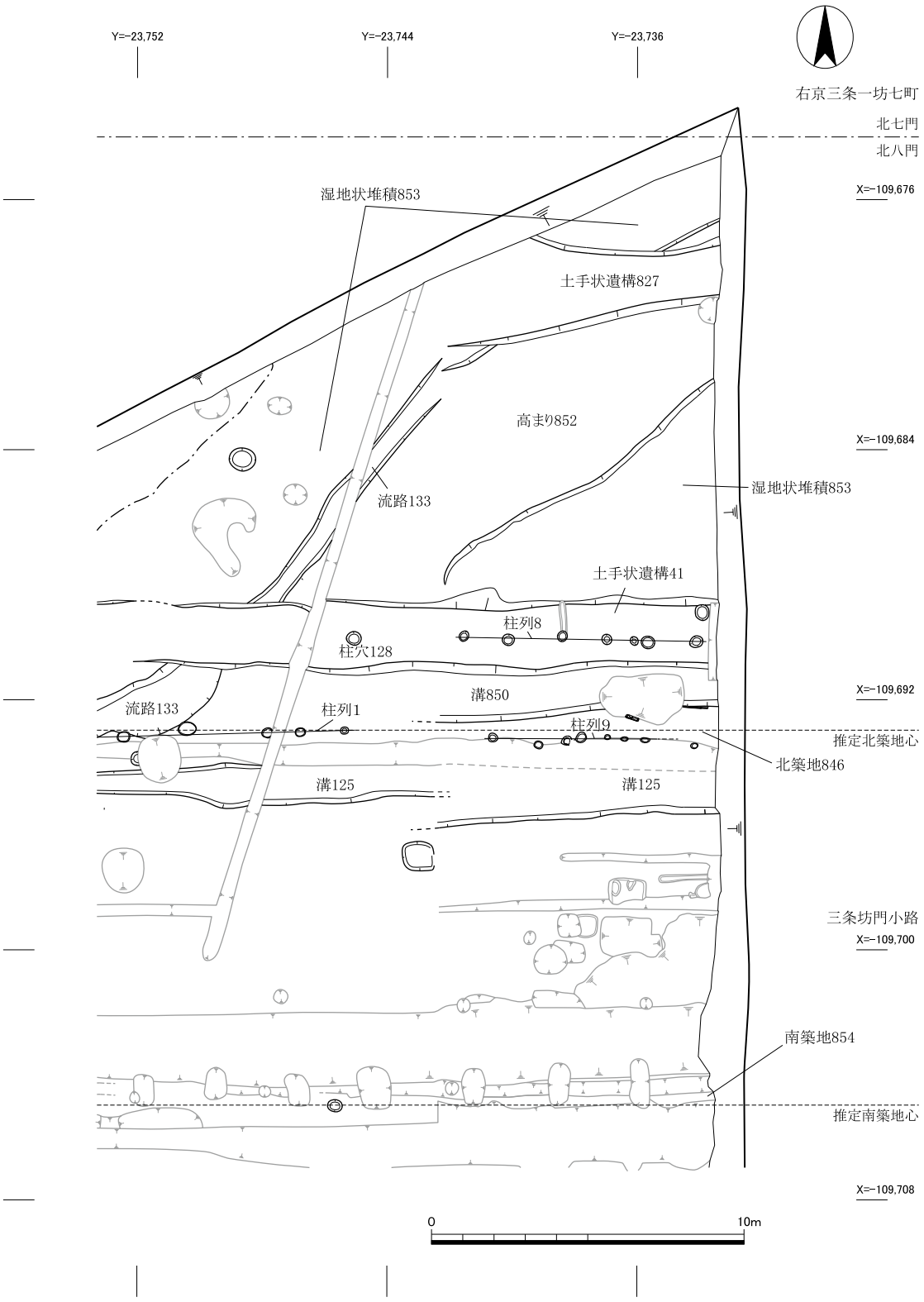


※断面位置は、図版12・13に記載。

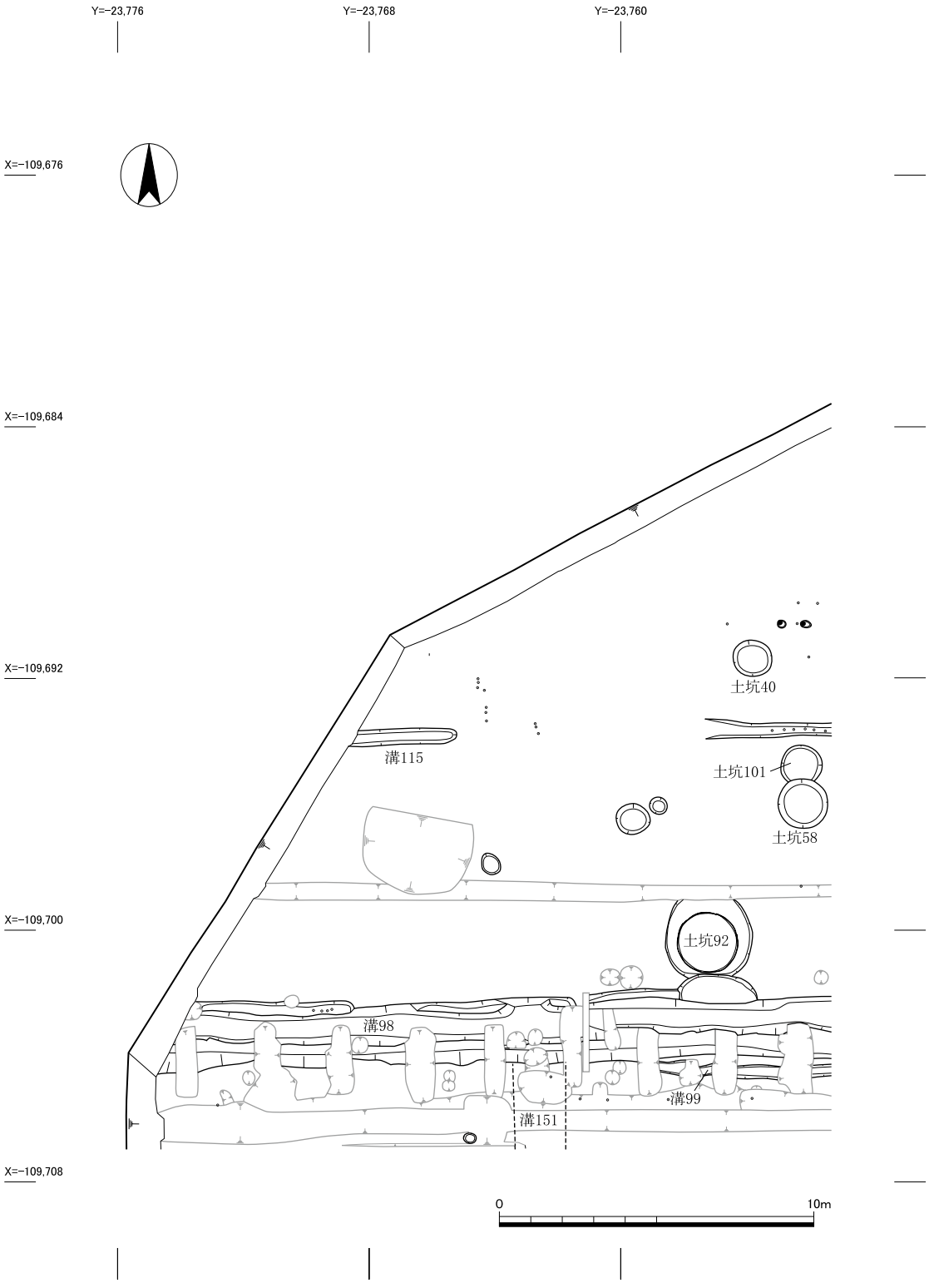
1　5Y3/2オリーブ褐色砂混粘質土(10YR4/3にぶい黄褐色粘質土ブロック含む)　——　近世耕作土
2　10YR4/2灰黄褐色砂層　——　耕作溝
3　10YR4/2灰黄褐色砂(φ13cm礫多量・土器片少量含む)　——　耕作溝
4　10YR3/4暗褐色砂混粘質土(橙色粘質土ブロックまばらに含む)　——　近世耕作土
5　10YR4/2灰黄褐色砂泥(炭化物少量含む)　——　耕作溝
6　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(炭化物・土師器片少量含む)　——　耕作溝
7　2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(φ2cm礫少量・炭ごく少量含む)　——　耕作溝
8　2.5Y4/3オリーブ褐色砂混粘質土(φ3～5cm礫含む)　——　中世耕作土
9　2.5Y3/2黒褐色粘質土　——　中世耕作土
10　2.5Y3/2黒褐色礫混粘質土　——　中世耕作土
11　10YR4/2灰黄褐色砂混粘質土(粘質つよい)　——　池350埋土
12　2.5Y4/2暗灰黄色砂混粘質土(上面に礫敷く)　——　池350礫敷
13　2.5Y4/1黄灰色粘質土(礫多量含む)　——　池350構築土
14　5Y5/2灰オリーブ色シルト(φ～5cm礫中量・白色粘土ブロック含む)　——　池350構築土
15　2.5Y3/1黒褐色砂質土(φ～2cm礫多量・白色粘土ブロック含む)　——　池350構築土
16　2.5Y3/1黒褐色砂礫(φ～3cm礫・炭化物少量含む)　——　池350構築土
17　2.5Y3/1黒褐色泥砂(φ～6cm礫多量・5Y3/2オリーブ黒色シルトブロック多量含む)　——　池350構築土
18　2.5Y3/2黒褐色砂泥(φ～6cm礫多量・5Y6/1灰色粘土ブロック含む)　——　池350構築土
19　2.5Y3/2黒褐色砂泥(φ～8cm礫多量・炭化物少量含む)　——　池350構築土
20　2.5Y3/2黒褐色砂泥(φ～4cm礫多量含む)　——　池350構築土
21　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(φ～6cm礫多量・2.5Y5/4黄褐色砂少量含む)　——　池350構築土
22　2.5Y3/2黒褐色泥砂(φ～5cm礫多量・炭化物少量含む)　——　池350構築土
23　2.5Y5/2暗灰黄色粘土　——　池350構築土
24　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥(φ～6cm礫やや多量含む)　——　池350構築土
25　2.5Y4/1黄灰色粘土　——　池350構築土
26　2.5Y3/1黒褐色粘土(砂礫含む)　——　池350構築土
27　2.5Y4/2暗灰黄色砂混粘質土(φ2～5cm礫多量含む)　——　池350構築土
28　10YR2/2黒褐色砂泥(φ～2cm礫多量・炭化物少量含む)　——　池350構築土
29　2.5Y3/2黒褐色粘質土(φ5～10cm礫含む)　——　池350構築土
30　2.5Y4/2暗灰黄色粘土　——　池350構築土
31　2.5Y3/1黒褐色粘土　——　池750放置後の堆積(埋土上層)
32　2.5Y3/1黒褐色粘土(炭化物やや多量・腐植土含む)　——　池750堆積(埋土下層)
33　2.5Y4/2暗灰黄色粘質土(φ3～5cm礫含む)　——　洲浜外縁部781
34　2.5Y5/1黄灰色粘土(炭化物ごく少量含む)　——　整地層3
35　10YR4/1褐灰色砂質シルト　——　整地層3
36　10Y5/1灰色粘土　——　整地層3
37　2.5Y4/2暗灰黄色粘土　炭ごく少量　——　整地層3
38　5Y4/2灰オリーブ色粘土　5BG6/1青灰色粘土ブロック含む　——　整地層3
39　10YR3/2黒褐色砂質シルト(φ1cm礫・瓦含む)　——　整地層3
40　2.5Y3/1黒褐色中砂　——　土手状高まり348
41　2.5Y3/1黒褐色粘土　——　湿地状堆積780
42　7.5Y4/1灰色砂礫　——　基盤層
43　10YR7/1灰色シルト　——　基盤層



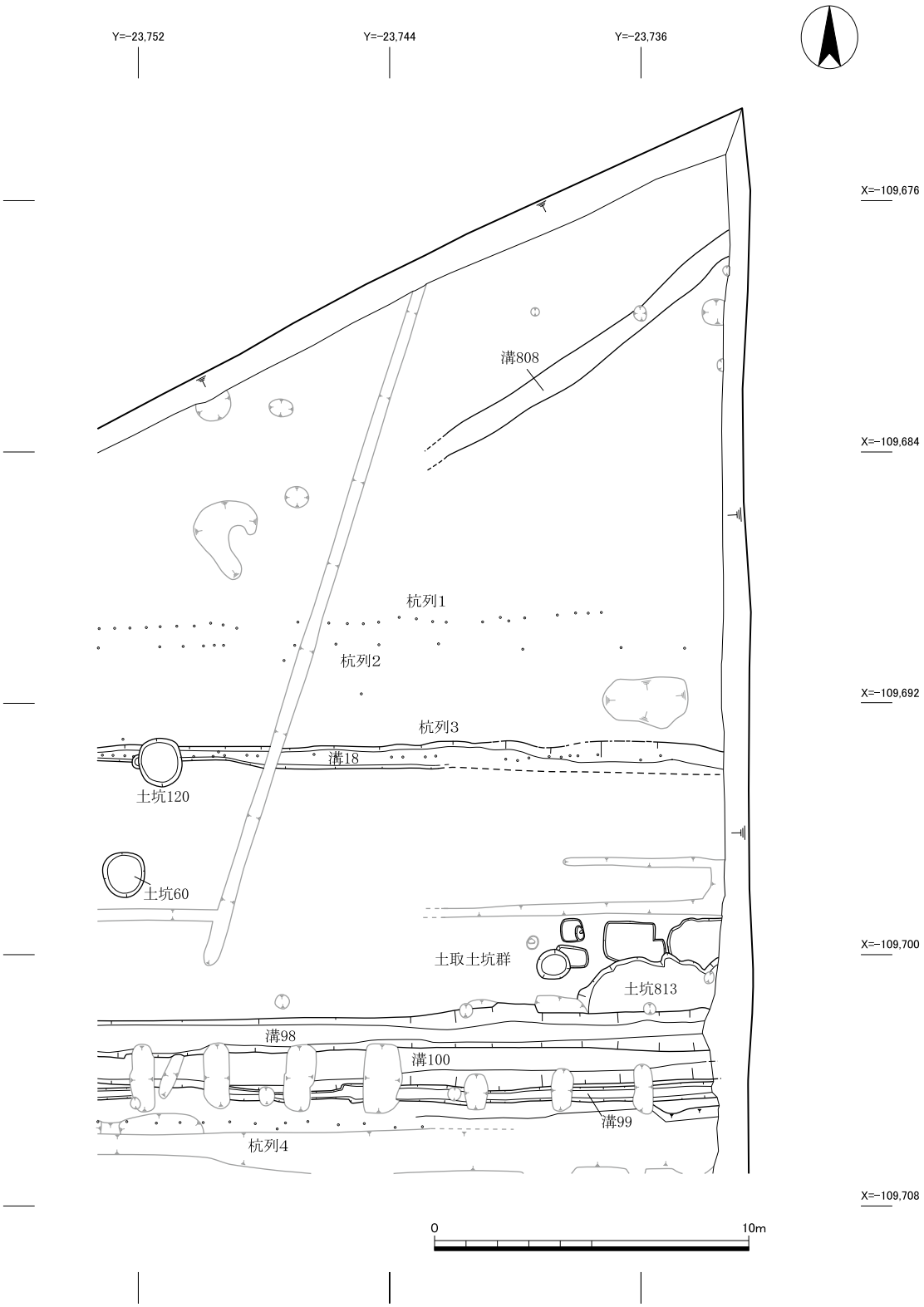
七町・三条坊門小路（１・４区）第２面〔弥生時代から平安時代中期〕遺構平面図１（１：200）



七町・三条坊門小路（１・４区）第２面〔弥生時代から平安時代中期〕遺構平面図２（１：200）



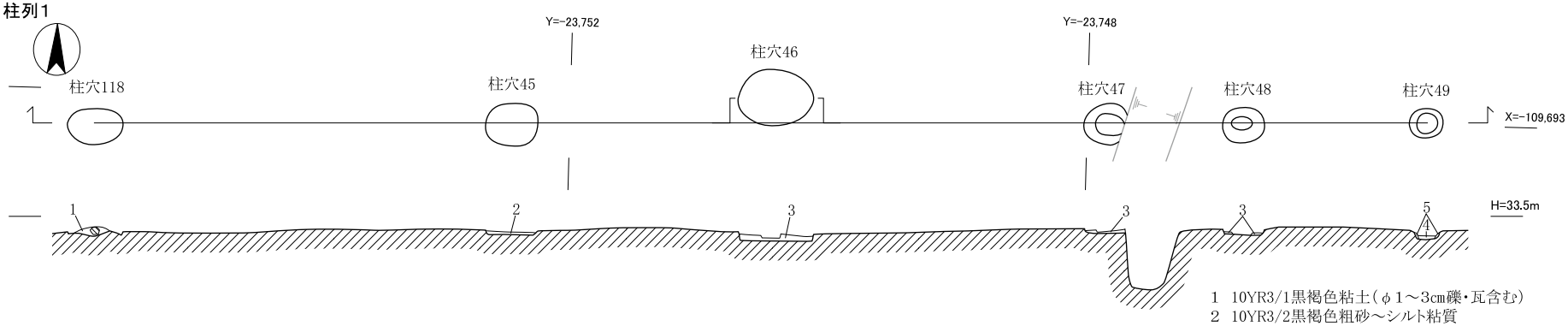
七町・三条坊門小路（１・４区）第１面〔平安時代後期から江戸時代〕遺構平面図１（１：200）



七町・三条坊門小路（１・４区）第１面〔平安時代後期から江戸時代〕遺構平面図２（１：200）

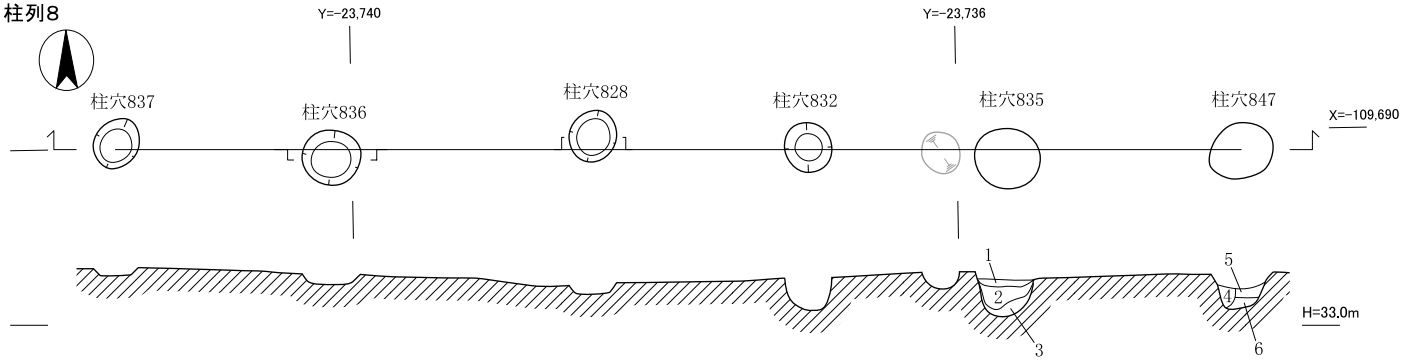
1・4区柱列1・8・9実測図（1：50）

柱列1



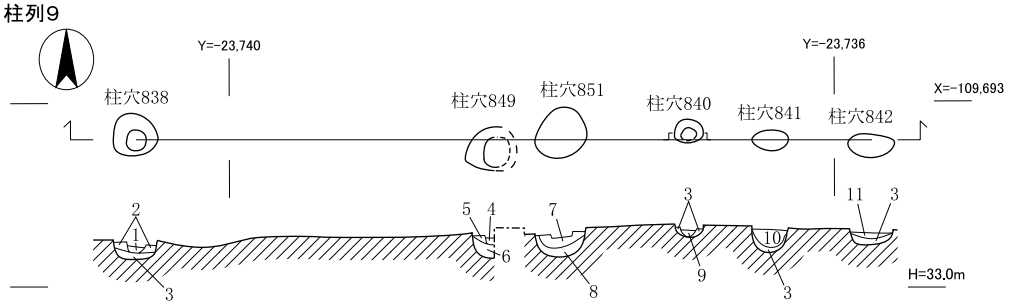
1　10YR3/1黒褐色粘土（φ1～3cm礫・瓦含む）
2　10YR3/2黒褐色粗砂～シルト粘質
3　10YR2/2黒褐色粗砂～シルト粘質（φ5cm礫含む）
4　10YR2/1黒色粗砂　粘質
5　10YR2/2黒褐色粗砂～シルト粘質

柱列8

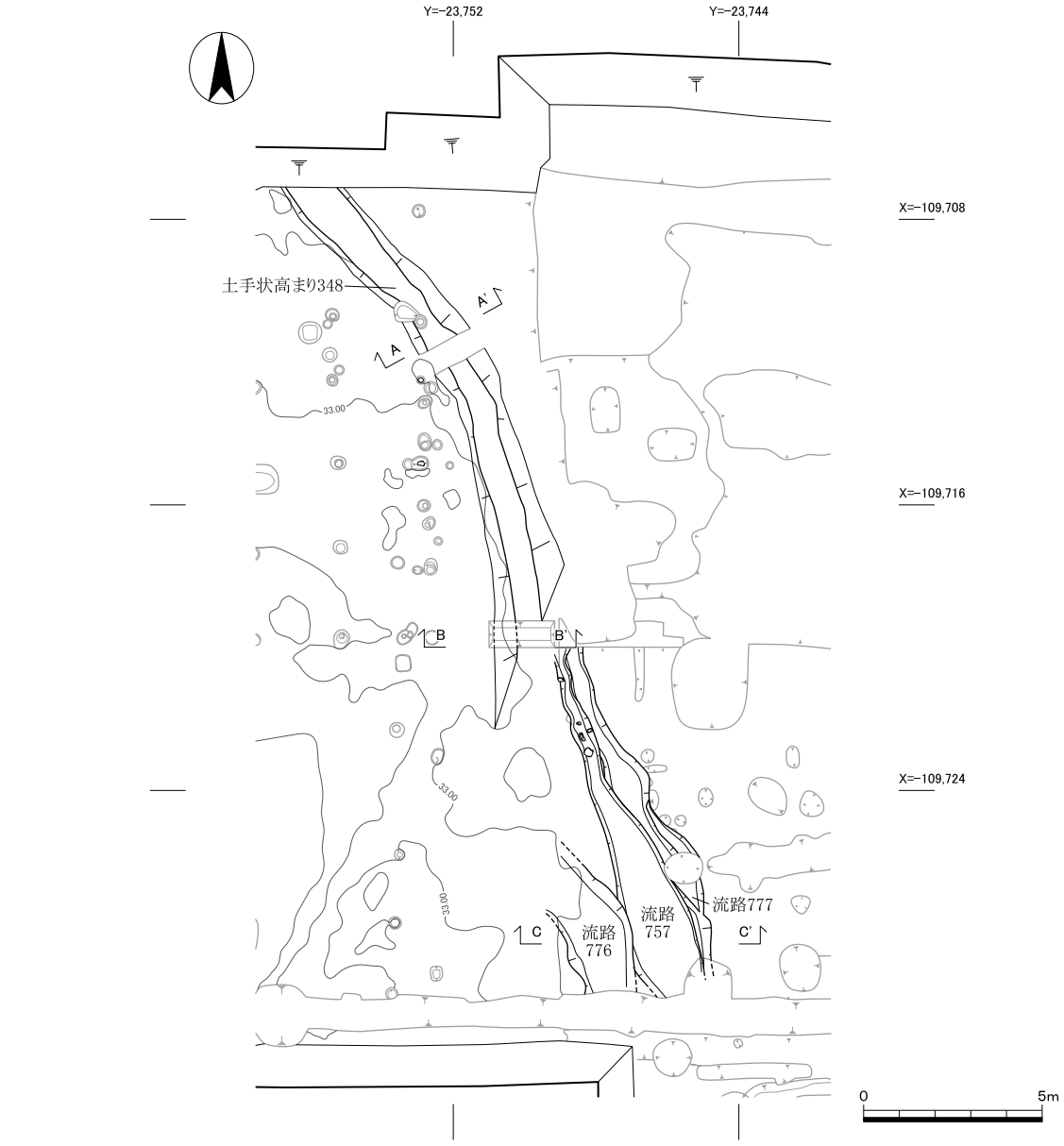


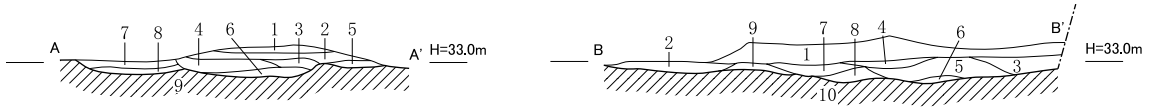
1　10YR2/1黒色粘土（φ4cm礫少量含む）
2　10YR2/1黒色粘土
3　2.5Y3/1黒褐色砂礫（φ3cm礫）
4　2.5Y3/1黒褐色粘土（φ10cm礫少量）
5　2.5Y2/1黒色粘土
6　2.5Y3/2黒褐色粗砂（10YR4/1灰色シルト含む）

柱列9



1　10YR2/1黒色粘土
2　10YR2/2黒褐色粘土
3　2.5Y2/1黒色粘土
4　2.5Y3/2黒褐色粘土（炭化物少量含む）
5　10YR2/2黒褐色粘土（炭化物少量含む）
6　10YR3/1黒褐色粘土（2.5Y4/2暗灰黄色細砂ブロック少量含む）
7　2.5Y3/1黒褐色粘土（2.5Y4/2暗灰黄色細砂ブロック少量・φ4cm礫少量含む）
8　10YR3/1黒褐色粘土
9　2.5Y2/1黒色粘土（2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック含む）
10　10YR3/1黒褐色粘土（10YR4/2灰黄褐色ブロック少量含む）
11　10YR2/2黒褐色粘土（φ5cm礫少量含む）



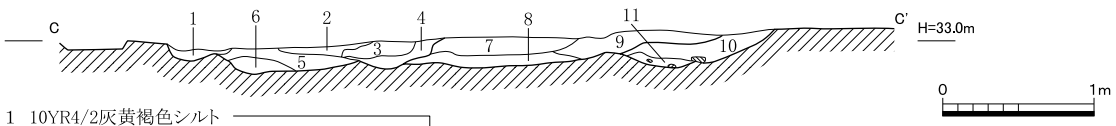


1 2.5Y3/1黒褐色砂質土
（φ1～2cm礫多量、粘土ブロック含む）
2 10YR3/2黒褐色砂質土
3 10YR2/1黒色砂質土（φ1～2cm礫含む）
4 10YR3/1黒褐色砂礫（礫多量含む、固く締まる）
5 2.5Y3/2黒褐色砂質土（礫少量含む）
6 10YR2/2黒褐色粘土
7 10YR2/3黒褐色砂礫
8 10YR2/2黒褐色粘質土（礫含む）
9 10YR4/1褐灰色シルト（基盤層）

土手状高まり348

1 10YR3/1黒褐色粘土（粗砂～φ5cm礫含む）
2 10YR4/1褐灰色粘土（粗砂～φ5cm礫・灰色粘土ブロック含む）
3 2.5Y3/1黒褐色中砂
4 2.5Y3/2黒褐色砂質土（粘土ブロック含む）
5 5Y3/1オリーブ黒色砂礫（φ5cm礫）
6 7.5YR2/1黒色粘土
7 2.5Y3/1黒褐色粘土（φ1～2cm礫含む）
8 2.5Y4/1黄灰色粘土混砂礫（φ5cm礫）
9 2.5Y3/2黒褐色粘土混中砂
10 10YR3/3暗褐色砂礫（基盤層）

土手状高まり348



1 10YR4/2灰黄褐色シルト
2 10YR4/1褐灰色細砂
3 2.5Y4/2暗灰黄色～2.5Y5/6黄褐色細砂～中砂
4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土
（地山ブロック・φ1～2cm礫含む）
5 2.5Y3/2黒褐色中砂（φ1cm礫多量含む）
6 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土（φ1cm礫多量含む）

流路776

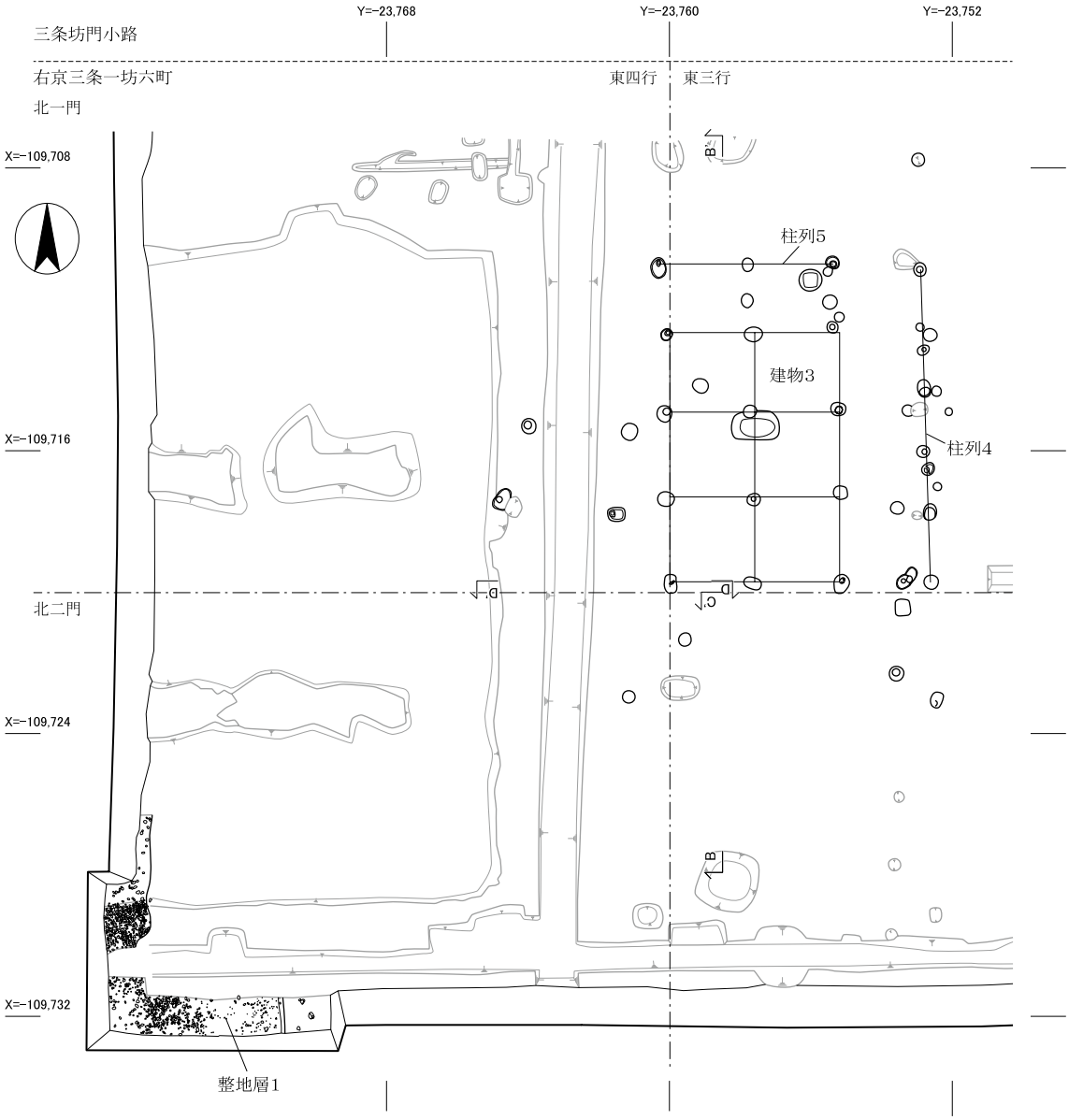
7 2.5Y3/2黒褐色シルト
8 2.5Y3/1黒褐色シルト（φ0.5～3cm礫多量含む）

流路757

9 2.5Y4/1黄灰色シルト
10 2.5Y3/1黒褐色シルト
（7.5Y5/1灰色シルト粘土ブロック含む）
11 2.5Y3/2黒褐色中砂（流木あり）

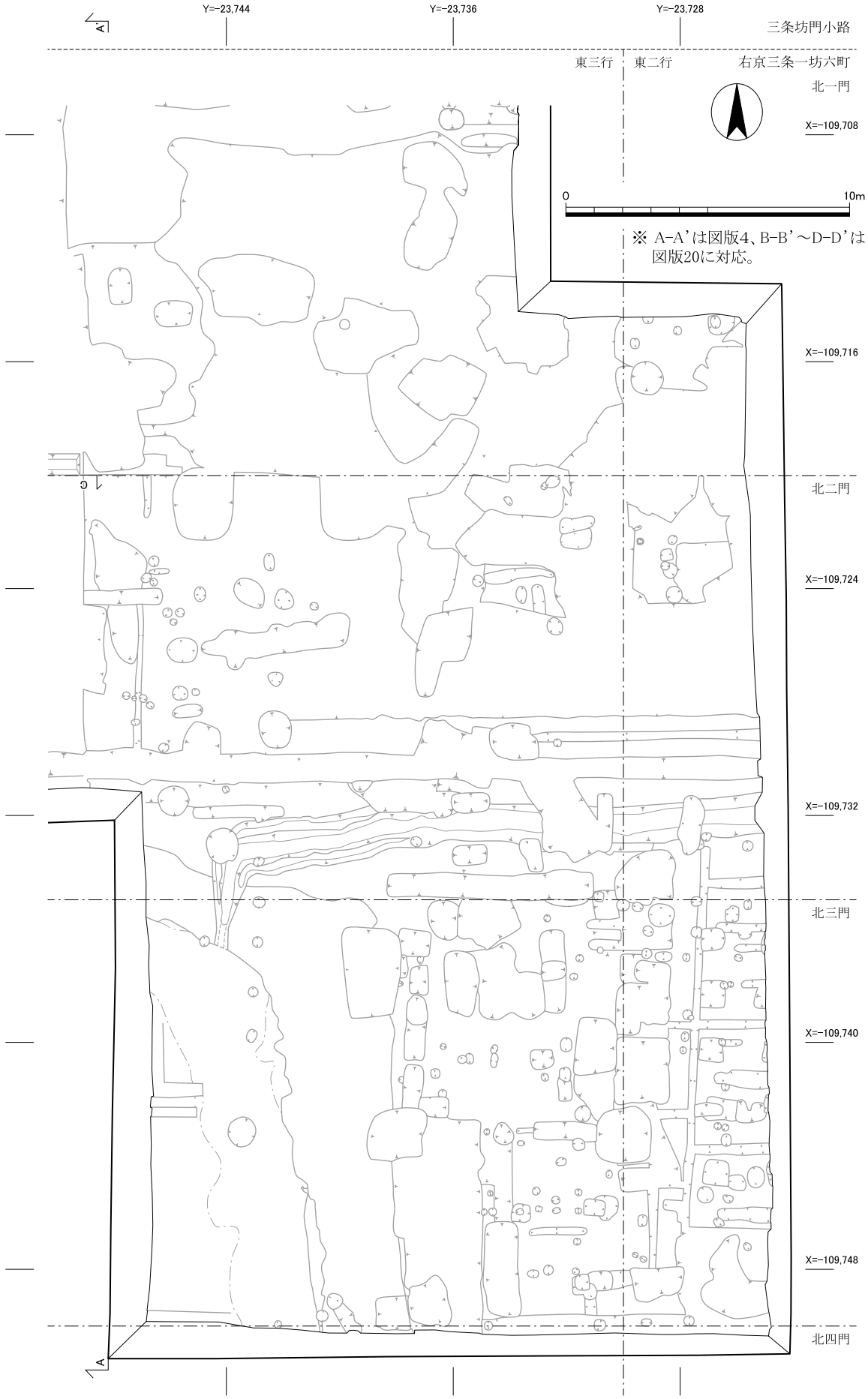
流路777

六町（２・３区）第２－２面〔弥生時代から平安時代初頭〕遺構平面図（１：200）、断面図（１：50）

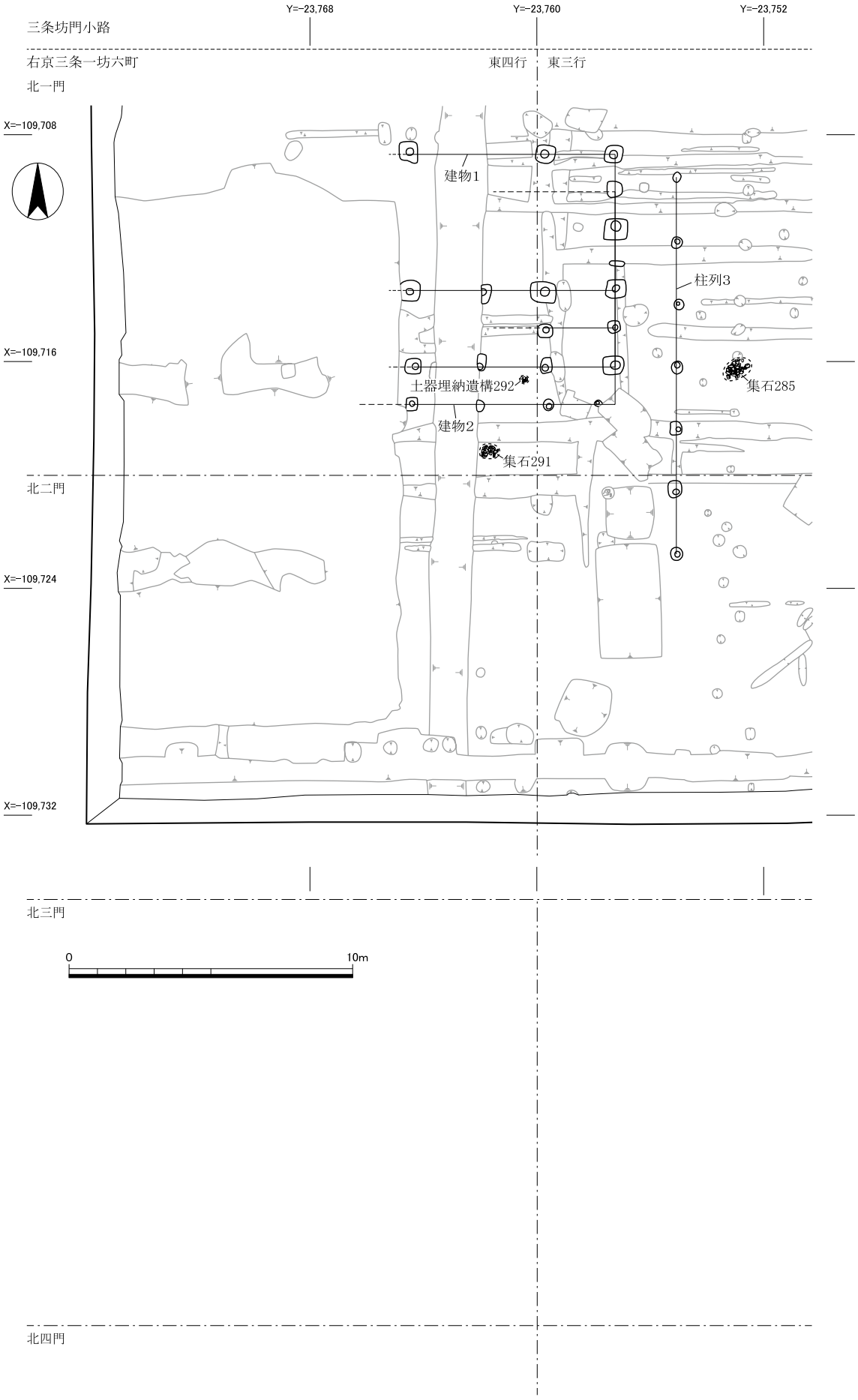


※A-A'は図版4、B-B'～D-D'は図版20に対応。

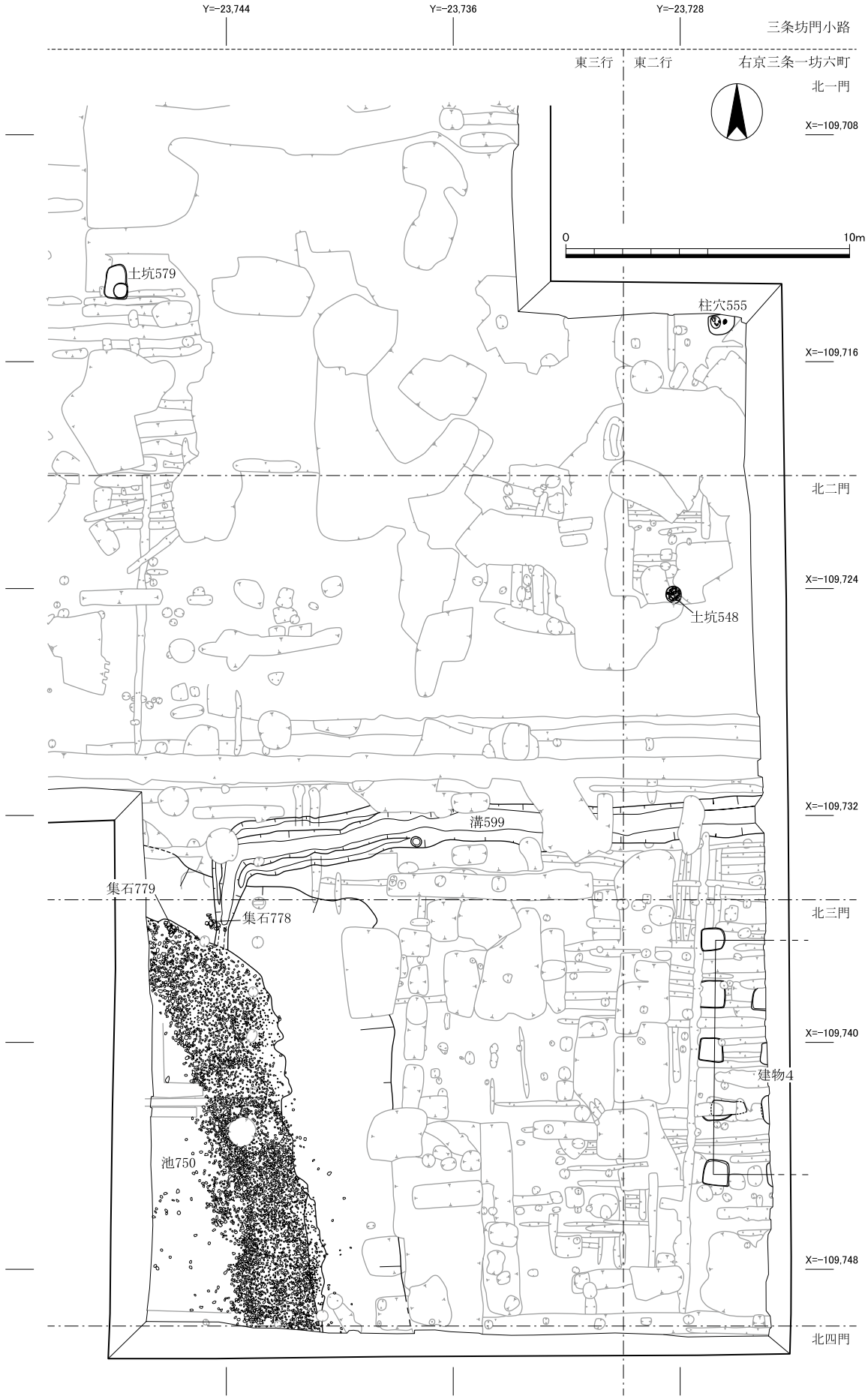
六町（２・３区）第２－１面〔平安時代前期前半〕遺構平面図１（１：200）



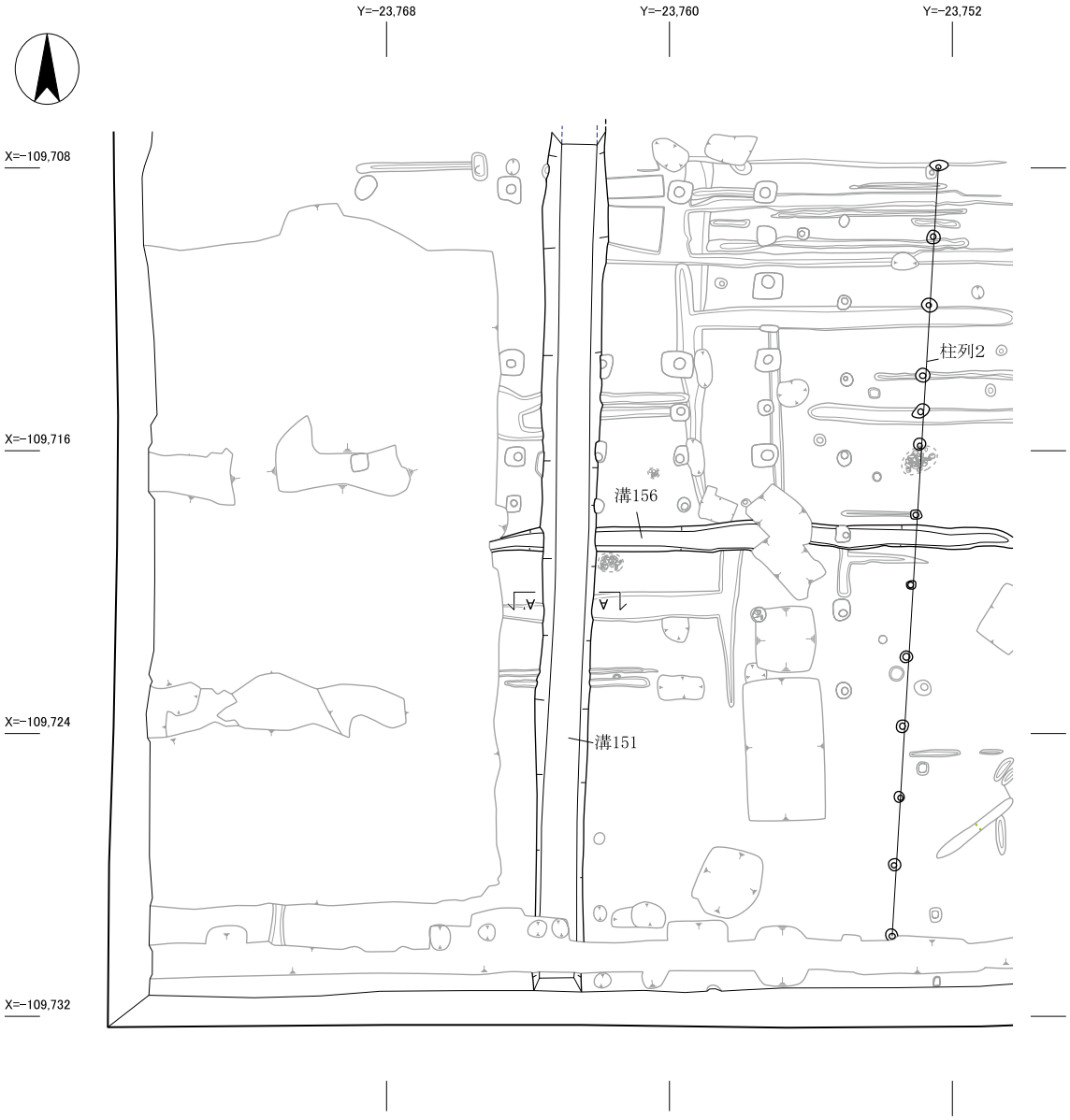
六町（２・３区）第２－１面〔平安時代前期前半〕遺構平面図２（１：200）



六町（２・３区）第１－２面〔平安時代前期後半〕遺構平面図１（１：200）

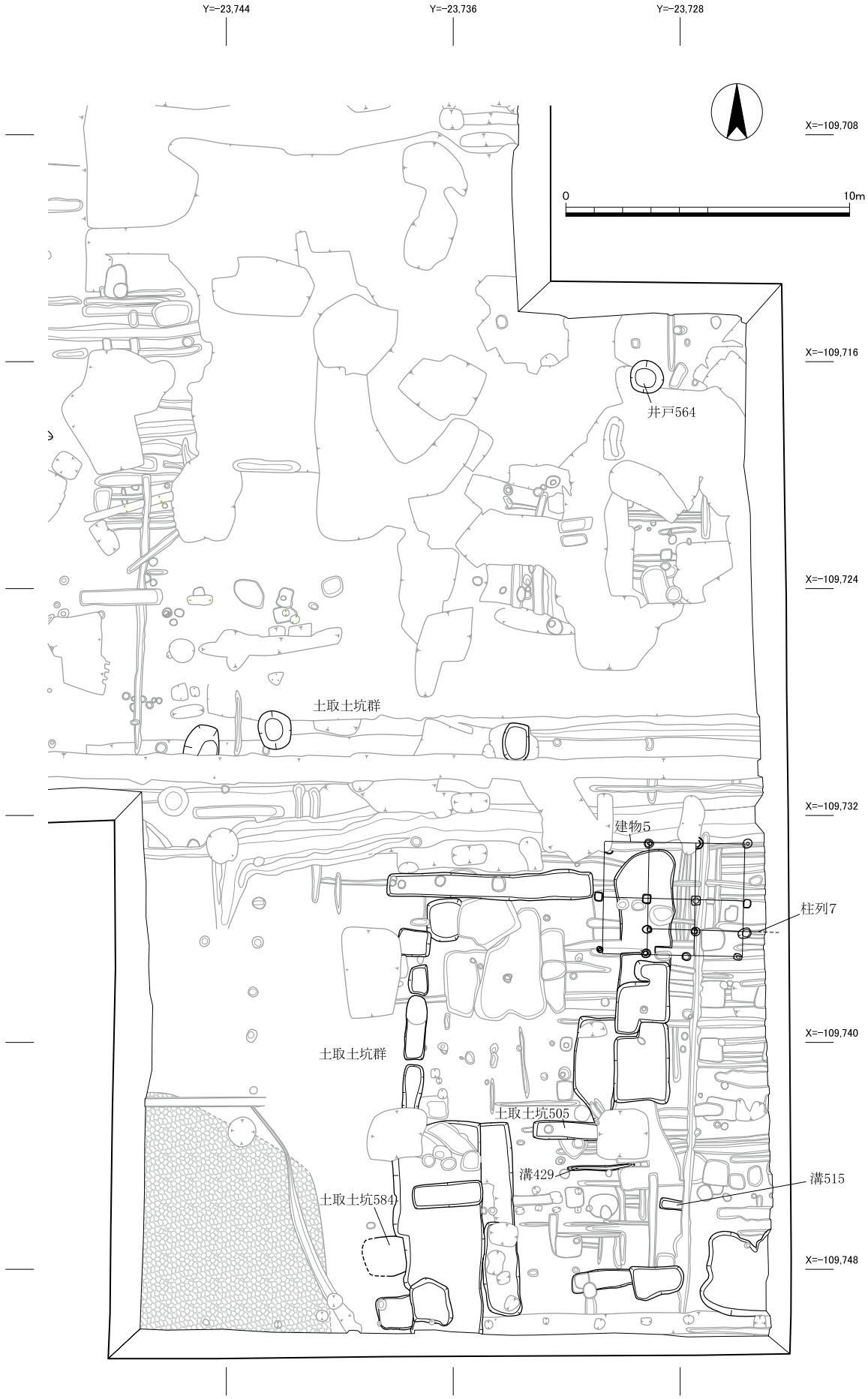


六町（２・３区）第１－２面〔平安時代前期後半〕遺構平面図２（１：200）

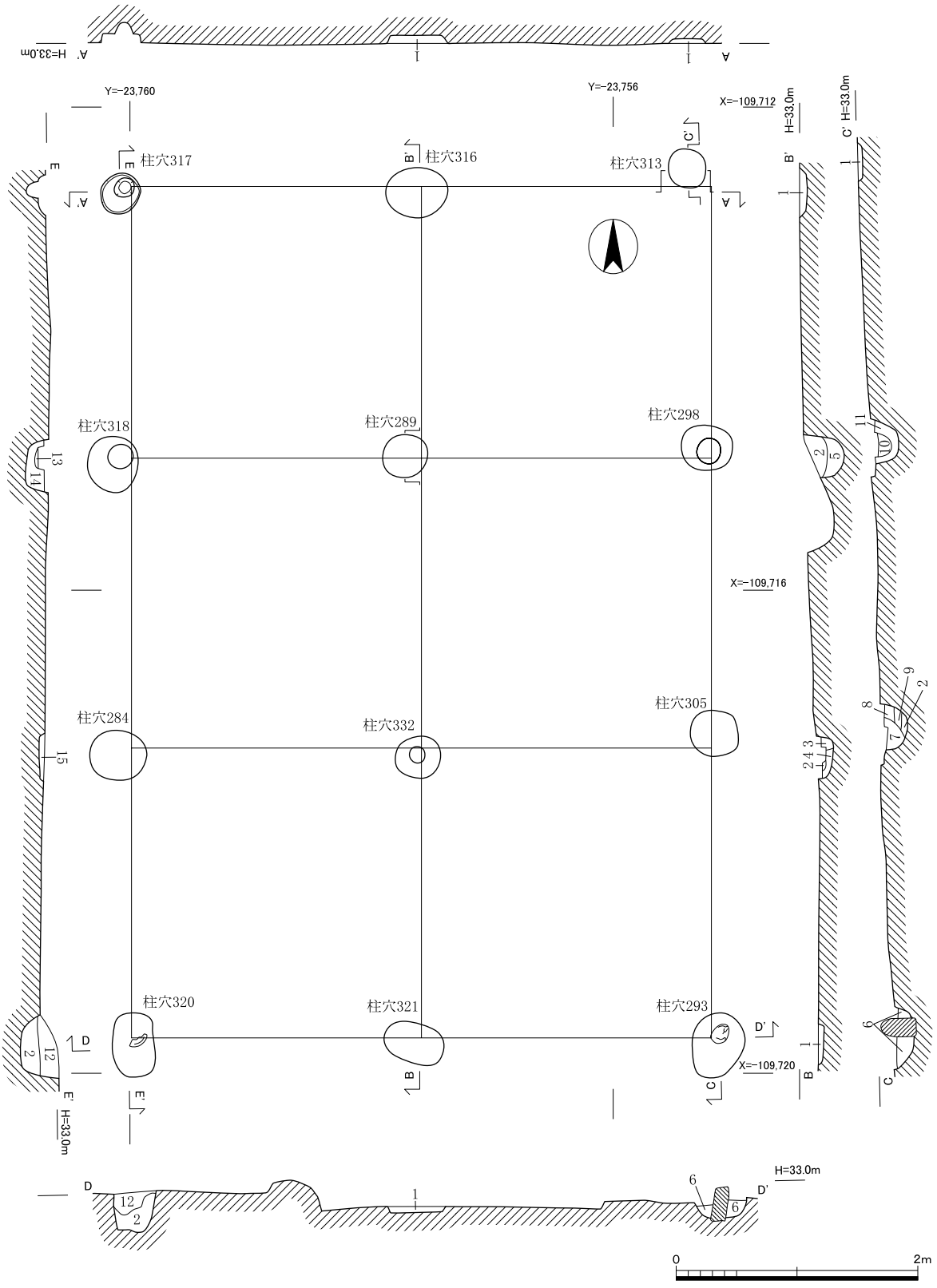


※ A-A'は図16に対応。

六町（２・３区）第１－１面〔江戸時代〕遺構平面図１（１：200）



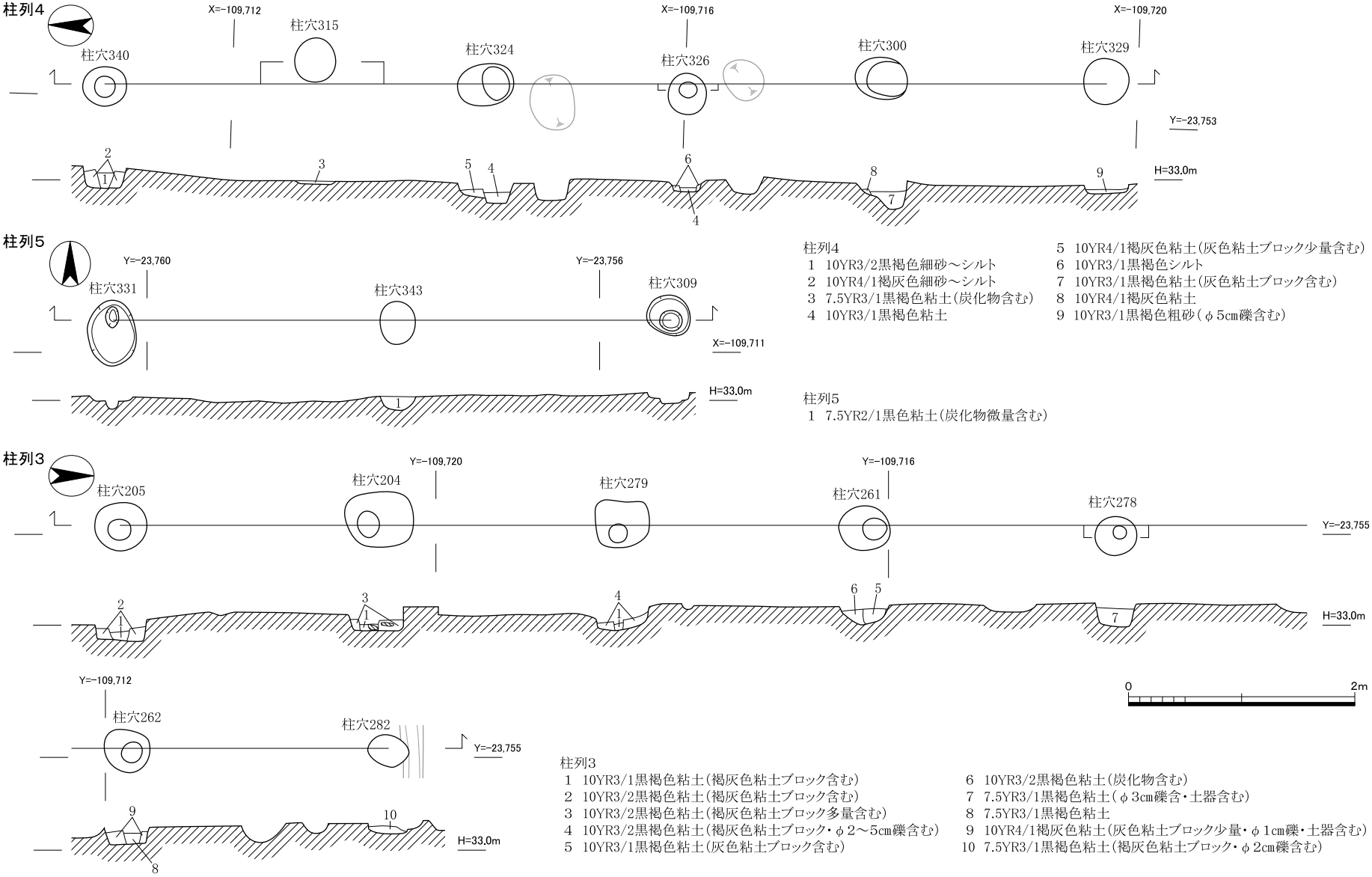
六町（２・３区）第１－１面〔江戸時代〕遺構平面図２（１：200）



1 7.5YR3/1黒褐色粘土(炭化物含む)
2 10YR3/1黒褐色粘土
3 7.5YR4/1褐灰色砂礫
4 2.5Y6/1黄灰色シルト
5 2.5Y3/1黒褐色砂混粘土
6 10YR3/1黒褐色砂混粘土
7 2.5Y3/1黒褐色粘土
8 10YR4/1褐灰色粘土
9 2.5Y3/2黒褐色粘土
10 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト(木片含む)
11 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト(10Y5/1灰色砂質シルトブロック・木片含む)
12 2.5Y2/1黒色粘土
13 10YR3/1黒褐色砂混粘土(木片含む)
14 10YR3/1黒褐色粘土(2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック含む)
15 10YR3/1黒褐色粘土(φ15㎝礫多量・炭化物含む)

2区建物3実測図（1：50）

2区柱列4・5・3実測図（1：50）



柱列4
1　10YR3/2黒褐色細砂～シルト
2　10YR4/1褐灰色細砂～シルト
3　7.5YR3/1黒褐色粘土(炭化物含む)
4　10YR3/1黒褐色粘土
5　10YR4/1褐灰色粘土(灰色粘土ブロック少量含む)
6　10YR3/1黒褐色シルト
7　10YR3/1黒褐色粘土(灰色粘土ブロック含む)
8　10YR4/1褐灰色粘土
9　10YR3/1黒褐色粗砂(φ5cm礫含む)

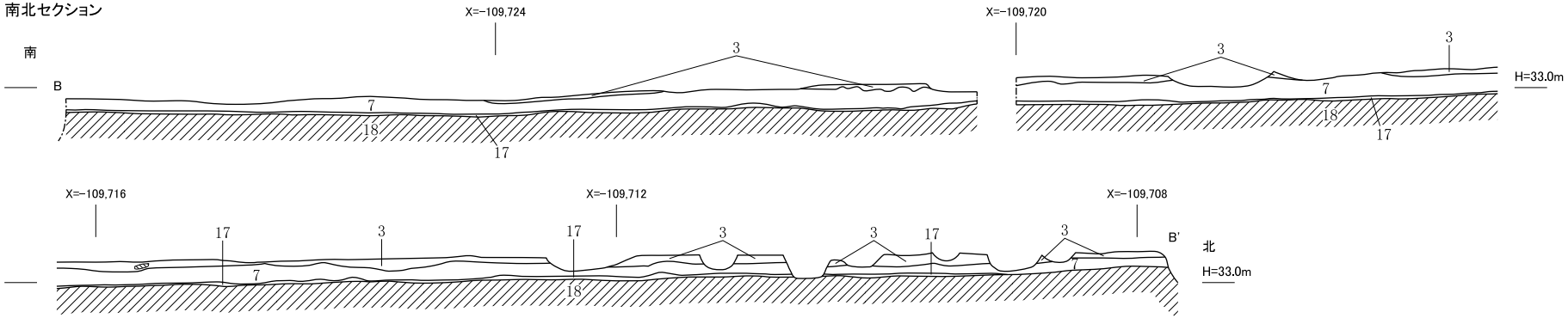
柱列5
1　7.5YR2/1黒色粘土(炭化物微量含む)

柱列3
1　10YR3/1黒褐色粘土(褐灰色粘土ブロック含む)
2　10YR3/2黒褐色粘土(褐灰色粘土ブロック含む)
3　10YR3/2黒褐色粘土(褐灰色粘土ブロック多量含む)
4　10YR3/2黒褐色粘土(褐灰色粘土ブロック・φ2～5cm礫含む)
5　10YR3/1黒褐色粘土(灰色粘土ブロック含む)
6　10YR3/2黒褐色粘土(炭化物含む)
7　7.5YR3/1黒褐色粘土(φ3cm礫含・土器含む)
8　7.5YR3/1黒褐色粘土
9　10YR4/1褐灰色粘土(灰色粘土ブロック少量・φ1cm礫・土器含む)
10　7.5YR3/1黒褐色粘土(褐灰色粘土ブロック・φ2cm礫含む)

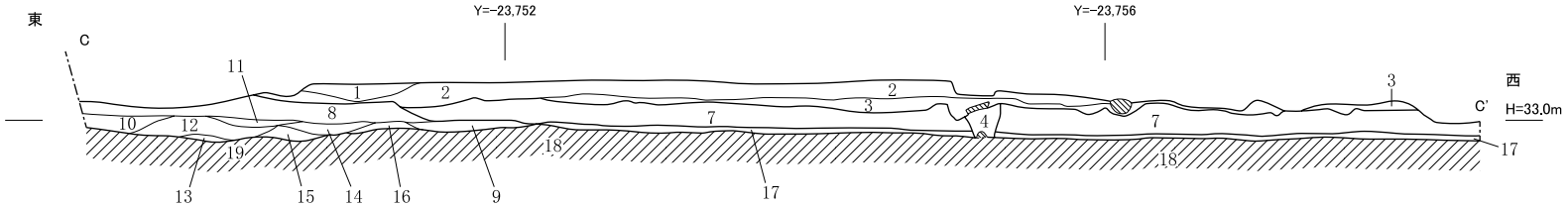
図版20　遺構

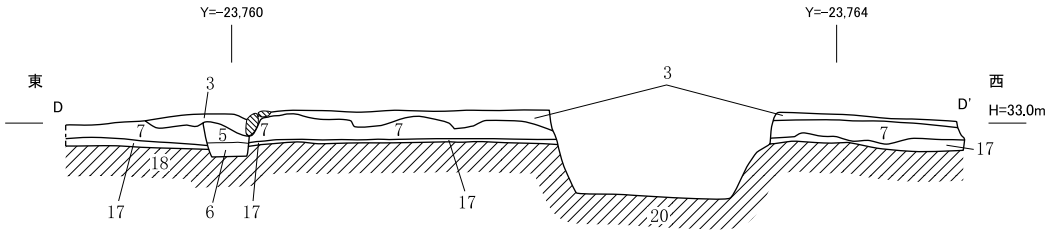
2区セクション断面図（1：50）

南北セクション



東西セクション

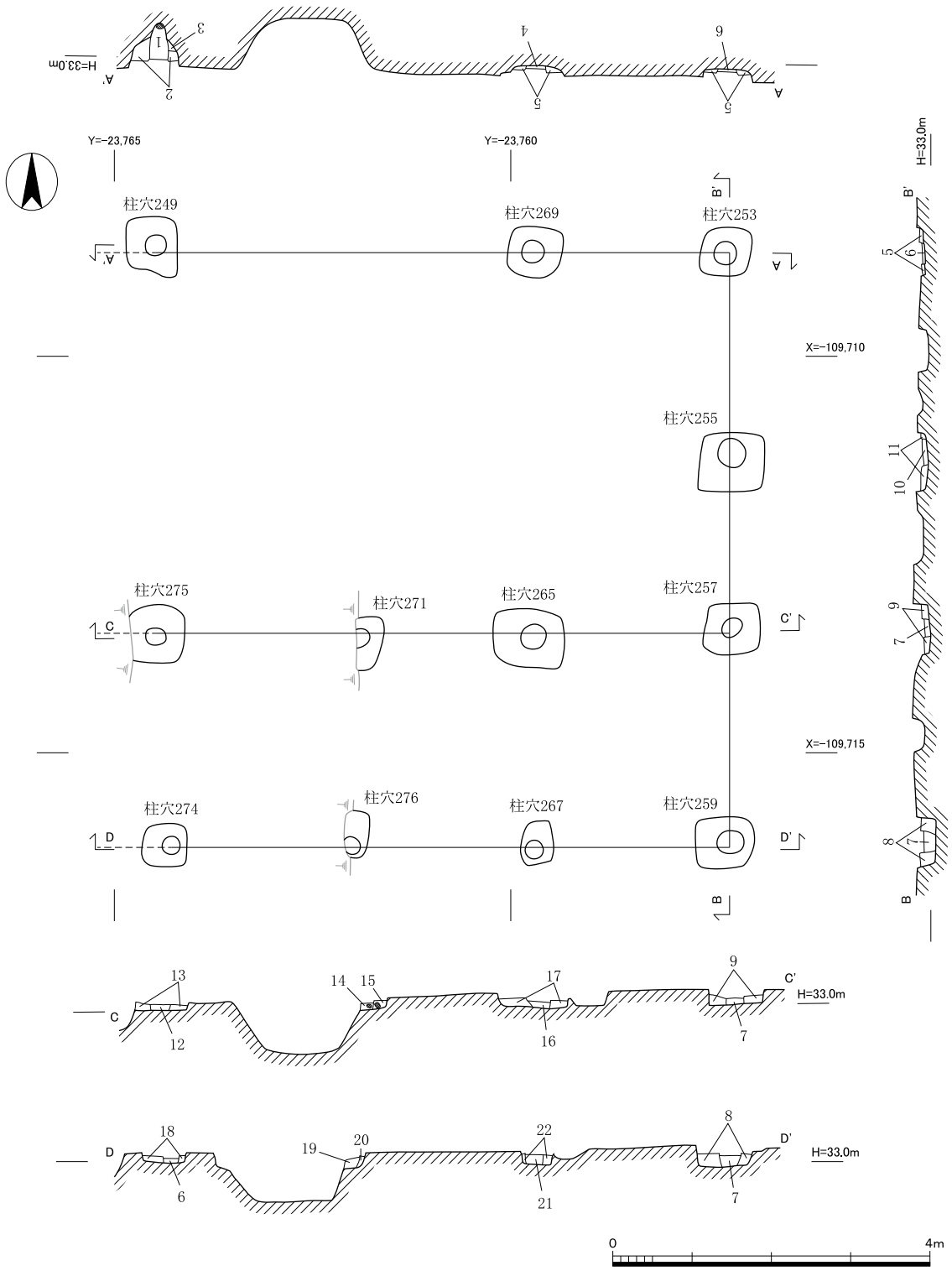




※ B-B'～D-D'は図版12・13に対応。

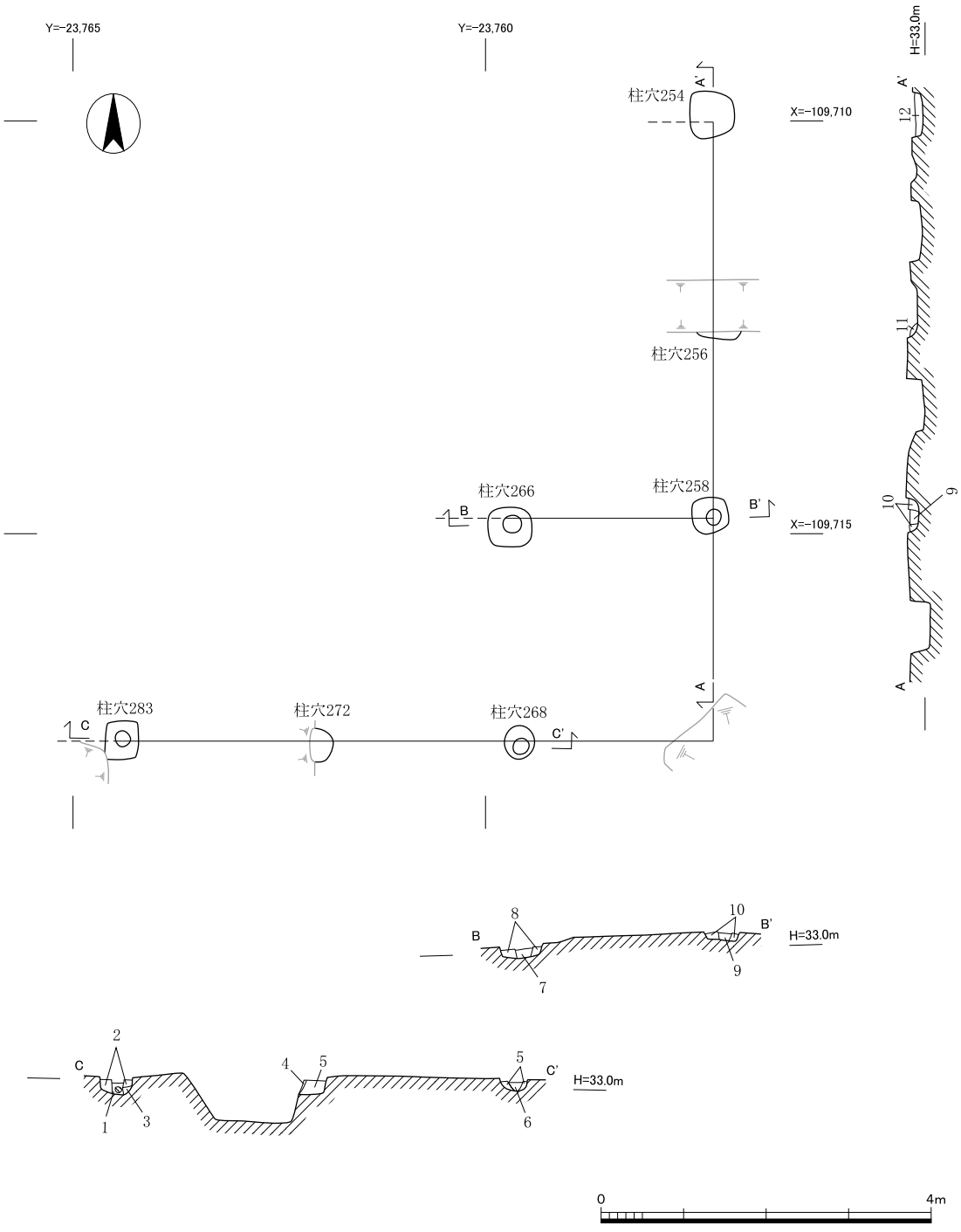
0　4m

1　10YR4/2灰黄褐色粗砂（φ4cm礫・炭化物含む）
2　2.5Y4/2暗灰黄色シルト(5Y6/2灰オリーブ色粘土ブロック含む) ── 整地層3
3　10YR4/2灰黄褐色細砂～シルト(礫・土器多量含む) ── 整地層2
4　10YR3/1黒褐色砂混粘土 ── 柱穴293(建物3)
5　2.5Y2/1黒色粘土
6　10YR3/1黒褐色粘土 ── 柱穴320(建物3)
7　10YR3/1黒褐色シルト ── 湿地状堆積349
8　10YR3/1黒褐色粘土(粗砂～φ5cm礫含む)
9　10YR4/1褐灰色粘土(粗砂～φ5cm礫・灰色粘土ブロック含む)
10　2.5Y3/1黒褐色中砂
11　2.5Y3/2黒褐色砂質土(粘土ブロック含む)
12　5Y3/1オリーブ黒色砂礫（φ5cm礫）　土手状高まり348
13　7.5YR2/1黒色粘土
14　2.5Y3/1黒褐色粘土（φ1～2cm礫含む）
15　2.5Y4/1黄灰色粘土混砂礫（φ5cm礫）
16　2.5Y3/2黒褐色粘土混中砂
17　2.5Y2/1黒色粘土(腐植土)
18　10YR4/1褐灰色細砂（φ2cm礫・植物遺体含む）(腐植土)
19　7.5Y4/1灰色砂礫層 ── 基盤層
20　10YR7/1灰色シルト



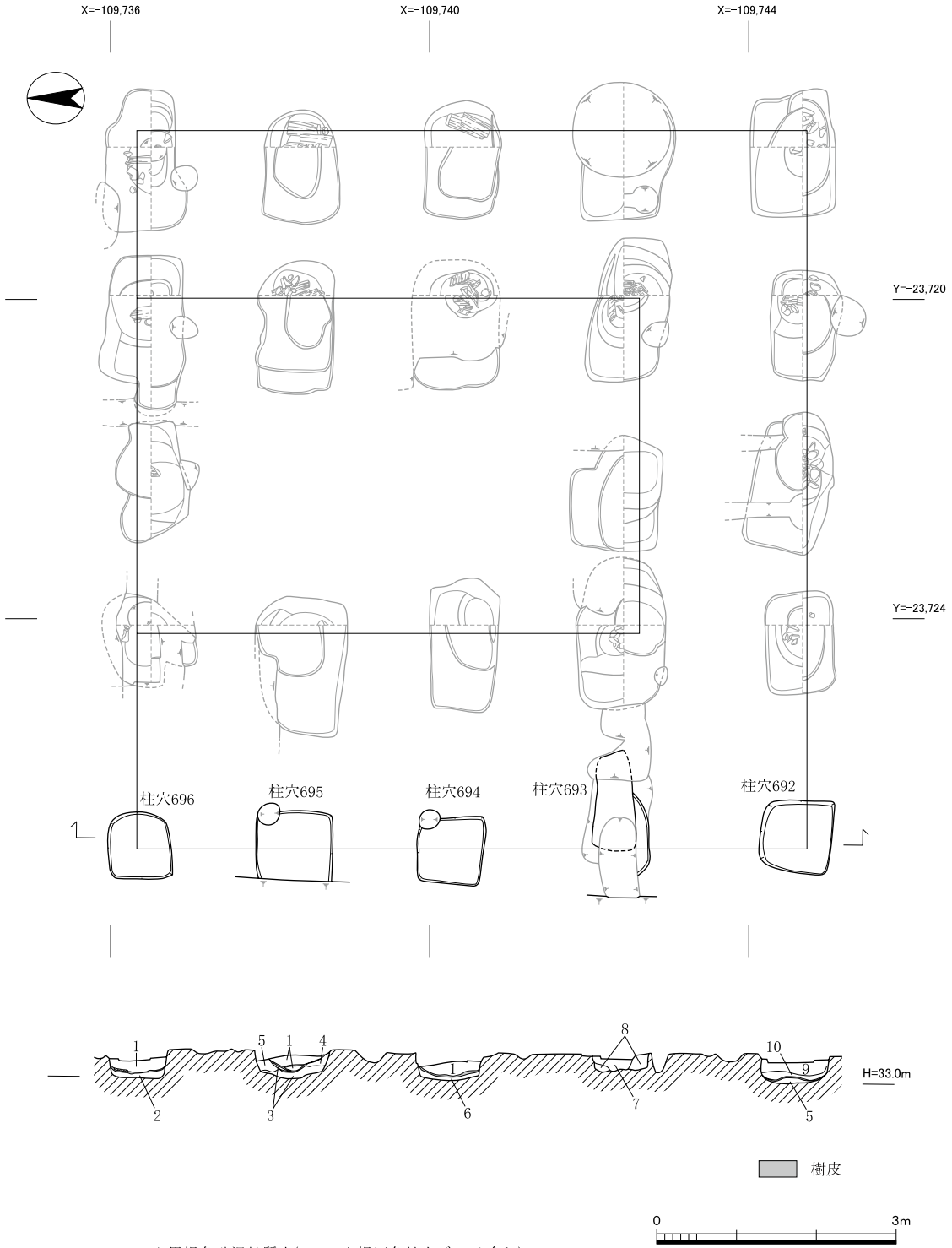
1 10YR4/1褐灰色粘土(5Y5/2灰オリーブ色シルトブロック・10Y5/1灰色粗砂ブロック含む)
2 10Y5/1灰色粗砂
3 5Y6/2灰オリーブ色シルト
4 10YR3/1黒褐色粘土(灰色粘土ブロック・φ2cm礫・土器片含む)
5 10YR4/1褐灰色粘土(灰色粘土ブロック含む)
6 10YR3/1黒褐色粘土
7 10YR3/1黒褐色粘土(灰色粘土ブロック含む)
8 10YR4/1褐灰色粘土(灰色粘土ブロック・土器・炭化物含む)
9 10YR3/1黒褐色粘土(φ2～3cm礫・炭化物含む)
10 10YR4/1褐灰色粘土(灰色粘土ブロック多量含む)
11 10YR3/2黒褐色粘土(灰色粘土ブロック多量・炭化物含む)
12 10YR3/1黒褐色粘土(灰色粘土ブロック・φ3～4cm礫・土器含む)
13 10YR4/1褐灰色粘土(灰色粘土ブロック・φ3～4cm礫・土器含む)
14 10YR3/1黒褐色粘土(灰色粘土ブロック・φ3～4cm礫含む)
15 10YR4/1褐灰色粘土(灰色粘土ブロック・φ3～4cm礫含む)
16 10YR4/1褐灰色シルト粘質(灰色粘土ブロック含む)
17 10YR3/1黒褐色粘土(灰色粘土ブロック多量含む)
18 10YR4/2灰黄褐色粘土(φ2～3cm礫含む)
19 10YR4/2灰黄褐色粘土(灰色粘土ブロック含む)
20 10YR3/1黒褐色粘土(灰色粘土ブロック・φ3cm礫・土器含む)
21 10YR4/2灰黄褐色細砂混粘土(φ2cm礫含む)
22 10YR3/1黒褐色粘土(φ3cm礫含む)

2区建物1実測図（1：80）



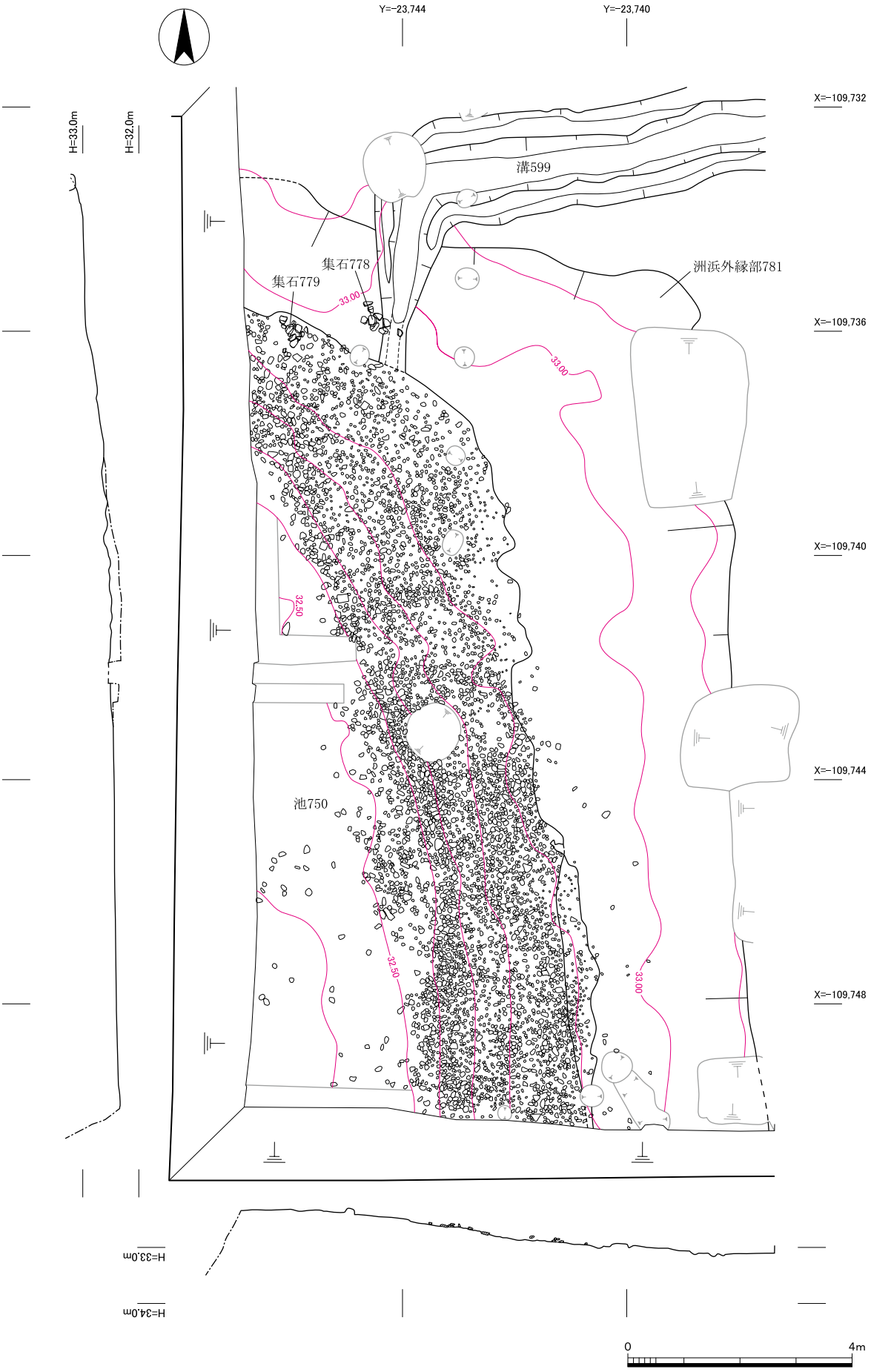
1　10YR3/1黒褐色粘土(黒色粘土ブロック・φ8㎝礫含む)
2　10YR4/1褐灰色粘土(黒色粘土ブロック含む)
3　10YR2/1黒色シルト
4　10YR4/1褐灰色細砂混粘土
5　10YR3/1黒褐色粘土(灰色粘土ブロック含む)
6　10YR4/1褐灰色細砂～シルト粘質(灰色粘土ブロック・木片含む)
7　10YR3/1黒褐色粘土(φ10㎝礫含む)
8　10YR4/1褐灰色粘土(灰色粘土ブロック・φ2～3㎝礫含む)
9　10YR4/2灰黄褐色粘土
10　10YR3/1黒褐色粘土(灰色粘土ブロック・土器・φ2㎝礫含む)
11　10YR3/2黒褐色粘土(10YR6/4にぶい黄橙色シルトブロック含む)
12　10YR4/1褐灰色粘土(灰色粘土ブロック・土器・木片・炭化物含む)

2区建物2実測図（1：80）



1 7.5YR3/1黒褐色砂混粘質土(10YR5/1褐灰色粘土ブロック含む)
2 7.5YR5/1褐灰色粘土
3 7.5YR4/1褐灰色粘土
4 7.5YR3/1黒褐色粘土
5 10YR5/1褐灰色粘土
6 10YR3/1黒褐色粘土
7 7.5YR3/2黒褐色砂混粘質土(炭化物片、土器片多量含む)
8 10YR4/2灰黄褐色砂混粘質土(10YR5/1褐灰色粘土ブロック含む)
9 7.5YR3/1黒褐色砂混粘質土(φ3cm礫含む)に7.5YR4/1褐灰色粘土ブロック含む
10 7.5YR2/2黒褐色粘土(褐灰色粘土ブロック含む)

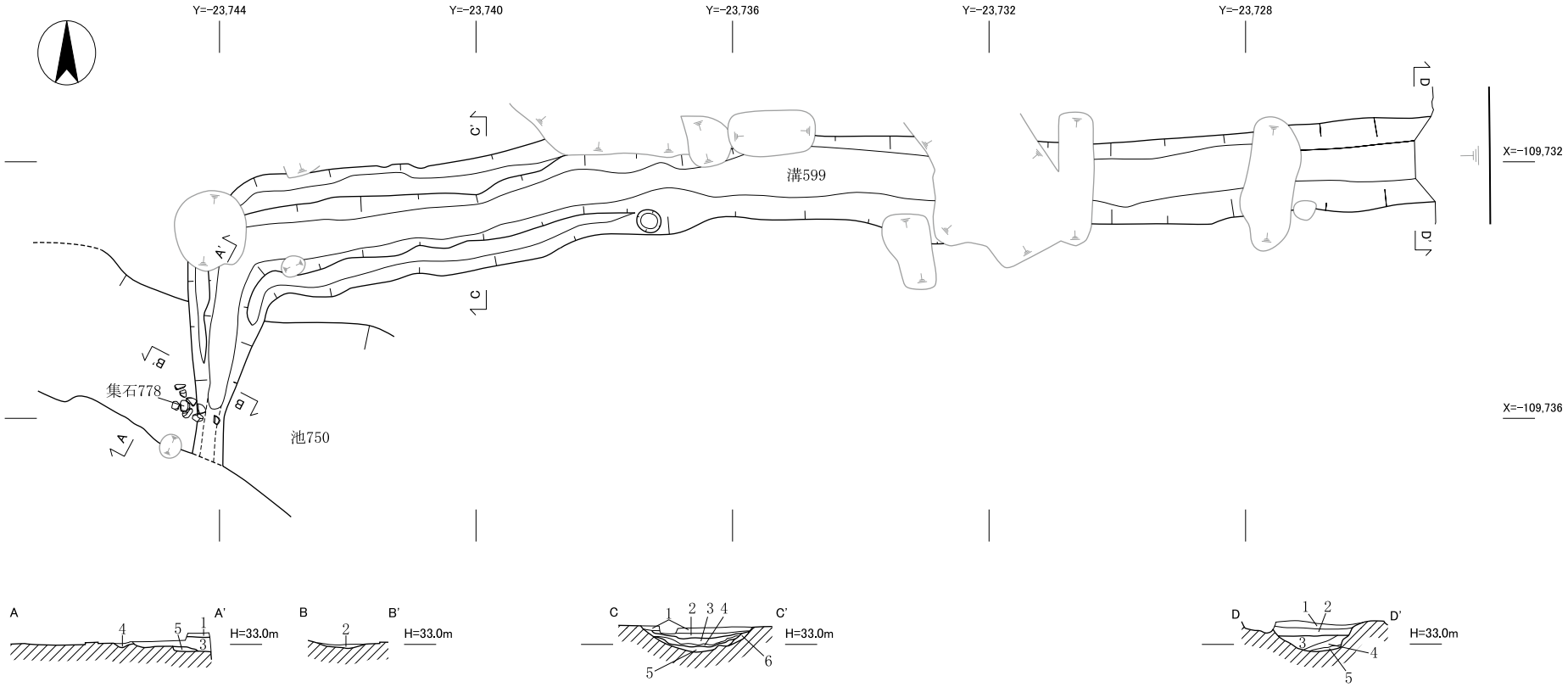
3区建物4実測図（1：80）



3区池750実測図（1：100）

図版25　遺構

3区溝599実測図（1：100）



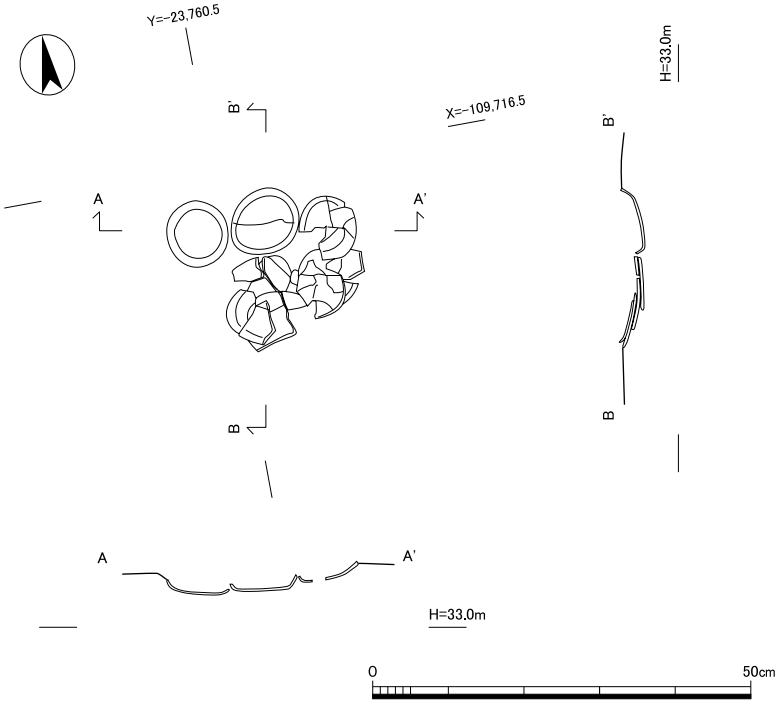
1　2.5Y5/2暗灰黄色砂混粘質土（φ1～3㎝礫含む）— 溝599埋土上層
2　10YR3/1黒褐色砂混粘質土 — 溝599埋土下層
3　10YR3/1黒褐色砂混粘質土 —
4　2.5Y4/1黄灰色砂混粘質土 — 溝599堆積土
5　2.5Y3/1黒褐色粘土（2.5GY5/1オリーブ灰色シルトよく含む）—

1　2.5Y4/2暗灰黄色砂混粘質土（土器片含む）— 溝599埋土上層
2　2.5Y4/1黄灰色砂混粘質土（土器片・炭化物含む）—
3　5Y4/1灰色砂混粘質土 — 溝599埋土下層
4　7.5Y3/1オリーブ黒色砂混粘土 —
5　5Y4/1灰色粘土（2.5GY5/1オリーブ灰色シルト含む）— 溝599堆積土
6　2.5GY5/1オリーブ灰色粘土 —

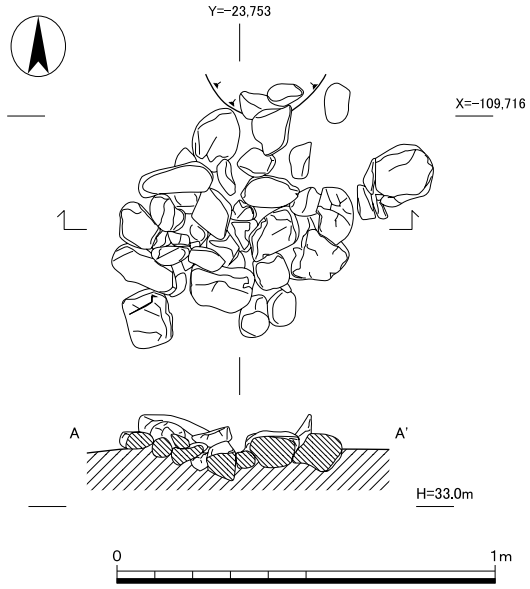
1　10YR4/1褐灰色粗砂～シルト（φ2㎝礫含む）— 溝599埋土上層
2　10YR4/1褐灰色砂混粘質土 —
3　10YR4/1褐灰色粘土（2.5GY5/1オリーブ灰色シルト・φ1㎝礫含む）— 溝599埋土下層
4　10YR4/2灰黄褐色粘土（φ2㎝礫含む）—
5　2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 —

0　5m

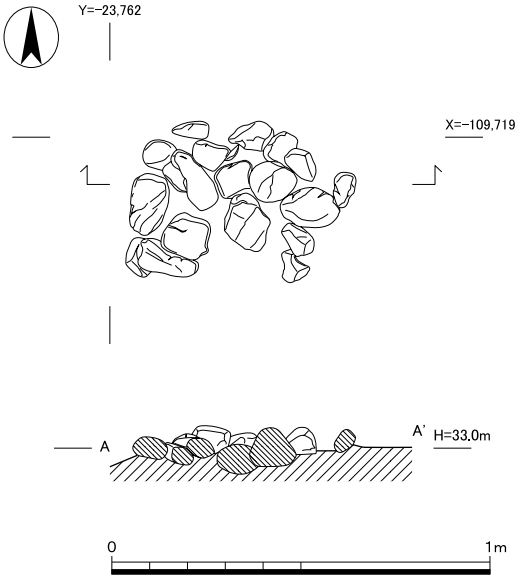
土器埋納遺構292



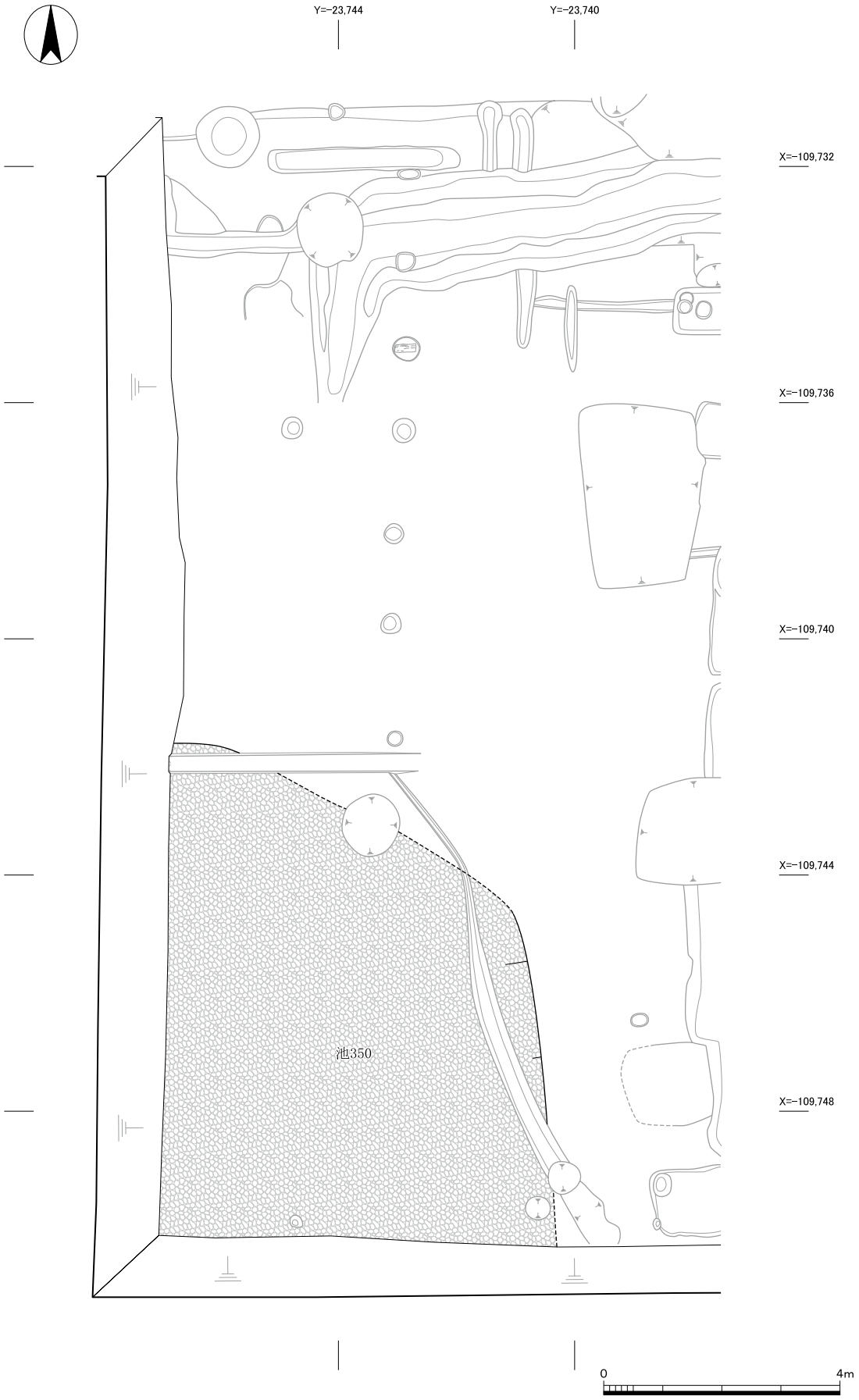
集石285



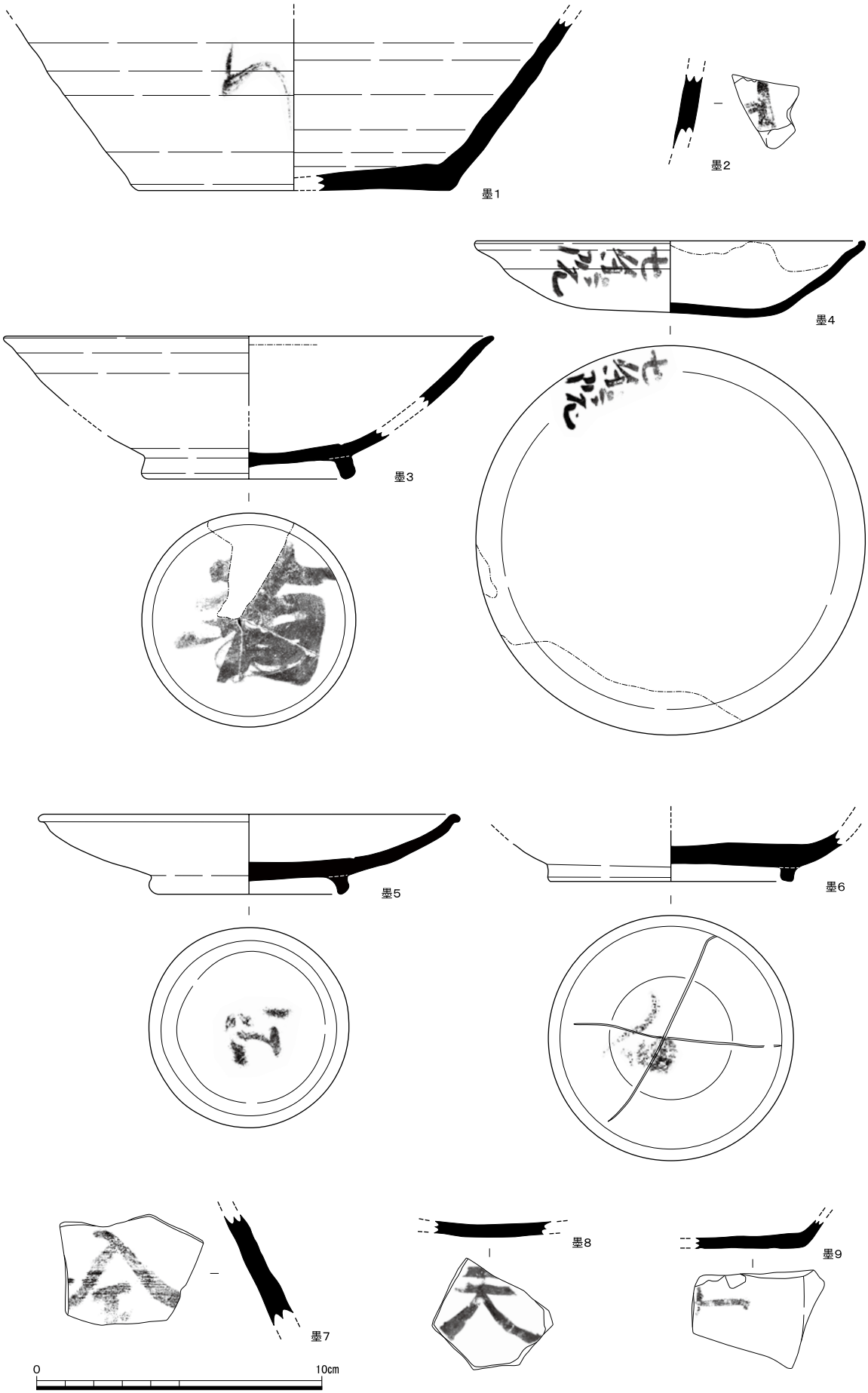
集石291



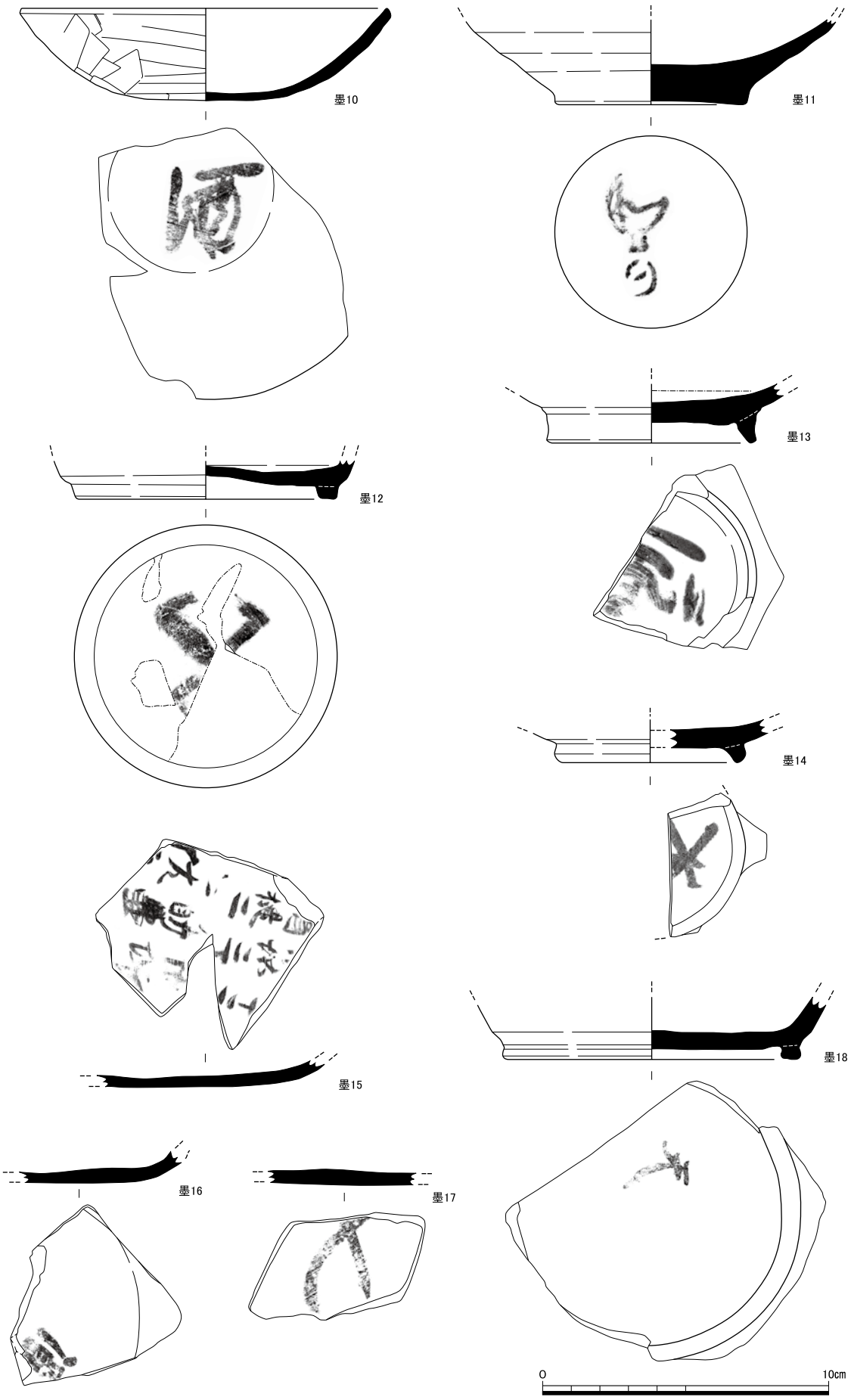
2区土器埋納遺構292実測図（1：10）、集石285・291実測図（1：20）



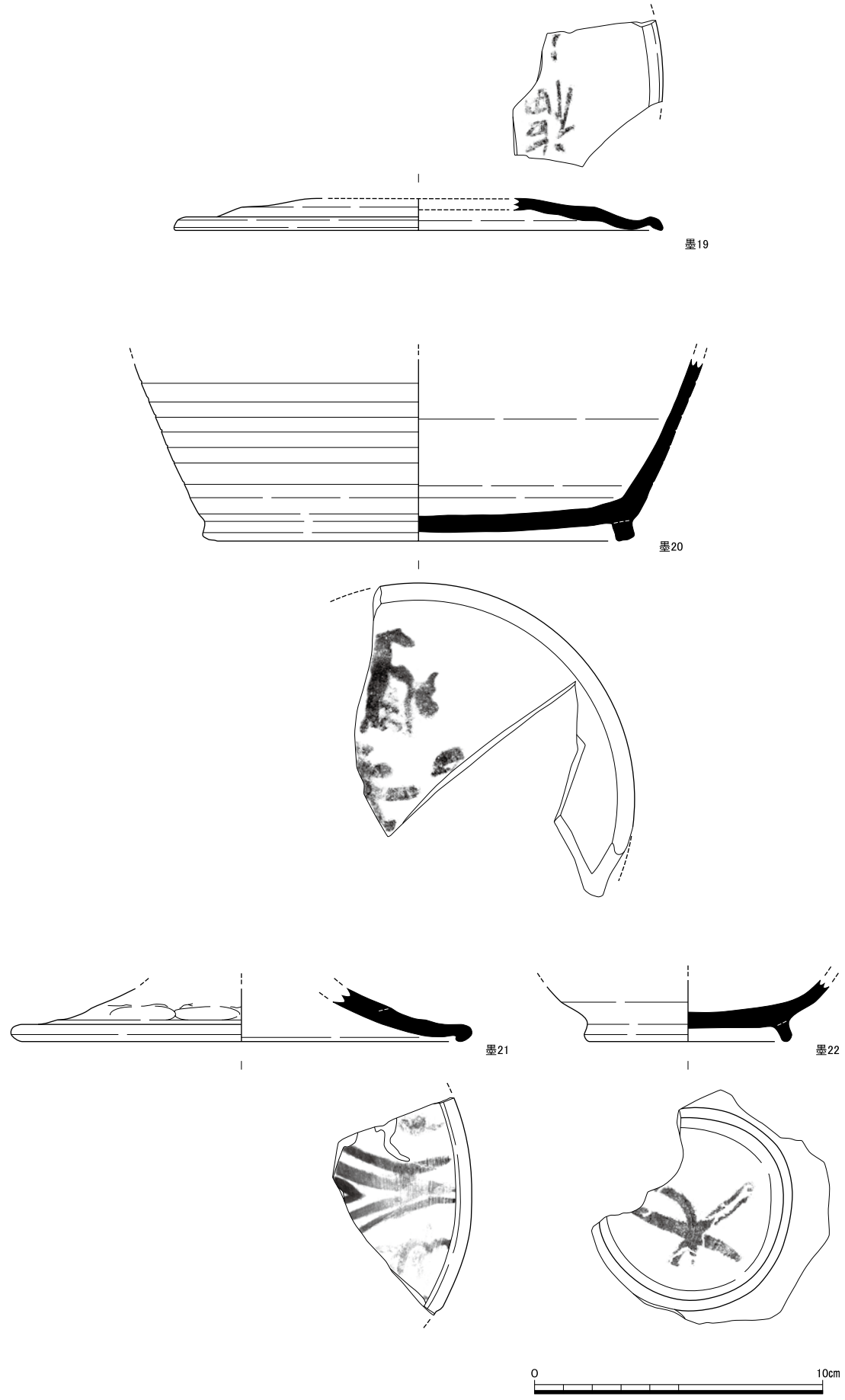
3区池350平面図（1：100）



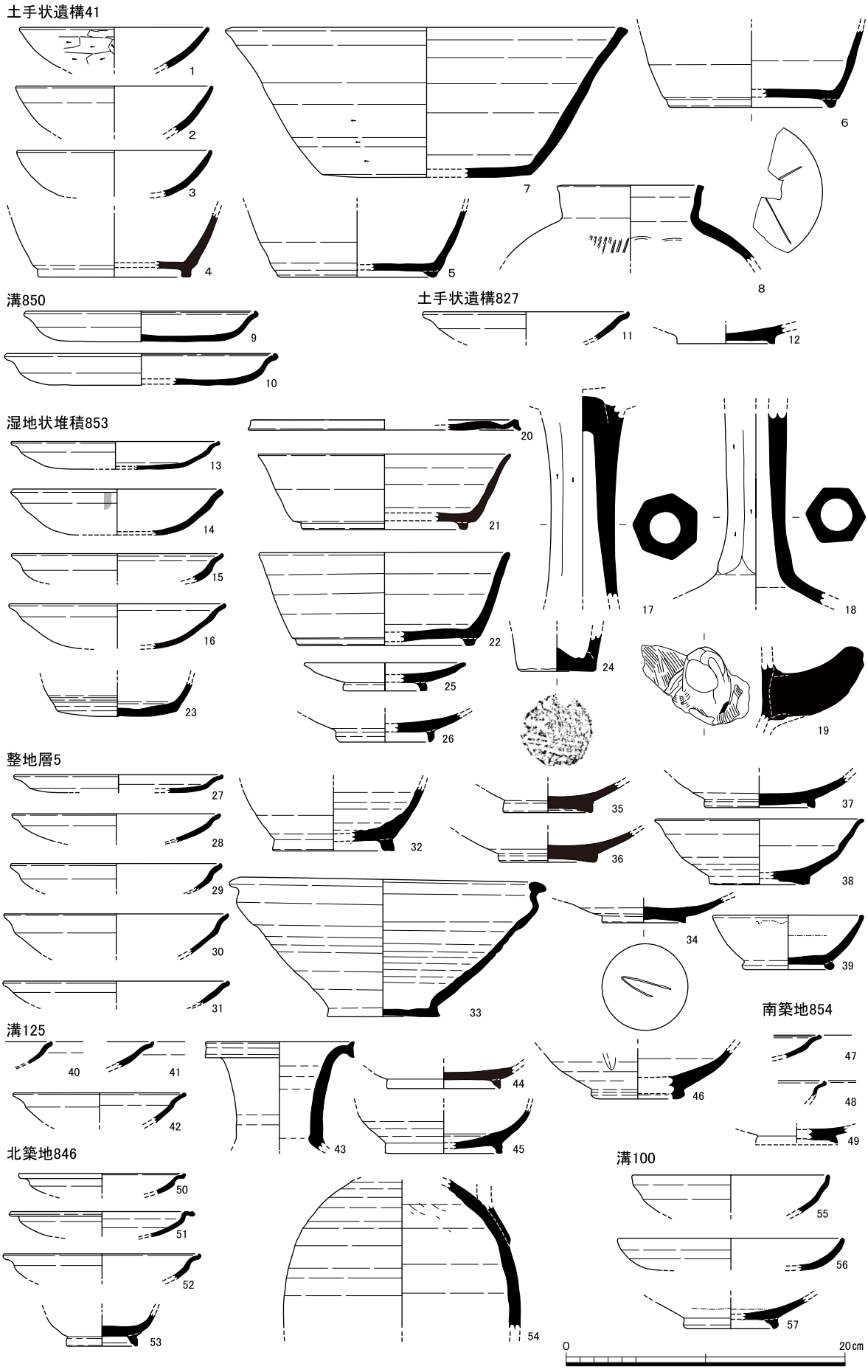
墨書土器実測図１（１：２）



墨書土器実測図２（１：２）

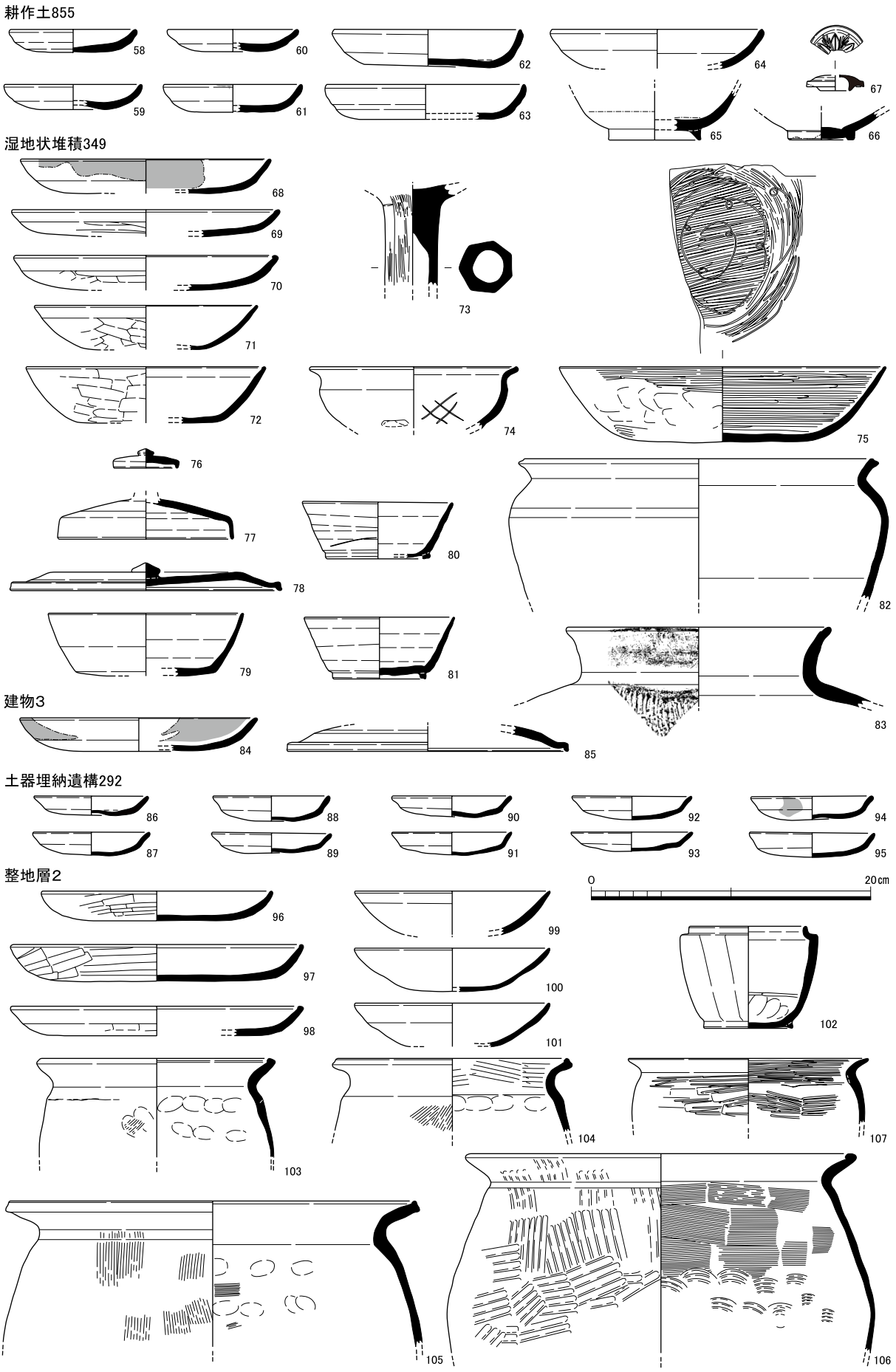


墨書土器実測図３（１：２）


土手状遺構41
溝850
土手状遺構827
湿地状堆積853
整地層5
溝125
南築地854
北築地846
溝100
0
20cm

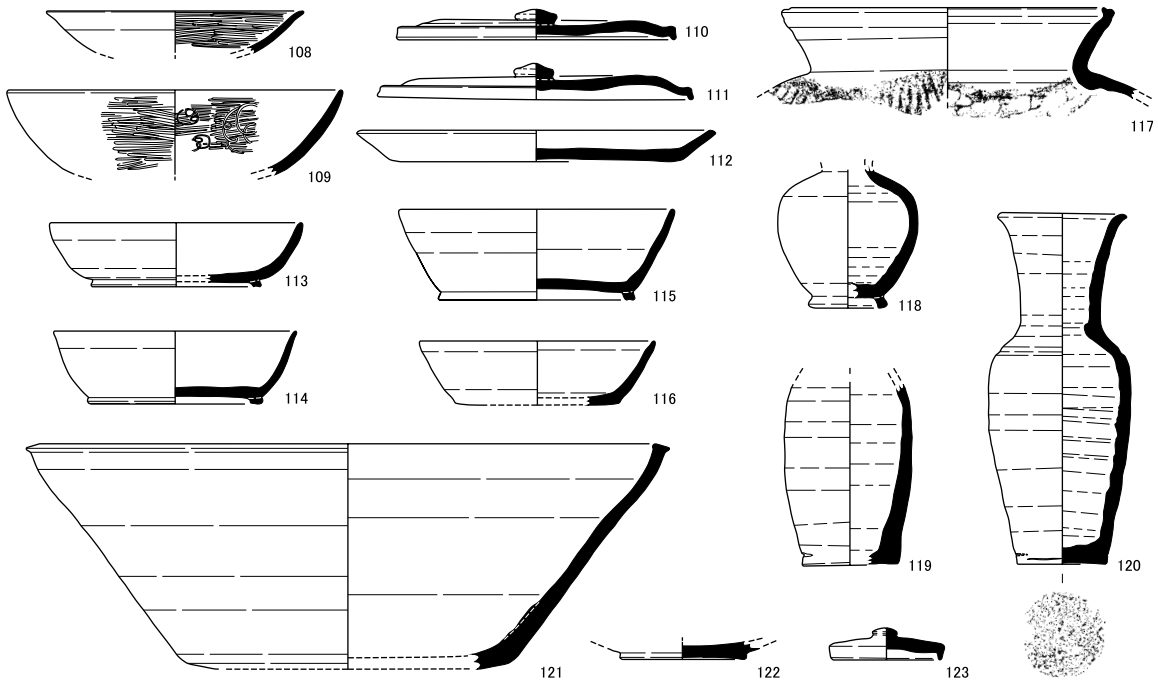
土器実測図１（１：４）

図版32 遺物

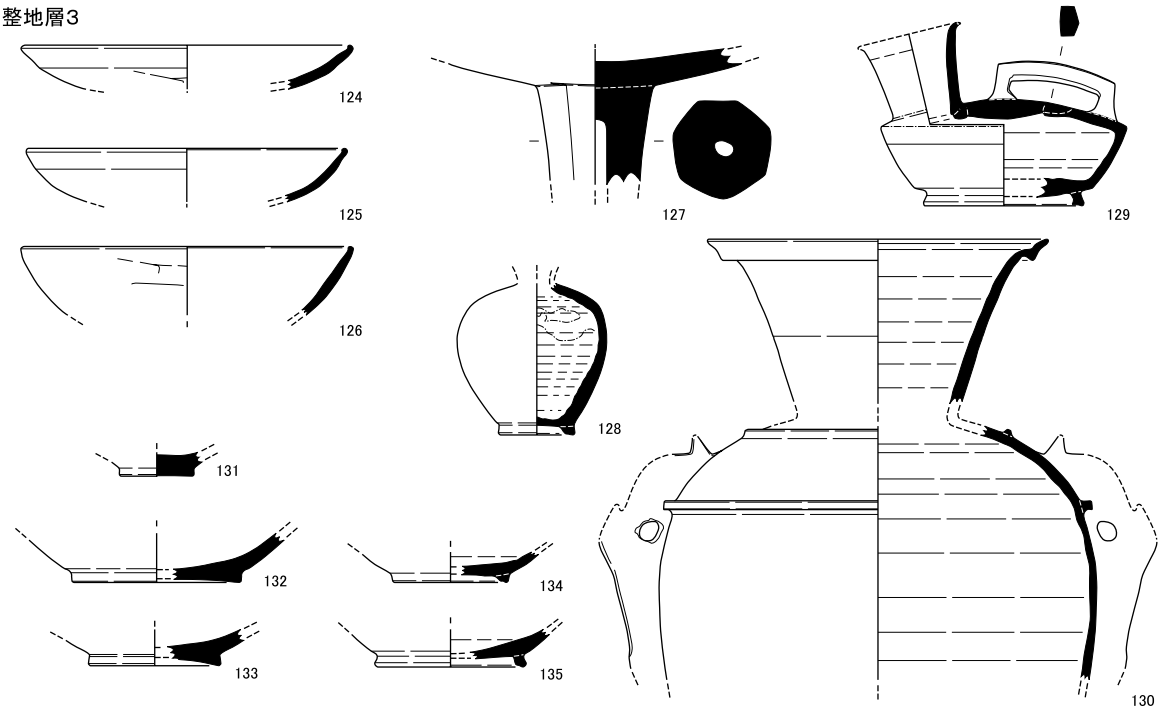


土器実測図２（１：４）

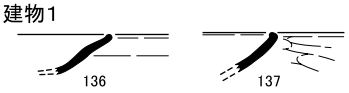
整地層2



整地層3

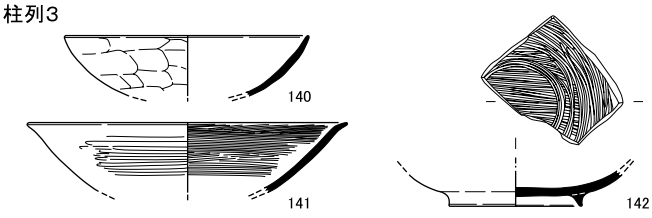


建物1

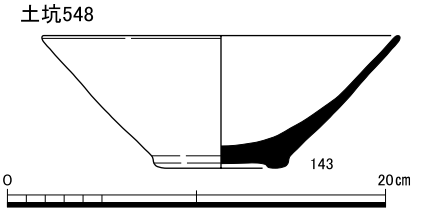


建物2

柱列3

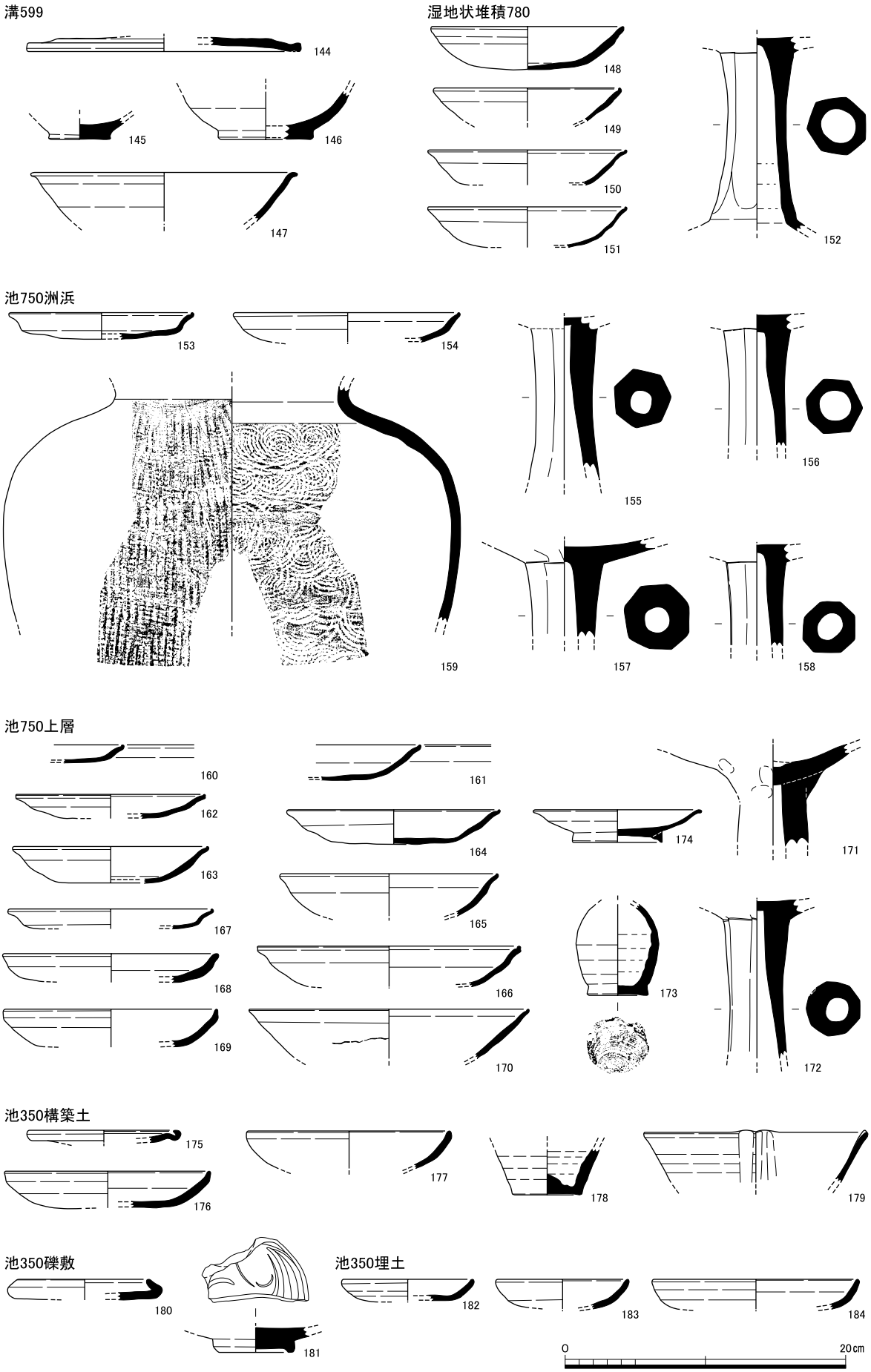


土坑548

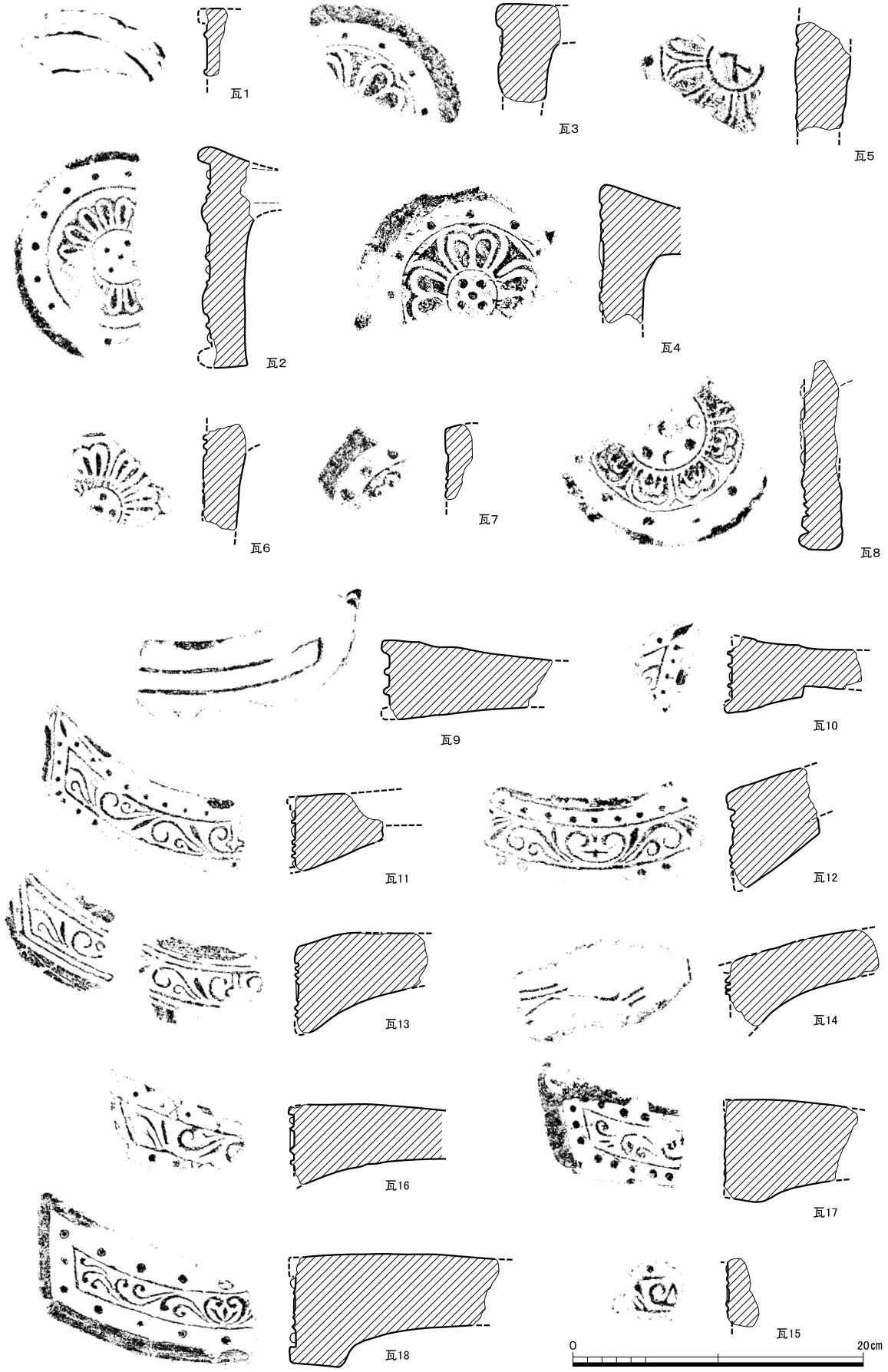


土器実測図３（１：４）

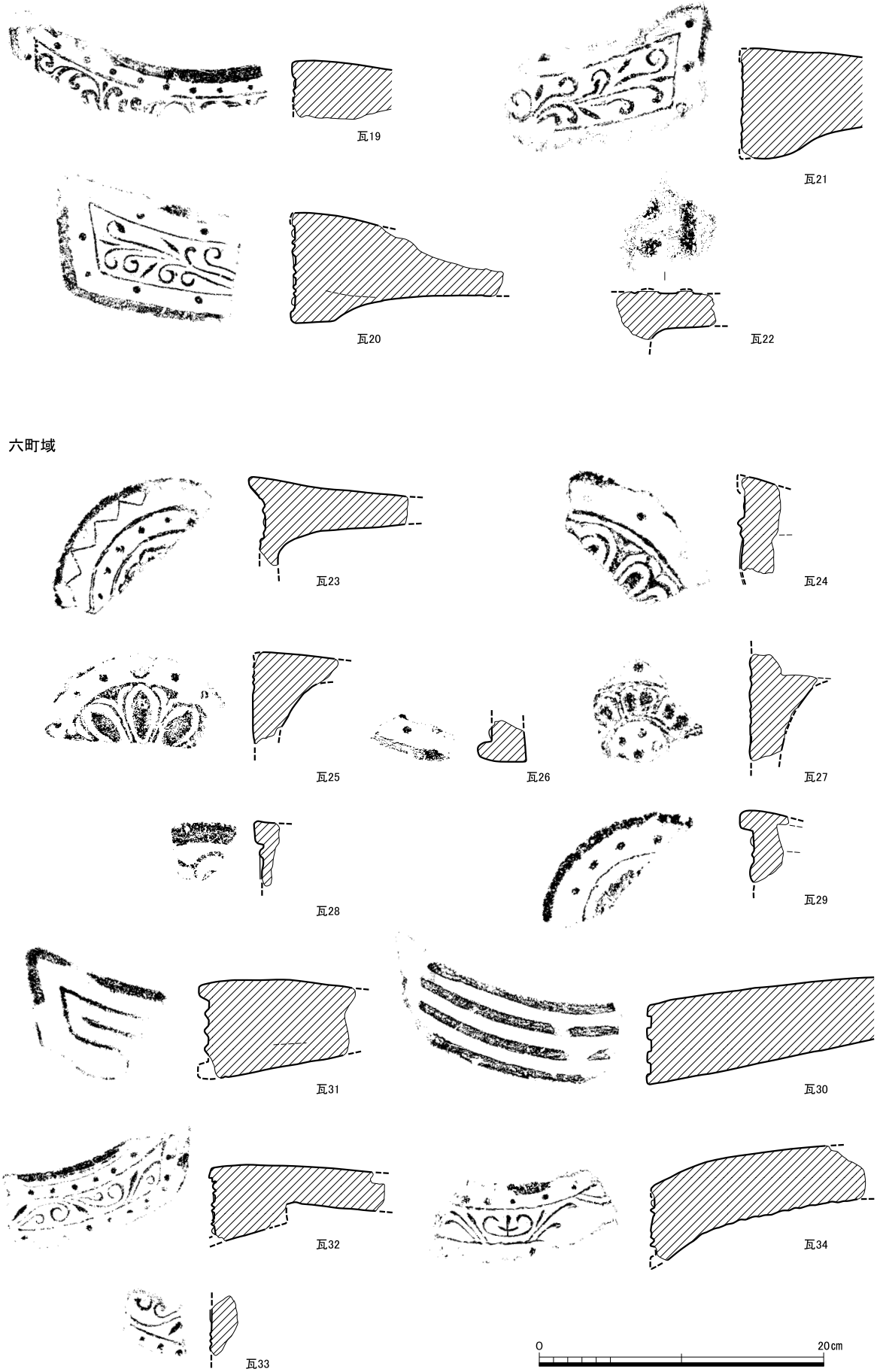
図版34 遺物



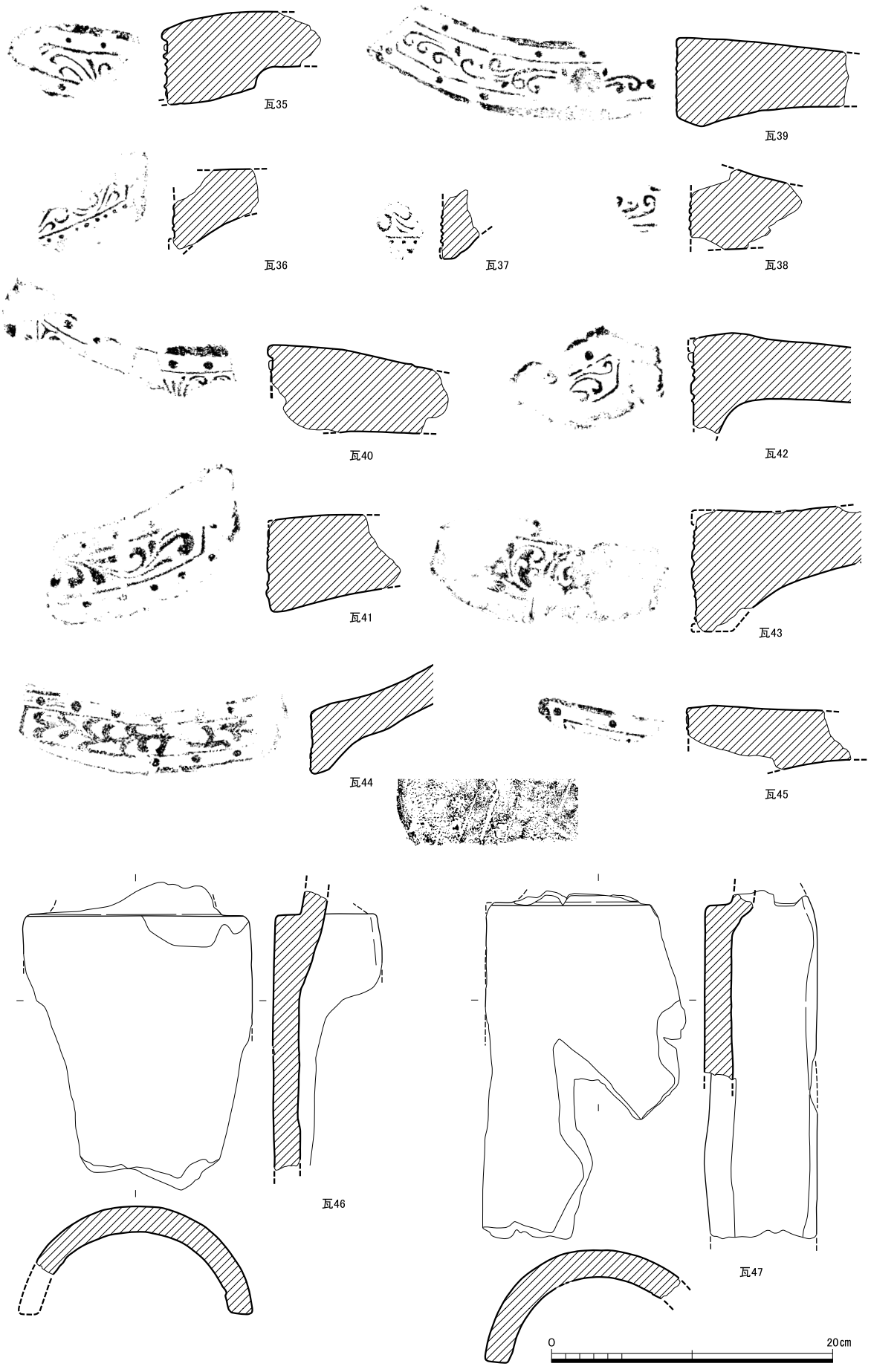
土器実測図４（１：４）



七町・三条坊門小路域出土軒瓦拓影及び実測図（１：４）



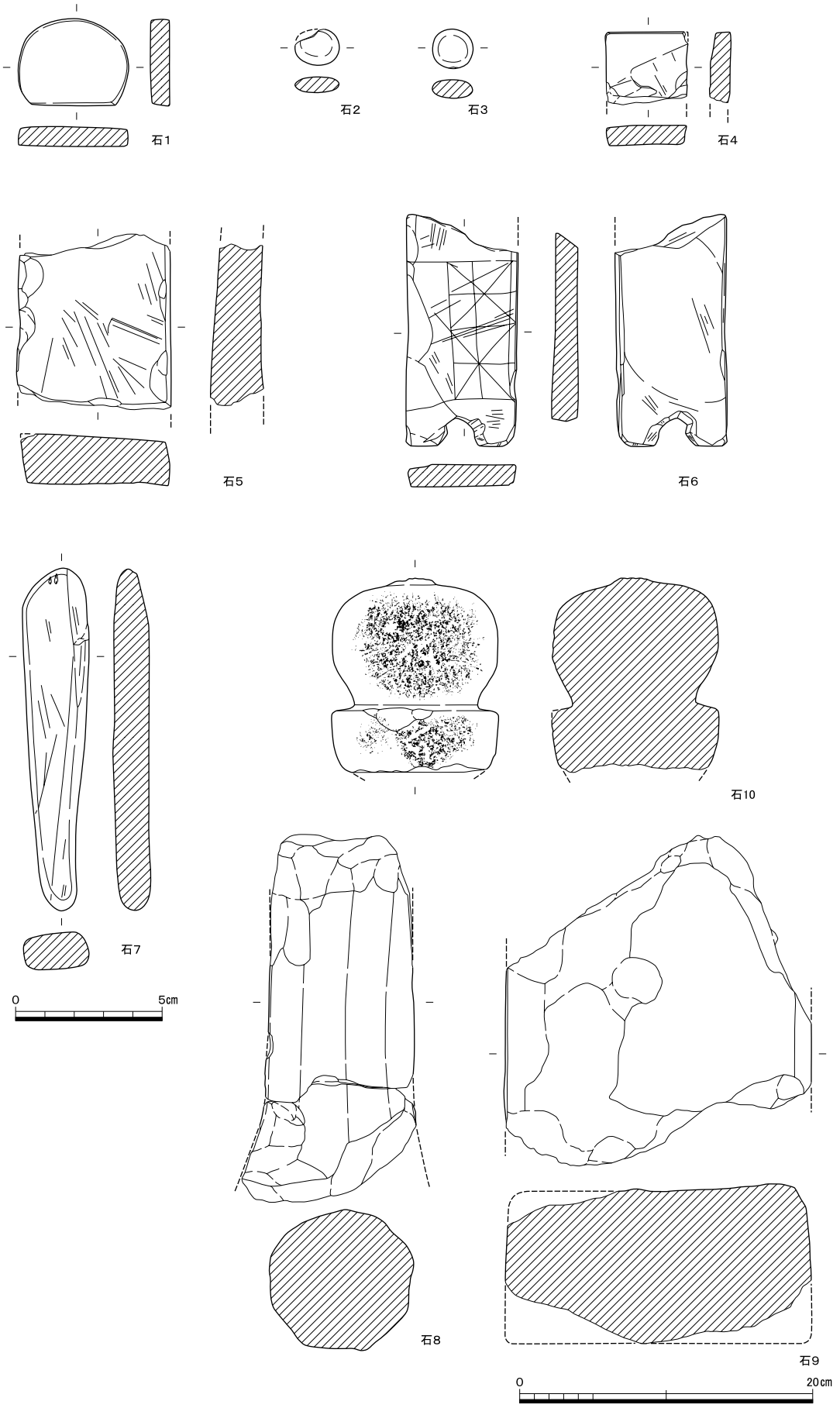
七町・三条坊門小路域、六町域出土軒瓦拓影及び実測図（１：４）



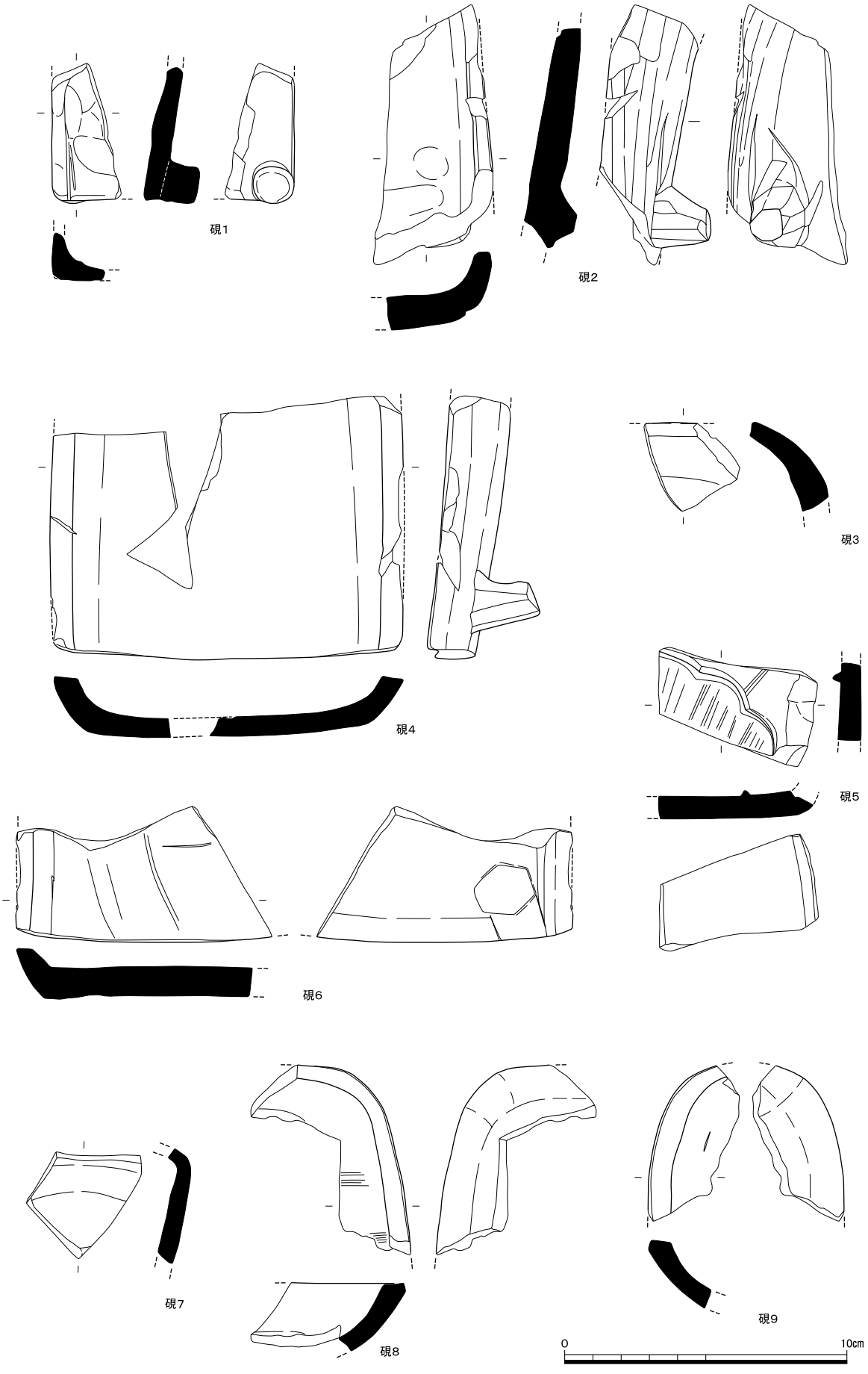
六町域出土軒瓦・丸瓦拓影及び実測図（１：４）

図版38　遺物

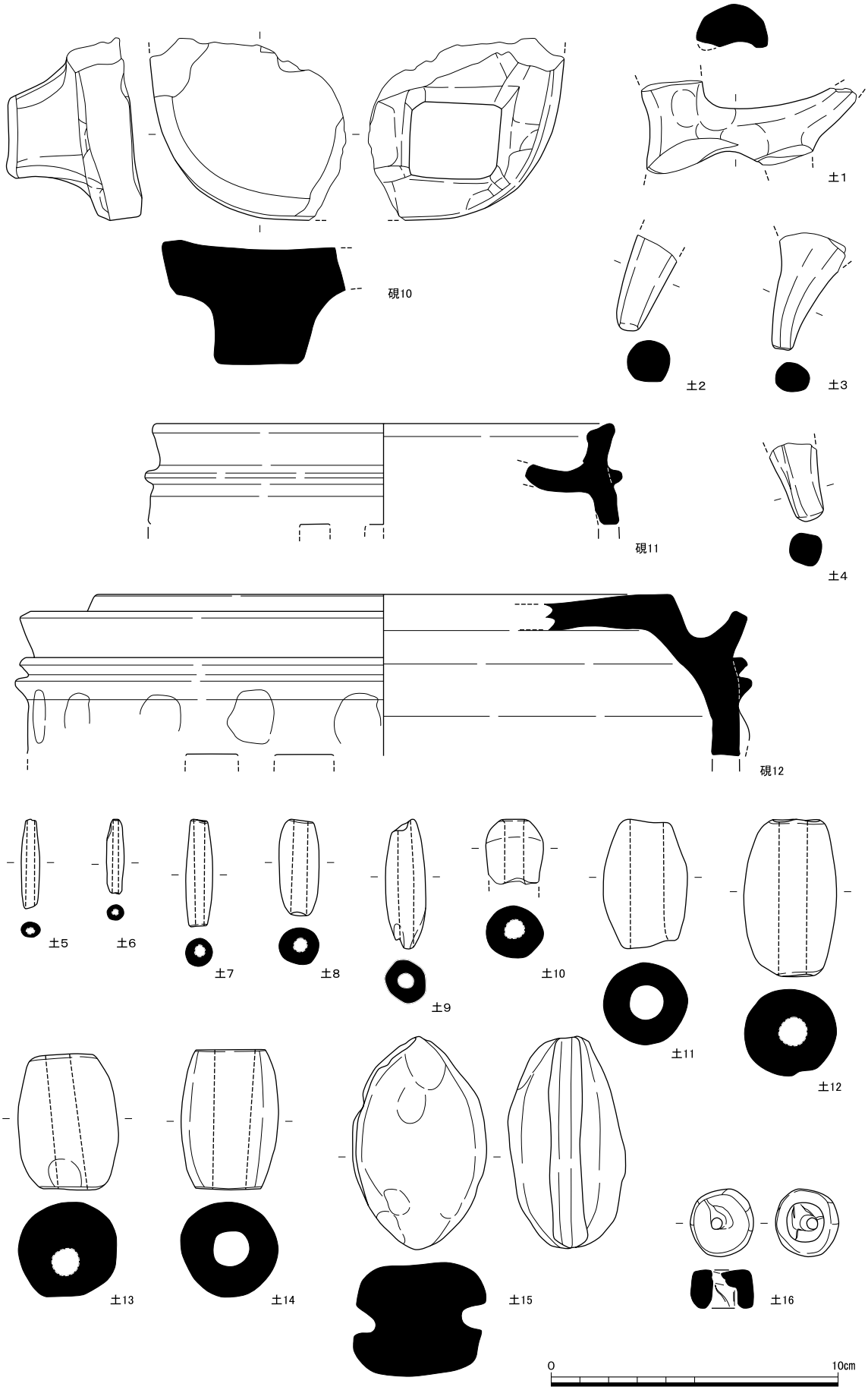
刻印瓦拓影（１：２）



石製品実測図（１：２、石８～10のみ１：４）

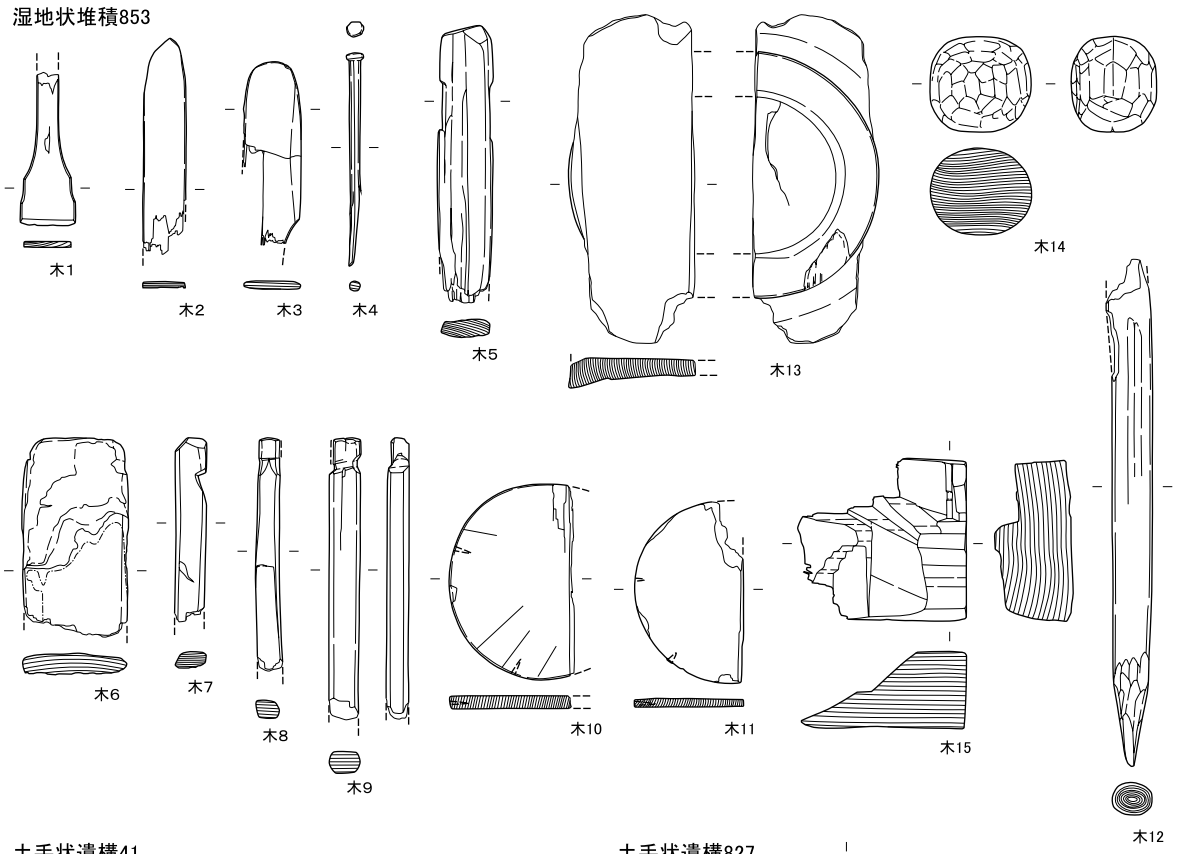


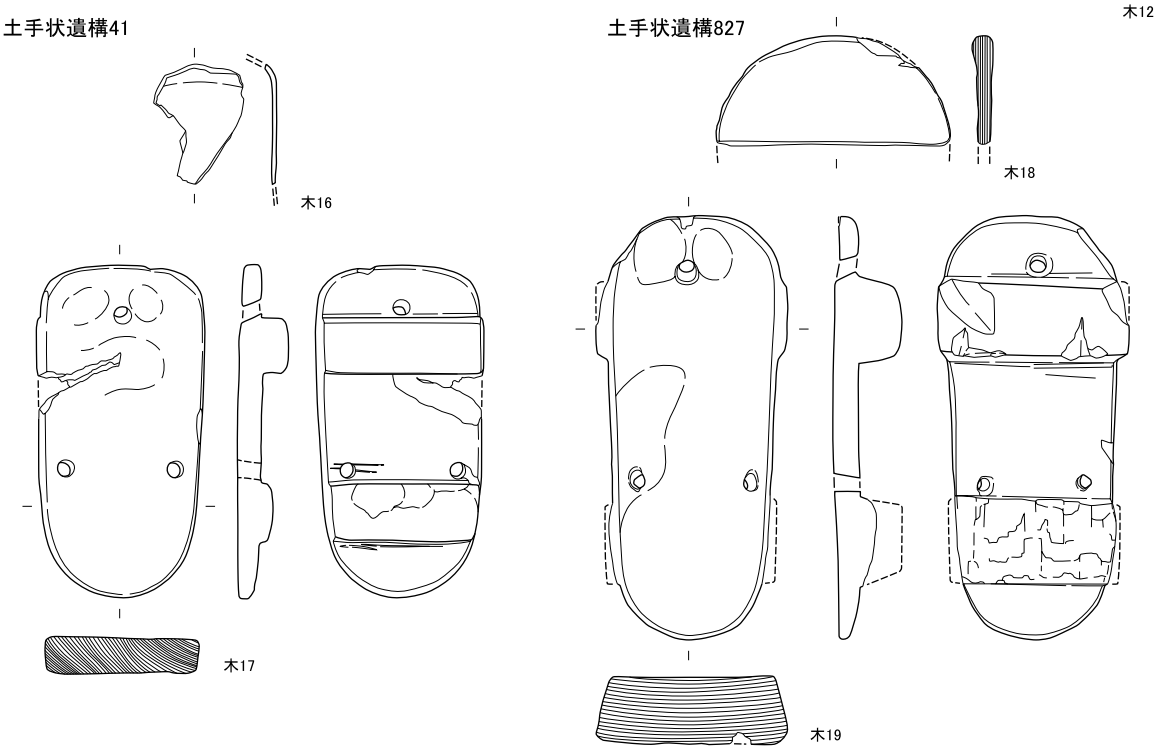
土製品実測図１（１：２）

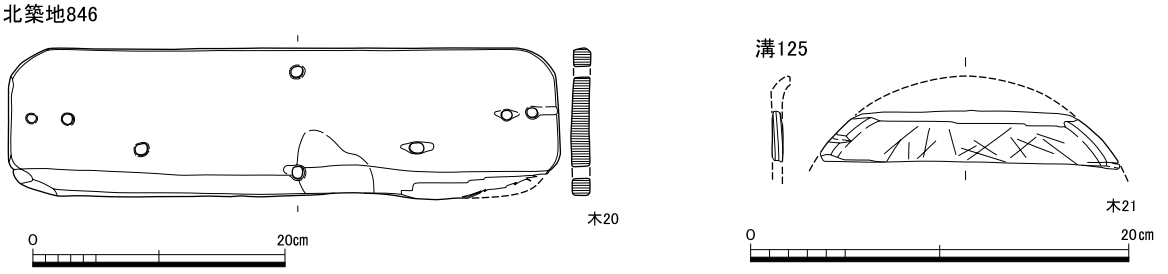

硯10
土1
土2
土3
硯11
土4
硯12
土5
土6
土7
土8
土9
土10
土11
土12
土13
土14
土15
土16
0
10cm

土製品実測図２（１：２）

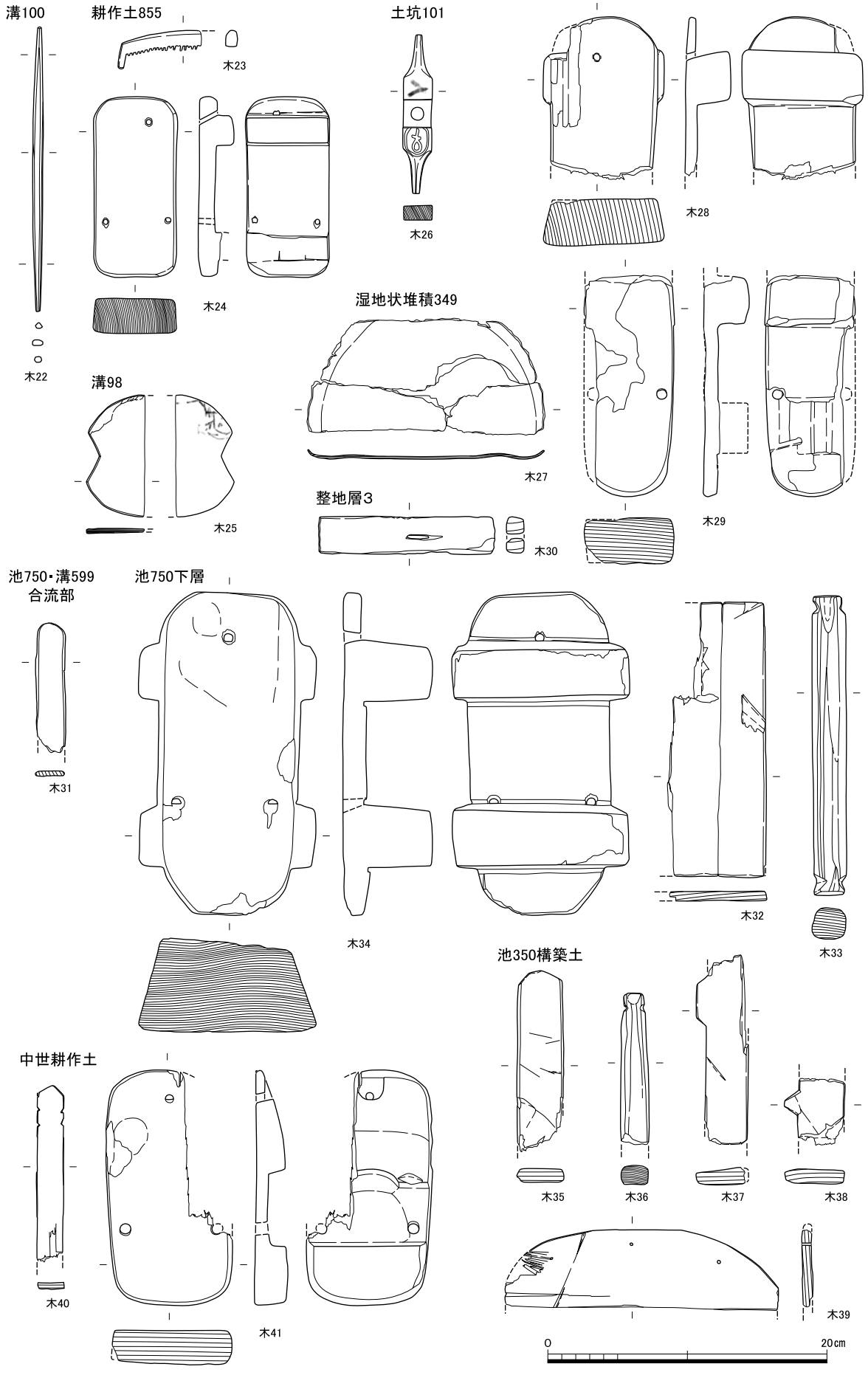
図版42　遺物





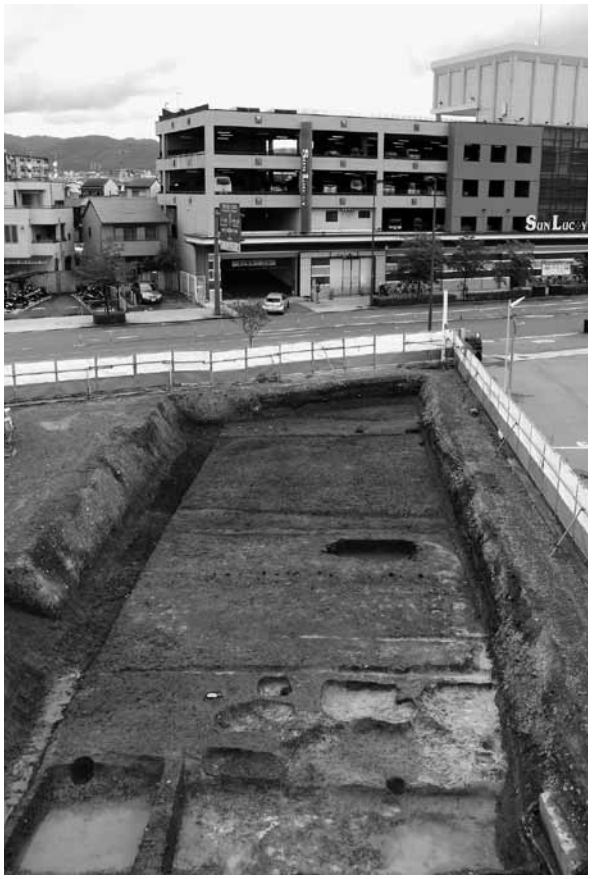


木製品実測図１（１：４、木20のみ１：６）


溝100
木22
耕作土855
木23
木24
土坑101
木26
木28
湿地状堆積349
木27
溝98
木25
整地層3
木30
木29
池750・溝599
合流部
木31
池750下層
木34
木32
木33
池350構築土
木35
木36
木37
木38
中世耕作土
木40
木41
木39
0
20cm

木製品実測図（1：4）

1　４区第２面全景（南から）



2　４区第１面全景（南から）

3　１区第１面全景（南西から）

1　4区土手状遺構41、溝125・850（東から）

2　4区南築地854（北西から）

3　1区溝98・100（東から）

4　1区土坑92（北から）

1　２区第２－１面全景（東から）

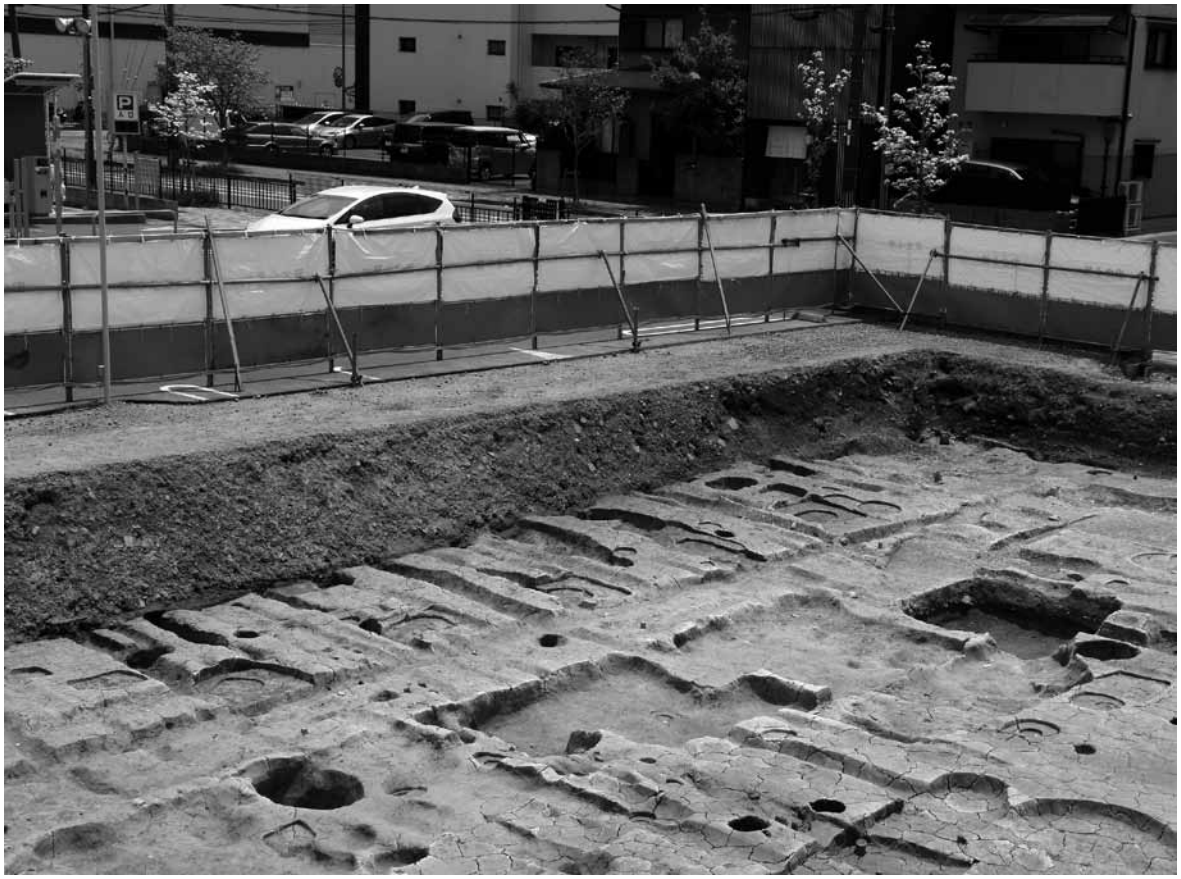
2　２区整地層１検出状況（北東から）

3　２区建物３：柱穴293（北から）

1　３区南半第１－２面全景（北から）

2　２区第１－２面全景（北から）

1　２区建物１・２検出状況（東から）



2　３区建物４検出状況（北西から）

1　３区建物４：柱穴696樹皮出土状況（北西から）

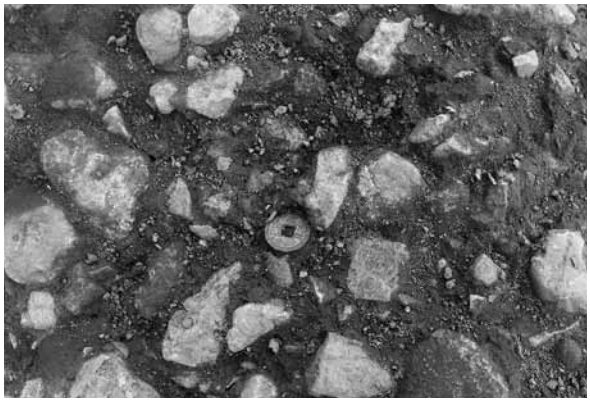
2　３区建物４：柱穴696断面（西から）

3　３区建物４：柱穴693（北東から）

4　２区建物１：柱穴255検出状況（北から）

5　２区柱列３：柱穴204断面（東から）

1　３区池750（北東から）



2　３区池750銭貨出土状況（西から）

4　３区池750高杯出土状況（西から）

3　３区池750円面硯出土状況（東から）

5　３区池750下駄出土状況（南西から）

1　３区溝599・池750合流部（南西から）

2　２区土器埋納遺構292土器出土状況（西から）

3　２区集石285検出状況（北東から）

4　２区集石291検出状況（西から）

1　３区第１－２面 池350検出時全景（北西から）

2　３区池350（北西から）

墨4

10

墨5

38

墨10

33

80

75

86

89

91

93

94

95

96

97

墨書土器、土器類

図版54 遺物

102

103

111

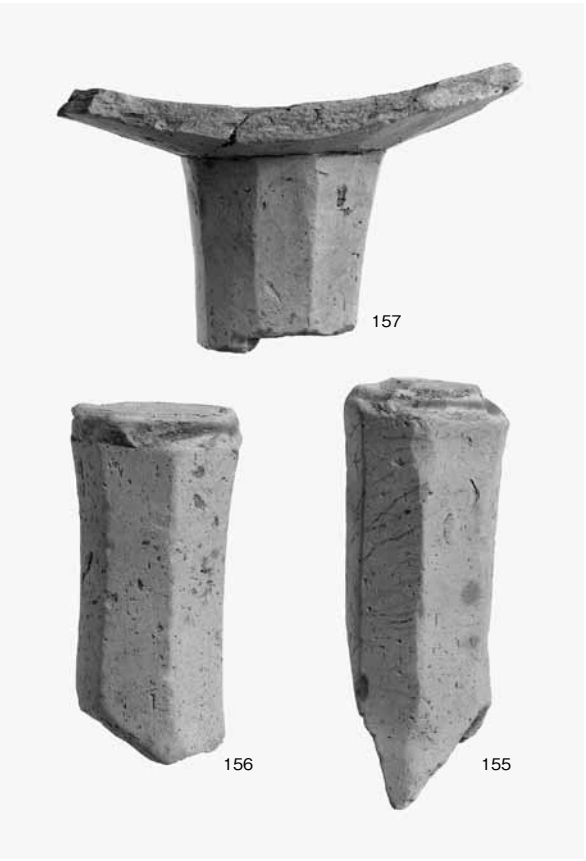
115

148

174

105

106


157
156
155

土器類

瓦2

瓦4

瓦5

瓦8

瓦25

瓦56

瓦58

軒丸瓦・刻印瓦

瓦11

瓦9

瓦16

瓦12

瓦18

瓦20

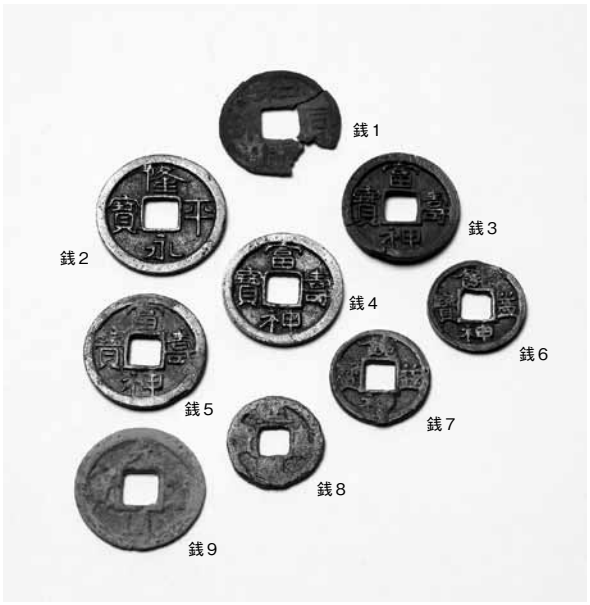
瓦30

瓦32

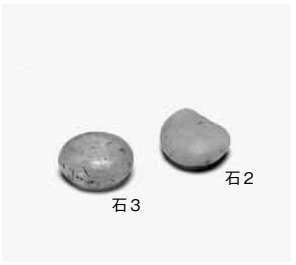
瓦39

瓦44

軒平瓦



石1



石4

石6

石9

石8

銭貨、石製品

土1

硯1

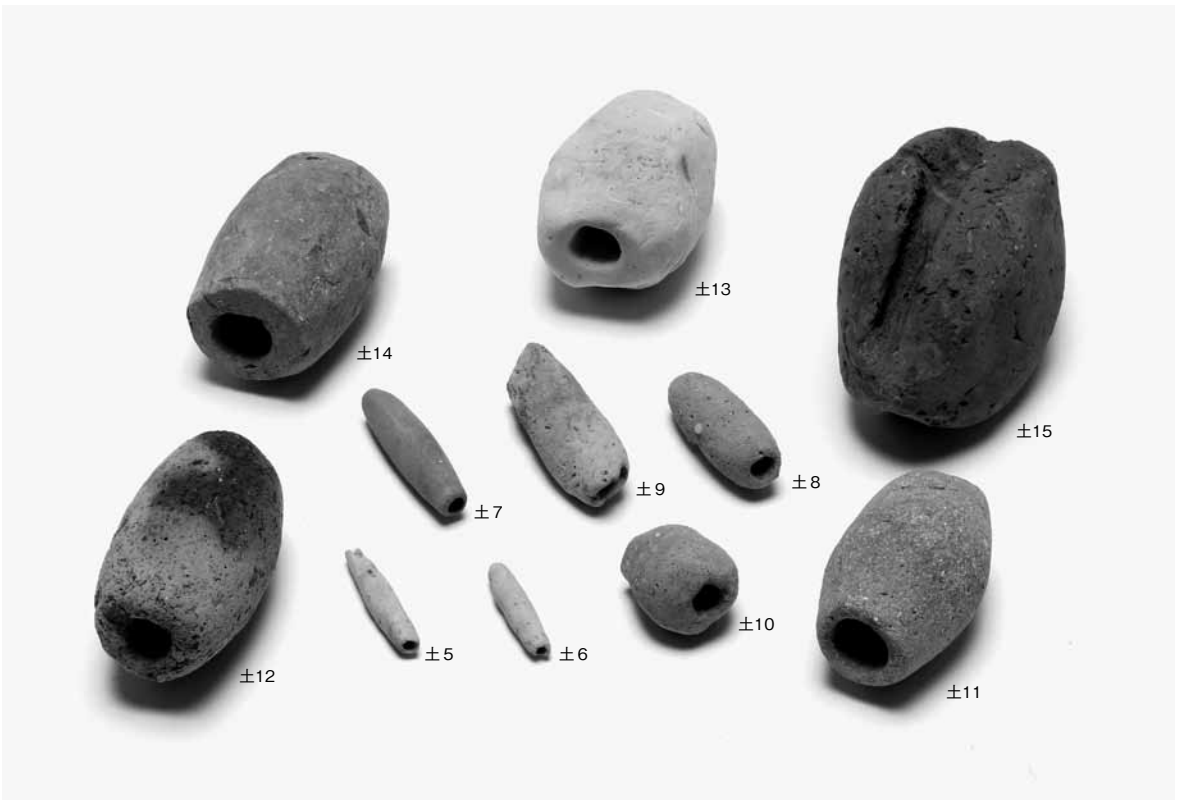
硯5

硯4

硯10

硯8

硯12



土製品

木簡1

木簡2

木簡3

木1

木20

木13

木14

木34

木39

木33

木12

木31

木38

木35

木37

木40

木簡、木製品

報　告　書　抄　録

ふ り が な	へいあんきょううきょうさんじょういちぼうろく・ななちょうあと、みぶいせき
書　　名	平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２０－１０
編 著 者 名	西田倫子・松吉祐希
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発 行 年 月 日	西暦2021年９月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京跡（へいあんきょうあと） 壬生遺跡（みぶいせき）	京都市中京区（きょうとしなかぎょうく） 西ノ京小倉町（にしのきょうおぐらちょう） 101、102、103、 105	26100	1 462	35度 00分 39秒	135度 44分 23秒	2019年12月 ９日～2020 年８月11日	2,724㎡	建物建設 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡 壬生遺跡	都城跡 散布地	旧石器時代 ～縄文時代		石器	六町の平安時代前期における土地利用の様相を確認した。 六町の南西部に広がる平安時代前期・後期の園池を確認した。
		弥生時代 ～飛鳥時代	流路、高まり	弥生土器、土師器、須恵器	
		平安時代	建物、柱列、柱穴、池、集石、土坑、畦、土手状遺構、土手状高まり、北築地、南築地、溝、土器埋納遺構、湿地状堆積、耕作土	墨書土器、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦質土器、輸入陶磁器、瓦、銭貨、金属製品、石製品、土製品、硯、木簡、木製品	
		江戸時代	建物、井戸、柱列、土坑、溝、杭列、土取土坑群、耕作溝	土師器、焼締陶器、瓦質土器、施釉陶器、国産磁器、銭貨、金属製品、石製品、木製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-10

平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡

発行日　2021年9月30日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961